

本作品の一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改竄等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償に問わらず本作品を第三者に譲渡することは出来ません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

CONTENTS

【ふたなり女学園へようこそ】

CHARACTERS

- 〈香奈 一章〉
- 〈友梨佳 一章〉
- 〈友梨佳 二章〉
- 〈友梨佳 三章〉
- 〈香奈 二章〉
- 〈香奈 三章〉
- 〈友梨佳 四章〉
- 〈香奈 四章〉
- 〈香奈 五章〉
- 〈友梨佳 五章〉

CHARACTERS

- 女教師友梨佳 序章
- 女教師友梨佳 一章
- 女教師友梨佳 二章
- 女教師友梨佳 三章
- 女教師友梨佳 四章
- 女教師友梨佳 五章
- 美姫 序章
- 美姫 一章
- 美姫 二章
- 美姫 三章

ふたなりお嬢様 紗耶香編

ふたなり女学園へようこそ

しゃーぶ

CHARACTERS

(一年生)

香奈　主人公の一人。まじめで物事をしつかり考える。

詩織　香奈の幼馴染。相部屋になる。おだやかな性格。

(二年生)

友梨佳　主人公の一人。香奈の姉。少しだらしないところがある。ふたなりになってしまふ。

紗耶香　友梨佳のクラスメート。金髪碧眼のお嬢様。様子がおかしいが……？

彩陽　友梨佳のクラスメート。茶髪をおさげにしている。

英梨　彩陽のルームメイト。八重歯が特徴的。その正体は……？

(三年生)

夏希　生徒会長。黒髪ロングにカチューシャの、清楚な美少女。

(教師)

凜　保健室の先生。白衣が似合う大人の女性。

美優　友梨佳のクラスの担任。グラマラスな体型。

〈香奈 一章〉

この学園に来るまで、わたしは、ふたなりというものを知らなかつた。

ふたなり——〈ちんぽが生えた女の子〉。そんな女の子がいるだなんて想像もつかなかつたけど、それは確かに、この学園に存在するものなのだ。

ふたなりの女の子たちは、この学園に来る前は普通の女の子だったと聞いていた。この学園で毎日を過ごしていくうち、何か不思議な力によって、ちんぽが生えてきてしまうのだ。そして、女の子たちは射精を一度体験すると、皆やめられなくなつて、女の子たちに抜いてもらわぬいではいられなくなつてしまふ。

保健室の凜先生は、それを〈病気〉だと言つていたし、最初はわたしも、ただただ異様なことだとしか思つていなかつた。

お姉ちゃんの友梨佳が、わたしが知らない間にふたなりになつていた時は、驚いて声も出ないくらいだつた。その時のわたしは悲しくて、もとのお姉ちゃんに戻つて欲しいと思つていた。

女の子に覆いかぶさつて、生えてきてしまつたちんぽから精液を出して喘ぐお姉ちゃんの姿は、淫らでどうしようもなく汚れてしまつたように見えた。

でも——それは違うのだ。わたしが間違つっていた。

友達の詩織はふたなりちんぽのことを、〈贈り物〉だと言つていた。今では、わたしもそう思つている。

わたしはちんぽでイカされる快樂を知つてしまつた。

犯される気持ちよさ。おまんこを突かれ、えぐられ、ナカだしされるその快樂に溺れてしまつた。男の人じやなくふたなりに処女を奪われてしまつたことも、後悔なんてしていいない。だつて、あんなに気持ちいいんだから♥

今日も、ふたなりの子たちとエッチする予定になつてゐる。今からおまんこが疼いて、どうにかなりそう……。

自分で言うのもおかしいけど、わたしは国語が得意で、中学校の時、作文のコンクールに出席したことがある。文章で他人に物事を伝えるのは、他の人よりきっと上手だ。

わたしが経験したことを、誰かに聞かせたい。これから書いていく文章で、これまで起きたすべてを、余さず伝えられるはずだ。順番に、ここに記していく、と思う。わたしが、ふたりセックスにハマつてしまつたのは、なぜなのか——

それは登校初日に、すでに始まつていた。

わたしはお姉ちゃんと一緒に、転校した白百合女学園に登校した。これがお姉ちゃんが普

通の女の子だつた最後の時間だつたと思うと、なんともいえない気持ちになる。

そんなことは知る由もなく、わたしはクラスが張り出された学園の昇降口で待ち合わせしていた見慣れた女の子に声をかけた。髪を結んだ、小動物みたいな、可愛らしい女の子。

彼女は、幼馴染みの詩織だ。

「おはよう、香奈ちゃん」

「詩織っ」

わたしは詩織を見つけると、駆けよつて抱き着いた。

中学の時からずっと一緒だつた詩織。毎日のように二人で登下校し、遊びに行つたり、勉強したりしていた。一度は別々の高校に進学したもの、わたしがこうして転校してきたことで、わたしたちは晴れて同じ制服を着ることが出来ている。

「やめてよお、香奈ちゃん。くつつかないでえ」

「ちよつとくらいいいじやん、詩織い」

「みんなの前だと恥ずかしいよお」

体をくねらせて、逃げようとする詩織を、わたしはさらにぎゅっと抱きしめる。

詩織の柔らかい体。胸はそこまで大きくない、ほつそりしたやせ型の女の子。わたしのほうが胸は大きくて、自分の胸を押し付けてあげると、詩織は頬を赤らめている。

わたしとお姉ちゃんは、姉妹揃つてけつこう胸が成長しているのだ。話しているときに、男の子の視線が胸に向くのを感じることがあって、わたしはそれが嫌だつたけど、今日からこの女子校で過ごすから、それに悩まされることはない。

女の子だけの幸せな世界。わたしはそういう場所に来たのだと信じて疑わなかつたけど、この後、それが間違つていたことを思い知らされることになるのだった。

「ねえねえ、一緒の部屋だよ、わたしたち……！」

クラスが違つてげんなりしていたところに、寮の部屋が同じことを知つて、わたしたちは大喜びをした。

何百人と生徒たちがいる中で、相部屋になれたのはとても低い確率だと思う。

「これから、毎日お泊り気分だね！ 詩織っ」

「うん……夜まで一緒にお話しできるね！」

わたしたちは、自宅から持つてきた荷物をうきうきしながら部屋にしまつていった。制服以外のお洋服、ちょっとした化粧品、教科書……新生活への期待でいっぱいで、面倒な作業も苦にならなかつた。

その日はもう、お風呂に入つたら横になりたかつたから、床にお布団も敷いてしまつていると、ドアをコンコン、と叩く音がした。

「はーい」

「見回りに来ました。初めまして」

ドアを開けると、綺麗な女人が顔を出した。

その人は、グラビアアイドルみたいな抜群の体つきで、胸もお尻も大きい女性らしい人だ

つた。

白いシャツに、タイトスカート——服装から、すぐに先生だとわかった。わたしは登校初日のもあって、まだまだ先生たちの名前を知らなかつた。

「ごめんなさい、先生のお名前、聞いていいですか……？」

「みんなからは、みゅう美優先生って呼ばれているわ。寮の管理をしています。よろしく。一年生はまだ寮生活に慣れていないと思うから、たまにこうして見回りに来るけど、あんまり嫌がらないでね」

「美優先生、これからよろしくお願ひします」

話しているうちに、担任のクラスが「2—D」だと聞いて、香奈はすぐに反応した。

「お姉ちゃんのクラスだ！ 友梨佳つて人、わたしのお姉ちゃんです」

「そうだったの。どうりで、なんとなく見覚えがあつたのね。でも、香奈さんは妹なのに、友梨佳さんよりしつかりしている感じがするわ」

「……よく言われます」

お姉ちゃんは結構自由奔放な人だ。やりたいことをやって、好きなように生きている感じがする。

わたしはそんなお姉ちゃんを見ていて不安になつて、その分しつかり者になつてしまつたのだと思う。

「今度、友梨佳さんと二人でいるところを見てみたいわ。仲良しなの？」

「お姉ちゃんとは、家などどうでもいいことでくだらない喧嘩してることが多くて……でも、仲はいいですよ」

しばらくなんでもない話をした後、詩織と二人で挨拶をすると、美優先生はまた来るわね、と言つて隣の部屋へと移動していくた。

「綺麗な人だね。詩織」

「そうだね、香奈ちゃん。あんな人が担任だつたら、毎日男の子が嬉しがつちやいそう」「何言つてるの？ ここはもう、女子校なんだから、そんなこと気にしなくてもいいんだよ」「あつ、そつか。ぼおつとしてた」

「まったく、もう」

詩織があはは、と笑つて「まかすのを見て、わたしもおかしくなつて笑つてしまつた。この時はまだ、何も異変は起こつていなかつたはずだ。しかし数時間後に、わたしは悪夢のような出来事に遭遇することになる。

学園に蔓延る呪い——しばらくわたしは、それを〈贈り物〉として捉えることは出来なかつた。

この学園の寮には、それぞれの部屋にシャワー室があつたけど、その他に、共同浴場が設置されていた。

綺麗なお風呂だと聞いていたから、わたしたちは、下着や寝間着、バスタオル、そして持

参したシャンプーなどを持つて、浴場へと向かつた。

「わあ、女風呂しかないんだね」

「そりやそうでしょ。女子寮なんだもの」

「そつかあ。変な感じ」

とぼけたことを言う詩織を可愛がりながら、わたしたちは脱衣室で服を脱ぎ始める。

ちょうど、混んでいる時間だったから、周りでは女の子たちが服を脱いで、下着姿になつていて、バスタオルを体に巻いていたりした。

わたしたちも、制服を床に落として、ブラジャーを外して、パンティを脱いでいく。

その途中で、詩織が何か異変を察知したのか、そもそもぞとしていたが、その時はまだ、彼女の身にどんな変化が起こっているのか、わたしは想像もしていなかつた。

「香奈ちゃん、はやく入ろうよ」

「う、うん……わかった」

裸になつた詩織はタオルで体を隠して、なんとなく举動不審な感じだつた。

もともと恥ずかしがり屋だから、知らない女の子たちに自分の身体を見られたくないだけかと思つていた。

それでも、体を洗つている最中、意を決したように詩織が話しかけてきた時は、何か異様な雰囲気を感じ取つていた。

「あのね、香奈ちゃん……なんだろう、これ……？」

詩織は、風呂椅子に座つたまま、体をわたしの方に向けた。

顔を真っ赤にしながら、少し足を開いて、下腹部のところを指さした。

「え……っ」

わたしは詩織の下腹部についているそれを初めて見たとき、それが何だかわからなかつた。

腫れ物——そうとしか、わたしは思わなかつた。それ以外に思いつかなかつた。

後から考えれば、すぐにちんぽが生えてきていると氣付いてもよかつたのかもしれないけど、そう気付くには、まだそれは小さすぎた。詩織のちんぽは、その時はほんの一センチくらいの出っ張りだつたのだ。

「できもの、かな？　すぐ腫れてるよう見えるけど……痛くないの？」

「うん……ひやんっ♥」

詩織は、自分のそれを触つて、なんだかはしたない声を上げた。

「ど、どうしたの？」

「ううん、なんでもない。こ、なんだかすごい敏感で……」

「そりなんだ。念のために、誰かに見せた方がいいかもね。あとで保健室に一緒に行つてあげる」

わたしは真剣に詩織を心配して、保健室に行くよう強く勧めた。

詩織は風呂に入つている間も、ずっとじもじとしていて、なんだか可哀想だつた。その

夜になつても、詩織は股間を気にしていて、折角一緒に夜までお喋りする予定が台無しになつてしまつた。

「ごめんね……わたし、今日は早めに寝るね」

「全然いいつて。早く寝て、早く治そう？ 明日、保健室で先生に診てもらおう」

「さつきから、むず痒くて……居ても立つても居られない感じで……」

詩織は、布団に入つても、つらそうにむずむずと体を動かしていた。

わたしがいつもみたいに、詩織に抱き着いて、背中を撫でてあげると、詩織はわたしの胸に顔を埋めて、ようやくぐっすりと眠り始めた。

わたしもそれで安心して、落ち着いて眠ることが出来た。

翌日、保健室で悪夢のようなものを見せられるとは知らずに。

その日、朝起きた時から詩織の様子はおかしかつた。

「香奈ちゃん……落ち着かない……」

なんだか頬を火照らせ、やたら隣で寝ているわたしにくつづいてくる。

普段はわたしの方から抱き着くことはあつても、詩織から体を寄せてくることはほとんどない。嫌ではないけど、なんだか、隣にいるのが詩織ではなくなつてしまつたような気がして、怖かつた。

「もう少しこうしてたい……んん……♥」

詩織はわたしのお尻に、腰を押し付けてくる。

固い何かが当たつていた。小さい突起のようなもの。柔らかいわたしのお尻の割れ目に食い込ませるように、ぐいぐいとななりつけてくる。

「詩織、どうしたの……？」

「わ、わかんないけど……なんか、これ……はあ♥」

「やめてよ、詩織……なんか、変だよ？」

放つておくといつまでもわたしの身体を抱きしめていそうだから、わたしは無理やり詩織から身体を引きはがし、朝の準備をし始めた。

その間も、詩織はぼおつとしていて、目の前が見えなくなつて、何か想像の世界に入り込んでいるかのようだつた。

二人で部屋を出て、教室に向かうときも、どこか上の空の様子だったから、わたしたちは一限が始まる前に保健室に行くことにした。

部屋に入ると、そこには女の先生が一人、机に向かっていた。

この人も、美優先生と同じく、白衣が似合う大人のお姉さんだつた。美優先生より胸は小さいけれど、それでもGカップくらいはありそうだ。

「あら、新入生の子？ こんな時間からどうしたのかしら？」

その人は、机の上に置いてある白い液体の詰まつた試験管をいじるのをやめて、こちらを

向いた。

につこりと微笑んで、椅子を一人分用意してくれた。

「そこに座って、可愛い二人組さん。わたしは凛先生ってみんなから呼ばれてるわ。あなたたちは一年生よね？」

「はい……香奈つていいます。この子は、詩織です」

「……」

詩織は、ぽんやりと凛先生を眺めたまま、頬を赤く染めていた。まるで見惚れているよう

だつた。

「大丈夫、詩織ちゃん？ わたしのこと、そんなに見つめちゃって。どこか体調が悪くなつちやつたの？」

「ええっと……それが……」

わたしは、詩織に例のアレを見せるように促した。凛先生にも「脱いで『らん♥』と微笑まれ、詩織は恥ずかしがりながらも、スカートを脱ぎ始める。

「なんだか……変なのが生えてきちゃつたんです」

「ううん？ 変なのって、どんなのかしら」

「固くて、さつきからずつと、びくびくしてて……」

詩織はついにパンティに指をかけて、ゆっくりと下ろす。保健室で友達が下着まで脱いでいくのを見るのはなんだかおかしな気分だったけど、詩織の股間を見て、わたしは瞠目した。「昨日より、おっきくなつてる……？」

割れ目の少し上にあつた腫れ物が、大きくなつてているのだ。

ちよつとした突起くらいだったものが、五センチくらいの棒になつていて。しかも、固くまっすぐに、ピンと伸びている。棒の下には小さな球体上のものが一つくつついていた。これは、腫れものなんかじゃない——わたしは、その棒からイメージするものがあつた。裸の小さな男の子を、ちよつと見てしまつたことがある。その股間についているものと同じ、アレ——。

「あら、小さくてかわいいちんぽ♥」

凛先生が、それをあつさりと言葉にした。

男性器になつた腫れ物は、今ぴくぴくと震えながら、固く勃起して、上を向いていた。先っぽからは、透明な汁がとろりと光つていた。

「普通は最初からもつと大きく成長するんだけど、詩織ちゃん……だつたかしら？ あなたのちんぽは、イマイチ発育がうまくいっていないわね」

「ちよ、ちよつと待つてください！ どうして詩織に、こんなものが……？」

「慌てないで。詩織ちゃん、よく聞いてね。あなたは、今日からふたりになつたのよ。おめでとう」

「えつ……」

詩織は、何を言われているのかわからないというように、困り顔でわたしの顔を見返して

きた。

ふたなり……わたしはその言葉を聞いたことがあつた。ちんぽが生えた女の子。そんなもの、変態の男の子が好きな漫画やビデオにしか出てこないものだと思つていたけど、そんなものがなぜ、現実に存在しているんだろう……？

夢でも見ているのかと思つて頬を引つ張つてみても、目が覚めるようなことはなかつた。

凛先生は、戸惑うわたしたちを見てクスクス笑いながら言つた。

「このふたなりちんぽが、うずうずして仕方ないのよね？」

「そ、それはっ」

「恥ずかしいことじゃないのよ。ちんぽが射精したがつて、勃起しちゃうのは当然のことよ？ もうちょっとわたしのそばにおいで♥」

「はい……っ」

吸い寄せられるように、詩織は凛先生のそばに椅子を動かした。

そして、ふいに詩織が高い声をあげ、体をびくりと震わせた。凛先生が、詩織の五センチくらいのちんぽを、優しく握つてあげていた。ちんぽがぴくぴくと動いて、わたしには詩織が気持ちがよさそうにしているように見えた。

「ひやっ◆り、凛先生……◆」

「うふ、どんな感じかしら？ ゾクゾクする？ その感覚に身を任せていのよ♥ わたしの手で、精通しちゃおうね♥」

詩織は、体を強張らせてそう言いながらも、眉を寄せてなんだか色っぽい声をあげてしまつていた。わたしは目の前の光景が理解できなくて、ただただ唚然として見守ることしかできなかつた。

「し、詩織……！」

「香奈ちゃん、これ、気持ちいい……◆ 凛先生の手、すごい、気持ちいいの……◆」

「あら、ありがとう。もうちょっと強くシゴいてあげてもいいのよ？」

「はああっ◆ そんな、強くう◆ ダメ、なんか、なんか出ちやいそうですう◆」

そして詩織は、一際甲高い声をあげて、体をのけぞらせた。

「ひゅっ！ ひゅるっ！」

詩織のちんぽから、わずかな量の白い液体が勢いよく飛び出していく。わたしは何が起きているか、知つていた。詩織は今、射精しているのだ。

ほんのわずかな精液を出すために、体を震わせ、快樂に身を震わせる詩織。異様な光景に愕然として、声すら出なかつた。

詩織のちんぽは精液を何度も迸らせた後、しなびて小さくなつた。詩織は、恍惚とした表情を浮かべていた。

「な、なにこれ……気持ちよかつたあ……◆」

「これが、おちんぽ射精の快感よ◆ すつぐよかつたでしよう？ もしまたムラムラした

ら、わたしのところにいらつしやい。好きなだけ精液出させてあげる♥」

床に垂れた白濁液をティッシュで拭いながら、凜先生は淫らに微笑むのだった。

詩織は、わたしに一部始終を見られていたことを恥ずかしがって、しばらくはわたしと会話することができなかつた。話しかけても、顔を真っ赤にして「く」くと頷いたり首を横に振つたりするだけで、わたしに目すら合わせてくれなかつた。

どうすればいいのかわからないまま、その日の授業が終わつて、一緒に部屋に戻ろうかという頃、ようやく、詩織の方から言葉をかけてくれた。

「香奈ちゃん……わたしのこと、気持ち悪いって思つてない？」

「思つてないよ」

「だつて、ちんぽが生えてきちゃつたんだよ……？」

「思つてないつてば。詩織は詩織だもん」

そう言つてあげると、やつとほつとした面持ちで詩織は胸をなでおろした。

「よかつたあ……」

「安心して。生えてきちゃつたものはしようがないよ。でも、他の人には知られたくないよね？」

「うん。見られたら、大変なことになっちゃうよ」

「そうだよね。お風呂に入るときとか、ふたりりつてことを隠すときには、わたしが力になるから」

「ありがとうございます……あ、あとね、香奈ちゃん」

急に、詩織はわたしのことをキラキラとした瞳で見つめて、妙なことを言い出すのだった。

「あのね……射精したとき、すつごく気持ちよかつたの……」

「そう、なんだ……」

「あんなに気持ちがよかつたの、初めてなの……」

詩織はぽつぽつと、精液を出した時の感想を聞かせてきて、わたしはどう反応していいのかわからなかつた。

ちんぽの生えたふたなりになつてしまつたことに対する、詩織自身は嫌な気持ちはないらしくて、それどころかさつきから、射精のことを話しながら、頬が緩みっぱなしだ。わたしは聞いていられなくなつて、話をつい遮つてしまつた。

「今もアレを思い出すと、ちんぽが勃つてきちゃうくらいで……」

「や、やめてよ。そんな……みつともないよ」

「そうだよね。でも、わたし、今ドキドキしてるの……次に凜先生に会う時が楽しみで」

「……詩織」

わたしは、穢れていない、綺麗だった詩織が汚れてしまつたような気がしていた。

別に詩織を嫌いになつたりはしないけど、なんともいえない気分になつてしまふ。

頬を赤らめ、ぼんやりとした表情でちんぽのことを喋る詩織を見ていると、ありえないことも考えてしまった。もしかしたら、詩織は男の子みたいに、凛先生だけじゃなく女の子みんなに欲情するようになるんじやないか……そう考えると、不安だつた。

この日の夜にされたあることも、余計にわたしを不安にさせた。

わたしたちはとりあえず、今日のところは部屋に備えつけのシャワーで済まして、寝床についた。

並んで横になっていると、詩織は相変わらずわたしにくついてきて、股間のそれをわたしに擦りつけてきた。固くなつたちんぽがお尻の割れ目に食い込んで、わたしはドキリとしてしまう。

「し、詩織……何やつてるの？」

「あつ、ごめん……なんだか腰が勝手に動いてたの……気持ち悪かったよね」

「大丈夫。きやつ、だから、やめてつてば……」

「ほんとにごめん……なんだか落ち着かなくて……もうちょっとこうしていい？」
詩織はわたしのことをぎゅっと抱きしめて、勃起ちんぽをぐいぐいと押し付けてくる。わたしはそれを仕方なく我慢して、詩織が落ち着いて眠るのを待つのだつた。

まだ、このときはその程度で済んでいた。

次第に詩織はちんぽの欲求に抗えなくなつて、わたしにちんぽをこすりつけるだけでは飽き足らなくなつてしまふのだった。

今思い出せば、はつきりとわかる。きっと、そのきっかけはあの人があの人が詩織に近づいたことだろう。

彩陽先輩。あやひ友梨佳お姉ちゃんの同じクラスにいた人だ。

あの人気が、詩織を狂わせてしまつた——

彩陽先輩に出会つたのは、詩織がふたなりになつてから数日後のことだつた。

詩織は凛先生に手コキしてもらつてからというもの、たまに、わたしに黙つてどこかへ行つてしまふようになつた。わたしは薄々勘付いていた。たぶん、一人で保健室に行つて、凛先生に相手をしてもらつてゐるのだ。

ちんぽが生えてきてしまつた詩織。ふたなりになつたからは、きっと男の子みたいに、精液を出さなければ気がおかしくなつてしまふのかもしけなかつた。

詩織自身も、わたしに隠し通すのは無理だとわかっているようで、一人でいなくなつた後の昼休みに何をしていたのか聞くと、素直に答えてくれた。

「具合が悪くて……保健室に行つてきてたの」

「具合？」

「ええつと……もう、はつきり言つちゃうね。ちんぽが疼いて、どうしようもなくて……」

「やつぱり、そななんだ」

詩織の言葉に思わずそういう風に答えると、詩織はしゅんとなつて、肩を落としてしまつた。

「おかしいよね……射精するために、保健室に通うだなんて……」

「ううん、そんなことない。変じやないよ。だって、射精したくてたまらないんでしょ？」

「そうなの……ちんぽがギンギンになつて、精液出したいよお、っていう思いで、頭がいっぱいになつて、それだけしか考えられなくなつちやうの」

「凛先生に優しくしてもらえてよかつたね」

「うん。凛先生がいなかつたら、わたし、きつと……」

詩織はわたしのことをじつとりとした視線で見つめてきた。

まるで、欲情した男の子みたいな目だった。わたしの身体が触りたくて、欲しくてたまらない、という目。

急な詩織の行動に、一歩後ずさつてしまつた。詩織は、慌ててわたしから目を反らした。

「な、なんでもない……わたし、おかしいよね」

「ううん、詩織はおかしくないよ。今の、忘れるから……いつも通りでいてね」

「うん」

気を反らそうと思つて、わたしは詩織と何も話さず、ただただ並んで廊下を歩いた。

その時、向こうから歩いてくる人影があつた。わたしのよく知つてゐる人物。

お姉ちゃんの友梨佳が、友達らしい二人の女生徒と一緒に、こつちに向かつて歩いてくるのだ。

わたしは声をかけようとして、目線を送つたが、その時お姉ちゃんの様子がなんだかおかしいことに気がついた。仲が良さそうにしている金髪碧眼の女の子と、その隣にいる茶髪をおさげをした女の子がいるのだけれど、漂う雰囲気が妙なのだ。

お姉ちゃんが金髪の子と一緒になつて、茶髪の子のお尻を追いかけて、言い寄つているような感じだつた。

そして何より変なのは、お姉ちゃんがやけに前かがみになつて、苦しそうな体勢をしていることだつた。

「おねえ……ちゃん」

結局、かけた声は小さくしぶんてしまつて、お姉ちゃんに気付かれることはなかつた。

お姉ちゃんは熱に浮かされたように周りが見えていないようで、すべ隣を通り過ぎたわたしの姿を見つけられなかつたのだ。

「あれ……？ あの人、香奈ちゃんのお姉ちゃん？」

「うん。なんか、気づいてもらえなかつた」

「どうしたんだろうね」

その茶髪の女の子が彩陽先輩だったということに気付いたのは後のことだつたけれど、今考へれば、あれがわたしたちと彩陽先輩との最初の出会いだつた。

さらに数日が過ぎて、わたしたち一年生が新しい場所に入していく時期が訪れた。

この聖白百合学園にはたくさんの中学生の部活がある。体育会系の部活から、文化系の部活まで、数えると数十の部活が、活発に活動していた。わたしたちはまず、体験入部という形でそれに参加していくことになっていた。

この学園は普通より一年生が部活に参加する時期が遅くて、偶然わたしはちょうどその時期に転校してきたのだつた。

「香奈は、何部に入る予定なの？」

「まだ、わかんない……」

わたしは中学時代、詩織と同じ水泳部に所属していた。

もともと詩織は水泳が得意で、小学生の時からずっと続けていた。わたしも詩織と一緒にいたいという理由で、中学生の時は詩織にくつづいて水泳部に入っていたのだ。
もし詩織が水泳部に入つていなかつたら、わたしも入つていなかつただろうな、といふくらい、水泳には興味がなかつたけれど、詩織と一緒にいるだけでわたしは十分だつた。

「わたしは、高校も水泳部かなあ」

「そうだよね。それじゃあ、わたしもそうするかも」

「中学の時もそう言つてたね、香奈ちゃんは」

というわけで結局、わたしはこの聖白百合学園でも、とりあえず最初に水泳部に体験入部してみることになつた。水泳の授業があると聞いていたから、スクール水着は用意していた。わたしたちは放課後、水泳道具を持ってプールへと向かつた。

聖白百合学園は私立高校で、普通の公立の高校より、設備が充実している。校舎はピカピカだし、体育館は新しく改装されたばかりだ。プールも同じで、大きくて綺麗だつた。

プール特有の塩素の香りが漂つて、中学生の頃を思い出した。

「わあ、やっぱり改めてみると聖白百合のプールは大きいね」

「詩織はこのプールに憧れてこの高校に来たんだつたよね」

詩織は水泳が得意で大会にも出場経験があつた。よりよい練習環境を求めて、この学校を目指したというわけだ。

わたしは、特技を持つている詩織が羨ましかつた。水泳をしているときの詩織は、どんな時より輝いていて、まぶしい。詩織が大会で良い記録を出した時は、友達であるわたしまで、誇らしく思つていた。

わたしは思いもよらなかつた。幼いころから水泳を頑張ってきた詩織への残酷な仕打ち——詩織が、水泳など興味が無くなつてしまふくらい、あることにハマつてしまふなんて。体験入部では、スクール水着に着替え、わたしたちは先輩たちに部の説明を聞いた後、一緒にプールで泳いだりした。

着替える時、詩織はちんぽを水着の中にしまえるか不安そうにしていたけど、なんとかもつこりするのを隠すことが出来ていた。詩織のちんぽは勃起していないときは本当に小さくて、ぱつと見たくらいではわからないくらいだつたのだ。

先輩たちの説明を聞いている段階で、昨日廊下ですれ違った、お姉ちゃんと一緒にいた先輩がいることに気付いていた。グループに分かれて練習することになったのだけれど、偶然、その人がわたしと詩織と一緒にグループになつた。

「こんにちは。あなたたち二人は、わたしと一緒に練習ね。わたしは彩陽って言います」「よろしくお願ひします」

わたしたちは彩陽先輩と一緒に練習して、すぐに仲良くなつた。練習の最中、会話は途切れることなく続いて、楽しい時間が流れた。

「へえ、大会に出場したことがあるんだ。きっと詩織ちゃんのほうが、わたしより上手だね」「そんなことないですよお」

「……ところで、詩織ちゃん。なんか……水着の中に、変なものが入つてない？ そこ、膨らんでるけど」

彩陽先輩の言葉で、わたしはようやく気がついた。水面の下で、詩織の股間がもつこりと膨らんでいるのだ。どうやら、ちんぽが勃起してしまつたみたいだつた。

詩織はその自覚がなかつたみたいで、自分の股間を見て、慌てて水着の上から手で隠した。「な、なんでもないんです……これは……」

「そうなの？ わたしには、そう見えないけど」

「あっ、詩織！ それは……腫れ物みたいなのが出来ちゃつたんだよね？」

「う、うん……つ、そなんなんですつ」

わたしがフオローして、その場はなんとか凌げたと思っていたけれど、その考えは甘かつた。この時、すでに彩陽先輩は、詩織がふたりであることを見抜いていたのだろう。詩織のことを考へるのなら、もつと詩織がふたりであることを隠す努力をするべきだつたのかもしれない。

その後、もう一度グループ替えがあつて、わたしたちは別々のグループになつた。その後も親切な先輩と一緒に練習できて、わたしも水泳部に入ろうかと思い始めた。
身体を流すために、着替え室の隣にあるシャワー室に向かおうと、詩織を探したけど、見つからなかつた。

「あれ？ しおりーつ」

一年生たちと先輩が、一斉にシャワー室に向かい始める中、詩織の影は見つからなかつた。同時に、彩陽先輩の姿も見つからなかつたから、もしかしたら彩陽先輩と一人でシャワーを浴びに行つたのかと思つて、わたしは一人でシャワー室へ向かつた。

そのまま、一人でシャワーを浴び、スクール水着から制服へ、着替えも済ませてしまつた。詩織が着替え室に来るのを待つて、シャツやスカートをノロノロと身に着けていたせいで、わたしは最後の一人になつてしまつた。その頃に、ようやく気付いた。まだ、着替えていない生徒たちがいることに。

「あれ……どうして二人が？」

荷物が、二つだけ着替え室に残つていたのだ。詩織のものと、もう一つ、先輩のものと思

しき荷物が一つ。おそらく、彩陽先輩のものだつた。

どうして、二人がまだ残っているのだろう、と思つた。彼女たちは一番最初にシャワー室へ向かつたはずなのに。ようやく、わたしは危機感を抱いた。もしかして、二人はまだ一緒にいるんじやないか。彩陽先輩は、詩織の秘密に気がついてしまつたのではないだろうか。わたしは考えた。二人がいるなら、きっとシャワー室じやないだろうか。どこか遠くに行つてしまつたわけじやなくて、まだ、シャワー室に残つてゐるんじやないか。

シャワー室で、一体何をしているんだろうか……？

わたしは、そつと着替え室を出て、隣にあるシャワー室の扉を開ける。

水がシャワーから流れる音。そして、人の気配があつた。なぜだかわからないけど予感がして、わたしは出来るだけ音を立てないように、靴と靴下を脱いでシャワー室の中へと入つていつた。

シャワー室の構造は、一人ひとりシャワーを浴びる個室が、入口から奥までいくつも並ぶ形になつてゐる。一番奥の個室から、詩織のものらしき声が聞こえていた。

「せ、せんぱあいっ◆ダメですうつ◆」

小さな声は反響し、わたしの耳にはつきりと届いた。妙に甘つたるくて、媚びるような声だつた。詩織のこんな声は聞いたことがない。いや、一度だけ聞いたことがあつた。保健室で凛先生に相手をしてもらつてゐるときの詩織の声――

もしかして……？

わたしは、見てはいけないと思いながらも、好奇心と不安を同時に搔き立てられて、一層足音が出ないよう気に付けながら、その個室へと向かつていつた。

じゅぽつ……じゅるるるつ、じゅぽつ

そんな卑猥にも聞こえる音に、わたしはぐくりと唾を飲んだ。そして、はつきりとそれとわかる会話が聞こえた。

「そんなに吸つたらあ、らめえつ◆もう出ない、もう精液、出ないからあつ◆」

「うーそ◆まだまだちんぽ、固くなつたままじyan。ちゅつ◆」

「そ、そ、うだけどおつ◆こんなの、おかしいよおつ◆あんなにいっぱい出したのに、なんか、奥からくるう◆出ちやう、また出ちやうからあつ◆」

「じゅるじゅるつ……好きな時に出しちやつていいんだよ？ ほら、もう一回びゅつぴゅしよう？」

「はああつ◆もうイク、またイつちやう……彩陽先輩にイかされちゃうう◆」

個室に手が届くまで近づいた。すりガラス越しに、一人の影が見える。

立つてゐる詩織の足元で、彩陽先輩がしゃがんで、詩織の股間に顔を近づけたり、離したりを繰り返していた。そのたびに、じゅふじゅふと卑猥な音が鳴つてゐる。

詩織はその刺激がたまらなさうに足を震わせ、天井を向いてゐるように見えた。

そんなはずない――彩陽先輩が、そんな人なわけがない。真相をこの目で見なくては。わたしは憑りつかれたように個室の扉に手をかけ、そして開いた。

「い、イクうつ♥ あああああつ♥」

ぴゅーっ！ ぴゅるるつ！ ぴゅくつ

目の前には信じられない光景があった。

詩織が小さなちんぽを一生懸命勃起させ、一生懸命、精液を放っていた。彩陽先輩の口内に。

彩陽先輩は詩織の五センチくらいのちんぽを口に咥え、射精を促すように、玉を指で転がしていた。一通り、詩織が眉を寄せて体を震わせるのを終えると、ちんぽをちゅぱつと口からはきだして、その先端をぺろぺろと舐めた。

唇の端から、とろりと白い精液がこぼれていた。

「うつ……はああつ♥ またいつぱい出ちゃつたあ……♥」

「詩織ちゃんの可愛いちんぽ、おいしくてやみつきになっちゃう♥ 」こんなに小ぶりで、小学生みたいな短小ふたなりちんぽ、初めて見たよ。……あつ」

そこでようやく、彩陽先輩は、そばで見つめるわたしの存在に気がついた。詩織も、ようやくわたしのほうに顔を向ける。

「ふああ……♥ あれえ……香奈あ……♥」

詩織は、夢見心地の表情で、すでに正気を失いかけていた。唇の端から涎を垂らしながら、恍惚とした表情で、へらへらとわたしに笑いかけた。

最後に、詩織はまだ尿道に残っていた精液を、ぴゅっと彩陽先輩の舌の上に放つのだつた。

〈友梨佳 一章〉

転校してきた最初の日から、違和感は感じていた。

この聖白百合女学園に転校することになつて、わたしは喜んでいた。この学園には女の子しかいない。これからは男の子のいやらしい視線で見られることはないのだ。わたしは普通に可愛い自信はあつたし、胸も結構大きいから、以前から男の子にいやらしい視線を向かれることが頻繁にあつた。中学に入つてからずつとそうだつたから慣れてきていたけど、やっぱり嫌なものは嫌で、女子校と聞いたときは素直に嬉しかつた。

しかし、それは糠喜びだつた。

「転校生の友梨佳さんです！ わたしたちのクラスへようこそ！」

担任の美優先生は、グラビアアイドルみたいな抜群の体つきで、胸もお尻も大きい大人の女性だつた。

美優先生は、にこやかに迎え入れてくれたけど、同級生になる女の子たちの様子が、なんだかおかしいのだ。

全員ではないけど、かなりの数の女の子が、わたしのことをねつとりとした視線で見つめていた。男の子が向けてくるいやらしい視線そつくりだつた。胸のあたりや、制服のミニスカートから出たナマ足に、視線が集中してくる。

「えつと……よろしくお願ひします……」

戸惑いながら自分の席に向かうと、隣の女の子にもそういう目を向けられて、どうすればいいかわからなかつた。

隣の女の子は、ハーフなのか、金髪ストレートに青い目の可愛い女の子だつたし、なんとなく高貴な雰囲気が漂つていてお嬢様みたいだつたから、本当だつたらもつと仲良くなりたい！ と思うところなんだけど、ねつとりと全身を舐めるように見つめられて、困つてしまふ。

「ゆ、友梨佳さん……お隣ですわね」

ホームルームが終わつたとたんに話しかけてきたと思つたら、なんだか言葉遣いが本当にお嬢様みたいだ。仕方なく顔をあげて目を合わせると、ぱっと顔を赤らめて、何やらもじもじしている。

「わ、わたくし……名前を、紗耶香さやかといいます。ど、どうぞよろしくお願ひしますわ」

「う、うん、よろしく」

背筋がぴんと伸びていて、お行儀正しく足も閉じている。やっぱり、どこか良いお家のお嬢様なんだろうと思つていたら、横から女の子が口をはさんできた。

「紗耶香はね、凄い家系のお嬢様なんだよ。しかも、お父さんが外国人。すごいよねー」

その女の子は、茶髪をおさげにした、かわいい女の子だつた。手首や首にアクセサリーを

つけていて、ちょっとやんちゃな雰囲気を漂わせている。

「わたしは、彩陽^{あやひ}。紗耶香はこういう風にたまに様子がおかしいけど、たまにだから……許してあげて♥」

「おかしくなつちやうの？ 面白いね、ふふ。よろしく」

「友梨佳さんがかわいいから、緊張してるんだよ、きっと」

「ええ？ どういうこと？」

その時は、彩陽が冗談を言つただけかと思っていた。紗耶香の様子がおかしい意味が、わたしにはわからなかつた。

その日の授業が終わつて、仲良くなつた紗耶香と彩陽と、女子寮へ向かうことになつた。聖白百合女学園は、全寮制の学校なのだ。わたしは、着替えの入つたスーツケースを持つて、一人に連れられて寮の玄関に立つた。大きい建物で、この女学園の女の子たちがみんな、ここに住んでいると思うとすごいと思つた。

ただ、寮へ向かう最中も、そして今も、通りすがりの女の子に、いやらしい目で見られて、わたしはやっぱりおかしいな、と首を傾げた。

「ゆ、友梨佳……なんだか、いい匂い、しますわね」

突然、紗耶香がそんなことを言つて、はあ、はあ、と息を荒げているから、正直ちよつと引いた。

「紗耶香もいい匂いするよ。シャンプーは寮のお風呂の使つてるの？」

「いいえ、わたくしは家から送られてきたものを……そうですね、今日、一緒にお風呂に入りませんか……♥」

「ええ？ べ、別にいいけど……」

わたしがどう答えればいいのかわからないでいると、彩陽があはは……と困つたように笑つた。

「ちよつと紗耶香、しつかりしてよ。あんた、さすがに気持ち悪いわよ」

「も、申し訳ありませんわ……でも……」

「わかつたわかった。ちよつと紗耶香のこと借りるね、友梨佳。あ、部屋はその角を曲がつた突き当たりだから」

紗耶香を連れて彩陽がいなくなつて、わたしは狐につままれたような気分だった。紗耶香の調子が良くなることを祈るばかりだつた。

スーツケースを引きずり、自分の部屋を見つけてドアを開けて入つてみると、けつこう綺麗な部屋だつた。置かれている勉強机や本棚、洋服箪笥はどれもおしゃれで、わたしは気分がよくなつた。

まるでホテルのように、ベッドが二つ並んでいる。そう、この部屋は二人部屋なのだ。もう一人の女の子が誰なのか気になるけど、部屋のドアに名前は書いていなかつた。ほかのドアにはそこにいる生徒の名前が書いてあつたのに、わたしの部屋にはわたしの名前だけし

か書いていなかつた。

「もしかして、一人部屋なのかな……」

部屋には生活感が全くない。本棚や机の上に教科書が置いてあつたり、洋服箪笥には服が入つてゐるんだけど、ゴミ箱は空だ。よくわからない。いずれにせよ、一人部屋ならそれはそれで嬉しかつた。一緒に暮らすルームメイトに気を遣うのは、けつこう疲れるのだ。

「これからわたしの新しい学校生活が始まるんだ……！」彩陽とは仲良くなつたし、紗耶香はよくわからないけど、まあ、友達は出来た。いい滑り出しだ。

今思うと、そんな風に思つていたのがばかばかしい。

気が付くと、わたしは自分の部屋のベッドで眠つていた。たしか、自分の荷物を開いて、洋服を箪笥にしまつたりしていたら、疲れてしまつて、一休みしようとベッドに飛び込んだのだ。

「痛いっ」

ベッドから起き上がるうとした時、何の前触れもなく、股間に激痛が走つた。体験したことのない痛み。まるで体の内側を擦られたような痛みだつた。慌てて自分のお股をスカートの上から目で確認したけど、なんともない。何かと思って、制服のスカートの上から触つてみたけど、腫れたりはしていない。

「な、なんのよ……」

わけがわからぬでいると、ドアをコンコンと叩く音が聞こえた。はーい、と言つて出る

と、紗耶香と彩陽が訪ねてきてくれていた。

「二人とも、来てくれたの？　はいってはいって」

「さつきは申し訳ありませんでしたわ」

「え？」

おかしかつた紗耶香の様子が、普通に戻つていて、のぼせたみたいに上氣していた頬は普通に戻つていて、ねつとりと絡みつくようだつた視線も、ごく普通に戻つてゐる。わたしが部屋で寝ていた短時間で何があつたのかと気になつた。

「これがおかしくなつてないときの紗耶香だよ、友梨佳」

「そなんだ……うん、普通に戻つてよかつた」

「はしたないところをお見せしましたわ。お詫びに、ダージリンを持つてきましたの。ぜひ一緒に飲みませんこと？」

「わあ、ありがとう！　なんだか高級な香りがする！」

「わたくしのお母さまが送つてくれましたの。余分にあるから、もらつてちようだい」

そんなわけで、丸い机に三人で膝を寄せ合つて座り、紅茶を頂いた。普通の時の紗耶香は

本当に礼儀正しくおしとやかで、さつきまでの彼女が嘘のようだ。

「もし二人でいるときに紗耶香がおかしくなつたら、保健室に連れて行ってあげて。保健室の凜先生が、なんとかしてくれるから」

「お願いいたしますわ」

「ふーん、わかつた。任せておいて」

何かの病気なんだろうか、と気の毒に思つたけど、翌日、その病気がわたしに降りかかるだなんて、わたしは思つてもいなかつた。

次の日、ごく普通に午前の授業が終わり、お昼休みに紗耶香と一緒にお昼ご飯を食べようということになつた。

彩陽は用事があるらしく、どこかに行つてしまつたから、紗耶香と一人きりで購買部に向かつた。

「痛いっ！」

向かう途中の廊下で、また股間に昨日と同じ激痛が走つて、わたしはふらついた。紗耶香が支えてくれて、助かつた。

「大丈夫ですか……？」

「ごめん、なんでもないの」

まともな時の紗耶香は本当に優しくて、購買部でお昼ご飯を買つている最中も心配してくれた。しかし、その辺りから、段々と様子がおかしくなり始めた。

「友梨佳……◆ 転ばないように、手をつなぎませんこと……◆」

頬を染めて、はあ、はあと吐息しながら言われて、気持ちが悪かつたけど、転ばないためならと思つて、手をつないで歩いた。紗耶香は嬉しそうにわたしの手を握つて、例のねつとりとした視線でわたしの体を舐めるように見る。

「友梨佳の手、柔らかい……◆」

「う、うん……ありがと」

「友梨佳は、胸も大きいですわよね……あの、その……」

わたしの胸を凝視して、どう考へても異様なことを言い出したので、わたしは彩陽に言われた通り、紗耶香を保健室に連れていくことにした。

「凜先生のところに……？　いやだわ、お恥ずかしい……」

なんだか前かがみになつて、歩きにくそうにしている紗耶香を連れて行くのには時間がかかつた。さつきまでわたしを支えてくれたまともな紗耶香に早く戻つてほしい。

保健室につくと、白衣を着た、綺麗なお姉さんが出迎えてくれた。柔らかい物腰と、ほんのり漂う色氣。大人のお姉さんという感じ。

「あら◆ 紗耶香ちゃん、またおかしくなつちゃつたのね。あなたは？ 初めてお会いしたかしら」

「友梨佳です。この間、転校してきました」

「ふうん、そういうこと。ということは、紗耶香がなんていう病気か、ご存じないのね」

椅子に座った紗耶香は、甘えるような目で、凛先生を見ている。なんだか手なづけられた
みたいだ。

「凛せんせい……◆ また、お世話になりますわ……◆」

「お友達の前だけど、いいのかしら？ この子はこの学園に来たばかりで、何も知らないと
思うのだけど」

「構いませんわ……◆ はやく、はやくしてくださらない……◆？」

「もう、紗耶香さんは本当にだらしないわね」

そういうて、凛先生は机から何かを取り出した。数センチ四方の、プラスチックの包装。
その中には、透明なピンク色の丸いゴムが入っていた。

高校一年生のわたしはそれが何か、知っていた。コンドームだ。訳が分からなくて、ひた
すら困惑した。

「紗耶香さんはね、〈ふたり〉っていう病気なのよ」

凛先生の言葉も意味不明だつたし、そのあと、紗耶香がした行為も理解不能だつた。スカ
ートの下に手を入れて、急に下着を脱ぎだしたのだ。かと思うと、スカートをまくりあげて
……そこにあつたものを見て、戦慄した。

太くて、血管の浮き上がつたちんぽ。ガチガチに固くなつて、ヒクヒク震える男性器が、
紗耶香の股間に生えていた。

スカートをめくりあげ、下着をおろし、ちんぽを露出した紗耶香の姿を見て、わたしは目
を見張つていた。あまり見たくないもののはずなのに、目を離せない。異様さに、視線を釘
付けにさせていた。

「先生……◆ お願いしますわ……◆」

紗耶香はちんぽを突き出し、待ちきれないという表情ではあ、はあ、と息を荒げている。
お嬢様然とした気品ある美しさをもつた、ハーフ美少女の紗耶香が、こんなことをしてい
ることに衝撃を受けた。

「しようがないんだから。すぐ、ゴムつけてあげるから◆」

保健室の凛先生は、椅子に座つたまま紗耶香に向き合つて、コンドームをちんぽの先端に
つける。そのまま、コロコロと慣れた手つきで優しく装着していくと、紗耶香はびくびく震
えた。

「あんっ◆ 先生の手が触れるだけで、感じちゃいますう……◆ はああ◆」

紗耶香のちんぽは、先生が触るたびに、ヒクヒクと震えている。ますます太く勃起して、
ぱんぱんに膨れ上がつている。

凛先生がコンドームの上からちんぽを優しく握り、しごき始めると、紗耶香は蕩けた表情
で嬌声をあげた。

「お、おほおつ◆ 気持ちいいですわつ◆ んああつ◆ 先生、シコシコするの、たまりませ
んわつ◆」

「もう、紗耶香ちゃんは見かけによらずだらしないんだから……もっと静かに、声を我慢で

きないのかしら」

「こんなのは、我慢できるはずありませんん♥ んひいつ♥ た、たまりませんわ♥」

「情けないわねえ……友梨佳さん、こんなところ見ちゃって、大丈夫?」

紗耶香の乱れ具合に正直ドン引きしているところに凜先生に話しかけられて、言葉すら出てこなかつた。ひたすら、目の前で繰り広げられていることに圧倒されていた。

凜先生は、紗耶香のちんぽをシコシコとしごき続けている。根元からカリ首までをしつかり握り、優しく上下に撫でさすつてはいる。カチカチに固くなつたちんぽの先端から我慢汁を垂らしながら、紗耶香はひたすら快感に打ち震えていた。

「あっ、そこおつ♥ カリのところ責めないでください♥ んほおつ♥ こんなに気持ちいいこと、他にありませんわあつ♥」

高貴な雰囲気を醸し出していた紗耶香がここまで堕落した姿を見せるだなんて、どれだけ気持ちいいんだろうと、少し気になつてしまつた。あんな風に手でしてもらつだけで喘ぎ狂うだなんて……想像すると、なんだか体の奥がじいいんとしてくる。

「せ、先生い♥ もうそろそろ、ダメですう♥ 奥から、精液込み上げてきますう♥ あつ、あ、あつ♥」

「あら、そろそろかしら? 我慢しないで、存分に出してしまんなさい」

「わ、わかりましたあ♥ いっぱい、いっぱい出しますう♥」

紗耶香はゆがんだ口元から涎を垂らしながら、うわ言のように呟く。紗耶香の細い足に力が入つてはいる。どうやら、絶頂が近いみたいだつた。固唾を飲んで、その瞬間を見守る。

「んひいいつ♥ イキますうつ♥ イキますわあつ♥ 凜先生の手コキで、精子、びゅるびゅる出でてしまいますわあ♥ 一んぎいつ」

「びゅくつ! びゅるるつ! びゅるるるるうつ! ! !

コンドームの中で、紗耶香のちんぽが猛り狂つて、白濁液を噴き出した。大量の精液がコンドームの先端にみるみる溜まつていつて、ようやく射精が終わる。

凜先生が握るちんぽは、まだヒクヒクと蠢いていたが、段々と小さく萎んでいつた。

「……つはあ、はあ♥ わたくしのちんぽ、いっぱい射精して喜んでますわ……」

紗耶香はそのままぐつたりと壁に寄りかかり、余韻に浸つて熱い吐息を漏らしている。衝撃的な一部始終だつた。思わず見入つてしまつて、最後まで見届けてしまつたけど、これから紗耶香とどういう風に接すればいいんだろう、と考えると先が思いやられた。

凜先生は、使用済みのコンドームを紗耶香のちんぽから外し、コンドームを目の高さに挙げて、そこに溜まつた精液を観察している。

「今日も健康そのものみたいね。よかつたわ♥」

そして、その精液を試験管にトロトロと移し、机の上に立てた。

よく見ると、保健室の机には同様に白濁液が入つた試験管が、いくつも置かれていた。まさか、あれは全て女子生徒から採取した精液なんだろうか……? もしかして、紗耶香の他にも同じようなちんぽが生えた女の子がたくさんいる……?

そう考えていた時だった。急に、股間を例の激痛が襲つた。昨日から経験していた断続的な痛み。今回は、これまで経験した痛みより遥かに強烈で、耐え難い痛みだつた。

「痛っ！…！」

思わず叫んで、その場にうずくまる。大丈夫？ と凛先生が駆け付けるのを、朦朧とする意識の中で見た。視界がぼんやりと薄らぐ中で、わたしは痛みの走る部分を手で押さえていたのだけど、そこに何か違和感があった。何か、突起物が手のひらに当たる気がするのだ。それが何か判別する前に、あまりの痛みでわたしは気を失つた。

目が覚めると、保健室のベッドの上だつた。白いカーテンがわたしを隠すように四方を取り囲んでいる。

がばり、と慌てて起き上がり、自分に何が起こつたのか思い出そうとした。保健室の凛先生にちんぽをしごかれる紗耶香。そのあと、わたしは……。

記憶が鮮明になつた。そう、股間の痛み。何か突起物が触れた。嫌な予感。わたしはこわごわと、自分の股間に、スカートの上から手のひらを乗せた。

もにゅり。何か、柔らかいものが、ついていた。

形を確かめると、棒のようなものと、その下に玉のようなものが二一つ。頭が真っ白になつた。これは、一体どうしたことなんだろう……？

「おはよう、友梨佳。やつと目が覚めたね」

カーテンがさつと引かれて、向こう側から現れたのは……彩陽だつた。わたしは慌てて、思わず股間を両手で押させていた。それを見て、彩陽がくすりと笑つた。

「大丈夫、何があつたのかは、凛先生から聞いてるよ。まさか、友梨佳も、紗耶香みたいになつちゃうとはね」

「ど、どういうことなの？ わたしの体に何が起こつたか、知つてるの？」

「ふふん、それはもう、自分でわかつてるんじゃない？ 認めたくないだけで」

そんな……。わたしは、もう一度自分の股間を触る。さつきのは何かの勘違いで、そこに何もないことを祈りながら。

やつぱり、棒と、玉がふたつ、ついている。わたしの手が感じ取つている。そして、その棒と玉も、わたしの手の感触を感じ取つていた。これは、わたしの体の一部なのだ。

頭が真っ白になつた。わたしは、本当に……紗耶香みたいに、なつてしまつたのだろうか？

「一体、これは、な、なんなの……っ！」

「友梨佳は、〈ふたなり〉になつちやつたんだよ。女の子なのに、おちんぽが生えている、〈ふたなり〉にね」

初めて聞く言葉だった。わけがわからないでいると、ふいに、彩陽がベッドの上にあがつてきて、わたしの正面に顔を寄せた。目を伏せながら、なぜか、自分の制服のブレザーを、

脱いでしまった。

「そこでね……凛先生に頼まれたんだけど、いいかな……友梨佳」

「な、なに……？　どうしてワイシャツのボタン、外してるの……？」

「あなたのちんぽを、精通させてあげて欲しい、つて頼まれたの。だから、ね……♥」

彩陽が、ワイシャツのボタンを外し終わり、ピンク色の可愛いブラジャーに覆われた、柔らかそうな膨らみが目に入った。

その瞬間、どくん、と自分の中で何かが脈打った。頭が、かあっと熱くなる。目が、その谷間に釘付けになっていた。ねっとりと、舐め回すようにその胸を見てしまう。以前、わたし自身に向けられていた視線を、彩陽に向けてしまう。

「んふ♥ 友梨佳ったら、鼻の下が伸びてる。コウフンしてきちゃったのかな？」

彩陽はそして、後ろ手にホックを外し、ブラジャーをシーツに落とした。

まろやかな曲線で彩られた、おっぱいが、わたしの目の前にあった。先端で、かわいらしいピンク色の乳首が、ぴくんと上向いて立っている。

わたしは、生唾をぐくりと飲んで、頬が熱くなるのを感じた。そして、体験したことのない感覚が襲つた。

下半身に——わたしに生えてきた、ちんぽに血液が集まっていて、ちんぽが、固くなり始める。大きく膨らんで、カチカチに勃起してしまった。

戸惑つていたけど、それ以上に、頭の中が目の前のおっぱいを触りたいという欲求で埋め尽くされた。

「ねえ、触りたいんでしょ。いいよ♥ ほら、揉んでみて♥」

手をつかまれて、導かれるままに彩陽の胸に触れた。ふにょん、と効果音が出そうなほど、柔らかくて、弾力がある。思わず、夢中になつて揉みしだいてしまう。

「柔らかい……♥ 彩陽のおっぱい、柔らかいよお……♥」

「でしょ？　さて、そろそろこっちのほうも、準備が出来てきたかなあ？」

「あひいつ♥」

股間に、感じたことのない感覚が電撃のように走った。彩陽が、わたしのスカートをめくりあげ、勃起して下着からはみ出したちんぽに、指で触れていた。

指が絡まって、しゅこしゅこと、ちんぽの皮を上下に動かし始める。すると、震えるような何かが、こみ上げてくる。

「なに、この感じ……？　あ、あ、んつ♥」

「たっぷり射精して、楽になろうね、友梨佳♥」

につっこりと淫靡に微笑む彩陽の手で、わたしは喘ぎ始めてしまっていた。

これまで感じたことのない感覚。しづかれるたびに、ちんぽが力を増して固くなつて、昂つていく。

「や、やあっ♥ なに、これえつ……♥ あ、ああっ！」

わけもわからず、その感覚に翻弄される。バチバチと、電撃が走るような感じだった。

次第に、その感覚の正体がわかつてくる。くすぐったいような、気持ちがいいような……
それはクリトリスでオナニーするときの快感に、よく似ていた。

シコシコとわたしのちんぽをしごきながら、彩陽は淫らに笑みを浮かべている。

「うふふ◆ そんなに可愛い喘ぎ声あげちゃって……◆ これがそんなにいいの？」

彩陽は、親指と人差し指でリングを作つて、ちんぽのカリ首のところをきゅっと締め上げる。皮の上から上下に動かされると、たまらない快感が押し寄せた。

「あああっ◆ そこ、ダメえつ◆ そこ、ちんぽ、ひもちいいいつ◆」「

「呂律が回つてないよ、友梨佳。大丈夫？ まだまだ、気持ちいいのはこれからだよ♥」
彩陽はいったん、じごく手を止めた。いつのまにか汗だくなつていたわたしは、やつと一息つくことができた。

改めて、ブラジャーを外し、前を開いた姿の彩陽を見る。以前まで、体育の前に女の子のあられのない姿を見ても、なんとも思つたことはなかつた。でも今は違う。食い入るように見入つてしまつていて。柔らかそうなおっぱいや、その先っぽでピンク色に咲いている乳首から、目を離すことができない。

彩陽は、ぺろりと舌を出した。唾液でテラテラと光る舌。さらに、その唇の前でさつきしたように親指と人差し指でリングを作り、上下に動かして見せた。その仕草にも、途方もない魅力を感じてしまつていた。

「わたしの舌で、イかせてあげるね◆ たつぱり、出していいから◆」「

「出す……？ それって……？」

「何言つてるの？ ちんぽで、〈出す〉つて言つたら、あれしかないじやん♥」

彩陽はぺろりと自分の唇を舐めて、わたしのちんぽにふうっと息を吹きかけた。

「ひやんっ◆ な、なに……もしかして？」

「決まってるじやん◆ しゃぶつてあげるつて、言つてるの◆」

わたしは喜ぶというより、ちょっとした恐ろしさを先に感じていた。

ちよつとしごかれただけであんなに気持ちがよかつたのに、そんなことをされたらどうなつちやうんだろう？ 想像すると、背中に鳥肌が立つた。

「そ、そんな、しゃぶるつて……！」

「安心して。実は昨日、紗耶香のちんぽも、おクチでヌイてあげたんだよ◆ わたしにしゃぶられるの、大好きなんだから」

「紗耶香が……？ つていうことは、あの時、様子がおかしかつた紗耶香が、元に戻つたのは……」

「そういうこと。それじやあ、わたしのおクチ、楽しんでね◆ あつたかくて、ヌルヌルで、気持ちいいって、紗耶香は言つてたよ。あむつ」

「ちょ、ちよつと待つて——んひいつ◆」「

心の準備が出来る前に、彩陽はわたしのちんぽをぱくりと咥え込んだ。

彩陽が言つた通り、生温かい、人肌の温度の粘膜が、ちんぽを包み込んでいた。トロトロ

の唾液が、たつぱりとまとわりついでくる。正真正銘、初めて感じる感触だった。

気持ちがよすぎて、さつきよりひときわ甲高い声をあげていた。ちんぽから頭のてっぺんまで、強烈な快感の電流が走り抜ける。頭が真っ白になりそうで、ほとんど何も考えられない。こんなに気持ちがいいことがこの世にあるなんて、知らなかつた。

「んあ、ああっ！」「これ、気持ちいいいっ♥　ちんぽしやぶられて、気持ちよくなつてるう♥」

「んふ……♥　ひやつぱり、たのひんでね♥　んじゅるつ……♥　ちゅぱつ、じゅるる……♥」「ひいつ♥　そんなに吸つたらあ♥　気持ち良すぎて、おかしくなるうつ♥　」「こんなのもらめえつ♥」

「じゅるうう……♥　ぐぱつ♥　んぐうう……♥」

彩陽は、涎を垂らしながら、わたしのちんぽを夢中になつてしまふり続けている。ピンク色の舌がちんぽを這いまわつて、ちゅるちゅると吸引される。どうやら、相当ちんぽをしあぶるのに慣れているみたいだつた。比べるものを探らないからわからないけど、相当上手だと思つた。

剥き出しの亀頭を舌がくすぐるたびに、何か熱いものが奥から込み上げてくるのが分かつた。タマタマがうねうねとうごめいて、狂おしい感覚が押し寄せる。

「あつ、ダメえ♥　ちんぽから、なんか出るうつ♥　もらしちやうう♥　んああつ——ぐうつ

「
どぴゅるつ♥　ぴゅるるるつ♥　ぴゅつぴゅつ♥

頭が今度こそ真っ白になつて、何もかも自分の中から出でいくような気がした。全身に快感が駆け回つていた。

彩陽が咥えた肉棒がビクビク震えながら、液体をぴゅるぴゅると出してはいた。その唇の端から、白濁した液体が、ところどころぼれた。彩陽はちんぽを口から出した後に、べえ、と舌を出した。

「ん……♥　んぐう……♥　んはあ♥　わたしのおクチで、精液、いっぱい出しちゃつたね♥」
その舌の先から、たつぱりと白いねばねばした液体が、流れ落ちる。その光景がわたしの目にはたまらなくいやらしく見えた。ちんぽが、ぴくりと反応した。

「せ、精液……？　わたしが、出した……？」

「初めての射精、おめでとう♥　精通つてやつだね。ふふ、気持ちよかつたでしょ？　（ふたり）になつた子はみんな、一旦射精の気持ちよさを知ると、やめられなくなつちやうつて聞くよ？」

「うん……♥　すつゞくよかつた……♥」

わたしは余韻に浸りながら、机に置かれた鏡にうつすらと映つた自分の顔を見た。

とろけきつて、だらしなく歪んだ表情。こんな自分を見たのは初めてだつた。

不思議と嫌悪感は湧いてこなかつた。こんなにも気持ちよくなれることが嬉しい気持ちのほうがあつかった。もっとしたくて、仕方ない。

彩陽は、ハンカチで口元を拭いながら、にっこりと笑った。

「わたしも、友梨佳のちんぽ、紗耶香のと同じくらい、おいしかったよ♥」

「彩陽……紗耶香とは、普段からそういうことしてるの？」

「ううん、ちがうの。わたし、おしゃぶりが上手で……♥ 紗耶香だけじゃなくて、他の〈ふ

たり〉の子にも、褒めてもらつてるよ」

「つていうことは……？」

「この学園の〈ふたなり〉の子は全員、しゃぶつてあげたと思うよ♥ みんな気持ちよくてたまらなそうにしてた。最近は毎日、誰かのちんぽをしゃぶつてあげてるかなあ。友梨佳も、してほしい？」

「い、いいの……？ それなら……♥」

「でも、ずいぶん先まで予約が埋まっちゃつてるし、どうしようかなあ……ふふつ♥」

悪戯っぽい笑みを浮かべられて、わたしは必死になってしまった。

もう一度、ちんぽをしやぶつて欲しい。その強烈な思いが湧き上がってきて、恥ずかしいだなんて思つている暇もなかつた。それほどちんぽの快感に夢中になり始めていた。

「そんなにして欲しいんだ……でもしばらくお預け、かな？」

「な、なんで……？ わたしも、してほしい……♥ もつといっぱい、ちんぽしゃぶつてほしい……♥」

「さつきまでちんぽが生えてきたのに戸惑つてたのに、もうちんぽ快楽の虜だね♥ かわいそうに……。本当に我慢できなくなつたら、保健室の凜先生に頼めばいいと思うよ」

そう言つたところに、ちょうど、カーテンが開かれて、凜先生が顔を出した。

白衣を着た、綺麗なお姉さん。あらためて観察すると、豊かな胸は、揉んだら柔らかそうだ。彩陽のを触つた時のことを思い出して、その揉み心地を想像してしまう。そのくらいには、わたしの心は薄汚れ始めていた。

「あら、終わつたところかしら？ 友梨佳さん、初めて射精させてもらつて、気持ちよかつた？」

「すつごく、よかったです、先生……♥」

「大人気の彩陽ちゃんにしてもらえるだなんて、よかつたわね。でも今度から、もし我慢できなくなつたら先生のところにもいらっしゃい。たつぷりヌキヌキしてあげるから♥」

「わかりました、先生……♥」

につこりと微笑む巨乳の凜先生に見惚れながら、わたしは上の空で答えていた。

凜先生で精液を出したい……そんな欲求ではやくも頭がいっぱいになり始めていた。でも、出したばかりなせいか、まだちんぽはそれほど疼いてはいなかつた。

……まだこの時は。

紗耶香の様子から、察する」ことが出来てもよかつた。〈ふたなり〉になつた弊害を、わたしは思い知ることになつた。

△友梨佳 二章△

異変が起きたのは、翌朝のことだった。

「な、なにこれ……！」

私が覚めた時に、股間に違和感を感じて、てのひらで触つてみた。すると、すっかり固くなつたちんぽが、刺激を求めるかのようにヒクヒクと震えていた。

パジャマ姿のわたしは飛び起きて、姿見の前に立つ。パジャマのズボンの前が、大きくなり出してテントを張つていた。それも、昨日と比べるとどう見ても、おかしかつた。

「な、なんで、こんなに大きくなつちゃつてるの……？」

勃起した状態のちんぽが、昨日より一回り大きくなつていた。

昨日、保健室で彩陽に会つてもらつた後、しばらくちんぽはおとなしくなつていた。寮へ戻つても勃起することはなくて、他の可愛い女の子に発情しても、欲求を自制できていた。わたしは姿見に移つた自分のみつともない姿が情けなくて、ちょっとどげんなりしたけど、それより湧き上がつてくる強烈な感情があつた。

「はあ……♥ オナニー、してみよつかな……♥」

昨日、彩陽にしごいてもらつたり、しゃぶつてもらつたりした時の快感が忘れられなかつた。もう一度あの快感を味わいたい。その気持ちがどんどん大きくなつて、わたしはちんぽに指で触れた。

自分でちんぽをしごくだなんてみつともないという気持ちもあつたけど、しごき始めるとそんな気持ちは一気に搔き消えた。

「あつ♥ これ、気持ちいい……♥ どうしよう、止まんなくなつちゃいそう……♥」

ちんぽのカリ首から、根元にかけてを片手で握つて、皮の上から上下に動かす。シコシコと上下運動を繰り返していると、夢のような快樂が、押し寄せてくる。

わたしは姿見の前に立つたまま、ちんぽをしごく手を止められなかつた。

ひざをちょっと曲げて、腰を突き出すような変なポーズになりながら、甘い吐息を漏らす。

「んああつ♥ どうしよう、これえ♥ ちんぽ、シコシコするの、たまんないいつ♥」

勝手にじごくスピードが上がりつづけ、わたしはオナニーにのめりこんでいった。普段、オナニーをすることはあつても、こんなに夢中になることはなかつた。我慢汁がダラダラ鈴口から垂れて、手のひらにこびりついていたけど、そんなことは気にならなかつた。

「ふう♥ ふうつ♥ ダメえ♥ こんなことばっかりしてちや、ダメなのにい♥ しごくの止

まんない♥ はああ♥」

姿見に映る、ちんぽを懸命にしごいてオナニーにふける自分の姿は女の子として色々と終わっていたけど、どうしようもなかつた。表情はすっかり快樂に浸つて、とろけきつていし、口の端から涎が垂れそうになつてゐる。腰を小刻みに振つて、少しでも刺激を増やそく躍起になつてゐた。

「あつ♥ でるう♥ 精液びゅるびゅるしちゃうつ♥ ——うぐうつ♥
ぴゅるつ♥ びゅつびゅつ♥

勢いよく、白濁液が噴き出して、姿見にこびりついた。射精は何度も続いて、そのたびに、姿見が汚れていく。

終わったころには、いくつもの白い筋が鏡の表面をタラタラと垂れていた。
一通り精液を出して、ようやくしごく手の動きが落ち着いて、わたしはその場でへたり込んだ。萎び始めたちんぽは、まだヒクヒクとうごめいでいる。

「気持ちよかつたあ……♥」

わたしは、毎朝、こうなつちやうのは面倒だな、と思いながらも、得られる快感がたまらなくて、このままでもいいかな、と思い始めていた。
しかし、異変はこれだけに留まらなかつた。

制服を着て寮を出て、待ち合わせした彩陽と合流した。彼女の姿を見て、ふいにちんぽが反応した。

可愛らしい彩陽の顔を見ていると、汚してやりたくなつた。昨日の記憶——しゃぶつてもらつて、その口にたっぷり射精した。あれをまたやりたいという欲求が急に大きくなつて、ちんぽが大きくなり始める。

「どうしたの、そんな風にわたしのこと、見つめて。もしかして、朝から発情しちやつてる?
ふふ♥」

「ち、違うよ……そんなんじやないって」

「本当? 紗耶香は〈ふたり〉になつた次の日は大変だつたよ? いつでもどこでも発情して、ちんぽをしごいてつて、頬み込んで。何回出せるのつてくらい、射精してたよ」

「わ、わたしは……そこまで節操なくないよ」

そう言いつつも、スカートの下で、ちんぽが勃起し始めるのを感じていた。さつきオナニーで出したばっかりなのに、もう勃起するなんて。昨日までみつともない紗耶香をバカにしていたけど、謝らなくちやいけないかもしけなかつた。

こんなにも射精したくてたまらないとは思わなかつた。体が熱くなつて、息が荒くなつてくる。きっと今のわたしは紗耶香みたいに、頬を染めて発情してゐるに違ひなかつた。ちよつと前かがみになりながら歩いていると、彩陽にくすくす笑われた。

「素直に言えばいいのに♥ 可愛いなあ……射精したいの?」

「で、でも……ホームルーム遅れちゃうし」

「そつかあ、それなら残念。しばらく我慢だね、頑張れ♥ わたしはお昼休みは別のふたな

りの子と約束があるから、保健室で凜先生に頼んでくるといいんじゃない？」

わたしは結局彩陽に呟いてもらわずに、教室で授業を受けた。

一限から二限まで、ずっと上の空だった。勃起したちんぽが疼いて、先生の話も頭に入つてこないし、何も手につかなかつた。ヒクヒク震えるちんぽは一向に小さくなる様子はなくして、ずっと勃起しつぱなしだつた。

隣の席の紗耶香にもわたしの様子がおかしいことに気付かれたようで、心配そうに声をかけてきた。

「あの……友梨佳さん、具合が悪いのではなくて……？」

「紗耶香、ありがとう……はあ◆」

きつと発情してとろんとした顔をしているだろうから、紗耶香に見られたくなくて、そっぽを向いていると、申し訳なさそうに声をかけられた。

「昨日保健室で、わたしがふたりつてこと、ご存知になつたと思うけれど……わたしの」と、もうお嫌いになつてしまつたのかしら……？ 気持ちが悪いもの、当然ですわ……

「そ、そんなことないよ！ 実はね……」

わたしは、テントを張つているスカートを、紗耶香に見せた。目を丸くされたけど、どこか嬉しそうな表情でもあつた。

「まあ！ 友梨佳さんも、ふたりになつてしまつたのね！ でも、よかつたですわ……」

「紗耶香……さつきから、勃起が止まらなくて……はあ◆ 紗耶香もこういう日、あるよね？」

「もちろんですわ。ちんぽがどうしても言うことを聞かない日は、一旦射精しないとどうしようもないんですの」

「そうだよね。そろそろ昼休みだし、保健室の凜先生に頼んでくる……」

「それがいいですわ！ 凜先生は色んな生徒たちの相手をしているから、気持ちよく出させてくれますわよ。そうですわ、わたしも最近初めてシテもらつたのですけれど、凜先生は頼むと、手以外でもヌいてくれますのよ」

「そうなの？ わかった、ちょっと頼んでみるね！ ありがとう……」

紗耶香は別の用事があるみたいなので、わたしは一人で保健室に向かつた。その最中も、廊下を歩いている女の子たちに襲い掛かりそうになつたけど、なんとかこらえた。朝オナニーして以来、ずっと我慢しているから、どうにかなりそうだつた。保健室に入ると、凜先生が笑顔で出迎えてくれた。

「あら、友梨佳ちゃん。どうしたの？」

白衣が似合う美人の先生。胸が大きくて、揉んでみたいという気持ちでいっぱいになつた。凜先生に向かい合つて丸椅子に座ると、スカートを押し上げてちんぽが勃起しているのが、凜先生にも見て取れた。

「やっぱり、そういうことね。ふたりになつたばかりの頃は、ちんぽが疼いてしようがな

「いつて、他の生徒からも聞いてるわ」

「お願いします……ずっと朝から、我慢してて」

「しようがないわね、シコシコしてあげる。ちんぽを出しなさい♥」

凛先生の前で、ちんぽを出すのは顔から火が出そなくらい恥ずかしかったけど、しゃいでもらいたい気持ちのほうが大きかった。

スカートをめぐりあげて、下着からはみ出たちんぽを見せる。ヒクヒクと震え、がちがちに勃起して、我慢汁が先から垂れている。

「こんなになるまで放っておいて……体に悪いわよ？ それじやあ、ゴムつけるわね♥」

「あの……先生っ、紗耶香から聞いたんですけど、手以外でも、又いてくれるって本当ですか？」

「紗耶香ったら、あまり広めないよう言つたのに。一部の仲のいい子にだけ、特別に気持ちよくしてあげてるの。でも、友梨佳さんも、してあげてもいいわよ♥」

「あ、ありがとうございます……ええっと、それじやあ……」

「わたしのおっぱい、大きいと思わない？ これを役に立てたくって、これで〈ふたり〉の子を癒してあげてるの♥」

「つてことは……」

「ぱいズりって、言うのよ♥ おっぱいでちんぽを挟んで、気持ちよくしてあげるの」

凛先生は、白衣の袖から手を抜いて、はらりと肩から床に落とした。

その姿にわたしは見惚れていた。色気のある綺麗な凛先生が、目の前で脱いでくれているのだから、興奮しないはずがなかつた。

シャツのボタンを外し、前を開く。ブラジャーに包まれた凛先生のおっぱいをこうしてみると、大きいのがはつきりわかつた。Gカップくらいありそうだ。

「わたしのおっぱい、たっぷり楽しんでね♥ うふふ♥」

凛先生がブラジャーをずらすと、豊かな膨らみの先端で、大きめの乳首がぷっくりと膨らんでいた。

少し体を揺らすだけで、たゆたゆと揺れる巨乳。大き目の乳首は、吸い付いてほしいと言わんばかり。

これから、ぱいズリをしてくれると言われて、ちんぽはバキバキに勃起していた。血管が浮き上がって、元気そのものだ。

「ごめんなさい、精液を採取するから、ゴムはつけさせてね♥」

凛先生は優しく微笑んで、コンドームの封を開けた。紗耶香にもしたように、ちんぽにつけでもらえるのかと思つたら、驚くことに、凛先生はそれを口に含んだ。

「おクチでつけてもらうのは、初めて？ うふ♥」

凛先生はそつと前屈みになつて、わたしのちんぽに口を近づける。指でちんぽの根元を支えてもらうだけで、ビリビリと電気が走るような快感があつた。唇が触れて、温かい凛先生の口の中に、ちんぽが飲み込まれていく。

「あ、あはあっ♥ 凜先生に、ちんぽ、咥えられてるう♥」

凛先生がわたしの股間に顔を埋めている。どうしようもなく興奮して、ちんぽがますます固くなった。口でされただけで気持ちよくて、体がこわばつた。

べろり、とちんぽを舌が舐めまわして、たっぷりと唾液をまぶされた。

涎の糸をひかせながら、凛先生がちんぽから口を離してにつりと笑つた。

「はい、ちゃんとゴムつけられたわね♥ ここからが本番だからね♥」

凛先生は、わたしの手を取つて、おっぱいに触らせててくれた。わたしもおっぱいはそこそこあるけど、それよりもずっと大きくて、柔らかいおっぱい。友達同士でふざけて触つたことはあつたけど、こんな風に魅力を感じたことはこれまでなかつた。

興奮して、頭がくらくらしてくる。思わず、欲望をそのまま言葉にしていた。

「どう、柔らかい……？」うふ♥ ちんぽがビクビクしてゐる。興奮してゐるのね♥

「すごいです……♥ あの、乳首、吸つてもいいですか……♥」

「あら、いいわよ♥ ほら、ちゅーって吸つてみなさい♥」

凛先生はおっぱいを手で支えて、吸いやすいように身を乗り出してくれた。わたしは、夢中になつてその大き目の乳首を吸つた。こんなに幸せな時はないんじやないか、つていうくらい、満足していた。

「あんっ♥ そんなに強く吸つちやダメよ♥ わたしまで気持ちよくなつちやうじやない♥」

「凛先生のおっぱい、おいしい……♥ じゅるるう♥」

「ほらほら、そのくらいにしておきなさい♥ そろそろ、友梨佳ちゃんのちんぽも刺激が待ち遠しくて仕方なさそうよ♥」

その通りで、おっぱいを吸つてゐる間、ちんぽはビクビク震えて、はやく射精したくてたまらなそだつた。わたしは椅子から立ち上がって、反り立つたちんぽを凛先生の前に突き出した。

「お願ひします♥ 凜先生♥ いっぱい射精させてください♥」

「こんなに勃起しちやつて……♥ いいわよ♥ 谷間にちんぽを挿れてみて♥」

「はーい♥ んんう……♥」

わたしは、息を荒げながら、凛先生のたわわなおっぱいの谷間に、ちんぽをぐつと突き入れた。先生は左右から、両手でおっぱいを挟んでくれる。

柔らかいおっぱいが、左右からぴつたりと押し付けられていた。思わず、甘い吐息を漏らしてしまふぐらい、気持ちがいい。先端から根元まで、先生のおっぱいで包まれて、卑猥な見た目だつた。

「ああっ♥ 凜先生つ♥ 気持ちいいですう♥ ちんぽが、先生のおっぱいで見えなくなつちやつてますう♥」

「ふふ、そんな可愛い顔で喘がないで♥ そんなにわたしのおっぱいの具合、いいのかしら

凛先生は、手のひらでおっぱいをこねくり回して、わたしのちんぽをやさしく刺激していく

◆

れた。むにゅむにゅと、形を変えるおっぱい。先生が、わたしを見上げてにつこりとほほ笑む。

「どうかしら♥ もつともつと、気持ちよくなつてちようだい♥」

「あはあ♥ 凜先生♥ わたし、そろそろイキそうですう♥ ちんぽがビクビクして、我慢できないって言つてますう♥」

「それじやあ、たっぷり気持ちよくなつて、たっぷり射精しちゃつてね♥ ふふ♥」
先生は、ぎゅっとおっぱいを手のひらで押し付けて、刺激を強くした。
わたしは我慢できなくなつて、いつのまにか腰を振つていた。男の子みたいにガシガシ振るような力はないから、へこへこと、ゆっくりな腰の振り方になつてしまつたけど、それでも気持ちがよくて、ますます射精の予感が高まつた。すぐそこまで、こみあげてきているのが分かつた。

「あああつ♥ あああーつ♥ 凜先生は、わたしイキますう♥ びゅるびゅる精子、出しちゃいますう♥ ——んんつ」

「どぴゅつ♥ びゅるびゅるつ♥ びゅーつ♥」

朝からずっと溜めていた精液が、一気に迸つた。気が遠くなりそうなほどの快感で目の前がチカチカした。全身がちんぽになつちやつたかのような快楽で、どうにかなりそうだつた。射精が終わると、力が抜けて、その場でぐつたりへたり込んでしまつた。ちんぽはようやく萎びて、おとなしくなつてくれた。

凛先生は、そのちんぽに装着されたコンドームを指でつまんで持ち上げる。その中にはたっぷりと白濁液が溜まつっていた。

「すごい量……♥ こんなに出すなんて、相当我慢してたのね♥」

先生は、紗耶香の時と同じように、精液を試験管に移して、保管した。

「一体、その精液は何に使うんだろう？ わたしは、疲労感でその場から立ち上がれないまま、ぼんやりとそう思つたけど、質問するほどのことでもないと思つて、存分に余韻に浸つた。

凛先生は、服を整え、再び白衣を着直しながら、につこりと微笑んだ。

「また、射精したくなつたらいらっしゃい♥ いつでも待つてるわよ」

保健室で凛先生に射精を手伝つてもらつて以来、わたしはあることばかり考へるようになつていた。

——もつと気持ちよくなる方法はないのかな？

ただ射精するだけでは物足りない。まだまだ上があるはず。最高の快感を得るためにには、どうしたらいいんだろう、とわたしはぼんやりと夢想する。

最初は、彩陽にしげいてもらつたり、舐めてもらつだけで天に昇るような心地を味わえた。その後自分でオナニーもしてみた。でも、やっぱり自分でするより、他の女の子にちんぽ

を刺激してもらった方が、気持ちよくなれる気がする。

凛先生のパイズリは、これまで一番気持ちよかつた。あのマシュマロみたいなGカップおっぱいで挟んでもらうのは、唯一無二の心地よさだった。

本当だつたら、毎日のように凛先生のところに行つてパイズリしてもらいたいところなんだけど、一つ問題があった。

凛先生は学園中のふたりの女の子を相手しているわけで、わたし一人のために時間を使つてくれるわけじゃない。この間、保健室に行つた時も先客がいて、危うく気まずくなつてしまふところだつた。

「ん……くああっ◆ 凛先生い……◆」

「頑張れ、頑張れ♥ 詩織ちゃん」

少し開けた保健室の扉から、そんな先生と生徒のやりとりが聞こえてきた。覗いてみた感じだと、一年生の女生徒の相手をしてあげているらしかつた。

また鉢合わせになつちやうのも御免だから、わたしは出来るだけ他の相手を見つけなければいけないな、と思つていた。凛先生と同じくらい気持ちよくしてくれる人は、他にいないだろうか？

「もつと、気持ちよくなりたい……◆」

「友梨佳さん、ぼおつとしてますけど、具合でも悪いのではなくて？」

「え……？」

隣の席の紗耶香が、心配そうにわたしのことを見つめていた。

金髪碧眼の、おどぎ話にでも登場しそうなお嬢様にして、ふたりの紗耶香。今は欲求が収まつてゐるようで、とくに挙動不審な様子はなくて、礼儀正しいお嬢様そのものだ。

「ちょっと、ムラムラしちやつてて……ちんぽが、勝手に勃起してきちゃつて」

「それは大変ですね。凛先生のところに行つたほうがいいんじゃないかしら」

「ううん、いいの。凛先生じやない人に、相手してほしくて……」

そういう会話をしていると、教室に入つてくる人影があつた。

担任の美優先生に、わたしの知らない綺麗な女生徒が連れ立つてゐる。

風にたなびく長い黒髪が、カチューシャで留められている——清楚な雰囲気が、魅力的に映つて、鮮烈なイメージが頭に残つた。

その人は、わたくしより一つ年上、三年生の先輩だろうか、なんとなく大人びた雰囲気を纏つっていた。

そして何より、思わずその胸に目が行つてしまふ。Gカップの美優先生よりも、さらに大きいおっぱい。制服の前が、大きくせり出している。

すらつとした体型なのに、胸だけはボリューム満点なのだ。まさに理想的と言つてよかつた。目が釘付けになつてしまつてゐるわたくしに、首をかしげながら微笑を返してくれて、わたしは頬がかあつと熱くなつた。

美優先生が親しげに話しかけてくるのも、耳に入つてこない。

「あら、もう放課後なのに、二人で何しているの？　もう他の皆は帰っちゃったわよ」「特に何も……お喋りしていただけです」

紗耶香は行儀よく会釈した後、わたしが見惚れっぱなしのグラマラスな先輩にじく普通に話しかけた。驚くことに、紗耶香とその人は、知り合いらしかった。

「そうですわ、^{なつき}夏希先輩……確か、生徒会のメンバーはまだ募集していましたよね」

「ええ、しているわよ、紗耶香さん」

しつとりとした声でその先輩は答え、につこりと微笑む。

夏希先輩。わたしはその名前を記憶に刻み込んだ。まだこの人と話したこともないのに、一目惚れしてしまっていた。

——夏希先輩とエッチしたい……♥

そんな思いが一気に湧き上がってきて、わたしはどうすればいいかわからなくなり、何も言葉が出てこなくなってしまう。

だが夏希先輩は、意外にも急にわたしの手を取って、嬉しそうに話しかけてきた。温かい手のひら——心拍数が一気に上がる。

「あっ……！ 隣にいるあなた、友梨佳さん、よね？ 話は聞いているわ。可愛い女の子が二年生に転校してきたって」

「そ、そんな、可愛いだなんて……はじめまして、友梨佳です」

「わたしは夏希。よろしくね♥」

「よろしくお願ひします。な、夏希先輩」

夏希先輩とこんなに仲良く話せている上に、可愛いと言つてもらえた。どうやら、夏希先輩は初対面にも関わらず、わたしのことを気に入ってくれているみたいだ。気分がよくなつて、股間がうずうずと勃起しそうになつてしまふのを、必死に抑える。

「夏希先輩は、生徒会に入っているんですか？」

「うふ♥ そうね、転校してきたばかりなのよね。知らないのも仕方ないわ。わたしはこの学園の生徒会長なの」

初耳だった。この目の前にいる綺麗な先輩が、生徒会長だったなんて。

確かに、雰囲気は洗練されて華やかだし、受け答えなどがしっかりとしていて、言われてみれば納得だった。

「す、すみませんっ、知らなくて」

「別に謝らなくてもいいの。そういうわけで……もし予定が空いていたら、今から生徒会に遊びに来てみない？ 生徒会はいつでも可愛い女の子を募集中よ♥」

ぐい、と近づいてくる夏希先輩。息が当たるほどの距離。

意外にも積極的なお誘いに、ドキドキしてしまう。さつぱりしたシャンプーの匂いが漂い、わたしは勃起を止められなくなつたちんぽを、さりげなくスカートの上から手で押さえた。そうしないと、スカートを押し上げて、ふたなりであることがバレてしまいそうだつた。

「生徒会……生徒会ってどんな活動をしてるんですか？わたし、あんまり知らなくて」「最初は遊びに来るだけでいいわ。今日はお菓子を食べたりお茶をしたりしながら、ゆっくりお喋りをしようと思つていたところなの。ぜひ、来てみない？」

お茶するだけ……そう言わると気になつてきてしまう。生徒会と聞くと、仕事があつて大変そうなイメージがある。結局、どんな仕事をしているのかわからなかつたけど、乗り気になつてきててしまった。

夏希先輩は、紗耶香に尋ねた。

「紗耶香さん、約束していたお菓子は持つてくれたかしら？紗耶香さんはいつも豪華なものを持ってきてくれるから、みんな楽しみにしているわ」

「もちろんですわ、とつておきのものを用意しましたの」

「あれ、紗耶香さんって、生徒会に入つてたの？」

「そうですわ。まだお話ししていませんでしたっけ？」

紗耶香はあら、と口に手を当てて自分でも驚いた様子だ。これまで用事がある、と言つてどこかに行つてしまつた時は、きっと生徒会のお仕事があつたのだろう。

わたしの腕をつかんで、紗耶香はにつこりと微笑む。

「一緒に生徒会に来ませんこと？楽しいことは保証しますわ」

「そこまで言うんだつたら……今日、試しに行つてみていいですか？」

「歓迎するわ。そろそろ始まる時間よ。友梨佳さん、早速行きましょう」

夏希先輩は、わたしの手のひらを引いて、につこりと笑つた。

わたしは温かいその手のひらの感触や笑顔にほんやりとなつて、夏希先輩と紗耶香の後に、ついていつてしまつた。

こういう風に可愛い女の子に誘われたら、断り切れそうにない。以前の自分だつたら、相手が可愛いだけで誘いに乗るだなんてありえなかつた。自分が変わつてしまつたことを認識しつつも、そのことが嫌になることはなかつた。

生徒会室で、わたしたちは楽しい時間を過ごした。生徒会の役員の女の子たちは歓迎してくれて、わたしはすっかり入部する気になつてしまつた。

紗耶香が用意していたケーキは美味しくて、顧問の美優先生も優しくしてくれて、至れり尽くせりでどうしてこんなに優しくしてくれるんだろう、と思うくらいだつた。

話に花が咲き、あつという間に時間は過ぎていつた。先生や生徒の噂、見て いるドラマの話……話の種は尽きない。

次第に会話は、生徒会の活動に移つていつた。隣に座つた夏希先輩が説明してくれた。「この学園の生徒会は少し変わつていて……パーティーの開催が主なお仕事なの。一部の生徒たちをこの教室に呼んで、楽しく遊ぶのよ◆」

「パーティー……一体、どんなことをして遊ぶんですか？ゲームとか？」

「それは見てのお楽しみ◆」

夏希先輩は、ふふ◆と笑つて、机の下でわたしの太ももに手を乗せた。

ドキリとしてその表情を見返すが、夏希先輩はどうしたの、と言わんばかりに首をかしげて足をさわさわと撫でてきた。

どうしてこんなことをしてくれるんだろう、という思考はどこかに行つてしまつて、わたしは夏希先輩に見惚れながら、ちんぽをガチガチに勃起させてしまつた。

あざとくて、いやらしい手つき。まるで、愛撫するのに慣れ切つてゐるかのようだつた。

ちんぽがカチカチに勃起してスカートを押し上げているのを見られてしまつた気がしたけど、夏希先輩は表情を変える様子はない。

「夏希先輩……？」

「今度のパーティーには、友梨佳さんも招待させて。来てくれるよね？」

「は、はい……♥」

わたしは気がついたら首を縦に振つていた。

「へえ、生徒会に入れてもらつたんだ。よかつたね」

「うん、そうなの……」

並んで廊下を歩き、何気ない会話をしながら、わたしは彩陽の横顔に見惚れていた。

今日は、ちんぽがやたら元気だつた。さつきから、女の子を見ると興奮して仕方ないのだ。ちんぽが勃起したまま全然もとに戻らない。射精することしか考えられなくて、もうスカートを押し上げてゐるのを隠す余裕すらない。

剥きだしになつた亀頭が直にスカートに擦れて、痛痒いような妙な感覚だつた。先端から我慢汁がにじみ出てスカートを汚しているのにも気付いたけど、どうでもよかつた。とにかく誰かにちんぽを刺激してもらつて、精液を出したい。

「もしかして、夏希先輩に勧誘されたの？」

「そうだけど……」

「やつぱり、ね。そういうことかあ……」これからが楽しみだね♥

「どういうこと？」

「ううん、なんでもない。そのパーティー、わたしも参加することになつてるから、その日は一緒に楽しもうね♥」

彩陽はなんだか含みのある言い方をしていていたけど、そんなことは後で考えればいい。一旦いかないと、頭がおかしくなりそつた。

少し前かがみになりながら、彩陽を追いかけていると、くすくすと笑われた。

「もう……友梨佳 今わたしに興奮してゐるでしょ？」

「な、なんでわかつたの……？」

「すつごいトロけた目でわたしのこと見てくるし、ほら、ちんぽが勃起してゐるのバレバレだ

よ」

「ひやっ」

つんつん、とスカートの上からちんぽをつつかれて、わたしは股間を両手で押さえる。指の間から勃起したちんぽの形がはつきりわかつた。

ちょっと触られるだけで甘ったるい声が出てしまう状態だった。ちんぽがヒクヒクして、もつと刺激を求めていた。

「ねえ、紗耶香もさつきからずっと黙つてたけど、興奮してるんでしょ？ しゃぶつて欲しそうな目してるよ♥」

「そ、そんなことありませんわ……わたしは……」

「さりげなくちんぽを押さえつけてるつもりかもしれないけど、勃起してるのわかってるからね」

「う、う存じなのだつたら、その……どうにかしてくれません」と?♥」

紗耶香は、節操なく彩陽に言い寄つてはいる。わたしも彩陽にまたフェラして欲しくてたまらなくて、彩陽の手を取つて、頬み込んでしまう。

「わ、わたしも……何とかしてほしい……♥」

「しようがないなあ、二人とも。わたしが特別に、気が済むまで気持ちよくしてあげるよ。

この後、浴場に来て。まだ皆が来るには早い時間でしょ。裸の付き合い、してあげる♥」

〈友梨佳 三章〉

わたしは、下着や寝間着、バスタオルを持って、着替え室に予定していたより早く来てしまった。射精が待ち遠しくて仕方なかつた。ちんぽはずつと勃起しつぱなしだ。

すぐに、紗耶香も着替え室にやつてきた。待ち合わせの時間はまだまだなのに、紗耶香も我慢していられなかつたのだろう。

「先に、着替えてしまいませんか？」

「そうだね、彩陽が来たらすぐに始められるようにしようつか」

わたしは制服を脱いでいく。リボンを外し、ボタンを外したシャツを床に落とす。スカートのジッパーを下ろして下着姿になる。

パンティからは醜悪なちんぽが思い切りはみ出していた。ヌルヌルとした液体で鈴口が濡れて、はやく精液を吐き出したいと言わんばかりに震えている。

隣にいる紗耶香を見ると、同じような状況だつた。はみ出したちんぽに血管が浮き出して、ぱんぱんに膨れ上がつていてる。

下半身のそれさえ見なければ、普通の美少女だ。でも、ちんぽの存在感は異様だつた。

「わたしたち、すごいのが体にくつついてるんだね……改めてみると、びっくりしちゃう」

「そうですね……でも、もうこれがいい生活なんて、考えられませんわ」

確かにそうだつた。わたしたちの生活は、もうちんぽとは切つても切り離せない。

毎朝のようにオナニーをして、たっぷりと精液をティッシュに吐き出してからクラスへ向かう。午後の授業中は周りの可愛い女の子たちに発情して、ちんぽが勃起してしまう。保健室の凜先生や彩陽にお世話にならないと、いつ女生徒を襲つてしまふかもわからなかつた。

下着も脱いだ紗耶香が、わたしのそばに近づいてくる。

「なんだか……友梨佳さんのちんぽ、この間より大きくなつていませんこと？」

「そうかなあ……ひやっ♥」

紗耶香が、そつとわたしのちんぽに指先で触れた。それだけで、わたしのちんぽは反応して、ぴくぴくと震えた。

いくらふたなりでも、紗耶香が可愛いことには変わりない。こうしてちんぽを触つてもらうと、興奮してしまつ。

その指は太さを確かめるように、わたしのちんぽを優しく握つた。温かい手のひらに包まれて、気持ちがよくなつてしまつ。

「紗耶香あ……♥ もつと触つてえ……♥」

「あら、いいですわよ。……それなら、わたくしのちんぽも握つてください……んんうつ♥」

紗耶香のちんぽを恐る恐る握つてみると、わたしのちんぽより一回り小さい感じがした。それでも、ギンギンに固くて、熱くて、カリ首がやたら大きい。自分のちんぽと比べてこん

なに違うんだ、とわたしは不思議な気分になつた。

「しごいてくださいませんか……♥」

「わ、わたしも頼んでいい？ ……あんつ♥」

わたしと紗耶香は、お互にちんぽを握った手のひらを動かして、喘ぎ声をあげてしまつた。

自分でオナニーするのとは違う快感がこみ上げてきて、腰碎けになつてしまいそうになる。紗耶香も毎朝のようにオナニーしているのもあって、しごき方はどつても上手だ。

女の子同士、ちんぽを向かい合つてちんぽを握りあうのは変な感じだったけど、紗耶香の手のひらが滑らかな動きでちんぽを擦るたびに、気持ちがよくてたまらなかつた。

紗耶香も、わたしにしごいてもらつてたまらなそうに身体を揺らしている。そのたび、長い金髪と柔らかそうなおっぱいが揺れた。

「友梨佳さん、そこ、すごくいいですわっ……んほお♥」

「紗耶香も、しごき方がねちつこくて、あんつ♥ やらしい……」

目の前で紗耶香は恍惚とした表情を浮かべていて、わたしもたぶん同じような顔になつているんだろうな、とぼんやりと考えた。

夢見心地で、ふたりなり同士の手コキを楽しんでいると、着替え室に入つてくる人影があつた。慌ててちんぽを隠そうと思つたけど、入つてきた人物を見て安心する。

「あれえ？ 一人でもう楽しんでたの？ そういう溜まつてゐみたいだね♥」

「彩陽……♥ 我慢できなくて」

「彩陽さん、お願ひしますわ……こんなに勃起して、亀頭が真っ赤になつちゃつてますの♥」
しごきあつて準備万端になつたちんぽを、二人して彩陽に向ける。紗耶香のちんぽは我慢の限界なのか、ぴゅっと透明な我慢汁を噴き出している。

わたしたちの反り立つたちんぽを見て、彩陽はくすくすと笑いながら、わたしたちの背中を押して浴場に連れて行つた。

「まあまあ、落ち着いて♥ ゆっくり三人で楽しもうよ」

「待ちきれませんわあ……♥」

切ない表情の紗耶香が急かしたおかげで、彩陽はすぐに服を脱いで裸になつた。ちんぽが生えていない、正真正銘の女の子だ。小さめの乳首がつんと立つたおっぱい、なだらかな体の曲線……股間に入つている縦の割れ目を見て、頭にさつと血が上つてくるのがわかるくらい興奮した。

彩陽はわたしたちを連れてまだ誰もいない浴場へと入る。

白く立ち上る湯気の中、彩陽の女体はやたら美しく見えた。あの女体に精液をかけて汚してやりたい——そんな欲望がふつふつと湧き上がつてくる。

「彩陽さん、はやく、はやく気持ちよくしてくれませんか……♥」

「あははっ、紗耶香つたら面白いんだから。わかつてゐるから、こつちおいで♥」

「はあい……♥」

紗耶香は促されるまま、風呂椅子に座らされて、ちんぽをひくつかせている。またしても、我慢汁がぴゅっと飛び出している。

わたしもその隣に座ると、彩陽はボディーソープを手に取って、泡立て始める。

「まずは、綺麗にするね。一人とも、ちゃんとおちんちん洗つてる？ カリ首のところは、放つておくとチンカスが溜まっちゃうんだからね」

「ちんかす……初めて聞きますわ」

「今日はわたしがお手本として、二人のおちんちんを洗つてあげるから」

「んひつ♥」「おほおつ♥」

彩陽は紗耶香とわたしのちんぽを、片手ずつ握った。ヌルヌルした手のひらの感触で、わたくしたちはあられのない嬌声をあげてしまった。

しゅこしゅこ……そのままボディーソープをたっぷりと塗られて、泡立てられると、気持ちがよくてどうにかなつてしまいそうだ。

彩陽はわたしのちんぽをしごきながら、洗い方を教えてくれた。

「紗耶香のちんぽはズル剥けだから、わりと綺麗だね。チンカスも全然溜まつてないよ。友梨佳のは勃起してるときだけ剥けるちんぽだから……ん、ちょっと汚れが溜まつてきてるかも」

「きやっ、そんなにいきなり剥かれたらあつ♥」

「ずるり、と思い切り皮を向かれて、わたしは何とも言えない不安感で悲鳴をあげた。

「皮がちゃんと剥けてないと、エッチするときに気持ちよくなれないからね♥ ほら、カリ首の裏のところ、白いのが溜まつてきてるよ。」しゅしゅと

「やあっ、そこおつ♥ 敏感だからあつ♥」

カリ首の裏を強くこすられて、痛気持ちいいような感覚でお尻にぎゅっと力が入つてしまふ。刺激が強すぎるせいか、ちんぽの亀頭は真っ赤になつてしまつた。

「そつか、友梨佳のちんぽはまだ童貞ちんぽだもんね♥ もつと優しくしてあげなきや」わたしは必死になつて彩陽のやらしい手つきに耐えていたけど、紗耶香は一足先に限界を迎えた。足の先までピンと伸ばして、ちんぽから勢いよく精液を放つ。

「あああ……イクう♥ イクイクうつ♥ そんなにしごかれたらすぐ精液出ちやいますわあつ♥！」

「びゅーっ！ びゅるるっ！ びゅるるっ！」

大量の精液がすごい距離を飛んで、わたしの足にまでかかつた。一通り出し終えると、ふう……と息をついて、ご満悦の表情になる。お嬢様とは思えない、だらしない頬の緩み方。ちんぽさえ生えていなければ美少女そのものなのに、もつたいないとつくづく思う。

紗耶香が余韻に浸る間に、彩陽はわたしのちんぽにシャワーをかけて泡を流した。わたしはその水流でさえイキそうになりながら、なんとか射精をこらえた。

「友梨佳はまだ我慢できそう？ ちんぽが綺麗になつたことだし、しゃぶつてあげようか

♥？」

「いいの……♥ それじやあ、お願ひ…………♥」

「ふふ、嬉しそうな顔。あーむつ」

「彩陽い♥ ああんつ……おくち、ひもちいい♥」

彩陽の唇が亀頭に口付けて、舌がぬるりと這いまわった。亀頭の周りを舌が一周して、ぺろぺろとアイスキャンディーを舐めるかのように、美味しそうに舐めしゃぶる。

痺れるような強烈な快感で、わたしは我を忘れて喘いでしまう。

ゆっくりとわたしのちんぽを口に含んでいって、桃色の唇が徐々に亀頭を覆い、ちんぽの中ごろまで咥えてしまう。

ひょっとこのような顔になつてわたしを見上げる彩陽は、なんだか可愛かつた。

「うぐうう……♥ 彩陽、もう限界っ……♥」

「ひいよ、ひっぱいらして……」

「うつ、あ、ああつ♥ でるうつ♥ 彩陽のお口にお漏らししちやうう♥ ——くうつ」

「びゅー♥ びゅくく♥ びゅるつ♥

気が狂いそうな快楽と共に、精子が尿道を通つて勢いよく放たれるのがわかる。彩陽はそれを全部口で受け止めて、ごくごくと喉を動かした。どうやら、全部わたしの精液を飲んでくれているみたいだつた。

「うふ、飲んじやつた♥」

わずかに唇に残つていた精液でさえも舐め取つて、彩陽は妖艶に微笑んだ。わたしの精液を味わいきつて、彩陽も満足げに言つた。

「さて、二人ともいっぱい出して、すつきりしたね」

「あ、彩陽さん……わたくし、そのお……♥」

紗耶香が、恥ずかしそうに顔を伏せる。その股間のちんぽは、まだまだ元気に屹立していた。

わたしも同じ。情けないことに、あれだけ口で気持ちよくしてもらつたのに、欲張りなちんぽの勃起はちつとも収まつていない。

目の前に裸の女体がある。それだけで、いくらでも精液が出せそうだった。

「わたしも、なんだけど……もうちょっとだけ、相手して？」

彩陽に頬み込むと、彩陽はわたしたちのみつともないちんぽを見て、おかしそうに笑つた。「ふふ、すっごいね、二人のおちんちん♥ しようがないなあ……そこまで言うなら、精液が出なくなるまで搾り取つてあげる」

「彩陽……♥」「もっと気持ちよくして欲しいですわ♥」

「でも、一人ばかり気持ちよくなつて、するいよ？ その前にわたしのことも気持ちよくして欲しいなあ……二人でわたしの身体、洗つてよ」

わたしの精液を飲み込んだ彩陽は、そんなことを言い出した。彩陽も心なしか頬を染めて、興奮しているように見えた。

彩陽の女体を好きなように触れる。この柔らかそうなおっぱいも、ぱりっとしたお尻も、

全部わたしのものにできる……興奮が体を駆け回る。

わたしと紗耶香は彩陽の言葉に反対するはずもなく、手にボディーソープを取って、泡立て始める。

「ほ、本当に触つていいの、彩陽？」
「ええ？ わたしたち女の子同士だもの。全然いいよ♥ ほらあ、わたしのおっぱい、柔ら

۱۰۴

彩陽はわたしの手のひらを自分の胸に持てて行った。

ぬるぬるとした手のひらで、彩陽のおっぱいを味わう。初めて彩陽に抜いてもらった時に触ったのと同じ感触。柔らかくて、いつまでも揉んでいたくなる。

「あんつ♥夢中になっちゃって♥もつと優しく揉んでよ」

〔彩陽、彩陽い……♥〕

「彩陽の身体、すべす

少那番は、形揚の背口の、腕三のうちの二回五二二六

絶耳者は采陽の背中や股を手のひらで沿立ててその感触を楽しんでいた。その股間でちんぽがひくひくと震えて、興奮しているのがよくわかる。

彩陽の胸から手を離せなくなつて いると、彩陽がいたずらっぽい表情で誘つてくる。

ねえ 友梨佳 ちゅーしょん

い、い、い、の、？】

この二の七微笑^{ハハ}『影陽の桃色』の唇^{ヒダ}が吸^ス、寄^シ

ふるんとして いそ うな唇。彩陽は目をつぶつて、唇を尖らせる。

わたしは、彩陽に向き合つて、顔を近づける。自分の心臓の音がやけに大きく聞こえた。

鼻がくづくくらいまで近づくと、彩陽の温かい息や匂いが感じられて、ますます興奮した。ぴつたりと唇をくつづけるとゾクゾクとしてしまう。

「ん……れろつ♥」

「んふう……ちゅう

彩陽が舌を出してきて、わたしの口の中に入ってきた。ちょっと驚いたけれど、受け入れると、口の中を彩陽の舌が這いまわる。なんともいえない心地よさで、わたしはされるがままに口の中を蹂躪されてしまった。

気持ちがよくて涎がどんどん湧いてくる。一人の唇の間からとろりと唾液が垂れた。彩陽の唾液がわたしのと混じって、ぐちやぐちやになっていく。

唇を離すころには、興奮でちんぽがビンビンになつて、もう我慢が出来なくなつていた。

「ふふ♥ 女の子同士のえっちなキス、気持ちよかつた？」

「容けちゃや、そうだつたよお……彩陽♥」

「溶けちゃいそうだつたよお……彩陽♥」

「友梨佳のおちんちん、す〜いことになつてるね♥ 二人とも、そろそろ射精したい？
…ひやんつ♥ 紗耶香、そんなに太ももとかお尻ばつかり触らないで♥」
「だ、だつて、彩陽さんの身体がいやらしいのがいけないんですわ……♥」

わたしがキスしている間、紗耶香は夢中になつて彩陽の足やお尻を撫でていた。あまりにも変態じみた愛撫をしていたことに自分でも気づいたのか、恥ずかしそうにそっぽを向いた。その股間のちんぽが相変わらずぴくぴくしていて、よほど興奮していたのだろうとうかがえる。

「それじゃあ、二人でじょんけんして」

「どうしてじょんけんなのでして……？」

「いいから、紗耶香。友梨佳とじょんけんして」

「わかりましたわ……」

じょんけんぽい、とグーを出すと、紗耶香はパーを出した。

一体何の意味があるのだろうと思つたけど、これはあまりにも重大な勝敗を決めるじやんけんだったのだと思い知ることになつた。

「それじゃあ、今日は紗耶香が、わたしのおまんこ使っていいよ♥」

「ほ、本当ですの！？ お、おまんこ……彩陽のおまんこ……♥」

明らかに目の色がおかしくなつて、まるい、という感情が込み上げた。
もし勝っていたら、彩陽のおまんこにわたしのちんぽを突き込めた……その様子を想像すると、たまらなくなる。

「えつ、ちょっと彩陽、わたしは……？」

「友梨佳は、わたしのくちまんこでいい？」

「フェラしてくれること……？」

「ただのおしゃぶりじゃないよ？ 最近、ディープスロートっていうのが上手になつてきたの。喉の奥まで、おちんちんを入れても、おええってならないの♥」

知らない単語が出てきて、よくわからないけど、気持ちよさそうなのは間違いない。彩陽の喉の奥までちんぽで犯せるとと思うと、早くしてみたくてたまらない。

わたしたちはいつまでもシャワワーのところにいてもつまらないから、お風呂の方へ移動した。大きな浴場には温かいお湯がたっぷりと張つて湯気を立てている。ちやぶちやぶとわたしたちはそこに浸かつて、行為始めた。

彩陽は四つん這いになつて、お尻を紗耶香の方へと向ける。紗耶香はそれに顔を近づけて、おまんこの割れ目を指で広げた。まじまじと彩陽の女の子の大學生どころを見つめている。

「こ、これが彩陽の……♥ も、もつとじつくり見ても構いませんの？」

「恥ずかしいから、そんなに見ないでよ。紗耶香は本当に変態だね♥」

「しょ、しようがないんですわ。だって、見たくて見たくて仕方ないんですよ……？」

「少しは我慢してよ。ヌレヌレになつてるの、わかる？ あんつ♥」

「すごいですわあ……愛液がとろとろ溢れて、柔らかいお肉がほぐれてますわ……♥」

紗耶香は彩陽のおまんこを指でくちゅくちゅと音を立てて、感動の声をあげている。

「それじゃあ、わたしのおまんこに、そのカリ首ぱんぱんのおちんちんを挿れてみて♥」

「ほ、ほんとうに挿れますわよ♥……ん、んほおおつ♥こ、これですわあ♥」
わたしは、四つん這いになつた彩陽の顔にちんぽを近づけながら、紗耶香の痴態を見ていた。

紗耶香が彩陽のお尻を両手で押さえながら、腰をずぱずぱと前に進めていく。結合部分が見えないのが残念だつたけど、紗耶香の蕩けた表情を見れば、気持ちがいいのはよく伝わってきた。

羨望の気持ちでいっぱいになりながら、わたしは未知のおまんこの快楽を想像した。ヌメヌメの愛液たっぷりの蜜壺の中、柔らかいヒダヒダの媚肉に包まれ、ちんぽをずぼずぼ抜き差しする……気持ちよくないわけがない♥

「ん……んんつ♥全部、入っちゃつたね。どう、わたしのおまんこは?」

「はあ、はあ……♥こ、言葉になりませんわあ……♥んひいい♥」

「動かしてもいいんだよ？ 大丈夫、紗耶香？」

「い、今から動かしますわ……んぎいつ♥こ、これたまりませんわあ♥」

紗耶香がゆっくりと腰を前後させ、快楽を貪り始める。胸を揺らしながら、一生懸命腰を振つて、よほど気持ちが良さそうだつた。口から舌が出て、涎がぽたぽたと滴つている。
紗耶香が快樂に溺れる様子を食い入るように見つめていると、ちんぽが彩陽のほつぺに当たつた。

彩陽が、わたしのちんぽに頬ずりして、ふえろつと舌を這わせる。

「ほら、友梨佳もわたしのおくちまんこ、欲しくないの？ ……あんつ♥紗耶香、そこ気持ちいいよ♥」

彩陽はおまんこにちんぽを突き込まれる快感で時折、喘ぎ声をあげながらも、欲しそうな顔でわたしを見上げて誘惑してくる。

「友梨佳のぶつといおちんちん、奥まで咥えてあげるよ。ちょうどいい♥」

「わかった……ん、んんつ♥」

わたしは、彩陽の顔を両手で押さえて、ちんぽを咥えさせた。大きく口を開けた彩陽の中に、ちんぽが入つていく。

中ごろまでちんぽを入れたところで、彩陽の舌に亀頭が当たる。

「こ、これえ……いいつ♥」

ヌルついた彩陽の舌が絡みついてきて、わたしは気持ちよすぎてどうにかなりそつだつた。

でも、喉の奥まで挿入していいと、彩陽は言つた。もっと先がある。わたしはさらに彩陽の口の中に、深くちんぽを突き込んでいく。

喉の穴に、亀頭が当たつた。その穴に、ちんぽを突き入れていつても、彩陽は苦しそうな表情をすることはなかつた。

気管にちんぽの先端がぎゅっと締め付けられる。狭い穴にちんぽを押し込んでいく感じが、たまらなく気持ちがいい。おまんこに挿入するのはきつとこんな感じなんだろうと思つ

て、感動がこみ上げる。

「あ、彩陽い…… ♪ すごい、おくちまんこ、気持ちいいよ…… ♪」

一
ん
おこおこ

彩陽は動物じみた声をあげながらも、根元までちんぽを咥えてわたしを上目遣いしてい る。

わたしはそのまま彩陽のお口にちんぽを入れたり、出したりを繰り返した。彩陽は呼吸が苦しいのか、ちんぽを気管に入れるとぴつたりと粘膜が吸い付いてきて、ますます気持ちがよかつた。

おまんこを疑似体験しながら、これでも十分気持ちがいいのに、本当のおまんこはどれだけ気持ちがいいのかと途方もない気分だった。

紅葉香は次第にヒストンのスピートをあけはせんはせんと懸命にお戻を振つて喘ぎ続けていた。

「ああっ♥ もう駄目ですわあ、我慢できませんわあっ♥
彩陽さん、いきますわあっ♥ イ

そして、紗耶香はびくん、と体をわななかせて、腰振りを止めた。きっとおまんこの中で、たっぷりと精液を吐き出しているに違ひなかつた。

わたしも、そろそろ限界が来ていて。精液がすぐそこまで来ているのが分かる。ちょっと乱暴こちんぽを出し入れしながら、うわざーとのようこ言う。

「出る、出るう♥ 彩陽の喉の奥に精液出ちやうう♥」

「ああつイクうつ
♥——んくうつ」

びゅー ♪ びゅるる ♪ びゅつ ♪

たまらない感覚とともに、ドクドクとちんぽが震えて精液を懸命に送り出していく。射精は長々と続いて、全部出し終わってようやくわたしはちんぽを彩陽から引き抜いた。

ものをたらたらと垂らしながらも、何ともなかつたような顔で微笑んだ。

「よかったです、彩陽♥」
「ふふ、わたしのぐちまんこ
気持ちよかったですでしょ？」

「満足してくれて嬉しいよ♥」
次にセックスするときは、童貞卒業させてあげるからね、友梨佳♥」

彩陽はそう言いながら腰を動かして、未だに余韻に浸つている紗耶香のちんぽを引き抜いた。吉田郎からも紗耶香の青姫がとうとうと二ぱしごして、さ。

口からも股間からも精液を溢れさせる彩陽は淫らでだらしないはずなのに、わたしには魅力的に見えてしまっていた。

わたしは快樂に溺れるばかりで、自分がどうしてこんな行為をしているかなんてどうでもよかったです。彩陽はどうしてこんなに淫乱な女の子になってしまったのか、そして彩陽が妹の香奈をどんな目に遭わせているかなんて、まるで興味がなかった。

この後その答えを知ることになつても、わたしはこのたまらない快樂を味わえればそれでよかったです。

女学園に蔓延るふたりたちは、どういった存在なのか。それを目撃するのは、まだしばらく後の話だ。

〈香奈 一章〉

詩織は彩陽先輩に初めてフェラされてから、何を言つてもふにやふにやと笑い返すだけで、上の空だった。

「詩織、大丈夫？」

「香奈あ……♥えへへ♥」

どうして詩織がこんなことに……わたしはどうすればいいかわからなかつた。

怒つてもいいかもしないし、悲しんでもいいかもしないけど、あまりにも想像を超えたことが立て続けに起き続けているせいで、感情が追い付いていかなかつた。

ずっと前から仲が良かつた詩織にちんぽが生えてきてふたなりになつてしまふだけでも十分衝撃的だつたのに、彩陽先輩のフェラを経験してこんなに幸せそうな顔をされるなんて。

彩陽先輩は、あの後すぐに逃げるようになどかに行つてしまつて、着替え室に戻つても、すでにそこにはいなかつたから、結局わたしの気持ちはどこにもぶつけることが出来ずに寢ぶらりんだつた。

「詩織……ニヤニヤしすぎだよ」

「だつて、わたし、これまで生きてきた中で、今が一番幸せかも……♥ 彩陽先輩、明日も会えるかなあ♥」

「もう……とりあえず部屋に戻るよ」

どれだけ気持ちがよかつたら、こんな風になつてしまふのだろうか。詩織の気持ちを考えると、途方に暮れるしかなかつたけど、その快樂がどんなものなのか気になつてしまふのも、本音だつた。

ちんぽをしゃぶられる……詩織は、唾液まみれの舌で、精液が涸れるほどたっぷりいじめられたのだろう。舌を肉棒を添うように這いまわされたり、唇で優しく甘噛みしてもらつたり……香奈が経験したこと想像するだけで、思考は、ますます卑猥な方向へと向かっていく。

「こんなこと考えてたらいけない……ふたなりだなんて、変だよ……！」

一人でそう呟きながら、ぼおつとしてまともに動いてくれない詩織をよそに布団を敷く。詩織を布団の上に横にさせると、すぐに眠つてしまつた。彩陽先輩に何度も射精させられて、よほど疲れてしまつたらしかつた。

「はあ……詩織は、これからどうなつちやうんだろう……」

わたしは不安でいっぱいになりながら、その夜は早めに眠りについた。隣で寝ころんだ詩織はぐつすり熟睡しているようで、わたしに抱き着いてきて、ちんぽをこすりつけてくることはなかつた。

本格的に詩織がおかしくなつてしまつたのは、次の日からだつた。

朝起きたら、詩織はいつも通りの詩織に戻つていたが、すでに彼女の心は、どうしようもなく汚れた快楽への欲求に支配されていた。

パジャマの前が、小さいながらもテントを張つていたのだ。ちんぽが勃起している証拠だつた。

「あ……おはよう、香奈ちゃん」

「おはよう。詩織……昨日のこと、覚えてる？」

「う、うん……」

詩織は、ぱっと頬を赤らめた。どう見ても、嫌な記憶を思い出した顔ではなかつた。わたしは焦つてさらに問い合わせる。

「彩陽先輩のこと、本当に信用していいの……？」

「信用していいに決まつてるよ！ いっぱいエッチなこと教えてもらつたの！ ちんぽつて、いろんなやり方で気持ちよくなれるんだよ♥」

頭を強烈に殴られたかのような衝撃があつた。これまで、エッチなことなんか全然興味のなかつた詩織が、こんなにいやらしい笑みを浮かべている。信じられなかつた。

「し、詩織っ！ あんなこと、やつぱりダメだよ！ 詩織、おかしくなつちゃつてるよ……！」

「そうかも……でも、あんなに気持ちよくされたら、誰でも頭おかしくなつちやうよおちんぽを涎たっぷりのお口でじゅるじゅるおしゃぶりされて……天国に飛んで行つちやいそうちだつたよ♥」

「……し……おり」

詩織の目の色は、明らかにおかしかつた。今日の前にいる詩織は、もうわたしの知つている詩織ではないかもしれないと思うと、胸が強く痛んだ。

以前の詩織に戻つて欲しい——そう願つて、わたしは詩織の肩を搖さぶつた。

「あんなの、おかしいつてば……あんなことしちゃ駄目だよ、詩織……」

「……香奈ちゃん」

詩織は、ようやくわたしの言葉が届いたのか、ふと笑みを消して、しょんぼりとなつた。「そう、なのかな？ 今のわたし、気持ち悪い……？」

「うん……」

「そつか……。できるだけ、我慢する……」

「そうだよ、我慢してよ……ちんぽなんて、なくなつちやえればいいのに……」

しゅんとした詩織の股間は、それでも生理現象なのか、少し膨らんでいた。

その後数日間、詩織は凜先生のところには行かなかつた。正式に水泳部に入ることが決まり、部活動を眞面目にし始めた。彩陽先輩と部活中に話すことはなくなつた。わたしは二人の関係が切れたのだと、勝手に思い込んだ。でも、それは甘い考えだつた。

わたしはひとまず、詩織がもとに戻ったと安心してしまった。ちんぽの誘惑を甘く見ていた。一度ふたなり射精の快楽を味わつたら、後戻りできない……そんなことは、知らなかつた。

詩織が快樂から逃れられないことを思い知らされたのは、それからすぐのことだつた。

ある日の晩、わたしは詩織と一緒に部屋で寝ていた。

詩織は、寝ている最中に、わたしにくついてきてちんぽを擦りつけるようなことはしなくなつていて、欲求を抑えることができていいのだとわたしは勝手に解釈していた。その日もごく普通に横になり、色々何気ない話をして楽しんでから、幸せな眠りに落ちた。

わたしは何かが動くのを感じた。ごそごそと、隣の布団で動いている人がいる。

かすかに目を開いて、何が起きているのか確認した。

詩織が、布団から出て、立ち上がっていった。一体何をしているんだろうか。わたしは寝ぼけながらも、様子を見ようと思つて、そのまま寝たふりをし続けた。

寝間着姿の詩織は、ふらふらと歩いて、部屋の外へ出る扉に向かつていた。

怪しい——目的地はどこなのか、わたしは詩織が部屋を出た後、こつそりと立ち上がり、後をつけた。こんなことをするなんていけないとも思った。詩織を信じられないなんて、友達としてどうなんだ、と自問自答もした。それでも、このまま詩織を放つておいてはいけない、という気持ちが勝つて、わたしは部屋を出て詩織を追いかけた。

開いた窓から冷たい風が吹くのも気にならないのか、詩織は脇目も降らずに廊下を突き当りまで行つて、階段を上り始めた。よほど急かされているかのように、足取りには迷いがない。

そして——なんとなく、前かがみになつて歩いていた。以前、お姉ちゃんがしていたのと同じ体勢。一体あれには何の意味があるのかと思いながら、わたしはバレないように、詩織が階段を上り切つた後で、わたしも一段目に足をかける。

どうして、上の階に行くのだろう……上の階は、二年生の女生徒たちが寝泊まりする部屋がある階だ。もしかして、上級生との密会だろうか。頭に、すぐ彩陽の姿が思い浮かんだ。二人が会ついたら、止めなければならない。わたしは使命感に燃えながら、急ぎそうになる気持ちを抑えた。

ここで詩織に見つかつたら、意味がない。誰と会つているか、しっかりとその場を目撃してから止めないと、詩織に言い訳されて、はぐらかされるかもしれない。慎重に、足を進めた。

だが——詩織の前に現れたのは、予想とは異なる人物だつた。

「あら、詩織ちゃん。もう来たのね♥」

「……あの、我慢できなくて」

わたしは、ぎょっとして目を見開いた。

美優先生——初めてこの寮に来た時、見回りに来たグラビアアイドルみたいな容姿の先

生。どうしてこの人が、詩織にあんなにも妖艶な笑顔を浮かべているのだろうか。

見回りの役目を担っている美優先生は、こんな時間に立ち歩いている詩織をすぐにでも部屋に戻すのが、本来あるべき姿であるはずだ。

それなのに、先生は詩織の手を取って、まるで誘うかのように、頬を赤らめて隣にある部屋へと導いた。

「可愛いわね、もう……♥ 今日もいっぱい、楽しませてあげる♥」

「は、はい……♥」

詩織は、ぽわぽわと美優先生に見惚れながら、部屋に入つていつてしまつた。
わたしは閉まつたドアを前にして、入るべきかどうか、迷いが生じていた。一体、中で二

人は何をしているのだろう……いやらしいことを、しているんだろうか。

胸がドキドキしてきて、唾をぐくりと飲んでしまう。美優先生は詩織のちんぽを優しく触つてあげて、射精にまで導いてあげるのだろうか。それとも、彩陽先輩みたいに、ちんぽを舐めてイカせてあげるとか……？

今入つたら、どんな風に二人が絡み合つているのか、見たい気持ちと見たくない気持ちがせめぎあつた。

「逃げちゃダメ……ちゃんと詩織を連れ帰らないと」

気持ちを切り替える。これは詩織のためだ。わたしがたとえ見たくなくても、このドアを開けないと――

「あれ、香奈ちゃん？」

唐突に、背後から声をかけられて、わたしはひつ、と声をあげて飛び上がつた。

聞いたことのある声。いや、さつきから、この声が聞こえることを予想して、わたしはここまで詩織を追ってきたのだ。

恐る恐る振り返ると、そこには詩織を目覚めさせてしまつた例の先輩がいた。

「ここ、わたしの部屋だよ。今、取り込み中だから静かにしてね？」

彩陽先輩は、しいー、と唇に人差し指に当てた。

彩陽先輩に見つかってしまった――どうにか言い訳して逃げようかと思つたけれど、すでに手遅れだつた。どうしてここにいるのか、言い当てられてしまつた。

「詩織ちゃんのこと、追いかけてきたんでしょう？」

「……そうです」

「ふふ、香奈ちゃんは、詩織ちゃんが夜な夜なわたしの部屋に来て何してるか、知らないん

でしょ？ 気になるよね。一緒にこつそり覗いてみる？」

「や、やめてください……わたしは詩織を連れて帰るんです」

「詩織ちゃんは帰りたくないと思ってるかもしれないよ？」

「そんなはず……」

詩織はきっと、彩陽先輩や美優先生に、ここに来るこつとを強要されているんだ。そう思ひたかった。

そうでなかつたら、詩織はもう、昔の詩織じやない。ふたりになつてしまつたからと言つて、夜にわたしに内緒で、こつそりエツチなことをしているわけがない。

この時のわたしは、そういう希望にすがつていた。

でも、それはただの願いだつた。冷静になつて考えれば、部屋で詩織と美優先生が何をしているか、答えは一つのはずだつた。

彩陽先輩が、くすぐすと笑いながら、わたしに現実を語つて聞かせた。

「この間、プールのシャワールームでわたしと詩織ちゃんが、何をしていたか見たよね？」

「……っ！」

「詩織ちゃんに、フェラチオしてあげてたんだよ？ おちんぽ、ちっちゃいのにカチカチに固くなつて、すうごい可愛かつた♥ 犯めてあげると、ひざをカクカク震わせて悦んでたよ」

「そんなこと、聞きたくありません……っ」

「信じてくれないの？ もう一回、詩織ちゃんがどんな子か見てみたほうがいいんじやない？」

そう言つて、彩陽先輩は、部屋の扉をわずかに開いた。中から、わずかに一人の声が聞こえてくる。甘つたるい成分が含まれていそうな声——信じたくなかった。

わたしがその場で立ちすくんでいると、彩陽先輩はわたしの腕を掴んで、引っ張つた。「ほら、一緒に覗いてみよう？ 詩織ちゃんのエツチなところ——」

その時だつた。廊下の角を曲がつて、こちらに向かつて歩いてくる女生徒がいた。

助かつた——そう思つた。ほつとして、足から力が抜けそうになつた。まさか、こんな時間に立ち歩いている生徒がわたしたちの他にいるとは思わなかつた。

これで、彩陽先輩から逃げ出すことが出来る。詩織を置いていくことになるけど、その時のわたしは現実に直面するのが怖くて、とにかくこの場から離れたい一心だつた。

「あれ、彩陽じやん。おつかれーっ」

その女生徒は、どうやら彩陽先輩と同学年のように、手をひらひらと振つた。にやつと笑うと、口の端に八重歯が覗いていた。なんだか、彩陽先輩と同じような、奔放な雰囲気の女生徒だ。

お風呂に入った後なのか、濡れた長い髪をタオルで拭きながら、こつちに向かつて歩いてくる。カラフルなパークターのポケットに手を突つ込んでいて、一言で言うと、ギャルつて感じのイメージだ。

隣にいるわたしをじろじろと見てきた。その視線に優しさが感じられなくて、一度安心してしまつたことを後悔し始めた。

「この子、可愛いじやん♥ わたしたちに随分ビビつてるみたいだけどもしかして、この人も彩陽先輩とグルなのだろうか……？」

「ね、縮こまつちやつて、可愛いよね♥ 今、この子の友達と美優先生がわたしたちの部屋

で二人でムフフな」としてゐるから、一緒に覗いてみよう、って言つてたの。^{えり}英梨も覗かないと？」

どうやら、この八重歯の先輩は、英梨という名前らしかつた。

この英梨先輩といふ人と彩陽先輩がグルだということがはつきりして、わたしはしやがみこみたくなるくらい、絶望していた。わたしたちの部屋、と彩陽先輩は言つた。きっとこの部屋は二人の相部屋なのだろう。

英梨先輩はわたしのことをチラチラと見て、舌なめずりをしながらにやつと笑つた。「別にわたしはこつそり覗くのは趣味じやないけど……この子に美優先生と詩織ちゃんの絡みを見せてあげるところなら、付き合はうよ♥」

「それなら話がまとまつたね」

「この子、名前は？」

「香奈ちやんだよ」

「ふーん、香奈ちやんか……わたし、香奈ちやんみたいな子めちゃくちゃ好みだからさ……ちよつかい出してもいいよね？」

「ふふ、いいよ♥」

「え……っ？」

戸惑うわたしに、英梨先輩は八重歯を見せながら近づいてくる。

「またびっくりするくらい可愛い子連れてきたね、彩陽は。……香奈ちやん、つかまえたつ」

「きやつ」

がばっ、と抱きつかれて、背後に回られる。わたしは怖くなつて体が痺れたようになり、その場で動けなくなつてしまつた。

この人……女の子のはずなのに、何かが違う。まるでわたしを捕つて食おうとでもしているような感じだった。わたしは嫌な予感がした。この人は、もしかして、普通の女の子じゃない……？

英梨先輩はわたしの首筋の匂いをくんくんと嗅いで、満足そうな声で言つた。

「香奈ちやん、いい匂いするね……甘い匂い♥」

「せ、先輩……？」

英梨先輩は胸が結構大きくて、わたしの背中にぴつたりと押し付けられるとボリューム感があつた。

そして、押し付けられたのはそれだけではなかつた。嫌な予感が的中したことを、わたしは察した。お尻に、何か固い棒状の物が押し付けられていた。

この八重歯のギャルっぽい先輩——英梨先輩は、ふたなりだつたのだ。

「ちんぽが固くなつてきちゃつたじやん♥ ふふつ♥
「き、気持ち悪い……離れてください……つ」

「悪いことはしないから。ちょっとだけ、こうやってわたしと一緒にいるだけでいいからさ

♥

「ひつ……！」

首筋に、ぬるつとしたものが這つた。英梨先輩の舌。そのままぺろぺろと舐められて、くすぐつたいような、妙な感覚が体に入つてくる。ぞわぞわと身体が反応しているのが分かった。

変な感じ——わたしはそれが快感だということに、この時はまだ気づいていなかつた。
今思えば、この時が、ふたりの女の子に攻められるよさを知つた最初の時だつた。
彩陽先輩は、びくびくと震えるわたしを夢中になつて舐める英梨先輩を見てくすぐすと笑つてゐる。

「気に入つちやつたみたいね、英梨？　あんまりいじめたら可哀想だから、ほどほどにね？」
「ふえろつ♥　わかつてゐつて……もしかしてこの子、処女？」

「わからないけど……たぶんそうじやない？　そうだよね？」

彩陽先輩が首をかしげて見つめてくるのに、わたしは震える声で返した。

「し、知りません……つ！　ひいつ……♥」

「可愛いね、香奈ちゃん♥　大丈夫、わたしがゆつくり教えてあげるから♥」
「やめて……助けてください、彩陽先輩……つ」

「安心していいのよ？　英梨はわたしが知つてゐたなりの中だと一番のテクニシャンだから♥」

首筋から耳まで舐め、甘噛みしてゐた英梨先輩が、ふいに手のひらでわたしの身体を撫でてくる。

妙な撫で方だつた。羽毛で撫でられているかのような感触。触れるか触れないかのところでお尻やお腹の上をさわさわと手のひらが通り過ぎていく。
もどかしいようなくすぐつたいようなその愛撫に、自分の口から信じられないくらい甘つたるい声が出た。

「ひやんつ♥　あ、ああ……つ♥」

わたし、どうしちやつたんだろう。わけがわからないうちに、体の中に、熱いものが溜まり始めるのがわかつた。

お尻に押し付けられる英梨先輩のちんぽが、ますます固く、大きくなるのがわかつた。
「声もすつごくいい感じじやん♥　もっとその声、聞かせて♥」

「い、いやです……なんで、こんな声……んつ♥」

「英梨つたら、ちよつとは手加減してあげればいいのに。そんな風にしたら、香奈ちゃん立つてられなくなつちやうよ？」

「そうしたら、わたしたちの部屋に連れ込めばいいじやん♥　ね、香奈ちゃん？」

「や、やめて……んあ♥」

英梨先輩の手のひらは、腰のあたりからお腹へと徐々にあがつてきていて、ついにわたしの胸を触り始めた。

寝間着だったから、ブランジャーはつけていなかつた。服の上から、ぎゅつ、と胸を揉みしだかれる。

「おっぱい、大きいね♥ 手のひらから溢れちやう。柔らかくて、揉み心地最高だよ？」

「いやあ……揉まないでえ♥」

わたしは、こんなことをされて嫌なはずなのに、体は裏腹に何かを感じていた。

やわやわと指が食い込むたびに、甘い痺れのようなものが生じていた。

こんな感覚、知らない——わたしは頭が真っ白になってしまって、されるがまま、口に手を当てて、声を抑えることしかできなかつた。

「香奈ちゃんも興奮してきたでしょ？ ふふ♥ おっぱい気持ちいい？」

「き、気持ちよくなんかあ……♥」

「可愛い……もつといじめたくなつてきちゃうじやん♥ 香奈ちゃんに、ちんぽしやぶらせたくなつてきちゃつた……♥」

わたしは「ぐりと睡を飲む。英梨先輩のギンギンに勃起してわたしのお尻をぐいぐい押してくるちんぽを、舐めしやぶる。想像するだけで卑猥だつた。

でも、想像の中で英梨先輩のちんぽをしやぶるわたしの姿は、なんだか嫌ではなきそうで困惑してしまう。詩織のちんぽをおいしそうにしやぶつっていた彩陽先輩の姿と、自分が重なつて、心がかき乱される。

わたしは、一体どうなつてしまふのだろう……？

「それは後にしてよね？ こんなところでフェラしてるの見つかつたら、大変でしょ？ せめて部屋に入つてからにして」

「わかってるつて♥ 彩陽、そろそろ部屋に入つてもいい？」

「そうね、そろそろ香奈ちゃんも温まつてきたところだし……詩織ちゃんと美優先生、どこまでいったかな？」

彩陽先輩が扉の隙間から中を見て、くすくすと笑つた。そして、わたしに隙間を覗くよう促してくる。

「ちようど、おもしろいところだよ♥ ほら、こっち」

英梨先輩に胸を揉まれて、なんともいえない心地よさで、頭がぼんやりとしてきてしまつていた。このままではいけない。そう頭の片隅で思いながらも、促されるままわたしは部屋の中を覗いてしまつた。

部屋の中では、美優先生と詩織が、触れ合う距離で向き合つていた。

さつきから、扉の隙間から甘つたるい声が聞こえていたから、もともと覚悟はしていたけれど、目にするとやっぱり衝撃的だつた。

「美優先生……♥ んつ、ああ……♥」

詩織ははあ、はあと息を荒げながら、恍惚とした表情を浮かべていた。

普段通り、シャツにタイトスカートという教師らしい姿の美優先生に五センチくらいしかないちんぽを握られ、優しくしげかれている。ちんぽは限界まで勃起して、ぴくぴくと悦

んでいた。

「先生におちんちん触られて気持ちよくなつちゃうなんて、いけない子ね♥」

「ふああ……♥ もつと、もつとシコシコしてくださいい……♥」

「そんなこと言つちやつて♥ 詩織ちゃんは素直なんだから」

美優先生は、につこりと妖艶な笑みを浮かべ、ねつとりとした手つきで手コキを続ける。

両手でちんぽを包み込まれ、根元から先端へ。先端から根元へ。柔らかく動く十本の指が

詩織を追い立てていた。詩織は頬を桃色に染めて、目元を緩ませて喘いだ。

「あっ……先生、そろそろお……♥」

「イッちやいそうなのね？ いいわよ♥ そのちつちやいおちんぽから、精液びゅっぴゅしちゃいなさい……んちゅ」

美優先生は、夢見心地の詩織に顔を寄せて、唇を触れ合わせた。

女の子同士のキス。初めて見る光景だつたけど、わたしは妙に興奮してしまつた。後ろから英梨先輩に体をまさぐられて、ぼおっとしながらも、一人が唇を合わせる様子に魅入つてしまつた。

「んつ……♥ ふう……れろお」

「ちゅう……♥ 詩織ちゃん、舌、出してえ……♥」

詩織は慣れていない感じだつたけれど、美優先生は唇を触れさせるだけでは飽き足らず、詩織が一生懸命突き出した舌にしゃぶりついて、吸いたて始める。

じゅるじゅる……♥ という唾液が混じりあう卑猥な音が立ち、詩織は気持ち良さそうにあられのない声を出した。舌を吸われているせいで、獣のような汚らしい声だ。

「あえ……♥ んん……へえ……♥」

「詩織ちゃん、可愛いわよ♥ れろ、ちゅぱあ……♥」

「い、イク……♥ 先生、わたしいつちやいますう——んぐうつ♥」

「ぴゅるつ♥ ぴゅるるるる♥」

詩織の小さなちんぽから、白濁液がぴゅつと飛び出して、布団の上を汚した。一部は先生の着ていてる服にまでかかつてしまつていて。

美優先生は詩織の射精が終わるまで、しつかりちんぽをしごき続けてあげていた。

涎のアーチを作りながら唇を離すと、詩織は緩み切つた表情にされてしまつていた。

「あらあら……精子、すつごい勢いだつたわね♥ うふふ、そんなに気持ちよかつたの？」

「……もう、ダメですう♥」

「ええ？ これで終わりのつもり？ ふふ、まだまだ、詩織ちゃんには頑張つてもらわない」と♥

美優先生は、おもむろにシャツのボタンを外し始めた。ぼちぼちと外れるうちに、中に着ている紫色のセクシーなブラジャーが露わになる。

Gカップはありそうなボリューム感満載の巨乳が、ブラジャーから溢れ出していた。くつきりと谷間を作り、ふにふにと揺れている。

隣にいた彩陽先輩が、『そこのところ囁いてくる。

「ほら見て、美優先生のおっぱい、すごいでしょ？ 香奈ちゃん」

『……すごく大きいです』

「今から、あのたぶたぶおっぱいで、詩織ちゃんを気持ちよくしてあげるんだよ♥」
「え……？」

わたしは、どのような光景が繰り広げられるのか、想像が追いつかなかつた。

おっぱいで、ちんぽを気持ちよくする……言葉ではわかつても、一体どうしてあげるのか、理解できなかつた。わたしはそういう知識にその時は疎くて、男の子がどういうプレイが好きだとか、考えたこともなかつたのだ。

英梨先輩は、興奮しきつているのか、鼻息を荒くしながら、わたしの胸をますます強く揉んだ。

「香奈ちゃんのおっぱいもあのくらい大きければ、挟めたのに……♥」

「あんつ♥ 英梨先輩、そんなに揉まないでえ……♥」

「胸で感じられるようになつてきてるじやん。ここも触つてあげるね♥」

「んひやつ♥」

体を貫いた鋭い感覚に、わたしは思わず声を上げてしまう。

英梨先輩がわたしの乳首をつまんでいた。胸を揉まれたせいですっかり膨らんでしまつて、いた乳首を、コリコリと刺激されて、わたしは仰け反つてしまふ。

これつて、もしかして気持ちいい……？ わたしは、胸を触られて得ていた何とも言えない感覚が、快感と言われるものではないのかと、ようやく気付き始めていた。

本当はこんなこと、いけないはずなのに。いつのまにか英梨先輩に胸をもつと揉まれたい、と思い始めてしまつっていた。

「や、やめてください……♥ ああつ♥」

「そんなに蕩けた顔で言われても、やめてあげない♥ こっちも、そろそろビショビショなんじやない♥」

「えつ……そ、そんなところ……んひいつ♥」

英梨先輩の手のひらが、そろそろわたしの寝間着の中へと入つてきて、おへその辺りから、その下の股間へと伸びてきた。

くちゅ♥ と音が鳴つた。いつのまにか、股間がヌルヌルした液体で濡れそぼつていた。どうして……そう考える前に、おまんこの割れ目を指で撫でられて、感じたことのないほどのあの感覚が体を駆け巡る。

「すつごい濡れてる♥ 香奈ちゃんも、わたしたちの仲間入りする日も近そうだね。いっぱい気持ちよくしてあげる♥」

「だ、ダメっ！ こんなこと……あんつ♥」

「気持ちいいくせに♥ ほら、見て。こんなにトロトロなのが、わたしの指にこびりついてるよ♥」

「ち、違う……それはつ」

「違うの？ それじゃあ、このエッチな匂いのするお汁は、なんのかな？ ちゃんと答えて♥」

「でもつ、ちがう……ちがうんですう」

「もう、言つちやいなよ♥ おっぱい触られて発情して、おまんこヌレヌレになつちやいました、つて♥」

英梨先輩の声が、わたしの頭の中に何度も響く。胸を触られて、おまんこがこんな風になつちやうほど興奮してしまつた——これまでエッチなことに興味のなかつたわたしが、こんなことに。

新しい扉を開けてしまつた気がしていた。ふたりの女の子に首筋を舐められ、体を愛撫される。こんなに心地がいいだなんて、信じくなかった。

それでも、この体の疼きは誤魔化せない。触られると、気持ちいい……わたしは、そのあまりにも簡単な事実を、初めて知つてしまつた。

今だつて、わたしのおまんこの奥の方が、何かを求めてトロトロと愛液を溢れ出させていた。英梨先輩の指が割れ目の中に入つてくると、ますますぐちょぐちょになつてしまふ。「さ、触らないでえ♥ それ、気持ちいいから、ダメえ♥」

「やつと気持ちいいって、言えたね？ 香奈ちゃんはもつともつと気持ちよくなれるんだよ♥ わたしに身を任せて、『らん』

「んはあ……♥ ほんとに、ダメ、だからあ……あつあつ♥」

「そんなに声出したら詩織と美優先生を邪魔しちやうよ？ ほら、一人も気持ちいいコト、始めてる♥」

わたしが、目を戻すと、これを書いている今でも記憶に鮮烈に残つてているほどの、例のアレを二人はやつていた。

立ち上がつた詩織が、ちんぽを突き出して——美優先生の柔らかそうなおっぱいに、挟んでもらつていた。むしろ、埋もれていると言つた方がいいかもしない。詩織の小さいちんぽは、おっぱいでほとんど隠れて見えなくなつていた。

パイズリ。あまりにも卑猥で、わたしはますますおまんこが熱くなるのを感じた。

「詩織ちゃんのちんぽ、わたしのおっぱいまんこに、全部はいつちやつたわね♥」

「……せ、先生い♥ 柔らかくて、温かくて……んはあつ♥」

「ちんぽ、もうビクビクしてるよ。我慢しないと、すぐ終わっちゃいそう♥ 詩織ちゃん、頑張れ♥」

「気持ちよすぎですう……♥ 美優先生♥」

おっぱいで見えないけれど、詩織のちんぽはすでに、限界まで勃起して射精寸前に違いない。美優先生はそれを余裕の表情で眺めて、うふふ、と淫らに笑つていて。

胸を手のひらで左右から押して、ふにふにとちんぽを刺激してあげている。

さらには、体ごと動かして、詩織のちんぽをしげいてあげると、詩織は甲高い嬌声をあげ

る。

「あっ♥ ダメです♥ 出ちゃいますう♥」

「先生のおっぱいに精子、気持ちよく出しちゃいなさい♥」

「あ、あつ♥ またイクうつ——んううつ」

「ぴゅーつ♥ ぴゅつ、ぴゅるつ♥」

美優先生の胸にちんぽを入れたまま、詩織はぴくぴくと痙攣した。美優先生は、気持ちよく射精が終わるように、最後までぴつたりと胸でちんぽを挟んであげている。やがて、谷間からお腹へ、とろとろと精液が垂れて流れた。詩織はちんぽを引き抜いて、その場にへたり込んだ。

「搾り取られちゃいましたあ……もう一滴も、精液出ません……♥」

美優先生は、唇の端から涎を垂らした詩織の頭を優しく撫でてあげるのだった。

一方、わたしは英梨先輩におまんこを指で搔き回され続けて、頭がぼんやりしてしまっていた。快感がこんこんと湧き上がってきて、すっかり体に力が入らない。

「な、なんか……英梨先輩……♥」

「うん？ そろそろ香奈ちゃんもイキそうなんじやない？ ここ押してあげるから、イつちやいなよ♥」

英梨先輩は、おまんこの中で、指をおへそのほうへぎゅっと折り曲げた。裏側から、お腹を押されるような感覚と共に、強烈な快感としか言いようもないものがこみ上げた。その時刺激された部分がGスポットといつ部位だと、わたしは後で知ることになるのだった。

わたしは声を出すこともできず、初めて「イク」ということを体験したのだった。

「ぐぐぐつ♥！」

火花が散つて、頭が真っ白になるようだつた。

ひざに力が入らなくなつて、完全に英梨先輩に体を預けてしまつた。おまんこが、きゅうきゅうと英梨先輩の指を締め付ける。

気がつくと、わたしは床に座り込んでいた。

「気持ちよくいたね、香奈ちゃん♥ これ、しゃぶつてみなよ♥」

そして英梨先輩がいきなり口の中に指を突っ込んできて、わたしは何も考えられずそれを咥えてしまうのだった。

なんともいえない不思議な味——わたしは恍惚としながら、自分の愛液がこびりついた指をしやぶらされていることをぼんやりと頭の片隅で認識した。それはまるで、自分の中にある欲情の味を、思い知らされるかのようだつた。

〈香奈 三章〉

わたしは、その晩以来、宙ぶらりんな気持ちでいた。

英梨先輩に身体を触られて、嫌なはずなのに感じてしまつた——自分が信じられなかつた。

あの時のわたしは、どうかしていたに違いない。そう思い込もうとしたけれど、英梨先輩の指先、手つきを思い出すと、身体の奥に妙な疼きを感じてしまうようになつていて。

「わたし、どうかしてる……」

朝早く目が覚めてしまつて、わたしはぐっすり眠っている香奈を眺めながらひとり呟いた。

身体が覚えてしまつていて。英梨先輩に胸をまさぐられ、立つた乳首を指でこすられる感触。

ヌルヌルに濡れてしまつたわたしのおまんこに、英梨先輩の指が入つてくる……あの時の得も言われぬ感触。

その指先の記憶をなぞるように、自分で自分の身体をいじろうとしていることに気付いて、わたしは慌てて自分の胸から手を離した。

「こんなの、ダメ……」

わたしは頭を振り、何もかも記憶から振り落とそうとする。美優先生の痴態、詩織のだらしなく緩んだ表情、彩陽先輩や英梨先輩のクスクスという笑い声……全部不快なはずなのに、体の奥が熱くなつてきてしまう。

「ん、香奈……？　おはよう、早いね」

詩織が目を開き、体を起こす。目を擦りながら、純粹そのものという感じでにつこりとわたしに笑顔を向ける。

「おはよう、詩織。……あつ」

わたしは詩織の股間で、またしても寝間着を押し上げてちんぽが勃起しているのを見つけてしまう。詩織はそのことに気付き、恥ずかしそうにちんぽを手で押さえた。

「ごめんね、勝手にこうなつちやうの……香奈ちゃんはこれ、嫌なんだよね」

「うん。そんな風になつちやつても、また美優先生や彩陽先輩のところには行かないでね」「大丈夫だよ。何度も言ってくれなくても、香奈ちゃんとの約束、覚えてるつて」

詩織は辛さを隠すような笑顔を見せる。

わたしはあの後、ぼんやりとしながら詩織と一緒に部屋に戻つた。快感に溺れて英梨先輩に身を任せてはいけないと必死に理性を働かせて、強引に連れ帰つたのだ。

お互に表情が快樂でゆるんでいて、どうすればいいかわからなかつたけど、詩織はそんな状態のわたしも可愛いと言つてくれた。ひたすら恥ずかしいだけだつたところにそう言われて嬉しかつた。

でも、わたしは詩織があんな風にだらしなくちんぽから精液を飛び出させている姿をこれ以上見たくなかったから、詩織のことをきつく叱つた。

美優先生や彩陽先輩に誘われても、ついていかないこと。それを固く約束させたから、今度こそ本当に詩織はちんぽ快樂に負けずに生活していくのはずだつた。

「あの人たち、絶対おかしいよ……あんなに嬉しそうに、詩織のちんぽをしやぶつたり、おぱいで挟んだり……おかしいよ」

「二人とも、いい人たちなんだけどな……香奈ちゃんがそう言うなら、もう会わないよ」「わたし、美優先生が一番いけないとと思うの。生徒たちがいやらしいことするのを黙認して……あの人人がそういうことを止めるべきなのに」

「そう、だよね……本当は、いけないことだもんね」

「先生なのに、いやらしいことに参加して……最悪だよ」

「でも、美優先生って、優しいって評判良いよ。きっと何か理由があつて、彩陽先輩とか英梨先輩を黙認してるんじゃないかな……？」

わたしたちはこの時、この学園のことを全然わかつていなかつた。

彩陽先輩や英梨先輩以外に、あんなことをしている生徒たちはいないと思つていた。自分たちが見た物以外のところまで想像力を働かせていなかつた。

わたしは知らなかつた。一人とか三人とか、その程度じやない数の女の子たちがこの学園のせいできんぽが生えてきてしまつっていたのだ。

もつとたくさんふたなりの女の子たちがいて、その相手をしてあげている女の子たちがあんなにもたくさんいるだなんて。わたしがそのことを知る時は刻々と近づいていた。

そもそも、どうして詩織にちんぽが生えててしまつたんだろう？

わたしはそのことが気になつて仕方なかつた。勝手に生えてきてしまうだなんて、どう考えてもおかしい。

生えてきた理由がわかれば、消す方法もわかるんじやないか。そういう考えが閃いて、どうにかその理由を突き止めようと、わたしは動き始めた。

謎を解くカギが何もないから、とにかく思いつく限りのことを試してみるしかなくて、わたしは最初に一番怪しいと思う人物を追いかけることにした。

美優先生の一日を、追跡するのだ。

わたしが犯される快樂を知り、墮ちてしまふことになるその日、美優先生が先生たちが寝泊まりする寮を出て、校舎へ向かい始めるのを自分の部屋の窓から発見した。

「詩織、ちょっと行つてくるね」

「うん……頑張つてね、香奈ちゃん」

詩織に見送られ、先生の後ろ姿を追いかけて足早に校舎に向かう。

その時間はまだ朝早くて、ほとんど校舎には誰もいない。美優先生は職員室に入っているので、わたしはこつそりと職員室を覗いた。

職員室には女の先生たちがたくさんいて、こんな早い時間から色々と準備をしているのか、と全然関係ないところで感心した。

わたしは美優先生が出てくるまで、廊下の陰に隠れていた。結構時間が経つて、生徒たちが大勢登校してきて、そろそろホームルームの鐘が鳴ろうかと言ったくらいの時に、ようやく美優先生は再び現れた。

「うふふ、それでね……」

「……へえ、生徒会の新しい子かあ、楽しみね」

美優先生は、白衣を着た凛先生と並んで職員室から出てきて、廊下と一緒に歩いて行つた。どうやら、抜群にスタイルが良い同士、一人は仲良しみたいで、笑い声が絶えない。

わたしは二人をこつそりと追いかける。凛先生が保健室に戻つていって、美優先生は一人になつて、校舎の階段を上つていく。相変わらず、白いシャツと黒いタイトスカートがよく似合つていて美人さんだ。髪もちゃんと結つているし、マイクもばっかり。女の子しかいないこの学校でも、毎日きちんとしている。

詩織とのあの痴態さえ見る前は、わたしも美優先生のことは好きだった。

その後ろ姿に思わず憧れながら、別の可能性についても考えていた。

——そういえば、凛先生も怪しいかも。

一番最初に、詩織に生えてきたちんぽを、何の驚きもなく受け入れて、射精を促してあげていた姿が脳裏に蘇る。すっかり慣れ切つっていた仕草で、これまで似たようなことを何度もしてきたかのような雰囲気があつた。

とりあえず、美優先生を追いかけた後、凛先生のことも探つてみようと思つて、わたしは美優先生が二年生の教室へ向かうのを見届けて、自分の教室に戻つた。

お昼休み、わたしは慌てて自分の教室を出て美優先生が二限に授業していたはずの教室へ向かう。お姉ちゃんに連絡して二年生の時間割を確認すると、ちょうど担当している「2-D」で授業しているということだった。もしかしたらもうどこかに行つてしまつたかと思つて小走りで向かうと、思わず別の人と出くわした。

お姉ちゃんが、教室から綺麗な金髪の同級生の子と一緒に出てきた。

「あれ、香奈じやない。こんなところで何してるの？」

「お姉ちゃんつ、今お姉ちゃんと話してる暇はないのつ」

「なによそれ、香奈のばーか」

べー、と舌を出されて、わたしも舌を出し返す。お姉ちゃんとは、いつもこんな感じだ。別に仲が悪いわけではなく、機会があるとよく一緒に出掛けたりしていただけど、すぐ仲が良いわけでもない。

お姉ちゃんのほうからよく絡んでくるのだけど、この学園に来てからというもの、ちつともそんなことはない。きっと他に良い友達が出来てわたしに構つている暇はないんだろ

うなと思う。

気を取り直して教室を覗くと、美優先生は教壇でプリントを整えて、ちょうど出てこようとしているところだった。わたしは慌てて目を反らしたけど、見つかってしまった。

にこりと微笑んで、わたしに話しかけてくる。

「あら、香奈ちゃん。この間の夜は楽しかったわね？」

「……全然楽しくありませんでした」

「あら、そう？」

香奈ちゃんはお姉ちゃんと一緒にご飯かしら？ わたしも生徒会のみんなと一緒にご飯食べてくるね」

「生徒会、ですか？」

「そうよ。わたし、生徒会の顧問で、生徒会の子たちと仲が良いの。ほら、そこで待つてくれるわ。三年生の夏希ちゃん」

美優先生の視線の先を見ると、可愛い女の子がドアのところでニコニコしていた。細い体のわりに、やたら大きなおっぱいの先輩だ。女のわたしでも触つてみたいと思つてしまふほど。その姿を見て思い出した。夏希ちゃんと呼ばれたその子は確か、生徒会長だったはずだ。何かの冊子に、顔が載っていた。

生徒会でご飯を一緒に食べるというのは、どうやら本当の事らしかった。

「それじやあね、香奈ちゃん。また彩陽ちゃんの部屋で会えるといいわね」

美優先生は、また含みのあることを言つて教室を出て行つた。夏希先輩と並んで歩き、楽しそうに話している。どうやら詩織の言う通り人当たりがいいのは間違いなさそうだった。生徒会室に行くのなら、妙なことはしないだろう。生徒会役員の人たちが一緒にいるのなら問題ないはずだ。

わたしはお腹も減っていたし、教室に戻つて詩織と一緒にご飯を食べに食堂にでも行くことにした。

放課後も、わたしはすぐに教室を出て、「2—D」へと向かう。

再び教室を覗き込むと、美優先生はすでにそこにはいなかつた。その代わり、机に突つ伏しているお姉ちゃんと目が合つて、なんとなく話しかけてしまつた。

「お姉ちゃん、また机で寝てたの？ 相変わらずだらしないなあ」

「うるさいなあ、ちょっと具合が悪くて突つ伏してただけよ」

お姉ちゃんはなんだか顔が火照つていて、本当に熱でもありそうだ。ちょっと心配になつて気遣つてあげようかとも思つたけど、お姉ちゃんだからいいや、という結論に落ち着いた。

「香奈こそ何してるの？ お昼休みも来てたよね？」

「なんでもないつてば。こっちの話だから、お姉ちゃんには関係ないの」

「それならどつかつてよ、今色々とやばいんだから……◆」

よくわからないけど、本人がそう言うなら間違いない。肩をすくめるくらいしか出来なかつた。

わたしは素直に言うことを聞いて、じやあね、とその場を後にした。

とにかく美優先生を見つけなければいけない。わたしは職員室にいるんじやないかと見当をつけた。

向かっている途中に、美優先生が保健室から出てくるところにばったり出くわした。

「あら、今日はよく会うわね？」

美優先生は微笑んで、階段の方へ歩いて行った。わたしは適当に会釈しながら、行き先を考える。階段のほうへ行つたということは、寮へ戻るというわけではなく、校舎の中にまだ用事があるということだ。

もしかしたら生徒会に関係することなのかもしれない。そう考えつつ、わたしは嫌な予感がしていた。

——また保健室だ。

やつぱり、何かあるのはこの保健室なのではないかと思つて、「ぐくりと唾を飲む。

美優先生は特別な理由がなければ保健室に寄ることなんてないはずだ。体調が悪いようには見えなかつた。これは絶対に、何かある……。

「中で、何やつてるんだろう……」

わたしは扉の隙間が少し空いているのを見て、また顔を寄せて覗こうとした——その時、ガラリと向こう側からドアが開けられた。

「あっ」

そこにいた女生徒を見て、心臓がドクン、と変な動き方をした。

八重歯が口もとに光る一つ上の生徒——英梨先輩。あの時の記憶が一気に蘇つて、わたしは体の奥がじいんとなつてしまつた。

英梨先輩はわたしを見てにやりと笑う。

「あれ、香奈ちゃんじやん。何してんの」

「た、ただの通りすがりですけど……」

「ふーん……もしかして暇してる？ それなら付き合つてよ♥」

わたしは強引に手を引かれて、保健室に連れ込まれてしまつた。抵抗しようと思つたけど、怖くて力が入らなかつた。ぴしやりと後ろでドアを閉められてしまう。

保健室には他に、凛先生がいた。わたしを見つけると無理やりわたしの手を引く英梨先輩を見て驚いた表情を見せた。

「あらあら、何してるの、二人とも？」

「た、助けてください……！ わたし、保健室に用事なんてなくて……」

「まあまあ……そんなに暴れなくてもいいじやん♥」

見世物でも見るような顔の英梨先輩は、わたしが嫌がつてゐるのを見て舌なめずりをした。凛先生が傍にいるのに、意にも介していない。

見かねたように凛先生に注意されても、全然気にしていないようだつた。

「英梨ちゃん、強引なのはダメよ」

「先生、違うんです。この子、本当はシたいくせに、それを認めようとしないだけなんです

よお♥ ほら、この間、わたしとどんなことしたか、凜先生に言つてみなよ♥

「い、嫌です……！ 離してくださいっ」

わたしはなんとか英梨先輩の腕を振り切つた。すぐに逃げ出そうかと思つたけど、そこに凜先生が思いもよらないことを言つてくる。

「香奈ちゃんたら、英梨ちゃんとそういう関係になつたのね……意外だわ♥ こういうちよつと強引な子が趣味だったのね♥」

まるで、英梨先輩のことを認めるような口ぶり。もしかして、この人も美優先生や、彩陽先輩と仲間になつて、やらしいことをしているんだろうか。

以前詩織にああいうことをしてあげたのは、仕方ないからじやなかつたんだろうか。ふたなりの女の子たちみんなに手を貸して、凜先生も楽しんでいたりするんだろうか。

わたしは、自分の周りに仲間が一人もいないんじやないかという恐怖に襲われた。頭の中でそれを否定する。わたしは間違つていない……あんな風にいやらしいことをするのは、普通にいやないはずだ。

「今、すつゞくムラムラしてるんだよね♥ ちょっとだけいいから、エッチなことさせてよ♥」

「や、やめて……！」

「そうだ、今日のパーティー、友梨佳ちゃんも来るらしいけど、香奈ちゃんのお姉ちゃんなんだつて？ 確かによく見ると顔つきとか似てるね。美少女姉妹じやん」

「お姉ちゃん……？ お姉ちゃんがどうかしたの？」

わたしは、急に知らないことを語りだす英梨先輩を見つめた。

パーティ一いつて？ お姉ちゃんが、この人と知り合い？ 何もかもが意味不明で、わたしは頭の中がぐちゃぐちゃになつっていく。

「あれえ？ 知らないの？ 友梨佳が今、どんな風になつてるか。姉妹でベタベタするほど仲良しつてわけじやないとは聞いてたけど、まさかそんな大事な話もされてないの？」

「お、お姉ちゃんにもわたしにしたような、いやらしいこと、してるの！？」

「あははっ、香奈ちゃん、何にもわかつてないね。可愛い♥」

いくらなんでも、わたしは怒りが湧き上がつてくるのを抑えられなかつた。

英梨先輩は、わたしや詩織だけでなく、お姉ちゃんやもつとたくさんの人々に、ああいやらしいことをして、めちやくちやにしてるんだろうか。

わたしみたいな嫌な思いをしている人が、この学園にはたくさんいるのだろうか。なんてひどい学園なんだろう。わたしは今すぐにでも逃げ出したい気持ちでいっぱいになつた。睨みつけるわたしを見て英梨先輩はおかしそうに笑つた。

「やめてよっ！ お姉ちゃんにもひどいことしてるの？ 許せない！」

「だから、何にもわかつてないよ、香奈ちゃんは。香奈ちゃんのお姉ちゃんはこれから生徒会室で、生徒会長の夏希先輩に童貞を卒業させてもらうところだよ。女の子とのセックスにハマつて、抜け出せなくなつちやうといふ♥」

「な、なに言つてゐるの……？」

「友梨佳ちゃんは、ふたりになつちやつたんだつてば。香奈ちゃんの友達の詩織ちゃんみ
たいに」

わたしは何を言つてゐるのかわからなくて、ただただ啞然とした。

お姉ちゃんが、ふたりに……？ あのスカートの下には、ちんぽが生えているのだろう
か？ そんなはずはなかつた。さつきまで、わたしと普通に会話していたのに。
きっと、この人は嘘をついている。わたしはそう確信した。ありえないことだつた。わた
しを騙して、その気にさせて、いやらしいことをしようとしているに違ひない。

「う、嘘……！ お姉ちゃんは、ふたりなんかじゃないよ……！」

「嘘なんかついてないよ、そんな嘘ついて、わたしに何の得があるの？」

「絶対嘘だよ……そんなわけないもん……！」

「それなら、証拠見せてあげる。先生、例の学生のリスト、見せてよ。この学園の女生徒た
ち全員を載せたリストを。その机の中に入つてるでしょ？」

英梨先輩は、机でわたしたちの言い争いを傍観していた凛先生に言つた。

「ああ、友梨佳ちゃんの妹さんだつたのね？ 友梨佳ちゃんのちんぽは発育がよくて、すつ
ごく大きかつたわよ」

「な、なに言つてゐるんですか……凛先生？」

「そういうえば、ここ保健室で、精通させてあげたわね。そこのベッドだつたかしら。ちよつ
と懐かしいわ。すゞく気持ちよさそうに射精してて印象的だつたわ」

「こゝに書いてあるでしょ？」 友梨佳、つて文字。よく見て

英梨先輩は何枚も紙が入つたファイルを受け取つて、わたしの顔の前に突き付ける。

そこには、学年順、出席番号順に生徒たちの名前が羅列されていた。そのうち、三分の一
くらいの名前に、赤い丸印がついている。

「赤い丸印がついているのが、ふたりの女の子。たくさんいるでしょ？ この学園の女
の子たちはふたりばかりなんだよ」

どのページも、赤い丸印で埋め尽くされていた。

全身に鳥肌が立つた。この学園そのものが、どうかしている……途方もない絶望感に襲わ
れた。

いやらしいことはいけないことだ。そういう、わたしと同じような考えを持つた人は、こ
の学園にはいないんじやないか。その感覺が唐突に現実感を持つて降りてきた。とんでもな
い場所にわたしは転校してしまつたのではないか。

ちんぽが生えてきて、射精せずにいられなくなつてしまふ女の子たち。この学園は、そ
んな存在で埋め尽くされているのだ。きっとわたしが知らないだけで、同じクラスのあの女
の子も、水泳部のあの先輩も、ちんぽが生えていてわたしのことをいやらしい目で見ていた
のかもしれない。

足がすくんで、わたしはその場にへたりこんでしまった。力が入らないのだ。どうすればいいかわからなかつた。ただただ茫然としていた。

英梨先輩はリストの一か所に指を当てて言つた。

「これが香奈ちゃんのお姉ちゃんだね」

友梨佳と言う名前。そこにはしつかりと赤い丸印がついていた。

はつきりとした証拠が目の前にあつた。いつの間に、お姉ちゃんはふたりになつてしまつたのだろう？ 今頃、ちんぽが疼いてしようがなくて、誰かに精液を出してもらつたために徘徊しているのだろうか。

凛先生はへたり込んだわたしを、少し憐れむような視線で見ながら説明してくれた。

「これは仕方のない現象なの。〈病氣〉のようなものだとわたしは考へてるわ。もともと普通の女の子だつたのに、一定の割合の女の子たちに男性器が生えてきてしまう。この学園で生活している女の子たちに広まる伝染病のようなもの……常識で考えたらありえないことだけど、それは実際にこの学園で起こつてることなのよ」

「〈呪い〉だつて言つてる子たちもいるよ。勝手にちんぽが生えてきて、その女の子を乗つ取つたみたいに、射精することばかり考えさせるんだからね。科学じや説明できぬじやん？ この学園に伝わる、何年も前から脈々と引き継がれてきた呪い……でも、わたしはその呪いが自分にかかるつたと思つてるよ？ だつて、こんなに気持ちいい思いが出来るんだもんね」

英梨先輩が、自分のスカートをたくしあげる。

そこには、黒っぽいちんぽがガチガチに勃起してわたしを向いていた。目の前に猛々しいそれを突き付けられると、腰が抜けたようになつてしまつた。

「や、やめてください……英梨先輩」

「香奈ちゃんみたいな子に、前から咥えさせたかったんだよ◆ ほら、口開けて◆」

「い、いやです……きやあっ！」

わたしは、英梨先輩にがつしりと顔を掴まれてしまつ。同じ女の子で、それほど力は強くないのに、わたしのほうが力が入らなくなつてしまつていて、抵抗できない。

そのまま唇にちんぽを押し付けられて、わたしは異様な気分に襲われていた。

これから、英梨先輩にめちゃくちやにされてしまつ……嫌なはずなのに、以前英梨先輩に胸を揉まれたり、おまんこに指を入れられたりしたときの記憶が蘇つて、胸がドキドキしてしまつっていた。

これは興奮なのかもしれない……認めたくなくとも、体が反応してしまつっていた。

「ん、んううつ！ ちんぽ、そんなにくつつけないでえ……」

「言葉だけ嫌がつても、本当はちょっと期待してるの、わたしにはわかるからね◆ 他の子たちも、こういう風に堕ちていつたんだよ。彩陽だつてそうだつた◆」

「あ、彩陽先輩が……？」

「最初からちんぽを舐めるのが好きな女の子なんて、いないじやん？ わたしが調教した

んだよ♥」

「そんな——んぐうつ！」

声を上げたところに、無理矢理ちんぽをねじ込まれてしまつた。口の中に固い棒が強引に侵入してくる。

独特の味が口の中に広がる。わたしは顔を押さえつけられたまま抵抗できず、その味を覚え込まれた。

「おいしいでしょ？ 彩陽はおいしいって言つてくれるよ、わたしのちんぽ♦」

「や、らめへ……んくうつ！ んごお、うううつ！」

「ほら、ちゃんとしやぶつてよ……舌を絡みつけて、涎をまみれさせるの♦ ……あんつ♦ そうだよ、それそれつ」

どうしていいかわからず、言われる通りちんぽをぺろぺろと舐めると、英梨先輩は嬌声をあげた。

意外にも甘つたるい声。こんなに可愛い声で喘ぐんだ、とわたしは妙な感情を覚えてしまつた。可愛い——こんなに醜悪なちんぽを舐めさせられているのに、こんな感情を抱くのは異様だと思いながらも、わたしは英梨先輩のちんぽを舐め続けてしまう。

口を塞がれて、悲鳴をあげることも、こんなことを間違つていると主張することも出来なかつた。

「あつ、あはあ……♥ いいじやん、わかつてるじやん、香奈ちゃん……♥」

「んう……じゅるうう、んぐぐ……」

「そうそう、しやぶりついで、精液を吸い出すみたいに……んひつ♥」

やたら気持ちが良さそうに、英梨先輩はカクカクと膝を震わせる。その声は、切羽詰まつたものへと変わつていつた。

「あく♥ 香奈ちゃんみたいな子を開発するのが、一番興奮する♥」

「んうつんううつ！」

「はあつ♥ これで香奈ちゃんも、わたしのものだね♥ ああつ、イク、すぐイッちやう……くうつ！」

「びゅーつ！ びゅくくつ！ びゅるつ！」

口の中に、何かが一斉に雪崩れ込んできた。大量のねばねばした液体。

わたしはその独特的の舌触りに、一瞬怯んだけれど、そのまま英梨先輩のちんぽを吸い続けてしまつ。どんどん先っぽから液体が出てきて、わたしは反射的にそれを嚥下してしまつた。ごくり、ごくり……英梨先輩の身体から出でたものを、飲み込んでいく。熱い液体が喉を通つて、お腹にまで落ちていくのが分かつた。

「んはあつ」

一通り出し終わつたところで、英梨先輩はちんぽをわたしの口から引き抜いた。たぱたぱと、唾液が床にこぼれる。

英梨先輩はそのまま、床に座り込んで、はあ、はあと息を荒げて余韻に浸る。

「……ふう♥ たまんなかったよ、香奈ちゃんのくちまんこ♥」
「わたし……英梨先輩に、口の中で……」

「ふふ、初めての相手の、彩陽のこと思い出すなあ♥ 最初は今みたいに香奈ちゃんみたいに茫然としてたけど、今じや自分から喜んでちんぽを咥えるからね♥」

英梨先輩はそう言つて、余韻から戻つてきて、すっと立ち上がつた。

「わたし、今日は大忙しなんだよね。本当はもつとこで香奈ちゃんといろんなどしたいけど、実は待たせる人がいて。生徒会室で、美優先生が待ってるんだ。また今度、たっぷり本番セックスしようね♥ じやあね」

そして、保健室のドアを開け、外へと出て行つてしまつた。

生徒会室。美優先生——危険なワードばかりだ。追いかければいけないと頭の片隅で思いながらも、口内を犯されるという初めての体験に圧倒され、わたしはその場でへたり込んだまま動けなかつた。

英梨先輩が出て行つた後、凜先生が声をかけてくる。

「もしかして香奈ちゃん、英梨ちゃんの精液、全部飲んじゃつたの？」

凜先生が、口に手を当てながらおかしそうに言つた。

さつきから、わたしたちの行為を傍観していた凜先生。わたしはふと思つた。どうして、この人は女生徒たちのリストなんか作つていたんだろう。

どう考へても、この人はおかしい……普段浮かべている優しげな笑みに裏があるのではないか——そんな疑念に襲われた。

そして、わたしはこの時、その疑念が正しいものであつたことを証明する異様なものを見撃つことになるのだった。

それはこの学園のもう一つの秘密であり、この〈ふたなり〉という現象のもう一つの側面なのだった。

凜先生は、この時わたしにわざわざそれを説明してくれた。それはぎょっとする言葉から始まつたことを、今でもはつきりと覚えている。

それはまさに〈呪い〉と呼ぶにふさわしいものだつた。異変が起きているのは、ふたなりの女の子だけではないということを、わたしは思い知ることになるのだった。

「一回精液を飲んじやえば、きっとわたしと同じになれるわよ♥ 最初は嫌かもしけないけど、すぐに良さがわかつてくるわ」

その場から動けないわたしに、凜先生はそう言つた。

——わたしたちと同じ。どういうことだらう?

うふふ、と笑う凜先生に、わたしは底知れない影を感じた。

この人は、わたしとは根本的に違う存在なのではないかと言う直感が来た。

そして同時に、わたしは自分のお腹に熱さを感じて手を当てる。英梨先輩の精液がここに入っているのだとほつきりわかつた。

「……んつ♥ な、なにこれ……」

お腹の中に入ってきた精液の熱さが自分に浸透してくるような奇妙な感覚を得ていた。

凛先生は、机に置いてあつた白い液体の入った試験管を手に取り、目の高さに掲げた。

わたしはその液体が何だろうとは以前から思っていたけど、今ようやく、そこに入つてゐる白い液体がふたなりの生徒が出した精液なのだと察していた。

初めての精飲を体験して茫然しているわたしに、試験管をゆるく振りながらゆっくりと説明した。

「わたしはね、この〈ふたなり〉という現象に興味を持つて、わたしなりに研究していたの。

こうやって、精子を採取したりしてね。成分を分析したら、ごく普通の、男の子が出すのと同じ精液だつたんだけど……驚くべきことがわかつたの」

「驚くべきこと……？」

「ふたなり精液には特殊な効用があるのよ。これも、説明する科学的根拠はないんだけど……それを摂取した女の子を発情させるっていう、信じられない効用がね」

わたしは、今飲み込んだたっぷりの精液がじわじわと体の中で広がっていくのを感じながら、わたしの中で変化が起きるのを感じていた。

何かが吹っ切れていた。わたしはちんぽを咥えてしまつた。口の中で射精されてしまつた。穢れてしまつた存在になつたという自覚があつた。

そして、今したことが、自分を別の何かへと変えていくのだという途方もない理解が訪れていた。まるで、初めてセックスを体験して、世界が変わつたかのような認識の変化があつた。

これは、たとえいやらしいことでも、必要なことなんだ――

「つまりこれは媚薬みたいなものよ。そしてそれだけじゃない。もう一つ効用があるの」「もう一つの効用……？」

「見ていればわかるわ。さてと」

凛先生は試験管の蓋を取つた。

「わたしも、ふたなりの生徒に無理やり犯されたことがあるの。精液を体内に摂取してしまつたその日から、わたしの中にまた犯されたいっていう感情が生まれたわ」

「そんな……」

「でも保健室の先生であるわたしまでしょっちゅう発情していたら、この学園はめちゃくちゃになつちやうでしょう？だから、わたしはこれで我慢することにしてるの……」これで、ね」

凛先生は、試験管を口の前で傾ける。

「そして、ありえないことが起つた。

「れろお……んぐ、んぐ……これを飲むだけで、ちょっと満足できるのよね◆」「舌を伸ばした凛先生。

傾けた試験管の口から溢れ出した精液を舌で受け取り、くくくと飲み込んでいく。

伸びた舌。これは、比喩ではない。

文字通り、凛先生の舌は通常の人間ではありえないところまで伸びて、精液を舐めとつていた。

鼻の頭から頸の下まで届きそうな、異様な長さの舌——凛先生はそれを駆使して精液を集め、試験管に入っていた分すべてを飲み干した。

するすると、その長い舌が口の中に戻っていく。そんなに長い舌が口の中についたことに、これまで気付かなかつた。

わたしはその姿を見て、不気味ささえ感じていたが、凛先生は空の試験管を机に置き、いつも通りにつこりと笑顔を浮かべるといつも通りの凛先生に戻つていた。

「ふう、美味しかつた♥」

今のはいつたい、なんなのか――

この学園は、どう考へても普通じやない。わたしは戦慄に襲われながらも、体の奥が熱くなつてくるのを感じていた。

わたしは英梨先輩の精液を飲んでしまつた。身体にじんわりと浸透してくるのがよくわかつた。

体温が上がつて、身体の奥が疼きだす。以前英梨先輩に身体をまさぐられた記憶が、勝手に蘇つてくる。

その媚薬効果が、現れようとしていた。気持ちよくなりたい……その感情が、ふつふつと湧き上がつてくるのだ。

〈友梨佳 四章〉

わたしはふたなりとして学園生活を送る中で、悶々とした気持ちを抱くようになつていった。

この女子校で一緒に生活している可愛い女の子たちを、自分のものにしたいという気持ちが日に日に強まつっていたのだ。

凛先生や彩陽に処理してもらうだけでは物足りない。もつと気持ちがいいコトをしてみたい……想像する中で、ひときわやつてみたいことがあつた。

女の子を、犯したい——おまんこにちんぽを思い切り突き込んで、めちゃくちやに動かしたい。ちんぽが生えてくる前は男の子の「ヤリたい」という気持ちはさっぱり理解できなかつたけど、今なら痛いほどわかつた。

色々なプレイを体験するうちに、どんどん欲望が大きくなつっていくのだ。

最初は手でしてもらうだけだつた。順々に、フェラチオやパイズリをしてもらつて、ついにこの間、紗耶香が彩陽のおまんこにちんぽを突き立てるところを見てしまつた。わたしもあれをしたい。女の子の大変なところに、自分のちんぽを突き込みたい。ついに、わたしはその段階にまで来てしまつていた。

「……はあ♥」

何気なく廊下の方を見ていると、妹の香奈がこつそりとわたしの教室を覗いているのが見えた。目が合うと、香奈がわたしの机のところに歩いてきた。

「お姉ちゃん、また机で寝てたの？ 相変わらずだらしないなあ」

「うるさいなあ、ちょっと具合が悪くて突っ伏してただけよ」

香奈は見た目はわたしによく似てゐるけど、性格は結構違う。わたしと違つて、神経質と言ふか、理屈っぽいというか、どうでもいいことをイチイチ考える面倒くさいところがある。妹のくせにわたしより胸が大きいところも嫌いだ。

それでも、ずっと子供のころから一緒にいるだけあって、口喧嘩はよくしても仲は良い。「香奈こそ何してるの？ お昼休みも来てたよね？」

「なんでもないってば。こっちの話だから、お姉ちゃんには関係ないの」「それならどつか行つてよ、今色々とやばいんだから……♥」

机の下でちんぽはびんびんに固くなつてゐる。

元気よく勃起するちんぽに呆れるような嬉しいような気持ちになりながら、わたしはスカートの上からちんぽを触つてみる。石みたいに固くて、わたしの指の一回りも一回りも大きい。

最近、はつきりと自覚することがあつた。
——ちんぽが、前より大きくなつてきてゐるのだ。

この間、紗耶香や彩陽とエッチなことをしたときにも一人に言われて気付いて、あの時から意識し始めたのだけど、ようやく今になつてその成長具合に自分で驚き始めた。

ふたなりになつたばかりの時と比べて、長さも太さも、段違いだつた。定規で計つてみると、一番勃起しているとき、長さは十七センチくらいあつた。

ふたなりになつてから、何度も何度も射精していたから、鍛えられたのかもしれない。そんな馬鹿なことを考えながら、嫌な気はしなかつた。

大きいちんぽのほうが、挿入したときに女の子も気持ちいいし、わたしも気持ちいいと彩陽に聞いていたから、わたしははやすく試してみたくてしようがなかつた。

香奈は肩をすくめたかと思うと、じゃあねと言つて教室から出て行つてしまつた。

しばらくの間、突つ伏していると眠くなつてきて、わたしは眠つてしまつた。

「ゆーりかっ」

声をかけられて目を覚ますと、紗耶香と彩陽が来ていた。二人とも、なんだか嬉しげに頬を緩ませている。

「友梨佳さん、今日はこの後、予定を入れてませんわよね？ 今日がなんの日か、忘れていませんこと？」

「えーっと……なんの日だっけ」

「友梨佳って、前から思つてたけど結構ズボラだよね」

「そんなことないつてばー！」

「あ……思い出した！ 生徒会のパーティー！」

「それなら、今日の放課後、何があるんだっけ？」

「あ……思い出した！ 生徒会のパーティー！」

そう、今日はあの夏希先輩に誘われた生徒会のパーティーが行われる日だつた。

わたしはあの日以来ちょこちょこと生徒会に遊びに行つていただけれど、準備はほとんど手伝つていなかつた。新入りだからという理由で、免除されていたのだ。どんなパーティーを行うかすら知らされずに、秘密にされたまま、今日まで来てしまつた。

何をするのかわからない期待でいっぱいだつたし、三年生の夏希先輩のことを思い出すだけでも気分が晴れやかだつた。細いのに、胸はびっくりするくらい育つている抜群のスタイルの良さと、物腰の柔らかさ——あの人には見えるというだけで上機嫌だ。

「彩陽もパーティーに呼ばれてたんだ。生徒会の役員じゃないのに」

「もちろん。わたしはパーティーで大事な役回りだからね♥ それじゃあ行こつか」

わたしは二人に連れられて、浮き浮きしながら廊下を歩いていく。

その途中、急に彩陽が囁きかけてきた。

「ねえ、友梨佳はこのパーティーがどういうパーティーだか知つてるの？」

「どういうパーティーって？」

「知らないんだ、友梨佳。紗耶香、教えてあげなかつたの？」

「わたしも、何も知らずに生徒会に入りましたわ。最初のパーティーの喜びは格別でしたのよ。友梨佳にもそれを味わつてほしくて、これまでずっと内緒にしてきましたの」

「なるほどね……そういうことなら、わたしも教えてあげない」「なにそれ、気になるよお」

何度も聞いても答えてくれなかつた。わたしは色々と想像しながら、廊下を歩いていく。

夏希先輩たちが用意してくれたパーティー。きつと楽しいに違いない。

ただ、わたしの脳裏に最初に生徒会に行つた時の記憶がよみがえる。机の下でわたしの太ももを撫でてくれた夏希先輩のいやらしい手つき。

その淫らなイメージが、なんだか忘れられずにいた。

そしてわたしはふと気づいた。隣にいる紗耶香は、最初わたしに発情して、襲い掛かつてこようとした時と同じように頬を赤らめていた。股間を見ると、どうやら勃起しているらしかつた。

これからパーティーだというのに、なぜそんなことになつてているのか。そこまで考えて、ありえるかもしれない一つの答えが思い浮かんだ。

——まさか、そんなわけ……

わたしは自分でそれを笑い飛ばしたが、さつきの彩陽の意味深な口ぶりを考えると、ますますその可能性が高くなつていく気がして、ぐくりと唾を飲んだ。

「あら、こんにちは友梨佳さん♥」

廊下の角から、待ち望んでいた人物が現れた。

夏希先輩。胸は大きいのにはつそりとした相変わらず理想的な容姿。今日もわたしに微笑みかけてくれたかと思うと、やたらボディータッチしてくる。わたしの手のひらを両手で包み込んで、引つ張つた。

「待つてたわよ。一緒に行きましょ？」

わたしは高揚感でいっぱいになりながら、夏希先輩に手を引かれるままに生徒会室へと向かっていく。

紗耶香と彩陽が後ろからついていても、こうして手を握つてもらつて、目線を合わせてもらうと、まるで一人きりになつたかのように錯覚してしまつ。

「今日はね、特別なお楽しみを用意したの。友梨佳さんにもたっぷり、気持ちよくなつてもらえるはずよ♥」

「気持ちよく……ですか？」

「そうよ。友梨佳さん、今日はこの具合はどう？　ふふ♥」

手のひらが股間に伸びてきて、スカートを押し上げているちんぽを布の上からさわさわと触られた。

信じられない気分だつた。わたしがふたなりであることを夏希先輩は、当然のように扱つてくれている。そのことも驚きだつたけど、わたしのちんぽを優しく撫でてくれていることがうれしくてしようがなかつた。

「あつ……♥ 夏希先輩、そこ、ダメですって……つ」

「いい勃ちつぶりね♥ 水泳部の彩陽ちゃんに聞いたけど、すつごいおちんちん大きいらし

いじやない？ このスカートをまくろ上げて実物を見るのが楽しみ♥」

「夏希先輩……！？ わたしがふたりりつてこと、知つてたんですか……？」

「友梨佳さん、わたしたちは、そういう組織なのよ♥ 生徒会つていうのは建前で、最初からそのために集まっているの。あなたを誘つたのも、そういう意図があつたからに決まるでしょ？」

「え……？」

「もう、先客がいるみたいね。もう始めちやつてるかもしれないわ。ドアを開けてみて」

生徒会室からは、ほんの少し、喘ぎ声のようなものが漏れ聞こえてしまつっていた。

ドアに恐る恐る手をかける。わたしは紗耶香や彩陽、そして夏希先輩たちが一緒になつてわたしに隠しごとをしていたことがちょびり怖かつたけど、それよりも中で何が起つているのか、真実が知りたいという気持ちが強くなつてしまつていた。

そして何より、夏希先輩がわたしのちんぽを触る手つきのいやらしさに、様々なものを期待してしまつて、余計な思考を許してくれなかつた。

ドアを開くと、そこには二人の女の子が折り重なつて、嬌声をあげていた。

「美優……先生つ♥ はあつ♥」

「英梨ちゃん、いい調子よ♥ あんつ、いいわ、もつと突いてえ♥」

そこにある光景が目に焼き付いてしまつた。

いつも通り白いシャツの美優先生が、生徒会の机の上に横たわつて、股を大きく開いていた。黒いタイトスカートと下着は脱ぎ捨てられ、床に放り出されている。

その美優先生の足の間で立つたまま腰を振るのは、わたしの知らない女の子だつた。着ている制服は少しよれているし、スカートからシャツ出ししていて、だらしない印象だ。開いている口から鋭い八重歯垣間見える。

足元に脱いだ下着が落ちている。スカートを履いたまま、ちんぽだけを出してセックスしていた。おまんこを出入りする血管が浮き出した黒っぽい色をしたちんぽ。

二人とも、快樂に表情を歪め、たまらなそうに喘いでいる。

「ああ～♥ 先生のおまんこ、たまらない……♥ もつともつと突きまくりたくなつちやうじやん……ふああ～♥」

激しく出し入れされるちんぽが、愛液を搔き出している。

じゅぱつ、じゅぱつ、といやらしい音が結合部から聞こえてきていて、わたしは英梨ちゃんと呼ばれたふたりの女の子のちんぽが、美優先生のおまんこを犯しているその姿から目を離せなくなつてしまつた。

夏希先輩が、慣れた口調で言う。

「ねえ、ちよつとフライングしすぎなんじやないかしら、二人とも」

「いいじやない、夏希ちゃん♥ 善は急げ、よ……んつ、ああ♥ こんなに気持ちいいコト、我慢するなんて体に毒なんだから♥」

「そうだよ、夏希先輩。わたしもずっと先生とヤリたくてヤリたくて仕方なかつたんだから

さ♥ はあ、はあ♥ 「

普段、お菓子を食べながら談笑を楽しむ場として使われていた生徒会室。そこが淫行のための場と化していた。まるで夢でも見てているかのような非日常感。

二人の行為に思わず魅入ってしまいながら、自然にかすれた言葉が漏れた。あまりにも卑猥な光景に感情が追いつかないでも、言葉が反射的に漏れたのだ。

「これが、パーティー……？」

「そうよ♥ 楽しんでいいてね、友梨佳さん。まずは一旦、この場の雰囲気に慣れてもらうのが手取り早いから♥ 英梨と美優先生のセックス、すぐ見応えがあると思わない？」
英梨は美優先生のシャツに手をかけて引張り、ボタンを乱暴に外した。いやん♥ と美優先生が声を上げ、いくつかのボタンが弾け飛んだが、一人ともそんなことは気にしてない。それほどお互いに夢中になっていた。

ブラジャーに包まれた豊満なバストが露わになる。英梨は待ちきれないと言わんばかりにブラジャーを急いでずらすと、大ぶりの乳首が現れる。

「先生のおっぱい、おっきい♥ 我慢できない……モミモミするね♥」

「いいわ、強く揉んで♥ あんつ、乱暴なくらい、つよくう♥」

英梨はぎゅつ、ぎゅつと音が出そうなくらい、そのボリュームたっぷりのおっぱいを強く揉んだ。それに反応して、たまらなそうに仰け反る美優先生。

二人が性欲をぶつけ合うようなセックス。まるで猫の交尾のようだった。女の子同士だけは思えないほどがつづいていたけど、英梨もやっぱり男の子じゃないから腰の振り方はどこか弱弱しいところがあつて、美優先生に覆いかぶさる姿もそれほど迫力があるわけではなく、どこか可愛らしさがあつた。

美優先生の乳首にしやぶりつきながら、恍惚とする英梨。

「じゅるう、たまんない、先生のおっぱい♥ ……ああ♥ イつちやう、イキそう、イクう——んぐうつ」

びくん、と体を震わせて、生々しい声をあげながら果てる英梨。美優先生のおっぱいに顔を埋めながら動かなくなってしまう。その腰だけがまだヒクヒクと動いていて、おまんこにナカだし射精を続けているのがわかる。

美優先生は倒れ込んできた英梨の頭をよしよしと撫でて、優しい言葉をかけている。
「気持ちよかつたね、英梨ちゃん♥ 最後までびゅーびゅーしちゃいなさい？ もちろん、まだまだこれからもっと気持ちよくなつてもらうけどね♥」

「あ、先生、最高じゃん……♥」

英梨が八重歯を覗かせた唇から涎を垂らして余韻に浸つていてのが見えた。
女同士で体を重ね、快楽を味わう二人。耽美的で甘ったるい光景に、わたしのちんぽはますます勃起を強めてしまった。

「大丈夫、英梨？ これからもっと頑張つてもらうんだからしつかりね♥」

「ふう……わかつてると、彩陽♥ もう三日くらいオナ禁してんだから、まだまだ余裕だ

つて♥

彩陽に背中を撫でられながら、英梨はまだまだ目の焦点が合わない感じだけど、体をなんとか起こした。

わたしはそれを呆気に取られて見ていたが、ふいに隣でわたしのちんぽをいじっていた夏希先輩が紗耶香の手を取る。

「友梨佳ちゃん、まだまだこの場の雰囲気に慣れてないみたいね。見せてあげましょ、紗耶香さん？」

「夏希先輩……♥」

紗耶香はふらふらと蜜に誘われる蝶のように、夏希先輩についていった。

夏希先輩は美優先生と同じように、机の上にお尻を乗せた。

何を始めるのか、と思うまでもなかつた。これから一人がしようとしていることはわかつてしまつた。

それでも目が離せない。続きを気になつて仕方ない。わたしはその場に棒立ちになつたまま、二人を見つめ続けた。

「さあ、紗耶香さん……いつも通り、楽しみましょ？」

「い、いいんですこと、夏希先輩？」

「わたしたち、これが初めてではないじやない♥」

「そうですわね……♥」

夏希先輩がスカートをめくりあげると、下着がじつとりと愛液に濡れて染みを作つていた。

紗耶香もスカートをまくらあげると、やたらエラの大きいちんぽをが反り立つっていた。同じ女子高生のはずなのに、股間についているものが違うだけでここまで印象が違うのかとやっぱり驚いた。

夏希先輩はとろんとした瞳で、紗耶香のことを見つめた。下着に指をかけて、するすると太ももから膝の方へと下ろしていく。

足を大きく開くと、股間の割れ目がくぱあ、と粘液の糸を引いている。その淫らな眺めだけで、わたしはちんぽがピクピクと震えた。

「さあ、紗耶香さんのそれを、わたしの中に頂戴？」

「何回もしてますわ……んっ♥」

ひとり、と亀頭を割れ目にくつつける紗耶香。何度か割れ目を撫でるように往復させたのち、そのままぬつぶりとちんぽを挿入していく。

ゆっくりと夏希先輩の中に入つていく紗耶香のちんぽが羨ましくて仕方なかつた。この間、彩陽といやらしいことをしたときも、紗耶香が挿入して美味しい思いをしていた。

わたしもこれをしたい——そう思いながら、勝手に手のひらが自分のちんぽをしげき始めた。

「おほおおつ♥ これすごい、たまらないですわあ♥」

「相変わらず、だらしない声ね♥ まだ半分くらいしか入っていないのにそんなに気持ちいいのかしら」

「気持ちいいです、夏希先輩♥ おちんぽ、溶けちやいそうですわあ……♥ んふうつ」

「ちゃんと最後まで、奥まで挿れてよ♥ そう、もつと……んつ♥」

ぴったりと紗耶香と夏希先輩の腰が密着して、ちんぽが全部入ってしまった。紗耶香はそこで動けなくなつて、夏希先輩の腰にしがみついたまま、悲鳴じみた声を上げる。

「ああっ♥ 夏希先輩の中、グニユグニユ動いてますうつ♥ わたくしのちんぽ、先輩のおまんこにしごかれて……ひいいつ♥」

「まだ射精しないでね、紗耶香さん♥ もつともつと楽しみましょう？ あんつ♥」

夏希先輩はぐりぐりと腰をすりつけるように、グラインドさせる。ヌチャヌチャと淫らな水音とともに、愛液が結合部から滴り落ちる。

紗耶香はたまらなそうな表情で震えながらも、少しづつ腰を降り始める。必死に射精を我慢しているのが痛いほど伝わってきた。

「あつぐう……♥ 夏希先輩、限界ですわあ……こんな風にナ力が蠢いて、反則ですわあっ！」

「ちんぽ、パンパンに膨れ上がってるわよ、紗耶香さん♥ もつと我慢して、わたしを強く突いて頂戴♥」

「ひいいつ♥ もう、もう駄目ですわあ♥ 頭がおかしくなりそうですわあ♥ イク、イクイクうつ——んぎいっ♥」

びゅー！ びゅるびゅるびゅるつ！ びゅくつ！

紗耶香は直前でちんぽを引き抜き、精液を勢いよく夏希先輩に放った。着衣したままだつた夏希先輩の胸元のリボンや、純白の制服に、黄色っぽい精液がとんで、こびりついた。背中をびくん、と反り返らせながら、ヒクヒクと痙攣した。何度も何度も、精液を発射するものが止まらない。しばらく出してようやく射精が収まつて、紗耶香はへなへなとその場にへたり込んだ。

熱い吐息とともに、涎が垂れてしまつてている。

「はあ、はあ♥ 夏希先輩のおまんこは、すぐすぎですわ……これ以上搾り取られたら、おかしくなつてしまいそう♥」

「わたし、まだイつてないのに♥」

そして、夏希先輩は潤んだ瞳をわたしに向けた。どの淫靡な眼差しに射止められて、見つめあうことをやめられなかつた。興奮が全身を駆け抜けて、心臓の鼓動が早くなつていく。

夏希先輩は、わたしに向かつて人差し指を突き出した。

「紗耶香さんの代わりにわたしを気持ちよくしてくれる人、この指とまれ♥」

「夏希先輩……♥」

「ありがとう、友梨佳さん♥ わたしをイかせる役目を任せるわね？ もちろん、ここが気持ちいいのは保証するわよ♥」

「頑張ります、夏希先輩♥」

その指を手のひらで包んだ私は、そのまま導かれるように至近距離へと寄った。

夏希先輩のもう一方の手のひらは、おまんこをくぱあ、と開いていた。紗耶香のおかげでぐじゅぐじゅにほぐされて、湯気が立つようなおまんこ。

愛液がダダ漏れで、発情を示すいやらしい匂いが漂つてくる。

夏希先輩は、スカートから突き出たわたしのちんぽの先端に触れた。

「おちんぽから、我慢汁がこんなに♥ ふえろつ……おいしい♥」

透明な液体を指で掬つて、口元へともつていく。

——そして、わたしはありえないものを見た。

夏希先輩が口を開き、舌を出して……信じられない長さまで伸びていた。指に何周か巻き付けられるほどの。

一瞬ぎょっとしたけれど、それがいやに煽情的で、わたしはついうつとりと見惚れてしまつていた。

桃色に色づく肉厚の舌——唾液でしつとりと濡れて、てらてらと光っている。

その舌でちんぽを舐められたり、キスをされたりしたら、一体どれだけ気持ちが良いのだろうか？ わたしたちふたなりを興奮させ、気持ちよくさせるためにあるようなその異様な舌に、悦びの戦慄が走った。

「ふふ、この舌すごいでしよう？ 紗耶香も最初は驚いていたわ♥ このなが〜い舌でいやらしいキス、してみる？」

「は、はい……♥」

「それじゃあ、おいで♥ 舌を出して……んはあ♥ れろお♥」

唇が触れたかと思うと、長い舌がゆっくりとわたしの口の周りを舐めまわし、絡みついてきた。夏希先輩の唾液の甘い匂いが、鼻腔に広がる。生温かいそれが這いまわるのは、ゾクゾクするほど鳥肌が立つた。

間近で息遣いが感じられて、熱い吐息が吹きかかる。

そしてついに、舌が唇の奥へと割り込んできた。

「んれえ……んあつ♥ んふう……♥」

ヌメヌメと、わたしの口内を蹂躪していく。歯を隅々まで舐められて、わたしの舌に巻き付いてぎゅっと締め付けてくる。

あまりにも異質な感触。わけのわからないほどの興奮で、ガチガチのちんぽの先から我慢汁がぴゅっと迸つた。

憧れの夏希先輩とキスが出来るだけで嬉しいのに、こんなに気持ちいいだなんて、反則だった。

わたしの舌をしごいていた、その長い舌から解放された時には、わたしは口から大量の唾液を溢れさせながらそれだけでイキそうになつていた。

「んはあつ……気持ちよかつた♥ もう、おちんぽ限界だね♥ ちゃんとわたしをイかせる

まで頑張つてね？」

「な、夏希しえんぱい……♥」

「うふ、舌で責めすぎたかしら。呂律、回つてないわよ？」

「はやく、挿れたいです……♥」

「いいわよ♥ そういうえば、友梨佳さんはまだ童貞なんでしょう？ 今日で晴れて童貞卒業ね。初めてのおまんこ、たあつぶり楽しんでね♥」

わたしはヒクヒク震えるちんぽを、夏希先輩のおまんこに近づける。

その時点で、おまんこがわたしのちんぽを求めるように、ぱつくりと口を開いて「咥えこもうとするかのようにうねうねと蠢き出した。

目を丸くするわたしに、夏希先輩はとろけた視線を向けながら言う。

「まず、指を挿れてごらん♥ わたしたちのおまんこ、すごいから♥」

言われる通り、わたしは指を、そつと夏希先輩の秘所へと伸ばす。

すると、夏希先輩のおまんこが独りでにぱつくりと口を広げ、わたしの指を待ち焦がれるようにヒダヒダを揺らした。驚きながらも指を触れ、ナカに挿入する。

ちゅぷん♥ わたしが入れたというより、粘液まみれのおまんこに指を飲み込まれていた。わたしは痺れたようになつてその蠢きに指を任せる。

勝手にナカに引き込まれていく。そして、グニユグニユ……♥ と、指を撫でこすり、締め付けるような異様な動き方。

引き抜いた指には、たっぷりと愛液がこびりついてヌラヌラと光っていた。

「さつき、紗耶香がすぐにイッちゃったのもわかるでしよう？」

「はい……すごくです♥」

「ね、とっても気持ちが良さそうでしよう？ 普通の女の子のおまんこの、何十倍も何百倍も、気持ちいいんだって♥ それじゃあ次は、指じやなくておちんぽを挿入してみよつか♥」

——まるでわたしたちふたりから精液を搾り取ることに特化したような女体だ。わたしは感動すら覚えながら、ちんぽをゆっくりと近づける。さつきと同じように蠢くおまんこは、むにゅむにゅとちんぽを求める軟体動物のようだ。

「はやくおいで♥ わたしも待ちきれないから、ね？」

「夏希先輩……ん、ふう♥ ……んひつ！」

ちんぽをその割れ目に触れ合わせた途端、ヒダヒダが勝手に絡みついてきて、あつという間にナカへと引きずり込まれてしまう。

にゅるにゅる……♥ ゆっくりと、ちんぽが吸い込まれるかのように飲み込まれていく。おまんこには自分で突き込むものだと思っていたのに、あまりにも想定外だった。亀頭がヒダヒダに覆われ、腰が勝手に、夏希先輩に近づいていく。

痺れるような鋭い快感で全身を貫かれるようだった。わたしは息が止まりそうになりながら、喘ぐように言った。

「あ、あつ……♥ なに、これえ……♥」

「友梨佳さんのぶつといちんぽが、入ってくるわあ……♥ こんなに引きずり込み甲斐があるちんぽ、久しぶり……♥」

「ちよつと待つてください、夏希先輩……ひやあつ♥」

自分でペースを整える暇もなく、ちんぽが一番奥まで到達してしまった。こつん、と亀頭が奥の壁に当たるのがわかつた。

根元まで咥えこまれてからが、本当の快楽の始まりだつた。

「それじやあ、始めるわね♥」

「え……？ んひいっ！♥」

さつき紗耶香が挿入した後動けなくなつた理由を、わたしは身をもつて知ることになった。

夏希先輩のおまんこが、指を咥えこませた時と同じ動きをした。

幾層にも連なつたヒダヒダが、一齊にちんぽをしごき立て始める。なでなで、ヌルヌルとこすられて、愛液をぐちやぐちやに塗りつけられる。

これまで感じたことのない、唯一無二の感触だつた。たとえようがない快楽が一気に押し寄せ、わたしは白目を剥きそうになつた。

「うふふふ、気持ちいいんでしよう♥ 童貞おちんぽ、ぱんっぱんに膨れ上がつて苦しそうよ♥」

「な、夏希先輩……だ、ダメです、これえ♥」

「まだ出し入れもしていらないのに音をあげるだなんて、情けないおちんぽね♥ わたしが動いてあげる♥」

そして、わたしはさらにこの上の快楽があることを思い知つた。

夏希先輩は、両足でわたしの腰をホールドする。

そしてゆっくりと腰を円を描くように動かし、蜜たっぷりの壺をぐりぐりと押し付けられる。

まるで天にでも昇つてしまつたかのようだつた。もう、性器がこすれあうぐちゅぐちゅと

いういやらしい音しか聞こえない。

頭の中をぐちやぐちやに搔き回されているかのような快楽の波に揉まれ、至上の悦びでちんぽが引き攣れそつだつた。

「あつ、あつ……♥ せ、先輩い……♥」

「んつ♥ わたしも友梨佳さんのガチガチちんぽ、気持ちいいよ♥」

「あく♥ もう、本当にダメえ……♥」

「ええ？ 友梨佳さんつたら、もうダメそうね……まあいいわ、本当にイクつていうのは、こういうことなのよ？ 本当の快楽つてものを味わつて♥」

「あぐう……♥ い、イク、イグイグう……♥ んんくつ！」

「びゅ～♥ びゅるるるう♥ びゅく～つ♥」

我慢するだとか、そういうことを考える前に、精液が迸っていた。

わたしは冗談抜きで気絶しそうになるのを感じた。目の前がチカチカして、くらくらつと視界が揺れる。おまんこにぎゅうぎゅうに締め付けられたまま、精液を搾り取られていく。

このままカラカラの出涸らしになるまで精液を吸われてしまふのではないかと思うほど射精は続いた。終わつたころには、わたしは全身にじつとりと汗をかいて、息も絶え絶えだつた。

わたしがちんぽを引き抜こうとしたけど、その時異変に気付いた。

締め付けるおまんこの力が強まって来ていた。カリ首がヒダヒダに引っかかつて、ちんぽを抜くことが出来ない……！

夏希先輩は、長い舌で自分の指を舐めながら、わたしをいやらしい目でじつとりと見つめていた。

「大丈夫、友梨佳さん？」一回目の射精は終わつたかしら」

「一回目……？」

「さつき、わたしのこといかせてくれるつて約束したわよね？ 先輩のわたしに嘘をついたのかしら、うふふ♥」

「な、夏希先輩……ひうつ♥」

またうねうねとおまんこが蠢きだして、わたしは敏感なイッたばかりのちんぽを襲う強すぎる刺激に悲鳴をあげた。

夏希先輩は、わたしの指に指を絡めて、恋人つなぎみたいにして、ますますわたしが逃げられないようにする。

「満足させて頂戴？」友梨佳さんのおちんぽ、気に入っちゃったの♥ もつとおまんこでしやぶらせてくれないと、逃がしてあげないから♥」

「そ、そんなあ……んひいつ♥」

「あんつ♥ このぶつといおちんぽ、気持ちよくてたまらないの……♥ もう少し味わわせてくれたらイケるから、それまで我慢してね♥」

「あつ……あ～♥ だ、ダメですっ、ああ～つ♥」

ヌルヌルと、愛液と精液の混じりあつたエキスの中で、しゃぶり尽くされる。

根元から先端まで、一寸の逃げ場もなく、ヒダヒダが絡みついていた。わたしはあまりの快感に爪先立つたまま、腰を前後に動かし始める。

ますます快感が強くなつて、わたしはたらたらと口の端から涎が零れているのに後から気付いた。

「いいわ、友梨佳さん♥ すつゞくだらしなくて可愛いお顔してる♥」

「せん……ぱい……♥ んああつ♥」

「タマタマの中、空っぽになるまで射精しようね♥ 友梨佳さんの精液はぜーんぶ、わたしのものよ♥ うふふつ」

ぎゅうっと玉が縮み上がって、最後の射精に備えて精子を無理やり絞り出し始める。

もう出ないはずなのに、夏希先輩に捕食されるかのように、ちんぽが勝手に精液を吐き出そうと震えていた。

そして、びくつ、びくつ！ とちんぽが痙攣し始める。わたしはその度にイッているのと同じ快楽が走り抜けるのを感じた。

どうやら、空撃ちしているらしかった。すっからかんなのに、ちんぽが射精せずにいるのとれなくて、精液すら出さずにイッているのだ。

「あっ！ ああ……♥」

精液が出せないのが、もどかしくて仕方ない。

腰はがつしりとホールドされ、おまんこはキツく締め付けてきている。

わたしは声にならない声をあげながら、夏希先輩にしがみつくことしかできない。その巨乳に顔を埋めて、夏希先輩の甘い匂いに包まれる。柔らかくて弾力のあるその感触は、これまで触った誰よりも大きくて、興奮がますます高まる。

「くうつ！ くは、あくく♥」

「あれえ、精液が出てないわよ♥ もつともっと頑張れるでしよう？」

「や、やばい、ですぅ……♥」

「頑張れ、友梨佳さん♥ 頑張れ♥」

よしよし、とわたしの頭を撫でる夏希先輩をイかせるために、わたしはなよなよとした腰振りのスピードを、なんとか上げていく。強烈な快感でどうにかなりそうになつたけど、効果はあるようだつた。

「あんつ♥ あつ♥ いいじやない、もっと、もっと突いて♥」

顔を上げると、すっかり蕩けた表情をしていた。そのまま顔を近づけて、また舌を絡めてキスを始めてしまう。

「ん、んちゅう……れろお♥」
「んぐ……ぐうつ♥」

ちんぽも口の中も、全部夏希先輩に攻めこまれて、本当に逃げ場がなくなつてしまつた。わたしは再び腰の奥から込み上げてくるものを感じて、最後のスパートをかける。もはや力の入らない腰に鞭を入れる。

舌を絡め合わせ、目の前で気持ちが良さそうに微笑む夏希先輩を見ながら、わたしは最後の絶頂を迎えた。

「くうつ♥ イク、イフ……んぐうつ♥」

「友梨佳さん、わたしもイクわつ♥ あつ、あくくつ♥」
「びゅーつ♥ びゅくびゅくつ♥ びゅるるつ♥」

わたしは尿道を勢いよく流れる精液が、夏希先輩のナカに注ぎ込まれるのを感じながら、ようやくおまんこがわなわなと震え、ほぐれてわたしのちんぽを解放するのを感じた。ちゅぽん、と引っ張り抜くと、ねとねとの愛液にまみれて糸を引き、亀頭が真っ赤になつ

てしまっている。

その場で尻もちをついて、余韻に浸る。

割れ目からとろとろと精液と愛液の混じった得体のしれないものが溢れ出して、とろとろと机に滴つた。

夏希先輩は、ヒクヒクと全身を震わせながら、脱力して動かなくなっていた。

「あつ……はあ……っ♥ 友梨佳さんの、すゞく気持ちよかつたわ……♥」

「わたしも気がおかしくなりそうでした、夏希先輩……♥」

「ふう……久しぶりに、クラクラするエッチが出来たわ……♥」

夏希先輩は焦点のあつていなかつた瞳に光を灯して、体を起こす。そして、わたしにつっこりと微笑んだ。

「童貞さんのくせに、上手だつたわね♥ また今度、二人きりで会いましょう？ その時は、この特別な舌で友梨佳さんのおちんぽを舐めしやぶつてあげる♥」

あの長い舌を絡められたら、一体どんな快楽が待ち受けているのだろう？

その言葉を聞いて嬉しくなりながらも、わたしは何かがおかしいことに気付いた。

そう、夏希先輩の後ろ、生徒会室のドアが開いているのだ。わたしが入つてきた時には閉めたはずだった。

誰かが、見ている……？ そしてわたしは、扉の陰から、一人の女の子がこちらを覗いているのを見た。

よく見覚えのある顔——その子は、妹の香奈だった。

〈香奈 四章〉

わたしは保健室を出て、気付けば生徒会室を目指していた。

そこに行けば、気持ちよくしてもらえる……その期待が勝手にわたしを動かしていた。英梨先輩は言つた。美優先生が待つてゐるから、行かないと——どうして、生徒会室なのだ

ろう。わたしはどんどん露もやがかかり始めている頭で考える。

美優先生は生徒会の顧問だから、生徒会室を自由に使える……そのことが関係あるのかかもしれない。

その他にも、もっと深い理由があるんじやないか。そんな気がしてならなかつた。

例えば、生徒会そのものに対する疑いの念——わたしは未だに、生徒会が何をやつている組織なのか、ちゃんとした話を聞いたことがなかつた。

英梨先輩は、パーティーをするとも言つていた。それは一体、どういうパーティーなのか。なんとなく、想像がつき始めていた。

階段を上り終わり、生徒会室に近づいていくと、わずかに開いた扉から明らかに嬌声が響いていた。

「くっつ！ くは、あくくく♥」

「あれえ、精液が出てないわよ♥ もつともつと頑張れるでしよう？」

「や、やばい、ですう……♥」

「頑張れ、友梨佳さん♥ 頑張れ♥」

いやらしい女の子たちの声に、わたしまで体の奥がじいんとなつてしまつた。

以前のように、逃げ出したいとは思わなかつた。お腹の中でじんわりと広がる英梨の精液が、わたしの身体を火照らせていく。

これではいけないとわかつてゐるのに、生徒会室で行われているだろう淫行に期待してしまつていた。

身体の疼きを鎮めてくれるのではないか……その思いがわたしを衝き動かす。

まるで示し合わされたかのようには、周囲に生徒の影はない。わたしはこつそりと、生徒会室を覗き見た。

そこは想像したことないほど淫らな空間だつた。女の子たちが、体を重ねあつて快楽に身をゆだねてゐる。美優先生に英梨先輩がおそいかつて腰を振つてゐる隣で、わたしのよく知る人が、嬌声をあげていた。

「くっつ♥ イク、イツ……んぐうう♥」

「友梨佳さん、わたしもイクわっ♥ あつ、あくくつ♥」

わたしは、英梨先輩に言つられて覚悟してゐた。それでも、目の当たりにしたときの衝撃は

ただならないものだつた。

お姉ちゃんが、生徒会長の夏希先輩にのしかかって、へこへこと腰を振つていた。いやらしい声を上げて、涎を垂らしながら悦楽に浸る様子は、堕落を体現しているかのようだつた。もとのお姉ちゃんに戻つて欲しい。一瞬悲しみがよぎつたけど、今のはどうもおかしくなつていた。

——気持ちが良さそう。

ついつい、お姉ちゃんが感じているはずだろう快感を思い描いて、股間が濡れ始めていた。夢中になつて、夏希先輩の大事などから、ちゅぽん、とちんぽを引っ張りぬく姿を見つめてしまふ。

「あっ……はあ……っ♥ 友梨佳さんの、すぐ気持ちよかつたわ……♥」
「わたしも気がおかしくなりそうでした、夏希先輩……♥」

「ふう……久しぶりに、クラクラするエッチが出来たわ……♥」

夏希先輩は、秘所からとろとろと白濁液を溢れ出させて、身体をだらりと横たえている。あのちんぽを突き込まれるのは、そんなに気持ちが良いんだろうか？ あんなに醜いものを突き込まれるだなんて、以前なら考えられなかつたのに、好奇心がわたしの心をくすぐる。

「香奈ちゃん……？ どうして……？」

ふいに近づいてきたのは、詩織だつた。

振り返つたわたしと目が合うと、気負うものがあるように視線をそらした。わたしがあれだけ、彩陽先輩や美優先生と離れるように言つたのに、それを破つてこの場所に来てしまつたのだから、その気持ちはよく分かつた。

しかし、わたしがこの部屋の前にいる理由は、英梨先輩たちを止めることがじゃない。自分もその中に入つてしまいたいという欲求に抗いきれないせいなのだ。

「詩織ちゃん、ごめんね……わたしが、間違つてたのかも」

「香奈ちゃん……？」

「わたし、英梨先輩にいやらしいことされて……気持ちよくなつちゃつたの。詩織ちゃんが、ちんぽを触られた時みたいに。今も、お腹の奥がじんじん疼いて、我慢できない……いつも、こんな感じだつたんだね」

詩織はあまりに驚いて、声も出ない様子だつた。

てつくり、あれだけ他人に我慢するように言つておいてこの体たらくなのだから、怒られてもおかしくないと思つていた。

だから、詩織がほつとしたような顔でこう言つた時は、その優しさについ頬が緩んでしまつた。

「なんだ……よかつたあ。わかつてもらえたんだね、わたしの気持ち」
「詩織……許してくれるの？」

「え？ 香奈ちゃんは何も悪いこと、してないよ……？」

「詩織い……♥」

わたしは、ついつい詩織に抱き着いてしまう。相変わらず困ったように、詩織はもがいた。

「やめてよ、香奈ちゃん……ちんぽ、勃つちやうからあ♥」

「あつ、ごめんね」

「ちんぽ、気持ち悪くないの……？」

「うん……なんでかわからないけど、あんまり嫌な感じがしないの」

腰のあたりに当たる詩織のちんぽの固い感触に、むしろ愛おしささえ感じていた。詩織にちんぽが生えてきて以来、初めて詩織と一緒にいて穏やかな気持ちになることが出来ていた。

「よかつたあ……わたし、香奈ちゃんが離れて行つちやう気がしてたの。でもそんなことなかつたんだね」

「当たり前じやん。それじやあ、入ろうか」

わたしは詩織と一緒に、生徒会室を再び覗き込む。

そして、わたしはついに、お姉ちゃんと目が合ってしまった。

お姉ちゃんが驚きに目を見開いてわたしを見ていた。もう、逃げ出しても意味がない。何より、さつきから股間が疼いて仕方なかった。割れ目から溢れ出した愛液が下着を濡らして、ぐじゅぐじゅだ。

このいやらしい空間に自分も染まってしまいたい。わたしは誘い込まれるように淫行部屋と化した生徒会室に足を踏み入れてしまった。

「あれえ、詩織ちゃんに、香奈ちゃんじやん。ムラムラして、来ちやつたの？」

ちようど行為に一区切りを付けていた英梨先輩が、わたしを見て、八重歯を見せて笑った。

「ち、ちがう……そんなんじや……」

「それじやあ、どうしてここにいるのかなう？ ふふ♥ とりあえず一人ともこつちに来なよ」

わたしは、なぜだか英梨先輩の言うことに従つてしまつた。こんなにも嫌悪感でいっぱいなのに、どこかで期待している身体が、勝手に従つてしまうのだ。

「えつ、ちょっと香奈ちゃん、いつの間に英梨の言いなりになつたの？ ふふ♥」

彩陽先輩におかしそうに笑われて、わたしは恥ずかしくて顔から火が出そうだった。わたしは、英梨先輩の言いなりになつてているんだ……快感を狂おしいほどに求めているという自覚が、わたしを吹っ切れさせていく。

もう、後戻りできないんだ。わたしは英梨先輩の精液を飲まされてしまつた。英梨先輩にこのまま、犯されちゃうんだ……あの、黒っぽい使い込まれたちんぽを突き込まれて。

英梨先輩は、ポケットから何か錠剤のようなものが入つた小包みを取り出し、彩陽先輩に呼び掛ける。

「ねえねえ彩陽、いつものアレ、美優先生と保健室に行つてもらつてきたよ♥」

「ありがと、英梨♥」

彩陽先輩は、その錠剤を数粒もらって、口の中に放り込んだ。

普段からその錠剤を使っているみたいだけど、一体なんのだろうか。気になつて声に出していた。

「それは……？」

「これのこと？ そつか、香奈ちゃんはまだ知らないんだ。驚かないでね。凜先生特製の媚薬だよ♥ わたしたちの精液が主な原料なんだって。ウケるよね？」

こんなにムラムラして仕方なくなるんだから、その錠剤の効果もてきめんに違いない。

ほんのり頬を朱色に染めた彩陽先輩と英梨先輩が、わたしに向かい合う。

「それじやあ、詩織ちゃんに、香奈ちゃん……今日はまずわたしたちが相手してあげる♥ 「先輩たちが気持ちいいコト教えてあげるんだから感謝しなよ？」

詩織には彩陽先輩が、わたしには英梨先輩が近づく。八重歯を見せてニヤリとしながら、

英梨先輩は言つた。

「香奈ちゃん、自分からわたしに体を委ねるだなんて、今後に期待しちやうよ？ わたしが、香奈ちゃんのこと、おちんぽがないと生活できないエッチな子に調教してあげる♥」

「英梨せん、ぱい……ん、ちゅうっ」

唇をついばまれ、舌を強引にねじ込まれる。欲望に任せたキスかと思いつや、ねつとりとわたしの舌に絡みついてきて、わたしは頭がますますぼおつとしてきてしまう。

涎の糸を引きながらキスを終えたときには、わたしは立つていられなくなつて英梨先輩にもたれかかってしまっていた。そのまま、促されるまま生徒会室のカーペットの上に横になつてしまふ。

わたしの上にのしかかってくる英梨先輩の熱を感じながら、わたしは隣で行われている、彩陽先輩と詩織の情事に目をやつた。この二人も床に倒れ込んでいた。スカートを捲り上げられた詩織の股間に、彩陽先輩がぱくりと食いついている。

「あ、彩陽先輩い……いひいつ♥ いきなりしやぶらないでくださいい♥」「じゅるるう♥ ほらほら、頑張つておちんちん、もっと大きくして？」

「む、無理ですう♥ むりい……！」あ、ああ……♥」

詩織は相変わらずちちやなちんぽをぱんぱんに膨れ上がらせて、彩陽の口淫に耐えていた。たまらなそうな表情で、天井を遠い目で見上げる。

わたしの視線に気がつくと、えへへ、といやらしく歪んだ微笑みを返してくれた。わたしも同じように、自分の頬が快樂で歪むのを感じながら、笑い返す。

「香奈ちゃんのうぶな処女おまんこ、いただきつ……♥」

英梨先輩がわたしのスカートをめぐりあげ、下着を脱がせるのをどこか遠くに感じた。このままでいいんだ……わたしは、このまま英梨先輩に犯されて、処女を奪われるんだ。そのことがむしろ嬉しいような気すらし始めていた。ようやく、わたしはつまらない恥じらいや意地から解放されて、自由になれる。

「そろそろ、おしゃぶりはおしまい。詩織ちゃんも童貞だったよね？」

「そ、そうです……♥あの、今日は、やつと……してくれる約束でしたよね？」

「そんなにわたしのおまんこ欲しいんだ？　しようがないなあ、先輩の気持ちいいおまん

こ、いっぱい味わうんだよ♥」

「はい……♥」

彩陽先輩は、スカートの中に手を入れて下着を脱いで、おまんこを詩織に見せつける。詩織のちんぽがひくひくとなつて、興奮しているのが見て取れた。

「す、すごい……♥これが、彩陽先輩の……♥」

「ピンク色で、てらてら愛液で濡れるのがわかるでしょ？　ナカにちんぽ挿れると、ヌルヌルなヒダヒダが絡みついてきて、気持ちよくてどうにかなっちゃうよ♥」

「挿れたい、です……♥挿れても、いいですか……♥」

「すぐに射精しちゃダメだからね？　気持ちよくつても、ちゃんと我慢するんだよ♥　いい？」

「精子、出しません……♥だから、おまんこに挿入させてください……♥」

「ふふ、しようがないなあ……考へてみれば、水泳部のシャワー室で気持ちよくしてあげて以来、ずっと本番セックスしてなかつたんだね、わたしたち♥」

彩陽先輩は、横になつた詩織のちんぽを上に向け、腰を下ろしていく。騎乗位で、詩織のふたなり童貞を奪うつもりなのだ。

おまんこの割れ目にちんぽをくつづけて、ぬりゅぬりゅと擦りつけた後、見せつけるようにゆっくりと彩陽先輩は詩織の短小ちんぽを飲み込んでいく。

「んっ……入つてきた、詩織ちゃんのちんぽ♥　亀頭が入つて……根元まで入つちやつたね

」

「ああっ……♥　彩陽、せん、ぱいい……♥　こ、これすごいです……！」

「どう、生まれて初めて味わうおまんこの感触は？」

「きもち、よすぎで……♥　あうう♥」

詩織は、ぴつたりとおまんこを密着させられながら、舌を突き出して喘いだ。よほど気持ちが良いのだろう、馬乗りになつた彩陽先輩の太ももを掴んだ手に力が入つている。

「もつとよくしてあげる♥　おまんこセックスがやめられなくなつちやうように、ね♥」

彩陽先輩は、ゆっくりと腰を揺する。ぐちゅ、ぐちゅと音を立てて小さなちんぽが蹂躪され、詩織は逃れられない快感に身悶えた。

「さて、そろそろ香奈ちゃんにも、初めてのちんぽ快楽、教えてあげる♥」

「英梨先輩……ゆっくり、お願ひしますう……♥」

「えー？　この初々しいおまんこに、早く挿れたくてたまらないんだから、少し気がはやるのも許して♥」

「ちよ、ちよっと待……あ、ああん♥」

くちゅり、といういやらしい音。

わたしは、割れ目にちんぽが押し付けられただけで、ビリビリと電気のような快感が走るのを感じた。このまま突き込まれたらどうなってしまうのだろう——そう想像するより先に、英梨先輩は、一気に肉竿を突き刺してきた。

隠しようのない痛みが、どうしようもなく身体に響いた。めりめりと、自分の中に固いそれが入ってくる。肉のヒダを搔き分けて、体の奥へと迫つてくるのが分かる。

「あ、ああ……♥ 英梨先輩のが、わたしのナカに……♥」

「ふう……♥ や、やばいよ、香奈ちゃんのキツキツまんこ、たまんない♥ 腰が勝手に動

いちやう♥」

英梨先輩は、はあ、はあ♥ と息を荒げながら、わたしのナカに侵入してくる。

奥に亀頭の先端がこつんと当たる。自分でも触れたことのない、大事なところに英梨先輩の肉棒が押し付けられている。悦びに近い、なんともいえない感情に襲われながら、わたしは痛みが少しずつ引いていくのが分かった。

その代わりに、ヒダをこすられる快感が、ゾクゾクと込み上げてくる。

「あっ、ああん……♥ 英梨先輩い……♥」

「わたしのちんぽ、気持ちいいでしょ？ これからもっと動かしてあげる♥」

本来ならこんなに早く破瓜の痛みが鎮まるはずがない。そのくらいの知識はあった。むしかしたら、飲み込んだ例のアレのせいで、快楽が何倍にも増幅されて感じやすくなっているのかもしれないかった。

英梨先輩がずちゅ、ずちゅ、と愛液を撥ねさせながら、腰を前後に動かし始める。

これまで得たのことのない、とろけるような甘美な感覚。きゅつ、と自分の膣が締まるのが自分でもわかった。そこを強引にエラの張ったカリ首に逆撫でられて、悶えるほどの気持ちよさだった。甲高い声をあげてしまう。

「はあ……♥ そんなに、動いたら……あつ、あつ♥」

「香奈ちゃんのおまんこ、ひたひた吸い付いてきて最高～♥ ああんつ、ずっとこうしてた
い……♥」

英梨先輩は、胸をふるふると揺らして腰振りを加速させながら、わたしの胸に手を当てて揉みしだく。獣のような激しい揉み方だったけど、わたしは感じてしまつて、乳首がビンビンに立ちあがつてしまつた。

全身が情事の熱に覆われ、思考が遠のいていく。犯される快感を味わうメスになつていく。ぼおつとしてただただちんぽを受け入れるわたしに、英梨先輩は顔を近づけた。そのまま、唇を合わせてキスを始める。

「んちゅ……んつんう♥ れろお……うはあ♥」

「香奈ちゃん……可愛いよ、香奈ちゃん♥ ちゅるう……はう♥」

女の子の甘い吐息とともに、ヌメる舌がわたしの舌に絡みつく。何もかもが気持ちよくて、どうにかなりそうだった。

そして、その淫らな多幸感の中で、何かが近づいてくるのが分かつた。これ以上こらえき

れない、限界が。絶頂の予感が、ひたひたと少しづつ迫っていた。

「ああ……♥ 英梨先輩、わたし……♥」

「わたしもイキそう♥ 一緒に行こう、香奈ちゃん、はあ……♥」

英梨先輩がますます腰を激しく打ち付けてきて、わたしの快感は最高潮を迎えた。一番奥に思い切り突き入れてきて、わたしはその一撃で果ててしまった。

「あつ〜〜♥ イク……ううつ♥」

「もうダメ、出る出る出るつ♥ 精液めちゃくちやナカ出しするう♥ ……んぐつ！」

びゅーつ♥ びゅるーつ♥ びゅるる♥

英梨先輩の液体が、体の奥に噴きかけられて、浸透してくるのが分かった。一番大事なところを穢されていく……気持ちよさが、そんな嫌なイメージを上書きしていくた。

——セックスって、すっごく気持ちいい……♥

わたしの中に、新たな引き出しが生まれた。ふたなりの女の子と体を重ねる悦び。これまでいないものだとレッテルを貼っていたものが、実は素晴らしいものだと思い知つて、これまでの自分を反省した。何ごとも体験してみないと、本当のところはわからない。

わたしは心の底から、英梨先輩とのセックスに満足していた。

「……あつ♥ 精液絞られるう♥ ……ふう、香奈ちゃんのナカ、最高だったよ♥」

「英梨先輩……英梨先輩のちんぽも、すっごくよかったです♥」

「これで、香奈ちゃんもすっかりわたしたちの仲間入りじやん♥ やつとこの学園に馴染めそうだね。改めて、ふたなり女学園へようこそ♥」

英梨先輩の言葉に、わたしはふにやふにやに蕩けているだろう顔に淫らな笑顔を浮かべた。

その隣で、騎乗位で逆レイプ状態の詩織が、涎を垂らしながら一際高い嬌声をあげた。

「あつ、ああつ♥ ダメです、精液出ちやいますう♥ ああん……イクうつ♥」

「もうイッちゃうの？ ちんぱちっちやいんだから、もっと頑張つてよ♥ ……あ、ナカで出てる♥」

詩織が、びくんと体を震わせて、彩陽先輩のナカに精液を放つていた。

わたしは、その手のひらに自分の手のひらを重ねる。詩織は、とろんとした目でわたしを見た。

「気持ちはよかつたね、詩織……♥」

「うん、香奈ちゃん……♥」

お互いで、満たされた表情のまま、わたしは手を握り合い指を絡めあつた。詩織とこれまでなく、心の深いところで通じ合っている気がした。

こうして、わたしは犯される快楽を知ることになった。

わたしはキーボードを叩く手を止め、椅子から立ち上がった。PCの電源を落とし、伸び

をする。やつと書き終わった、という達成感でいっぱいになつた。

文章を書くのは好きだけど、ここまで長いものを作ったるとなると、話は少し変わつてくる。さすがに嫌になる時はあつたし、面倒になつて放り出したくなつた。それでも、最後まで書ききつた時の解放感のような心地よさを今知つて、また執筆してみてもいいかな、と思つたりした。

——丁度いい時間。これから詩織ちゃんに会うのが楽しみ。

ここまで描いたのは過去のわたしの物語だ。今のわたしは、さつき書いた小説に登場した香奈とはもう変わつてしまつている。

快樂を求める女生徒に。ちんぽを突き込まれて、ふたなりの女の子たちにだらしなくしだれかかる淫らなメスに。この淫靡な慣習の蔓延る白百合女学園の一員に。

わたしは、この女学園の風習に取り込まれた。女学園で、犯された女の子たちの列に、わたくしも加わつて闇の中へ堕ちてしまった。

これでよかつたのだ。だつて、あんなに気持ちいいことは、この学園じやなきや味わえなかつたから◆

ゾクゾクと湧き上がる興奮に身を躍らせながら、わたしは詩織のもとへと向かつた。

〈香奈 五章〉

わたしはすでに何度か、詩織と体を重ねていた。

あの日、生徒会室で先輩たちに犯されて以来、ルームメイトのわたしたちは頻繁にセックスをしていた。同じ部屋にふたりの女の子がいる……そのことは、抗えない誘惑だつた。

もう一度、おまんこのナカにあの気持ちのいいちんぽを突き込んで欲しい。下腹部をどろ火で炙られるように、欲求がふつふつと湧き上がってきて、勝手に股間が濡れてしまうのだ。

「詩織……♥ 今日も楽しみだなあ」

わたしは図書室を出て、自分の部屋に戻りながら、印刷した原稿を読み返していた。

図書館のPCで執筆したものをコピー機で紙に写して持ってきたのだ。これを書き始めてからずっと、詩織に何度か見せて、一緒に推敲したり、間違っている部分を直してもらつたりしていた。

詩織は、わたしの書いたこの白百合女学園の実態を描いた小説を、楽しんで読んでくれていた。卑猥な表現に顔を赤らめながらも、熱心に読み進めてくれていた。

ついに完成したこの原稿を読んでどんな反応をしてくれるか、わくわくしてしまう。自分の部屋に戻ると、寝間着姿の詩織が出迎えてくれた。

「香奈ちゃん、おかえり♥ また夜遅くまで小説書いてたの？」

「ただいま♥ うん……でもね、ついに完成したの！ タイトルも決まつたよ。〈ふたり女学園へようこそ〉っていうの。読んで読んでっ」

「すごーい…………こんなにいっぱい書いたんだね。香奈ちゃんはもう立派な小説家だよ」「そんなことないってば」

わたしたちは布団の上で二人並んで座る。

紙の束を渡すと、詩織は期待通り目をキラキラさせて読み始めた。この間見せたときは、わたしが保健室で英梨先輩に口を犯されたところまでしか書き上げていなかつた。その後の、わたしと詩織が生徒会室で先輩たちに犯されるシーンは、初めて見せることになる。「この場面、すごくえっち…………♥ わたしたち、こんなにいやらしいこと、口走つてたつける…………？ わ、わたしこんなに情けないこと言つてないよ？」

「言つてたよ、この時詩織は童貞ふたりだったじやん。彩陽先輩に騎乗位で責められて、もうダメ～って感じだつたよ？」

「は、恥ずかしい…………わたし、女の子たちに責められてばっかりなんだね…………この原稿、みんなに見せたりしないよね？」

「うーん、わたしもそのこと、考えてたんだけど……やっぱり読んでもらわないと意味ないじゃん。だから、本当に仲の良い人たちには見せようと思つてるよ」「やめてよお…………わたし、こんなにだらしない子じやないよお…………」

「ふふっ、大丈夫だよ。登場する女の子たち全員のだらしないところ、たっぷり書き込んでるから。これが全部本当のことなんだから、この学園はすぐいよね」

わたしは改めて自分の書いたものに目を通してみる。実は、詩織に言われて大きな訂正をした部分があつた。作品の雰囲気に関わる文章そのものの大幅な訂正。「ハートマーク、詩織に言われて付けてみてよかつた。これがあるとやっぱり、雰囲気が出るね♥」

「なんだか静かで淡々とした感じになっちゃってたから……」

「可愛くなつたし、ラブラブな感じも出たもんね。お手柄だよ、詩織♥」
わたしはいつも通り、ふざけて詩織に抱き着く。頬を擦りつけると、詩織がやめてよお、と言いながら軽くもがく。

以前だつたらこれはただのおふざけだつた。でも今は別の意味があつた。

このハグは、詩織とセックスしてもいいよ、という意思表示だ。ムラムラしているときは、わざと詩織に体をくつづけて、こうやつて誘惑するのだ。

詩織はムズムズと腰を揺らして、わたしの目をじつとりと見つめる。これはわたしに欲情している証だ。どうやら、今日は詩織もムラムラしているみたいで、その股間でゆっくりと突起が起き上がるのが見えた。

「詩織……♥」

「香奈ちゃん……んつ♥」

わたしは詩織の唇に、自分の唇をくつづける。お互いの吐息が混じりあう。

はむはむ、と唇をついばみあうキスから始まって、わたしは詩織の唇を割つて舌を入れていく。

「んん……ちゅうう……♥」

「んはあ……れろお……♥ 香奈ちや、んう♥」

わたしは同時に、服の中に手を入れて詩織のちんぽを手のひらで包む。そのミニサイズのちんぽの先端は、すでに我慢汁でヌルヌルとしていた。

シコシコとじごいてあげると、詩織はたまらなそうな声を上げて、ちんぽをヒクヒクとさせれる。

「香奈ちゃん……あつ♥ そこ、気持ちいいい……もつとじごいてつ♥」

「詩織の声可愛いよ♥ もつとちんぽがビンビンになるまでコいてあげる♥」

キスをやめて目を開くと、詩織はすっかり蕩けた表情で、わたしの手コキの快感に浸つている。部屋の中に詩織の喘ぎ声が響いて、わたしたちの部屋は妖しい雰囲気に包まれていく。わたしは詩織のはだけた寝間着から覗いた女体にキスをしていく。首筋、胸元、乳首、お腹……少しづつ、下半身の方へと降りていく。

これは、彩陽先輩に教わった、ふたりりの子を興奮させるテクニックだ。あれ以来、わたしたちは先輩たちと例のパーティーや何度も重ねて、色々なセックスを体験していた。先輩たちはやっぱりセックスが上手で、わたしたちも追い付かなきやいけない、と日々努力して

いる。

「詩織、ちんぽ、舐めていい？」

「香奈ちゃん……いいよ♥ どんどん、いやらしいこと上手になつていくね……」

「もつと詩織に気持ちよくなつてもらうためだもん。……ちゅつ、じゅるつ♥」

わたしは詩織の小ぶりのちんぽに、音を立ててキスをして、その先端に舌を這わせる。見せつけるように舌を出して、ねつとりと唾液をまぶしていく。ちんぽが涎まみれになるまで、しつこくしつこくなぶりまわすのだ。詩織はちんぽをヒクヒクさせて喜んでくれた。

「ああっ♥ 香奈ちゃん上手……。ろろろするの、気持ちいいよお♥」

「詩織のちんぽ、ちっちゃいから、簡単に咥えこめちゃう♥ あむ……んん♥」

「あんまりちつちやいつて言わないでお……あつ♥ そんなにしゃぶりつかれたらあ……」

…
♥

詩織のちんぽを根元まで口に含んでわたしはストローを吸うように吸引する。詩織はひやああ♥ と情けない声をあげて、もう絶頂が近いのが、ちんぽが口の中でピクピク震えるのが止まらない。

「まだ精液出さないでよ、詩織♥ 先輩たちにも早漏つてからかわれてるじやん。もつと頑張れるふたなりにならないと♥」

「わ、わかつてるよお……♥ でも、我慢しようとしても、勝手に出ちやうんだもん♥ あつ、イクイクうつ♥ ああ～♥」

ぴゅる♥ ぴゅつぴゅつ♥

小さなちんぽが可愛らしく脈打つて、わずかな精液が口内に飛び出してくる。ねばねばとして、口の中にこびりつくような舌触り。もう慣れっこだった。わたしはその独特の味を楽しんで、ごくりと飲み込む。

詩織は眉を寄せてぼんやりと射精の快感に浸つていたけど、わたしが髪を撫でてあげると、わたしにふにやりとした笑みを見せる。

「香奈ちゃんのフェラ、また上手になつてる……」
「英梨先輩にいっぱい練習させられるからね。詩織は感じやすいから、すぐイかせてあげられるの♥」

「それで、香奈ちゃん……その、本番セックス、してもいい？」

詩織は、我慢が出来なさそうに、射精したばかりのちんぽを反り返らせている。

ちようどわたしも、飲み込んだ精液がお腹の中に浸透してくるのを感じていたところだつた。煮え返るような快楽への欲求。おまんこに何か突っ込まないとどうにかなつてしまいそうな、強烈な誘惑が訪れていた。

わたしは着ていた制服を、下半身だけ脱いでいく。スカートと下着を下ろして、お尻を丸出しにしてしまう。

詩織の視線がねつとりとわたしのお尻にまとわりつくのを感じた。わたしの身体を求めてくれている——そのことが悦びとして感じられた。

わたしは改めて、詩織がふたなりになつてくれてよかつた、と心の底から思った。これは呪いなんかじやなく、贈り物なのだ。わたしと詩織が、もつと深いところで繋がるための。

「香奈ちゃん……挿れていい？」

「詩織、来ていいよ。一番深いところで、繫がろう♥」

わたしは、体にしなを作つて、お尻をくいと詩織の方に突き出す。後背位でつながるために、お尻を少し揺らして、誘惑する。

割れ目から、いやらしい女の匂いが広がつていくのがわかる。それを嗅いで、詩織が興奮しているのもわたしにはわかる。

はやくちんぽが欲しい——トロトロと、愛液が割れ目から溢れ出して布団に滴るのが感じられた。ちんぽが肉ヒダを搔き分けてくるのが待ち遠しくて仕方なくて、愛液が次から次へと湧き出してしまうのだ。

詩織がわたしのお尻を両手でつかんで、ちんぽが割れ目にあてがわれると、体の中を歓喜が駆け回る。

「いくよ、香奈ちゃん……んう♥」

「はやく挿れて……あんっ♥」

じゅぶり。結合部から透明な汁を溢れさせながら、肉棒が侵入していく。

小さなちんぽでも、挿入の快感はひとしおだ。何より、詩織が自分の中に入つて、気持ちよくなつてくれているというのが一番うれしかった。

根元まで挿入しても、詩織のちんぽは奥まで届かない。中途半端な位置で、わたしのおまんこに締め付けられてヒクヒクしている。

わたしは詩織を振り返つて、媚びるように甘えた声を出す。

「詩織、動いて……挿き回してくれないと、気持ちよくないよ♥」

「ふう、ふう♥ そんな、香奈ちゃん……ちよつと待つてよお……ああっ♥」

ぱちゅん、ぱちゅん、と詩織が腰を前後に揺すりだす。

ヒダヒダが亀頭で逆撫でられて、浅いところまで戻つたかと思うと、再びナカをえぐつてくる。たまらない快感が訪れて、わたしはあられのない嬌声をあげた。口の端から涎が垂れていても気にならないほど、心地がいい。

「ああっ♥ 詩織、いいよお♥ もつと突いて♥ もつともつと激しく♥」

「そんなの、無理だよお♥ 香奈ちゃんのおまんこ、気持ちいい……すぐ出ちやいそう

「いいよ♥ ナカ出しして♥ いっぱいびゅるびゅるって、わたしのおまんこに精液注ぎ込んで♥」

「香奈ちゃん、香奈ちゃん……ああ、イクう♥ いっぱいお漏らしちゃう……んくう

「♥ ぴゅつ♥ ぴゅるぴゅるつ♥

体の一番奥に、詩織の精液がかかるのがわかる。熱くてどろどろの汁で、満たされていく。

それは至福の瞬間だった。気持ちが良いのはもちろん、詩織と一つになつた、と実感できるのだ。セックスを繰り返すたび、わたしは詩織と何の隔たりもなく繋がつているという感覺を得ていた。

親友を超えた存在。恋人と言つてもいいのかも知れなかつた。詩織はわたしにとつてかけがえのない存在になつていていた。

わたしの腰にしがみついて射精して、詩織は仰け反つて震えていた。

「ああっ……◆ 香奈ちゃんのおまんこ、すごい締め付け……◆」

「詩織、もっと精液出せるよね……？ わたし、まだイつてないよ……◆」

わたしはいやらしく腰をくねらせて、詩織とどこまでも深くつながるために、詩織に微笑んだ――

ふたなりの詩織と、毎晩のように体を交わらせる学園生活。

わたしはそんな淫らな生活を送つて、これまでのどんな時より幸せを感じていた。充実していると自信をもつて言えた。

詩織がいれば他に何もいらない。そんな風に実感できる日がくるだなんて、思いもよらなかつた。

何にも代えがたい、ふたなりの子を夢中にさせる女としての悦び。それがこんなにも甘い蜜だなんて。

詩織も同様に、セックスより素晴らしいものはないと思つてゐるみたいだつた。わたしとの約束を何よりも大事にしてくれるし、頑張つていた水泳も、今はそれほど力を入れていなさい。

水泳部には、彩陽先輩を中心とした又いてくれる先輩たちや、同じようにふたなりになつてしまつた同級生たちがいて、練習はそこそこに、淫らな特訓をしてもらつてゐる。

この学園のどの組織も、部活動、スポーツを頑張るというのは建前で、実態はセックスを楽しむ同好会と化している。顧問の先生たちもそれに加わつてゐるのだから、もうどうしようもなかつた。それが、わたしがこの学園のあらゆる組織を調べた結果の、あまりにもだらしない実態だつた。

でも、わたしはそれがしようがないのはよくわかっている。だつてこんなにも気持ちいいんだから。これは最近知つたのだけど、ふたなりの女の子たちの精液は媚薬効果と例の特殊作用があるだけで、子供を作る能力がない。いくらでも生セックスやナカ出しし放題なのだから、歯止めが効くはずもなかつた。

そして、わたしにも変化が訪れていた。

――おまんこを、自分の意思で動かせるようになつてきたのだ。

凜先生や夏希先輩の身体に現れたのと同じ、精液を大量に摂取した女の子に現れる特質。ふたなりの女の子たちから精液を搾り取るために進化したとしか考えられない女体の変化。

嫌な気持ちは微塵もない。わたしも、この女学園の一員になれているのだと、嬉しくなつた。これで、ふたりの女の子たちをもつと悦ばせることが出来る。そうすれば、もつとたくさんふたりの女の子たちから求められることになるはずだ。

来年、わたしたちは新しい一年生たちを迎えることになる。そうしたらわたしは先輩だ。一つ下の女の子たちのうち、一定数がふたりになることになる。その子たちにちんぽ射精の悦びを教えて、この女学園の淫らな風習を伝えていかなければならない。

これは脈々と受け継がれてきた伝統なのだ。絶えさせることなく、これからも引き継いでいかなければならない。彩陽先輩たちがそうしたように。

それは今度こそ、わたしたちの役目なのだ。わたしはその時に備えて、もつといやらしくふたりの女の子たちを誘惑して、気持ちよくさせることが出来るよう、日々頑張っている。目標として、思い浮かぶ光景があった。ある言葉を新入生に囁くこと。それは英梨先輩からかけられた言葉だ。わたしも、その言葉を新入生に受け継いでいきたい。

わたしの女体で童貞を卒業したふたりの女の子に、こう言うのだ。

——ふたり女学園へ、ようこそ。

〈友梨佳 五章〉

生徒会室でのパーティーの後、暗くなつた道を、わたしは夏希先輩と一人で寮への帰り道を歩いていた。

さつきまで繰り広げられていた、甘々でだらしないことこの上ない、女の子たちとのパーティは、一生頭から離れることはない気がする。

美優先生と、英梨の激しいセックス。夏希先輩が紗耶香の精液を搾り取るセックス。

そして、夏希先輩との初めての童貞卒業セックス。優しく導いてくれて、わたし至上最高のセックスを経験できたと思う。

あの長い舌を絡ませるキス。ぐにゅぐにゅと動くおまんこ。どうしてそんなすごい身体を持つているのかわからないけど、とにかくあんなに気持ちが良いセックスが出来るだなんて、夏希先輩はすごい。

「夏希先輩……、今日はありがとうございました、これからももっと一緒にいさせてください♥」

「もちろん、あなたを生徒会に招いて本当に良かったと思ってるわ。童貞ふたりとは思えないくらいよかつたわよ、……突然だけど、今夜、あなたの部屋は空いてるかしら？」

「え……？」

「まだ、少しやり足りないのよ、うずうずが收まりきつてないの。ダメかしら？」

あれだけセックスしたのに、まだ満足していないだなんて。驚いたけど、わたしはそれよりも嬉しくて仕方なかつた。

また夏希先輩といやらしいことが出来る。あんなことやこんなことが妄想に広がつて、クラクラしてしまう。たとえば、その大きなおっぱいで気持ちよくしてもらつたり、長い舌でフェラしてもらつたり……想像の種は事欠かない。

何より、夏希先輩に、相手として選ばれているのがたまらない悦びだつた。好きな人に好いてもらえるのはこんなに幸せなことだつたのか、と思い知らされた。

「もちろん、大丈夫です！ 実はわたしの部屋は一人部屋で……」

「そうだったの。夜は寂しいんじやない？ これから夜は定期的に、友梨佳さんの部屋に行くのもいいかもしねれないわね♥」

「夏希せんぱあい……♥」

わたしは早くセックスしたくて仕方なくて、早足で二年生の部屋がある階まで上つて、夏希先輩を自分の部屋へと案内した。

扉を開けて、夏希先輩を自分の部屋に連れ込むのは、なんだか不思議な満足感があつた。あの憧れの先輩に、わたしの部屋を訪れてもらつていい。

少し散らかつてていたからどういう反応をされるか不安だつたけど、杞憂に終わつた。

「綺麗なお部屋ね♥ 女の子らしいお部屋」

「ありがとうございます♥」

「さて……それじゃあ、部屋の鍵を閉めて？ もう一回友梨佳さんでのつかいおちんぽを見せて♥」

「はい♥」

夏希先輩の方から、小声でそう囁いてくる。わたしは従わないわけもなく、慌てて鍵を閉める。

「友梨佳さんには、まだわたしのおっぱいを味わってもらつてなかつたと思うの。おっぱいは好き？」

「大好きです……♥」

以前はそんなことはなかつたのに、ふたりになつてからというものの、わたしは大きなおっぱいを見るだけで気分が良くなるようになつていた。

夏希先輩の、Hカップはあろうかという大きなおっぱいは、わたしの羨望の的だつた。あのおっぱいを触つて、乳首舐めしやぶつて、ちんぽを挟んで欲しい……そんな妄想を、これまで何度も何度したことだろう。

「さあ、そこに座つて。おちんぽを出しなさい♥」

夏希先輩は、シャツの前のボタンを自ら外していく。もともとわずかに透けて見えていた、ピンク色のブラジャーが露わになる。たぶたぶの巨乳を下から支え、はち切れそうになつているブラジャー。

わたしはそれに視線を吸い寄せられながら、下着を脱いで椅子に座つた。スカートを押し上げる勃起ちんぽの形が、夏希先輩に見られてしまう。

スカートをめくつて、夏希先輩の目の前にさらすと、くんくんと匂いを嗅がれて、微笑まれた。

「うふふ、相変わらずぶつといおちんぽ♥ そんなに固くしちやつて、興奮しすぎなんじやない？」

「夏希先輩のおっぱい、すごくエッチで……♥」

「ありがとう♥ 生おっぱい見せてあげる♥」

そして、夏希先輩はブラジャーを外し、床へ放り投げた。

たぶん、という音がしてきそうなほどボリュームたっぷりのおっぱいが、目の前で揺れていた。こんなに綺麗なおっぱいは見たことがないと思つた。

見惚れていると、夏希先輩はわたしの手をとつて、胸に当ててくれた。下から持ち上げるように揉むと、信じられないくらい柔らかいのに、ちゃんと押し返してくる弾力もある。触つてているだけで癒された。

「んふふ、おっぱいの感触、気持ちいい？」

「たまらないです……♥」

「そういう顔してるわね♥ 乳首も吸つてみる？ 実はわたし、おっぱいも特別なのよ♥」

特別、という言葉の意味を考えながら、わたしは言われるがまま、おっぱいを揉みながら、乳首に吸い付くと、その先端からとろとろと液体が染み出していくのがわかつた。

母乳が出ているのだ。わたしは夢中になつてそれを吸つてしまつた。おいしい……甘くてとうけるような味わい。夏希先輩の優しさをそのまま表したような、お乳の味だつた。

「あんっ♥ 強く吸いすぎよ♥」

「おいしいです……♥ もつと吸わせてください♥」

「しようがないわね♥ このお乳はね、最近出るようになつてきたの。ふたりの女の子とセックஸばっかりしてたら、体が変化していくのよ。この長い舌と同じ。この女学園の呪いみたいなものね。わたしは呪いなんかじゃなくて、祝福だと思つてるけどね♦」

わたしは夏希先輩の説明を聞き流しながら、おっぱいを揉むのと吸うので忙しかつた。わたしがいつまでも乳首を吸つてることにしひれを切らしたのか、夏希先輩がふいにちんぽをぎゅっと握つた。わたしは乳首から口を離して喘いでしまう。

「あんっ♥ 先輩、いきなりい……♥」

「そろそろわたしにも、友梨佳さんのおちんぽ、味わわせてよ♥ こんなに大きくて、太くて、立派なんだから、美味しいに決まってるわ♥」

そして、夏希先輩はわたしの太ももの間に身を寄せて、べろお、と舌を出した。

例の異様に長い舌。それが、ゆっくりとわたしのちんぽに近づいてくる。

亀頭をぺろぺろと舐められると、それだけでたまらない快感が押し寄せる。唾液でヌルついた温かいべろで擦られる気持ちよさ。

そして、次第に夏希先輩の舌が、わたしのちんぽに絡みついてくる。

最初はカリ首に一周、巻き付くように舌が絡んできた。こんな感触は初めて味わうものだつた。蒸氣の立つ舌が蛇のように、わたしのちんぽを余すことなく締め付けてくる。

「あっ♥ 先輩、そんなの反則ですう……♥」

「んれろお……♥ んふふ、れろえろお……♥」

そして、夏希先輩はさらに舌を伸ばした。

もう半周、今度は根元の方まで絡みついてくる。そしてその舌がひとりでに動き始めた。まるで独立した生き物のようだつた。唾液を泡立たせながら、にゅるにゅるとわたしのちんぽを舌だけでじごいてくるのだ。

あんまりにも異質だつたけど、ありえないくらい気持ちがよくて、わたしは一瞬声も出なかつた。

「……な、なにこれえ♥ すごいですう、夏希先輩……♥」

「これ、すっごく練習したんだからね♥ んつ……れろお♥」

ビクビク震えるちんぽを、舌が受け止めている。

一旦舌を離すと、夏希先輩の舌は喉のあたりまで垂れさがつていた。ぽたぽたと涎を垂らすさまは、たまらない卑猥さだった。もはやその舌は、物を味わうための器官ではなく、わたくしたちふたりを誘惑する性器にしか見えなかつた。

垂れた唾液は、おっぱいの谷間に流れ、ヌルヌルと泡を立てている。準備は整っていた。

「今日は特別フルコースにしてあげる◆ おっぱいの谷間にちんぽを近づけて……◆」

「わかりました……♥」

言われるがまま、ちんぽを突き出した。

わたしのちんぽは、今日のパーティーで成長したようで、さらに大きくなつていて。いつの間にか二十センチはありそうなほどの、巨大なちんぽ。外国人のちんぽの平均サイズまで超えるほどの大きさにまでなつていて、自分でも驚いてしまう。

「どうしたら、こんなに立派になるのかしら♥ この学園でも、トップクラスの大きさだと思うわ◆」

「褒めてもらつて嬉しいです……♥」

「たぶん、これ以上は大きくならないと思うけどね。おまんこに入らなくなつちやうから♥ あなたの身体も、女の子を悦ばせるために進化してるのでこと。わたしの舌と同じ◆」

そして、夏希先輩はそのHカップおっぱいでわたしのちんぽを挟んだ。

たっぷりのボリュームで、包み込まれる。たまらない感触とビジュアルに、興奮して仕方なかつた。

わたしのちんぽが大きいせいで、先端が谷間から飛び出してしまつていた。夏希先輩は体を上下に動かして、ちんぽ全体をおっぱいでこすつてくれた。

「ああく♥ 夏希先輩のおっぱい、すごいですう◆ ずっと挟んでもらいたいですう◆」

「おっぱいの中で、おちんぽビクビクしてるわよ◆ そろそろイキそうなのかしら♥」

「もう、限界が来そうです、夏希先輩……♥」

「それなら、わたしも搾り取つてあげる◆ んれえ……◆」

そして、夏希先輩は下を向いて、谷間から飛び出したわたしのちんぽの亀頭を、その長い舌で舐め始めた。

ヌルヌルと柔らかいおっぱいでこすられて、谷間から出たかと思うと、舌でフタをされる。逃げ場のない快感で、わたしはおかしくなりそつた。これまでかとばかりに、舌で亀頭をにゅるにゅると刺激されて、わたしは絶頂を迎えた。

「あつ♥ ああく♥ 夏希先輩、イキますう◆わたし、イキますう——んぐうつ♥」

びゅー◆ びゅるるる◆ びゅつ◆

精液が放たれて、いくらかは舌で受け止められたけど、残りが夏希先輩の顔へとかかっていく。

白濁液で汚していくのは、ゾクゾクとする支配感があつて、ますます射精の勢いが増してしまつた。

ぱたぱたと精液を垂らしながら、夏希先輩は淫靡に微笑んだ。

「んふ、おいしい♥ 友梨佳さん、気持ちよく出せた？ わたしの身体、すごいでしょうもつともつと、犯したくなつてこない？」

「夏希先輩……♥ お願ひしますう……◆」

わたしは、夏希先輩に今日何度目かの挿入をする用意は出来ていた。ちんぽは全く萎えることなく、そそり立っていた。

そうして、その晩は一晩中、夏希先輩とセックスしてしまった。

翌日の朝起きると、夏希先輩はわたしたちの体液で汚れた部屋の掃除や、片付けをしてくれていて、わたしはずつとこの人と一緒にいたいと思わされてしまった。

「早く起きないと遅刻するわよ、友梨佳さん♥」

「ごめんなさい……♥」

わたしは幸せに包まれながら、朝の準備をした。シャワーを浴びて、体に染みついた淫行の匂いを落として、クラスへと向かう。

初めてのおまんこセックスを味わった次の日は、普段何気なく過ごしていたこの女学園が違つたものに見えた。何もかも鮮やかに、輝いて見える。これから的生活が楽しみでならない。生徒会の女の子たちと何度もセックスしたかたし、生徒会に限らず色んな女の子たちとセックスして行きたかった。

なんて楽しい学園生活なんだろう……♥

ふたなりになつてよかつた、と改めて思った。

それから、わたしはこの女学園で許される限り、女の子たちを犯していくた。

生徒会の女の子たちだけではなく、彩陽に紹介してもらって、水泳部の女の子たちを犯したり、他の部活の女の子たちにも手を出していった。

毎日のように、女の子たちとセックスする生活。わたしは良いモノを持っているおかげで、どんな女の子でも悦ばせることが出来た。

そして、ついにわたしは先生たちにも手を出し始めた。生徒たちとセックスする、淫らな女教師たち。彼女たちも、この女学園に染まって淫乱そのものと化していた。

今日は保健室で、あの先生たちとセックスの約束をしていた。

「楽しみだなあ……♥ ふふっ♥」

わたしは四限の授業が終わって、抑えきれない性欲を抱えながら呟いた。机の下で、相変わらずスカートはテントを張っている。

そこに、廊下からわたしの姿を覗いている人影がいることに気付く。
妹の香奈だ。何か用事があるのだろうかと思つて、目線を合わせて首をかしげると、わたしのところに駆け寄ってきた。

「お姉ちゃん、やつと書きあがつたよ！ この学園の小説なの」

香奈はやたらかさばる紙の束を抱えていて、驚いてしまう。昔から、香奈は小説を読んだ

り文章を書いたりするのが好きだったけど、いつの間に小説なんて書き始めていたんだろ
う。

「どうしたの、これ……？」

「最近あつたことを書いたの。私小説っていうのかな？　主人公はわたし。お姉ちゃんもち
ょろっと出てくるから読んでよ」

渡された紙に記された文字の多さに、わたしは目が回りそうになつた。もともと、わたし
は小説なんて読まないタイプだ。どちらかという漫画が好きで、活字を読み続けると疲
れてしまう。

「す、すごいね……これ何文字あるの？　っていうかこれ、もしかしてエッチな小説……？」
さらりと目を通しただけで、会話文にハートマークが入っているのがわかつた。女の子たち
が喘いで、セックスしている場面が描かれている。

香奈はうつ、と言葉に詰まって、でもすぐになんだか攻撃的に言い返してきた。

「……エ、エッチな小説書いちやダメなの？　官能小説家って、けつこう女性の人も多いつ
て知ってる？」

「へえ、そなんでも香奈、こういう趣味だったの？」
「こういう趣味って？　百合？　それともふたなり？」

「なんていうか、すっごいエッチだし……もしかして、これ書きながら、興奮したりして
るの？　オナニーとかしたり？」

「そんなこと、お姉ちゃんには関係ないでしょ！　わたしのことはいいから、この小説読ん
でみてよ」

「でも、わたし官能小説とか、あんまり読まないし……エッチなことは十分やつてるし
どうせリアルでセックスするほうが楽しいじゃん♥」

わたしはそう言うと、香奈は急に癪癢を起こした。

「お姉ちゃんひどい！　決めつけないで！　ちゃんと最後まで読んでから感想言つてよ。
小説つてそういうものなんだから」

「ふ、ふうん……わかった、後で読んでみるね」

「どうせ読む気ないでしょ……別にいいもん、詩織は面白かったって言つてくれたから」
ぶりぶり怒った様子で、教室の外へ出て行つてしまつた。香奈が一生懸命書いた小説を、
小馬鹿にするようなことを言つたから、怒られちやつたのだろうか……小説なんて書いた
ことがないから、ちつとも気持ちがわからない。

香奈とは、生徒会室のパーテイー会場で出くわしてからも、大して関係性は変わつてない。
香奈もこの女子園に取り込まれちゃつたんだなあと思いつつも、そのことに関して何も会
話していなかつた。

わたしがふたりになつたことも分かつてゐるみたいだけど、香奈はそのことには触れて
こない。姉妹でムラムラするなんてことはなかつたし、これまで通り、仲が良いのか悪いの
か、よくわからない状態が続いていくんだろうなと思う。

「友梨佳さん、その紙の束はどうしたんですの？」

トイレから戻ってきた、隣の席の紗耶香が話しかけてきて、わたしは説明してあげた。

「うちの妹が、エッチな小説書いたから、読んでーって見せてきたんだけどさ……」

とりあえず、保健室に行くまでの間、紗耶香と一緒に最初の一ページ目から読み始めてみた。

香奈が自分のことを語ることから始まるその小説は「ふたり女学園へようこそ」というタイトルだった。最初はエッチなことに興味のなかつた、というか毛嫌いしていた香奈が、いやらしいことにハマっていく過程を描いているみたいだ。

赤裸々なその内容に、読んでいるこっちがちょっと恥ずかしくなってしまう。

「よく書けていますわね……香奈ちゃん、文才があるのではなくて？」

「そうなのかな？ よくわかんないけど、ちょっと興味湧いてきたかも」

相変わらず理屈っぽい香奈らしい文体で語られる、香奈自身の気持ち。わたしはここまで香奈の気持ちを深く考えたことがなかつたから、こうして初めて触れてみて新鮮な気分でもあつた。そして、妙にエッチな場面の描写がねちっこくて、ドキドキしてしまつたのも正直なところだった。

「そうそう、先生たちとの約束があるんだつた。とりあえず行かなくちゃ。じゃあね、紗耶香」

「わたし、続きが気になりますわ……一旦、この小説を借りてもよろしくて？」

「いいよ。持つといて」

わたしは適当にそれを紗耶香に渡して、教室を出ようとすると、声をかけられた。

その声の主は、今日の相手の一人だった。グラビアアイドルのような容姿——わたしのクラスの担任の、あの先生が書類を持っていないほうの手をわたしに振つていた。

「あら、友梨佳さんじやない◆ ちょうどわたしも向かうところよ。一緒に行きましょう◆」

保健室に向かう道すがら、わたしはドキドキしてしまつっていた。

美優先生は本当に美人だ。今日はいつもと装いが違つて、ぴつたりと体のラインが出る桃色のセーターを身に着けている。おっぱいの大きさがこれでもかと強調されて、わたしの視線は勝手にそつちに向かつてしまつた。

髪もゆるく巻いてセットしてくれているし、なんだか大人の色気がむんむんと漂つてしまつている気がしてならない。

妙に女の色香がしてくる理由は、すぐに明らかになつた。

「わたし、今日のことずっと楽しみにしてたのよ◆ 友梨佳さん、最近巷で有名じやない」

「有名！？ そなんですか？」

「そうよ。とっても気持ちいいセックスしてくれるって評判なの◆ 今日もわたし期待して、気合を入れてきちゃつたんだから」

どうやら、わたしのためにしつかりおめかししてくれたみたいだった。そこまで期待されるとちょっと不安になるけど、わたしも多少は自信があった。これまでセックストてきた女の子たちの大半は、わたしの大きなちんぽを突き込まれて、よがり狂うくらいに乱れてしまつていた。

「そんなにハードル上げないでくださいよ♥ わたしだって、先生たちとそういうこと出来るつてだけで嬉しいんですから」

「そうね、わたしたちは、限られたふたりの子としか、そういうことしないものね。友梨佳さんは選ばれたのよ？ うふふ」

わたしはこの女学園でもなかなか出来ない体験をこれからさせてもらうのだと思うと、ますます興奮してきてしまう。

保健室にたどり着き、ドアを開けると、もう全員が揃っていた。

「友梨佳ちゃん、来てくれてありがとう♥ 美優も一緒だつたのね」

「あ、友梨佳。おはよ」

そこにいたのは、いつも通り白衣を着こなした凛先生ともう一人——英梨だった。八重歯を出してやりと笑う。

わたしは生徒会でのパーティーに何度か呼ばれる中で、英梨ともふたり同士仲良くなつた。彩陽のルームメイトということで、一緒に遊ぶ機会も多くて、今ではすっかり友達だ。英梨はどの部活にも所属していないくせに、どの部活にも顔を出す子だった。あらゆる場所に出没して、セックスして帰っていく。ふたりの子たちの中でも一番のやり手と言つて間違いなかつた。

とにかく、テクニシャンだという話だつた。色んな女の子たちを夢中にし、手籠めにしているらしい。

だから、先生たちのお眼鏡に適つているというのも納得がいった。

「さて、早速始めましょう？ うふ♥」

凛先生がドアに鍵を閉めて、保健室は貸切状態になつた。わたしは、スカートの下でちんぽが勃起しすぎて痛いくらいだつた。

英梨は、先生たちとセックスするのは初めてではないらしく、すっかり慣れた口調で言った。

「それで、今日はどんなことしてくれるの？ 美優先生に、凛先生♥」

「もちろん、たっぷり満足させてあげるわ♥ 一人のために色々と用意したんだから♥ ね、凛？」

「そうよ、二人とも♥ 他の若い女の子たちじゃ満足できないようにしてあげるわ♥」

巨乳揃いの先生二人が、くすぐすと顔を見合させて笑つた。

英梨はやりとして、わたしに言う。その股間では、まぎれもなくちんぽがスカートを押し上げて勃起していた。

「先生たち、いつもすごいことしてくれるから、期待しておいて損はないよ、友梨佳。この間はわざわざコスプレしてくれたもんね」

「なんだ。興奮してきちゃつた……♥」

わたしは、「ぐりと唾を飲む。一体、どんなことを用意してくれていると言うのだろうか。

わたしは、「ぐりと唾を飲む。一体、どんなことを用意してくれていると言ふのだろうか。

そして、先生たちの普段の様子から想像できないくらい、淫らなプレイが始まった。わたしは服をほぼ脱いで、ほとんど裸になっていた。

英梨とわたしは首のリボンと、スカートだけしか着ていないし、美優先生は下半身を黒いストッキングで包んだだけで、凛先生はガーターベルトで二ソックスを吊っているだけだ。

中途半端に服を残した、セックスするための装い。その格好だけで卑猥なのに、持ち出したアイテムがもっと卑猥だった。

凛先生が机の下から出したのは、透明な液体の入った、大きな容器だった。
「じゃーん、ぬるぬるローション♥ 一人はローションプレイ、したことあるかしら?」「ないです」「あるわけないじやん?」

「だよね♥ 今日は特別に、先生たちがこれを使って、二人のちんぽをビンビンに興奮させてあげる♥」

今、洗面器に大量のローションが準備されて、わたしと英梨は、ベッドに座らされていた。ちんぽが勃起してヒクヒク震えている。

上半身の服を全て脱いだ先生たちは、おっぱいを揺らしながら、わたしたちに近づいてきた。

わたしの前には、美優先生が来てくれた。英梨には、凛先生が相手をするみたいだ。

英梨は早くも我慢が出来ないのか、ローションを使う前に、凛先生とキスを始めている。

「先生、我慢できない……ちゅう♥」

「英梨ちゃんは積極的なんだからあ……♥ ん、ちゅう♥」

ねつとりとした二人のキスを見ているだけで、興奮してしまう。凛先生は、舌をねろりと伸ばしたかと思うと、その異様に長い舌で英梨の口の中を蹂躪していく。英梨のちんぽが反応して、ぴくぴくしているのがわかる。

「ちょっと、友梨佳さんはわたしのことを見て？ わたしたちもキスしようか♥」

「はい……んつ♥」

美優先生との、舌を絡めるディープキス。近づくだけで、いい匂いが漂ってきてたまらない。

舌を絡め合わせていると、くちゅくちゅと唾液を送り込まれて、それだけで夢見心地になってしまう。

たっぷりと美優先生の唾液を味わい終えると、頭がぼんやりってきて、もう気持ちよくな

りたいという思いで頭がいっぱいだ。

美優先生も、蕩けた表情で、わたしを見つめ、洗面器に用意されたローションを手に取つた。

「んはあつ……それじやあ、塗つていくわね♥ 友梨佳さんも手伝つて♥」

「分かりました……♥」

両手にヌルヌルのローションをとつて、自分の胸に塗りたくつていく美優先生。見せつけるようなその動きがいやらしくて、それを見ているだけでたまらない気持ちになつてくる。わたしはローションまみれの手で、美優先生のおっぱいに触る。Gカップのふにふにのおっぱいの触り心地は最高だった。ペチャペチャと音を立てて、光沢でてらてらと光るくらいにまで塗り込んだ。

「こつちも塗つて……あんつ♥」

美優先生はローションのついたわたしの手を、太ももや股間に持つていく。

わたしはドキドキしながら、ストッキングを着けたままの太ももや、股間にも塗りたくつていく。女体がぬるぬるにまみれて、エッチなことこの上なかつた。もともとスタイル抜群の身体が、ますます魅力的になつていく。

美優先生のお尻は丸くて柔らかくてたまらなかつた。ストッキング越しに触る、この薄い生地の触り心地が何とも言えない。

そのままおまんこをローションを潤滑液にして撫でると、甘い声で誘惑してきた。

「友梨佳さん、もっと触つて……♥ ほら、ナカからも、ヌルヌルなのが出てくるの、わかるでしよう？ ふふ」

「美優先生……♥」

割れ目から湧き出す愛液。美優先生が興奮している証拠だ。

どうやら、事前に例の凛先生特性の媚薬も服用しているみたいだつた。わたしのちんぽを、物欲しそうな目で見て舌なめずりした。

「おつきなちんぽ……♥ おっぱいで挟むわね♥」

「お願ひします……あつ♥」

美優先生は、てらてらとローションで光るたわわなおっぱいで、わたしのちんぽを挟んだ。むにゅうう、と柔らかいおっぱいが押し付けられる感触。ローションで限りなく摩擦はゼロになつていて、普通のパイズリとは全然違う感触だ。すべすべして、ヌメヌメして、とにかく心地いい。

「すごい……♥ これ、すごいです、美優先生♥」

「楽しんでね、友梨佳さん……うふふ♥」

美優先生が体を動かすと、おっぱいがぬるり、ぬるり、とどこまでも優しくちんぽをしげきあげていく。その独特な快感がたまらなかつた。もしかしたら、ローションプレイにハマってしまうかもしれない。

喘ぐ」としかできずに、ただただ美優先生の愛撫を受け止めていると、隣で同じことをし

ていた凜先生が声をかけてくる。

「そうだ美優、折角だから二人で、一人の子を相手してあげない？」

「いいわね♥　わたしたち二人に責められるだなんて、とつても贅沢♥」

「まずは友梨佳ちゃん、あなたを天国にご招待♥」

そして、ベッドに座つたわたしのところに、全身をヌルヌルにした先生たちが群がつた。

二人して、ローションまみれの巨乳をたゆんだゆんと揺らしながら、わたしのちんぽに狙いを定める。

「もしかして……美優先生、凜先生？」

「もちろん、それよ♥」

「お姉さんたちのダブルパイズりだなんて、ふたなり冥利に尽きるんじゃないかしら♥」

先生たちのGカップおっぱいが、両側からちんぽを挟んだ。

ふによんっ ♥ 四つのぱんぱんに膨らませた水風船のようなふくらみが、ちんぽを中心にもむにゅむにゅと押し付けられる。ぬちやああ、とぬめりにぬめつた感触。

美優先生と凜先生が一緒になつて胸を動かすと、これまでではありえなかつたような気持ちよさだつた。

「ああく♥　おちんぽがおっぱいに溺れてます……◆」

「わたしたちのおっぱい、気持ちいいでしよう？」

「どこに当たつても柔らかいんじやない？　うふふ♥」

「そんな風にされたら、わたし……もうイッちゃいそうです、あんっ♥」

どんどん射精の予感が近づいてきて、長い間もちそうになかつた。わたしは至高の時間を目いっぱい楽しむために、限界まで我慢する。

それでも、精液が込み上げてくるのは止まらない。

「ほら、イッちゃいなさい、友梨佳さん♥」

「我慢しなくていいんだから♥　力を抜いて、びゅくつてしまやいましょう？」

「あ、美優先生、凜先生、わたし……イクうつ♥　——ああつ！」

びゅーつ♥　びゅるるつ♥　びゅー♥

精液が迸つて、二人のおっぱいにトロトロとかかつてしまふ。そのままローションと混じりあって、ぬるぬると半透明の液体になつた。

わたしが射精したのを見て、二人は嬉しそうにくすぐすと笑う。

「いっぱい出たわね、友梨佳さん♥　でもおちんちんはガチガチよ？　まだまだ期待できそうね♥」

二人はわたしがベッドに倒れ込んで余韻に浸ると、先生達は英梨のところに群がつた。

わたしは英梨がイクまで、ぼんやりとその姿を眺めていた。

「ああ♥　やばい、先生たち、それたまんない……♥　イクイクイクつ♥」

美優先生も凜先生も、ノリノリでダブルパイズりしてあげていた。おっぱいがお互いに入れ違つて、英梨を追い詰めていく。英梨はちんぽをびくびくさせて、最高に気持ちが良さそうに頬を緩めて喘いでいたかと思うと、身体をびくっと震わせて精液を噴き出した。

だいぶたくさんの中出しをしていたけど、さすがは英梨で、わずかに余韻に浸っていたかと思うと、すぐに気を取り戻した。

そして、まだまだ性欲を持て余している先生達は、もう我慢がならないのか、そのままわたくたちを誘惑してくる。

「ねえ、そろそろわたしたちのナカに突き込みたくない？」

「先生達のおまんこ、とっても気持ちいいわよ♥ こんなにトロトロにはぐれて、食べ頃なんだから♥」

先生達は、床にぐつたりと横になつて、少女と言うには熟れた女体を、わたしたちの前にさらけ出す。

四つん這いになつて、お尻をわたしたちの方に突き出した。ローションまみれのお尻が、物欲しそうにわずかに揺れている。

さつき射精したというのに、襲い掛かるのを我慢できないほど魅惑的なお尻だった。凜先生の、ガーターベルトが着いたセクシーな下半身。美優先生の、ストッキングに覆われて肉感の増した下半身。どちらも甲乙つけがたい。

英梨が凜先生のお尻に引き寄せられて、ちんぽを挿入せずにいられないのを横目に見ながら、わたしは美優先生の黒い薄生地覆われたお尻を揉んだ。

そして、ストッキングをゆっくりと下ろしていく。真っ白でつるつるな光沢を帯びたお尻が、少しづつ出てくるのは、まるで何かの果実の皮を剥いているような気分にさせられた。その中にくるまれた甘い実を味わうために、太もものところまで下ろしてしまふ。お尻の中心では、ピンク色の割れ目がぐじゅぐじゅに熟れて、いやらしい匂いを漂わせていた。欲求をどこまでも焚きつけるそのお尻を掴みながら、わたしはちんぽをひとりとくつつけた。「友梨佳さん、それえ♥ ぶつといのを突き刺して……♥ んああつ♥」

ぐじゅり、とガチガチに固まつたちんぽをヌルヌルのおまんこに押し込んでいく。

精液を求めるように、ひたひたと吸い付いてきて、たまらない感触だった。そのまま一番奥まで挿入すると、美優先生は眉を寄せた媚びるような表情で、わたしのちんぽを賛美した。「あんつ♥ とっても大きくて熱うい……♥ こんなに大きいなんて、おまんこの穴が広がつちやうわあ♥」

「ふう……♥ 美優、せんせい……♥」

「大人のお姉さんのおまんこの、具合はいかが？ たまらないかしら♥」「いっぱい甘やかってきて、溶けちゃいそうですう♥」

わたしは、早くも射精しそうになりながらも、先生のおまんこをたっぷり味わいながら腰を振つた。ぱちゅん、ぱちゅんと愛液が撥ねる音。

突き込むときは緩んで、抜くときにはきゅうっと締め付けてくる。抜き差しするたびに、

ゾワゾワと快楽の波が押し寄せる。

隣で、英梨も同じように凛先生を犯していた。後ろからガンガン突いて、涎を垂らしながら感じ切っている。

「凛先生、凛先生……♥ これ、やつぱり気がおかしくなりそうですう♥ はあつ♥」

「気が狂うまでおちんぽじゅぱじゅぱしてちようだい♥ あはあ……気持ちいいわあ♥」

「あく♥ ダメです、これ……♥ 中毒になりそうです、凛先生のおまんこ♥ ふああ♥」

「いいわよ、また今度セックスしましよう? 英梨ちゃんの腰振り、くせになるわね……♥

あんつ♥」

わたしも美優先生のおまんこでしきたでられて、イキそうになつてると、凛先生がまた声をかけてくる。

「そろそろ、おちんぽとおまんこ、交代しない? わたし、友梨佳ちゃんのおちんぽも味わいたいの♥」

「いいわね、凛♥ それじやあ、一旦ペア交代ね?」

先生たちは、はあ♥ はあ♥ と甘い息を吐きながら、そんな会話を交わす。

わたしは、ぬるり、とちんぽを引き抜いて、凛先生のもとにふらふらと向かった。もう美優先生のおまんこであれだけ気持ちよくさせてもらったのに、まだまだ凛先生のおまんこに突き込めると思うとたまらない。

「んふう……♥ 英梨ちゃんにじゅぱじゅぱ突かれて、もうトロけちゃいそなのに♥ 友梨佳ちゃん、もつとわたしのこと追い詰めて♥」

「凛先生……わかりましたあ♥」

わたしは、もう一度、挿入を始める。

突き込もうとして、美優先生とは様子が違うことに気付いた。ひとりでおまんこの入口が蠢いて、ちんぽを待ちわびている——夏希先輩と同じだ。

そう、凛先生の女体も、わたしみたいなふたなりを気持ちよくするために特化されているのだ。

ちんぽを触れ合わせると、すぐにおまんこが食いついてきて、わたしのちんぽをナカへ、ナカへと引き込んでいく。

「んつ♥ 凛先生の、すごい……♥ 勝手に、ちんぽが入っちゃいますう♥」

「うふふ、すつゞくやらしく動いてるでしよう? 友梨佳ちゃんのおちんぽ、もつとぐじゅぐじゅのおまんこで締め付けてあげる♥」

凛先生は、言葉通りに、わたしの肉竿を、これでもかとばかりにヒダヒダで刺激してくる。夏希先輩とシたときに近い、強烈な快楽に、涎が垂れてしまふほど気持ちがよくなつてしまつた。わたしはそれを味わわされるともうダメで、思い切り腰を振り始めてしまう。

わたしのピストンに合わせるように、絡みついてくる凛先生のおまんこ。もうどうにかなつてしまいそうだった。

「ああんつ♥ 友梨佳ちゃんの、すつゞい大きくて奥まで当たつてるわあ♥ 突いて突いて

♥ もう頭がおかしくなっちゃいそうよお♥

「先生……♥ わたしも、そろそろお……♥」

「イッちやいなさい♥ 先生のおまんこにたつぱり出して、気持ちよくなっちゃいなさい♥

ああっ♥

「はあ、ん～♥ 凜先生、出ますう♥ 精液ドクドク出ちゃいますう——んううう♥」

どぴゅるるるつ♥ びゅー♥ びゅくく♥

わたしがイクと同時に、凛先生のおまんこもきゅうううと締め付けて、ますます射精を促すようにうねうねと動いた。わたしは搾り取られるような感覚に陥りながら、何度も何度も射精した――

保健室から出るころには、すっかり日が暮れてしまっていた。

享楽の限りを尽くして、最高の満足感に浸っていた。人生で今日が一番幸せだったのではないか、と本気で思ってしまうほどだ。

美優先生や英梨と次の約束をしてから別れて、文字通り精根尽き果てかけながら自分の部屋に戻ると、なぜか彩陽や紗耶香が待っていた。

「あれ、どうしたの、二人とも？」

「香奈ちゃんの書いた小説、二人で読んでたの」

「友梨佳さんに返さなくてはと思って、ここで待っていたのですわ」

どうやら彩陽まで、香奈から渡されたあの紙の束に興味を持つたらしかった。わたしは小説は普段読まないから、面白いとか、面白くないとか、よくわからないのだけど、どうやらみんなに好評らしい。

彩陽が真顔で面白い、と勧めてくるから、少なくとも駄作ではないみたいだ。

「最後まで一気読みしちゃったんだけどさ、よく考えてるよね。〈ふたり女学園へようこそ〉っていうタイトルってそういう意味だったんだ、って思った」

「どういうこと？」

「最後まで読まないとわからないようになつてますわ。そういうところが、小説の面白みですもの。友梨佳さんも通して読んでみたらいかがでしょう？」

「えー、めんどくさいよ」

「まあ別に無理には進めないけどさ。全部読まなくともわかるのは、この小説、とにかくすつごいエッチだよね♥ 香奈ちゃんつて、もしかしたらすごい変態なのかも」

「そうかもしれませんわね。そうじやなきや、こんなに卑猥な表現、できませんもの」「なんだか、その紙束のせいであたしの妹が変態だって広まつててみたいで、あんまりいい気分じやないかも……」

「でも、才能あるんじやない？ 読んでて飽きなかつたもん。もっと色んな子に読ませてあげたいよね」

「そうですね。きっと香奈ちゃん、人気者になれますわ」

「ちょっと待つてよ。わたし、まだ本当にそれ全然読んでないの。どんな話だつた？」

二人に話の筋を聞いてみると、香奈の体験を描いた小説の中に、いやらしいシーンが散りばめられている感じなんだろうな、というイメージをわたしは持つた。

説明の途中で、彩陽は微妙な顔で付け加えた。納得いかない部分があるらしい。

「それでね、一年の詩織ちゃんのことをわたしが誘惑するシーンが出てくるんだけど……完全にわたしが悪役なんだよね、これ。印象操作だよ。もうちょっと書き方あつたんじやないかな？」

「あら、そういうえば彩陽さん、詩織ちゃんにこんないやらしいことしてたんですね？」

「ええ？　たしかに事実としては間違つてないんだけど……間違つてないから悪質つていうか……うーん」

「それって、彩陽が本当に悪いやつだったってことじやないの？　ふふ」

「違うつてばあ、友梨佳あ」

わたしたちはおかしくて笑いながら、香奈の小説の話でだいぶ盛り上がり上がつてしまつた。この学園に来てから色々とあつたけど、ふたなりになる前となつた後で、変わらずにこうしてわたしの部屋で談笑していられるのは、嬉しいことだ。

話している中で、わたしはちょっと気になることを思い出した。確か、香奈はこの小説にわたしがちよろつと登場していると言つていたはず。

「あー、出てきたよ。なんだかすごくどうでもよさそうな扱いだつたよね。偶然会つちゃつたから声かけたけどつまんなかった、みたいな」

「なによそれ？」

「友梨佳さんは話の本筋には関係ないですから、しようがないのではなくて？」

「ちよつと待つてよ！　じゃあなんで登場させたの？　その場面、見せて！　……これ、わたしのこと馬鹿にしてるでしょ！」

後日、わたしは当然のごとく香奈に文句を言いに行つた。

あの描写じや、わたしがいつも机に突つ伏して寝ているみたいだし、わたしがだらしない、なんていう間違つた記述もある。あんなものが出回つたら、恥ずかしいなんてものじや済まない。名誉棄損だ。

確かにあの時、わたしはちんぽが疼いてしようがなくて、適当にあしらつてしまつっていた。もつと可愛く受け答えする、もつとおしとやかな女の子として描いてくれないと困る。

申し立てを受けて、香奈はちよつと考えていたけど、返答は意外にも良心的なものだつた。「それじやあ、お姉ちゃんの話も書いてあげるよ。そうだな……友梨佳編、みたいな感じで。この間お姉ちゃんに見せたのは、香奈編っていう風にして、ダブル主人公ものにアレンジしてみる」

「え？　本当に書き直してくれるの？」

「今の〈ふたり女学園へようこそ〉もいい感じなんだけど、このままだとふたりの女の

子たちの淫乱っぷりが書き足りてない気がするし……何より、今の人だとふたりの女の子たちが何を考えているのか、この小説を読んでもよくわからないから。別にお姉ちゃんのためじやなくて、小説の完成度を上げるために書き直すんだからね」

「何よそれ。そういう余計なことは言わなくともいいのに」

「なんでお姉ちゃんのために書き直さなきやいけないの？　お姉ちゃんのばーか」「はあ！？」

散々な言われようだつたけど、結局書き直してもらうことになつて、わたしは香奈にけつこう細かいインタビュームたいなのを受けた。転校してきてから、ふたりになつて、生徒会のパーティーに参加するまでの期間のことを、事細かにしつこいくらい聞かれて、わたしも負けずに丁寧に話して聞かせた。相変わらずどうでもいいことをイチイチ考える子だなあ、と思いながら洗いざらい語つてしまつた。

それを反映して、わたし視点の小説を書いてくれると言つのだから、多少の面倒くささは我慢するのがお姉ちゃんだと思つて辛抱した。

一体どんな形になるのだろう、と期待を膨らませて待つこと数週間。

香奈は再びわたしのクラスにやってきて、二倍近い厚さになつた紙束を持ってきた。

気になつたのは、香奈がやたらニヤニヤしながらそれを見せてきたことだ。まるでわたしを馬鹿にしているかのような笑い方。

「ふつ……お姉ちゃんの話してくれた通り、忠実に小説にしたら、こうなつたよ」

わたしは仕方ないから、香奈が丁寧に書き上げてくれた文章の「友梨佳編」を読んで、一気に怒りが込み上げるのを感じた。

わたしが女の子のことばかり考えている描写。気持ちよければそれでいいや、というだらしない考え方。一日中ちんぽが疼いて発情している描写。こんなものが出現るだなんてありえない！

「ちよつ……これじやあますます、わたしのイメージが最悪じやない！」

「だつて本当の事じやん」

文句をつけまくって、書き直すように何度も言つたけれど、香奈がそれに応じてくれるることはなかつた。

この小説が、この女子園で何十年も後まで読み継がれることになることなんて、わたしは知る由もなかつた。

ふたなり女学園へようこそ 女教師友梨佳編

しゃーぶ

CHARACTERS

(教師陣)

友梨佳 ゆりか 前作の主人公の一人。女子高生時代にふたなりになり、ふたなり女教師として学園に再び戻ってきた。

美優先生 みゆ グラマラスな体型の先輩女教師。友梨佳の学生時代の担任。

凜先生 りん 保健室の先生。白衣が似合う大人の女性。

(一年生)

美姫 みき 黒髪ロングのクールな女の子。

撫子 なでこ 栗色の髪を縦ロールにしたおとなしい引っ込み思案なお嬢様。

愛衣 あい ポニーテールの活発な体育系女子。

女教師友梨佳 序章

白百合女学園という名の女子校がある。

そこでは可愛い女の子たちが何にも汚されることなく、優雅な生活を送っていた。

全寮制をとっているおかげで、女生徒たちは皆、女子寮で寝泊まりをし、学園の外へ出ることはほとんどない。高校三年間、異性と関わることなく、純潔を保つ女の子たちの園だった。

——そのはずだった。

わたしは、五年前、白百合女学園に通う女子高生だった。高校二年生の時に、転校してその学園で過ごすことになったのだ。

女子しかいない空間をごく当たり前に満喫する時間は、ほとんどなかった。この学園で、わたしは人生を変えてしまうような経験をした。

突然、わたしの股間にちんぽが生えてきたのだ。
巷ではふたなり女学園と呼ばれるその学園では、一定数の女の子たちになぜかちんぽが生えてきてしまう現象が起きていた。わたしも、その現象に巻き込まれてしまったのだ。
最初は驚き慌てたが、ちょうどその時一緒にいた彩陽というクラスメートにちんぽをしごかれ、初めての射精を味わった。これまでに感じたことのない快感を得て、一気にちんぽ快樂の虜になった。

わたしは、ふたなりとして生まれ変わったのだ。

それ以来、わたしはたくさんの女の子たちを犯した。生徒会長の夏希先輩、保健室の凜先生、担任の美優先生……誰もがわたしのちんぽによがり狂い、喘ぎ声をあげた。
ふたなりセックスが横行するその学園は、わたしにとっての天国となつた。わたしは高校三年生の卒業まで毎日女の子たちを犯し続け、最高の快樂を貪つた。

——そして、今年の春。

わたしは再び、ふたなり女学園へと帰ってきた。女生徒ではなく、女教師として。

「今日からこの白百合女学園で一年B組を担当する友梨佳と言います！ 友梨香先生って呼んでね。よろしくお願ひします！」

そう挨拶すると、一年B組の女生徒たちは拍手して温かく迎え入れてくれた。

股間にちんぽを生やしたわたしが、彼女たちに欲望まみれの視線を向けていることを知らずに。

わたしは白いシャツを着て、黒いタイトスカートを履き、教壇に立っていた。ここから見下ろすと、無垢な女生徒たちが、わたしと同じ女の子だと思って、油断しきっているのがよくわかる。

この子たちはまだ、この白百合女学園の真実を知らない。ふたなりだけのこの女学園の実態を知らないのだ。

もう少し時間が経てば、このクラスの中にも突然股間にちんぽが生えてくる女生徒たちが現れるだろう。彼女たちはその時、何を感じ、どう行動するのか。楽しみで仕方ない。ちんぽが生えてきたふたなり女子は、射精の誘惑に絶対に打ち勝つことが出来ない。そのことはわたしが身をもって知っている。一日一回は射精しないと夜も眠れない体になってしまうのだ。

ふたなりちんぽは一日中ほとんど勃起し続け、その女生徒を快楽への欲求へと引きずり込む。どれだけ我慢しようとしても、オス性欲を我慢することは出来ない。一度生えてきたら最後、ふたなりちんぽから精液を放つことに忠実な、淫らな生き物と化してしまう。「まだこの女学園に来たばかりで、不安もたくさんあると思います。もし何か困ったことやわからないことがあつたら、わたしに遠慮なく聞いてください♥ それじゃあ、今日のHRはおしまい！」

始業式を終えたわたしは、タイトスカートの中でムクムクと勃起しかけていたちんぽを押さえつけながら、職員室へと向かつた。

女教師友梨佳 一章

このふたり女学園で、再び淫行三昧を目論んでいるわたしには、強い味方がいた。

五年前にわたしとたくさんセックスしてくれたあの先生。生徒会の顧問を務め、たくさん
の女の子たちを淫らな宴へと誘った、いやらしい美人教師。

「初めてのH.Rはどうだったかしら、友梨佳ちゃん、いえ、友梨佳先生と呼ぶべきかし
ら？」

美優先生は、五年前と変わらぬ美貌のまま、職員室でわたしを待っていた。
わたしと似たような白いシャツと黒いタイトスカートを履き、につこりと笑顔を浮かべ
ている。

あの時、担任の先生だった美優先生は、今のわたしにとつて、尊敬する先輩教師となつて
いた。そのことがなんともいえないこそばゆい感じだつた。

「友梨佳ちゃんのままで大丈夫です！ よろしくお願ひします♥」

「よろしくね♪ また友梨佳ちゃんといやらしいことが沢山できると思うと嬉しいわ♪」
わたしが大学生だった間も、ずっとこの女学園で教師を務め、今では教頭先生にまでなつ
ている美優先生は、以前りますます大人の魅力たっぷりになつていた。

あれだけ色んなふたり女生徒を誘惑し、セックスをしまくつていたあの頃も、フェロモ
ンをむんむんに漂わせる美人だったが、今ではさらに大人の女性として成熟を深めていた。
おかげでわたしのふたりちんぽは美優先生に反応して、ビンビンに固くなつてしまつ
ている。

もしかしたら、美優先生にお相手をしてもらえるだろうかと様子を窺いながら、わたしは
会話を続けた。

「一年B組、可愛い女の子たちばかりでびっくりしました！ あの子たちをわたしの好き
にしていいんですよね？」

「ええ♥ 友梨佳ちゃんの欲望が赴くまま、犯しまくつてあげて♥」

「ありがとうございます！」

「いいのよ、ここ白百合女学園はふたりの女の子にとっての天国なんだから♥ 存分に気
持ちいいセックスを味わつてちょうどいい♥ 実はね、友梨佳ちゃんにとって嬉しい知らせが
あるの」

「なんですか？」

「うふふ、驚かないでね？ この女学園は友梨佳さんが在籍していた五年前より、ちょっと
だけ……性が乱れてるの♥」

「そなんですか？」

「ええ♥ 昔は裏で隠れてやつていたセックスを、表で堂々とやる生徒たちが少しずつ現れ

てきているのよ」

「もしかして……」

「放課後、二年生や三年生のクラスを見に行つてみると面白いわよ♥ 人目を憚らずにふたなりセックスする女の子たちが見れると思うわ♥」

もともと、この女学園にはふたなりセックスが蔓延っていた。

放課後になると、わたしを含むふたなり女生徒たちは、こそそと屋上や誰もいない教室に向かいふたなりセックスを始めていたし、あらゆる部活はふたなりセックスの巣窟となっていた。

それでも、一応空気を読んで、表に出で堂々とセックスするようなことはしなかつた。

しかし、その風潮が変わりつつあると、美優先生は言うのだ。

「だから、友梨佳ちゃんにとつてはますますやりやすくなっているということよ♥ そうだ、一年B組の名簿を見せてちょうだい♥ わたしも気になるの。どの子がふたなりになつて、どの子がふたなりにならないか♥」

わたしは言われた通り、ファイルにまとめていた名簿を取り出し、美優先生と一緒に読んだ。

すでに何人か、さつきのHRの時に目星をつけていた女の子たちがいた。みんな可愛い美少女だけけれど、その中でわたしは三人を厳選して、名前に丸印をつけていた。

美姫——十六歳。B86W53H82。黒髪ロングのクールな女の子。

撫子——十六歳。B94W47H92。栗色の髪を縦ロールにしたおとなしい引っ込み思案なお嬢様。

愛衣——十六歳。B81W52H83。ボニー・テールの活発な体育系女子。

三人とも違うタイプの選り抜きの美少女だった。このうち誰かがふたなりになつてしまふ可能性もあるけど、誰か一人はきっとわたしのふたなりセックス相手になつてくれるはずだ。

強引にでも、そうさせるつもりだった。

「可愛い子たちばかりね♥ さて、今年も登校一日目から、体に異変を感じる子たちが出てくるはずよ。股間に痛みやむず痒さを感じて、保健室にやつてくるはずだわ♥ わたしはそつちを見てくるわね♥」

「わかりました」

わたしは美優先生を見送って、まずはどちらの子をターゲットにするか考えた。

女教師としてこの学園に来て初めて犯す女生徒はどの子がふさわしいだろうか？

美姫 序章

わたしはこの白百合女学園に入学するのが小さい頃からの夢だった。

歴史あるこの学園には、由緒正しい家柄の女の子たちが集まるという話で、可愛い女の子たちとの優雅な生活を夢見ていた。

だから、今こうしてこの制服を着れているのが、何よりもうれしい。良い感じの色のプリーツスカート、おしゃれなデザインのブレザー、そして可愛い赤いリボンを胸元につける。この制服が大好きだ。

しかも、幼馴染の撫子と愛衣と一緒に合格できたから、人生で今が一番幸せなのかと思つてしまふほどだった。

「担任の先生、美人さんでしたね」

H Rが終わつたとたん、同じクラスになつた撫子がわたしの席にやつてきて話しかけてきた。

撫子はちょっとしたお金持ちの一家のお嬢様だ。縦ロールの栗色の髪がそれを象徴している。

小学生の時からずっと仲良しの幼馴染で、今ではその上品な言葉遣いや立ち居振る舞いにも、すっかり慣れてしまった。

そんな撫子と、いつも通り、何気ない会話を交わすのが楽しい。

「そうだったね。友梨佳先生、って言つたつけ。良い先生に当たつたみたいでよかったです」
「高校の先生つて、みんな怖いのかと思つてドキドキしてました。すごくフレンドリーな先生でよかったです」

「撫子つたら、中学に入った時も、同じこと言つてなかつたつけ？ 中学の先生は皆怖いのかと思ってましたあ、優しそうでよかったですうつて」

「そうでしたか？ ふふ、わたしつたら何も変わってないんですね」

撫子はぽわぽわとした癒される雰囲気を醸し出していて、わたしは一緒にいると安心してしまふ。

そこに、もう一人の幼馴染、愛衣が駆けよつてくる。わたしたち二人を元気よく抱きしめて、にしつと歯を見せて笑つた。

愛衣は中学生の時、陸上部で短距離走をやつていた運動が大好きな女の子だ。いつもエネルギーに満ち溢れていて、テンションが高いとポニーテールが犬の尻尾みたいにぶんぶん揺れている。

「わーい、美姫、撫子！ わたしたち全員同じクラスだね！ いえーい！」

「いえーい、ですねっ」

「いえいっ、愛衣。運いいよねっ。このまま寮の部屋も近くだつたりしてね」

「そうだったら、本当に最高だね！　でも遠くでも毎日遊びに行くからね！」

「えー、毎日はちよつとめんどうかも。愛衣がいるとうるさいし」

「ガーン、そんな、ひどいよ、美姫……」

「嘘だよ、愛衣。わたしも愛衣の部屋行くね」

「びっくりさせないでよ、美姫。まあ、冗談だってわかつてたけどね」

わたしは談笑しながら、とある事情でついついちょっと顔をしかめた。

折角愛衣と撫子とお喋りしていい気分のはずなのに、さつきからずっと下腹部の辺りが痛むのだ。正確には股間の辺りがズキズキして、二人との会話に集中できない。

顔色が優れていなかつたのだろうか、愛衣は少し心配そうに首を傾けた。ポニーテールが揺れる。

「どうしたの、美姫？　美姫がいつもクールなのはわかつてること、ちょっと今日はテンション低すぎない？」

「ううん、なんでもない……」

股間が痛いだなんてちよつと言いくらい。我慢していれば治るだろうと思つて黙り込むと、撫子が茶化してくれた。

「愛衣ちゃんがテンション高すぎるだけですよお」

「そうかなあ、あははっ」

わたしは、何か不穏な予感を感じ取っていた。

この痛みは、普通でない感じがするのだ。根拠はないけれど、そんな感じがしてならない。こつそりと一人の死角でスカートの上から股間を触つてみると、何かが腫れ上がつたかのような突起があつた。

(なんだろう、これ)

それはちょうどおまんこの割れ目の上あたりから生えていた。小さな豆のような感じで、しこりが出来ていてるのだ。

まあいいか。とりあえず、放つておけば治るだろう。痛みだつてすぐに引くに違いない。わたしはそれを放置したまま、撫子と愛衣と一緒にこれから生活する寮へと向かつた。

女教師友梨佳 二章

わたしは楽しみで楽しみで仕方なかつた。この女学園のぴちぴちの十六歳JKの身体を好きに弄んで、犯しまくるのが。

生徒として女学園に在籍していた頃は、クラスメートや先生たちを犯しまくつて性欲を発散させていたけれど、大学に入つてからはそうもいかなくなつてしまつていたのだ。一人寂しくふたなりちゃんぽをしごいてオナニーする日も多かつた。

常習的にふたなりセックスをするこの学園で、またいやらしい発情ナカ出しへセックスが出来ると思うと、ちゃんぽが疼いて仕方ない。スカートの中で射精するときを待ちわびて我慢汁を垂らしながら、鬼のように勃起している。

期待でいっぱいになりながら、わたしは一人の女生徒を放課後の教室に呼び出していた。他の女生徒たちは部活の体験入部に向かつたり、寮で友達と一緒にお茶したりしているはずで、この教室にはわたしの他に誰もいなかつた。

西日を受けて、橙色に染まる一年B組のクラス。整然と並んだ机と椅子たちが、学生時代への懐かしさを感じさせるような夕方の光で照らされている。

机の一つに腰かけて待つていると、とある女生徒が、教室に入つてきた。

「失礼します。友梨佳先生、あの……わたくし、何か悪いことをしましたか……？」

栗色の髪を縦ロールに巻いお金持ちのお嬢様、撫子ちゃんだつた。おつとりとした雰囲気で、胸やお尻が人並み外れて大きい女の子だ。わたしのお気に入り女生徒リストの中でもトップクラスの美少女。

わたしに呼び出しを食らつたことで、不安そうな上目づかいでわたしを見つめている。わたしが女生徒だつた時も、クラスメートに紗耶香という金髪碧眼お嬢様がいた。この女学園は由緒正しい家柄のお嬢様が集まつてくることでも有名なのだ。お金持ちの人たちが、自分の自慢の娘がふたなり化するかもしれないことなんて何も知らず、入学させるのだから、ちょっと可哀想だつた。

「とりあえずそこに座つて、撫子ちゃん」

「は、はい……」

撫子ちゃんはちょっと怯えながら、わたしが腰かけていた机の椅子に腰を下ろした。

こうして呼び出したのは、わたしにとつて都合の良い事実があつたからなのだ。

わたしはバインダーに用意していたとある書類を撫子ちゃんに見えるよう机に置いた。「あ……っ、これは……っ」

それを見てあつと息をのむ撫子。その書類とは、入学直後の実力テストの結果だつた。

惨憺たる点数だった。百点満点中、八点しか取れていない。高校受験して実力で入ってき
たとは思えない出来だった。

「これはどういうこと？ 撫子ちゃん？」

わたしはあくまで冷たい目で撫子ちゃんを見下ろしながら叱責すると、撫子ちゃんはどう
しよう、と困り切った表情になつて震えた声で弁解し始めた。

「友梨佳先生、あ、あの……わたくし、お勉強が苦手で……」

「苦手にしても、あまりにも点数が悪すぎない？ この問題なんて、中学校で習った基礎
的な部分すら理解できていないのが、丸わかりよ」

「そ、それは……ふええ」

目をうるうるとさせながら、言いよどむ撫子ちゃん。そうやつて、泣いて頼めば許しても
らえると思いつ込んでいるようだ。

どうやら、この撫子ちゃんはイマイチ頭がよくないようで、普段おつとりとして要領が悪
いのもそのせいらしかった。

本来ならこんな子は、この白百合女学園に入学できるはずがない。

この撫子ちゃんは、どうも不正してこの学園に入学したのではないかという疑惑があつ
た。もしそれが本当なら、ふたりセックス相手として調教するには申し分ない弱みを掴む
ことになる。

ふたりちんぽが勃起しているのをバレないようにしながら、わたしは疑惑をぶつけた。
「実はね、撫子ちゃん。教師陣の間で、あなたに関する悪い噂が出回っているの」

「つ……！」

「撫子ちゃんは、お金持ちのお父さんによる多額の不正献金で、入学試験の結果が悪かつた
にもかかわらず、裏口入学したんじやないかって噂よ」

「わ、わたしは、お父様に頼んでいないんですつ……お父様が勝手につ！」

「あれ、もしかして図星なの？ そんなわけないよね？ 一生懸命勉強して、この白百合女
学園に入学したんだよね？」

「ふええ、ごめん、なさい……つ」

「えつ……？ 本当にお金の力でこの学園に入学したの？ 撫子ちゃん、それはまずいわ。
ズルして入学したことが他のクラスメートたちにバレたらどうなつちやうでしようね？」

「うふつ♥」

「うう……」

俯いて、怯えるように震える撫子ちゃん。

その様子がわたしにとつてはソソつて仕方なかつた。このわがままボディの美少女の弱
みを掴んだ。これからわたしの言ひなりにさせて、ふたり肉便器にしてあげるのだ。ふた
なりちんぽが我慢できないとばかりにヒクヒクし始めて、わたしは頭の中がふたりちん
ぽ快感への渴望でいっぱいになつてしまつた。

「許してください……わたくし、ずっと仲良しの幼馴染の美姫ちゃんや愛衣ちゃんとの

学園に入学できて、今が一番幸せなんです。楽しい学園生活が始まつたばかりで……やめた
くありません」

「もしこの学園を退学になりたくないのなら、一つだけ方法があるわ」

わたしは、にこりと笑みを浮かべて、撫子ちゃんの耳元に顔を寄せてこっそりと囁いた。
「友梨佳先生の言うこと、なんでも聞いてくれるかしら♥」

「そんな……でも、この学園に残るためなら……はい、なんでも言うこと聞きます♥」「
イイ子ね◆ すんすん……◆ 撫子ちゃんの髪、とってもいい匂いがする◆ 首筋、舐めて
もいい?」

「え……えつ?」

「なんでも言うこと聞くんでしよう?」

「どうして、そんなこと……は、はい、舐めても構いません……ひやんつ♥」

わたしが首筋に舌を這わすと、撫子ちゃんは小さく悲鳴をあげて、体を強張らせる。

撫子ちゃんは若い女の子特有の甘い味がした。髪からふわっと香るシャンプーの匂いを
楽しみながら、わたしはしばらく撫子ちゃんの味を堪能した。

首筋を唾液まみれにした後、舌を離して撫子ちゃんの表情を見ると、顔を真っ赤にして涙
目になっていた。わたしの行動が信じられないのか、混乱しきった感じで言つてくる。

「あ、あの……友梨佳先生……?」

「ふふ、本当に退学したくないのなら、撫子ちゃんにして欲しいことがあるの。最初は驚く
と思うわ。でも、すぐにわかつてもらえると思うから♥」

わたしはついに、スカートを脱ぎ、セクシーな下着を露わにした。その下着から、醜悪な
アレがはみ出ている。

撫子ちゃんはそれを見てはっと息をのんだ。わたしが下着も脱いでしまうと、そそり立つ
たふたりちんぽが、撫子ちゃんの目の前にさらけ出された。

ビクビクと震える血管の浮き出した醜悪な肉の棒。外国人並みの大きさと太さを誇つて
いた。先っぽからは透明な液体が溢れ出し、はやくしごいて欲しそうにしている。

(ああっ◆ はやく撫子ちゃんにシコシコしてもらつて気持ちよくなりたいつ◆ びゅーび
ゅー精液出して撫子ちゃんの可愛い顔にぶつかけてあげたい♥)

わたしはその気持ちに苛まれながら、あくまで平静を装つた。

撫子ちゃんはふたりちんぽに釘付けになつた目を大きく見開いていた。その表情には
恐怖が垣間見える。

「な、なんですか、これ……うそ、そんなのありえないですつ」

「わたしはちんぽが生えた女なの。いわゆる、ふたりつていうやつね♥」「
い、意味わかりませんつ……ふたりだなんて、いるわけないですつ」

「撫子ちゃんはまだ何も知らないのよ◆ この白百合女学園の眞実を。この学園にはたくさん
のふたりがいる。わたしみたいな先生だけでなく、生徒にもね。ある時突然、ちんぽが
生えてきてしまうの」

「な、何を言つて……！？」とにかく、ははやくそれをしまつてくださいよおつ」

「そうするわけにはいかないわ。お金で裏口入学した撫子ちゃんは、なんでも言うこと들을聞いてくれるんでしょう？」

「うつ……そ、そんな、卑怯ですうつ」

「みんなが努力して入学したのに、一人だけ楽してこの学園に入った撫子ちゃんのほうがよっぽど卑怯よ。さて、まずはこのふたなりちんぽを両手で優しく握って、シコシコして

♥

「わ、わたくし、そんなこと……」

「それなら退学ね♥」

「う、うううう……」

撫子ちゃんは仕方なく、という感じで、わたしを睨めつけながら、ふたなりちんぽにそつと触れた。その睨んだ顔もまた可愛い。触れた瞬間ぴくっと震えるちんぽに驚いて、ひやうつ、という声をあげていたが、そのまま両手でわたしのふたなりちんぽを包み込んだ。そのまま十本の細い指を絡めつけ、上下にしゅこしゅことこすりだす。

(ああ～♥ 気持ちいい♥ 撫子ちゃんがわたしのふたなりちんぽを嫌な顔しながらじーいてくれてる♥)

不慣れな手つきだったけど、それがまた興奮の材料になつた。

根元のところからカリ首のところまで、満遍なく握つてしまついてくれていた。

「ふう♥ ふう♥ すぐいいわ、撫子ちゃん♥」

「わたくしがこんなにいやらしいこと……どうして、こんなことに……」

「ふたなりちんぽ、ギンギンになつてるでしよう？ 撫子ちゃんが可愛いから、興奮してるの♥ ああ～♥ たまんない♥」

「友梨佳先生、気持ち悪いですよお……綺麗な先生だと思つてたのに、こんな人だつたなんて……」

「ふふ♥ そういうことを言つていられるのも、今のうちだけかもしれないわ♥ 撫子ちゃんはこの学園のふたなりについて、なんにも知らないんだから♥ いずれ撫子ちゃんもわたしのふたなりちんぽが欲しくて欲しくてたまらなくなつて、自分から懇願するようになるわ♥」

「わけのわからないこと、言わないでください……早く終わらせてください」

「もつとちゃんと握つてしまついて♥ ああ～♥ そこそこ、気持ちいいわつ♥ どんどんふたなりちんぽ固くなつちやうつ♥」

「この、変態教師い……友梨佳先生がこんな人だつたなんて、本当にがつかりです……」

「言うだけ言つておきなさい♥ あとで後悔することになるわよ♥ はあんつ♥ さて、そもそも撫子ちゃんのお口を堪能したいわね♥ 舌でわたしのふたなりちんぽを舐めなさいつ♥」「こ、これを舐める……？ あ、ありえないです、絶対に嫌です……」

「それなら、撫子ちゃんは今日限りでこの学園を退学ということでいいわね？」

「ふええ……！ 屈辱ですうつ……！ こんなに汚いものを、舐めるだなんて……！」

撫子ちゃんは、泣きそうな表情になりながら顔を近づけ、ほんの少し突き出した舌で、そつと先端を舐めた。先走り汁をふえろと舐めとつて、顔をしかめた。

「変な味がしますう……つ、本当に最悪うつ、こんなことさせられるくらいなら、いつそ死んでしまいたいですうつ」

そのまま、撫子ちゃんは嫌そうな顔でわたしのふたなりちんぽを舐め続けた。亀頭にぺろぺろと満遍なく涎を塗りつけてもらつたあと、わたしは先っぽを咥えこむように命令した。

「口の中に、いれるなんて……つ、あむつ……んんつ」

撫子ちゃんが、わたしのふたなりちんぽに咥えつき、口の中でれろれろと舐めまわしてくれた。

(最高……♥ 撫子ちゃんの初々しいフェラ、気持ちいいつ ♥ 温かくてヌルヌルして、もう射精しちゃいそうつ ♥)

吸い付くように命令すると、撫子ちゃんはわたしのふたなりちんぽを咥えたまま上目づかいで睨みつけてきた。それでもわたしの命令を聞かないと退学とわかっているので、じゅるじゅるといやらしい音を立てながら、吸引してくれた。

「十六歳の撫子ちゃんの、びちびち口まんこ最高つ ♥ まだ誰にも犯されてない口まんこ、わたしのものにしちやつた♥ ごめんね、撫子ちゃん♥」

「んん、うう、んぐうううつ」

口にふたなりちんぽを突っ込まれているせいで、何も言葉を発することが出来ず、ただただわたしを睨みつけることしか出来ない撫子ちゃん。

そんな撫子ちゃんの涎まみれにされながら、精液を吸い出すようにふたなりちんぽをしやぶられると、もうダメだった。

「ああうイクイクイクうつ ♥ 撫子ちゃんにふたなりちんぽちゅうちゅうしやぶられていつちやうう ♥ 精液ドクドク発射しちやう ♥ んぐううつ ♥」

びゅるるるるつ ♥ ぴゅつぴゅつ ♥ びゅうううつ

ふたなりちんぽを咥えたままの撫子ちゃんの口内に、大量の精液を放出していく。突然放たれた精液に撫子ちゃんは驚いてくぐもった声をあげながらも、わたしが手で顔を押さえているせいで口からちんぽを抜くことが出来ず、全て余さず口内射精されてしまう。

「んんうううつ！ んんつ！ んぐううううつ」

やがて撫子ちゃんは反射的にそれを嚥下し始めてしまっていた。喉にぶつかれたドロドロの精液がそれを促すのだ。こく、こくと喉を動かしてわたしのふたなり精液を体内に摂取していくのを確認して、わたしはふたなりちんぽを口から引き抜いた。

撫子ちゃんにふたなり精液を飲ませるのも、わたしの目的の一つだった。実はこの精液には、想像もつかないような特別な効用があるのだ。

催淫効果。これを飲み込んでしまった女の子は、もうふたなりちんぽなしでは生きていけない体になってしまふ。ふたりに欲情し、ふたりのちんぽをしやぶつたり、おまんこに

突き込まれたりしない限り、ムラムラしてどうしようもなくなってしまうのだ。

そんなことなど露知らず、撫子ちゃんはわたしが出した精液を全部飲み込んで、ふはあ、と息をついていた。ちょっと息苦しそうになりながらも、わたしを睨みつける目は変わらない。

「こ、これで満足ですかあ、友梨佳先生……」

「ふふ♥ 気持ちよかつたわよ、撫子ちゃん♥ 明日からもよろしくね♥」

「最悪ですぅ……どうしてわたくしが、こんな目に……」

「そんな風な感想を抱くのはきっと今日が最後よ♥ 明日の撫子ちゃんはきっと、わたしのふたなりちゃんぼが欲しくて欲しくてたまらなくなってるわ♥」

「な、何を言つているんですか？ そんなの、ありえないです……もう、帰つていいですか？」

「いいわよ、また明日ね♥」

「友梨佳先生なんて、大嫌いですっ」

そう言つて立ち去る撫子ちゃんを、わたしはついついニヤニヤしながら見送つてしまつた。わたしのふたなり精液を飲んだからには、あんなことを言つていられるのはそう長くない。きっと今日の晩には発情してたまらなくなつて、おまんこが疼いてしまうはずだ。そして、わたしのふたなりちゃんぼを咥えたことを思い出しながら、オナニーするに違いない。

明日は、撫子ちゃんにどんなことをしてあげよう♥

わたしはこれからふたなり女学園での生活、女教師としての学園生活が改めて楽しみになりながら、乱れた服装を整えて、職員室へと戻つた。

女教師友梨佳 三章

翌日の放課後も、わたしは撫子ちゃんを教室に呼び出した。

わたしのふたなり精液を飲み込ませた撫子ちゃんが一体どんな状態になつてゐるか、期待でいっぱいだった。

(今日も撫子ちゃんをたっぷり味わつちゃおう♥ 昨日はフェラしてもらつたから、今日はもっとすごいことだつてしまやおつかなあ♥)

わくわくしているのを悟られないように澄ました顔で待つていると、ドアを開けて撫子ちゃんが入つてきた。昨日のような不安でいっぱいの表情ではなく、わたしを可愛い顔で睨みつけてきている。

「ちゃんと来てくれたのね、撫子ちゃん♥」

「わ、わたくしの身体に、何をしたんですか……♥」

開口一番に、そんなことを言つてきた。

撫子ちゃんの声は掠れて、弱弱しくなつていた。

はあ、はあ♥ と熱い吐息。上気して赤く染まった頬。内股になり太もも同士をこすりあわせている。わたしに発情しているのを必死に堪えているのが伝わつてくる。狙い通りの結果に、わたしは内心大喜びしていた。

これまでこういう風に、ふたなりセックスに興味のない女の子を、こちら側に引きずり込むようなことはあまりしたことがなかつた。大抵はすでにセックス快楽の沼にどっぷり浸かつた、淫乱な女の子ばかりを相手してきたから、撫子ちゃんをふたなり精液便器に調教していくのは初めての感じでゾクゾクした。

わたしはあえて撫子ちゃんに意地悪をして、ふたなり精液の効用について教えないことにした。

「どういう意味かしら？ 何か体調が悪いの？」

「なんだか、体が火照つて仕方ないんです……♥ しかも、わたくし、そんなはずないのに、

今日、友梨佳先生と会うのが、楽しみになつてきて……♥」

「もしかして、わたしのちんぽをしゃぶりたくて、頭がおかしくなりそくなんじやない？」

「そ、そんなわけっ！ あんな汚いものを舐めるだなんて、そんなこと、したいわけないじやないですかっ……！」

撫子ちゃんは、自分に言い聞かせるように強く言つた。

しかし、本当はわかっているはずだ。自分の身体がふたなりちんぽを求めているということを。わたしのちんぽを舐めしやぶつて、おまんこに突き込まれたいと心のどこかで思つてしまつてゐるのだ。

わたしはスカートと下着を脱ぎ、昨日覚えた快感を期待してガチガチに勃起したちんぽをさらけ出した。

それを見た撫子ちゃんは、恐怖すら滲ませていた昨日の表情とは少し違う反応をした。とろんと見惚れてしまっているかのようだた。瞳を潤ませ、だらしなく頬を緩めていかにも欲しそうな表情をしている。

「す、すごいです……友梨佳先生の、おつき〜…………♥」

「ふふ♥ しやぶりたくなつてきた？」

「違いますっ……！ ただ、ちょっとすこいって思つちやつただけです……全然、欲しいだなんて思つていませんからっ」

そう言いつつも、わたしのちんぽから目を離せなくなつてしまつている撫子ちゃん。口の中でちろちろと舌が動いて、物欲しそうにムズムズと腰を揺らしている。わたしのふたりちんぽの虜になつてしまつているのはもはや疑いようがなかつた。

わたしは椅子に座り、股を開いて撫子ちゃんのスペースを作つた。ちんぽをピクピクさせながら、撫子ちゃんを待ち受ける。

「さて、退学になりたくなければ、わたしの欲望まみれの勃起ちんぽ、しつかり舐めて♥」「は、はい……友梨佳先生♥」

撫子ちゃんはまるでようやく許可を得たかのように、ちょっと嬉しそうに頬を染めてわたしの足の間にひざました。

そのまま惹き寄せられるようにわたしのふたなりちんぽの先端の匂いを嗅ぎ、うつとりとした表情を見せる。

「おかしいです……この匂いが、好きになつちやいそうです……♥」

「撫子ちゃん、淫乱のちんぽ好きになつちやつといいのよ？ ちんぽは撫子ちゃんを気持ちよくする、撫子ちゃんの味方なんだからね♥」

「そ、そ、うなんですかあ……？ あつ！ ダメ、わたくし、何を考えて……！ わたくし、どうにかしてます……友梨佳先生のちんぽがおいしそうに見えるだなんてっ」

「その気持ちは間違つてないわ♥ ほら、たくさん舐めしやぶつちやつて♥ 撫子ちゃんの口まんこで、ヌルヌルの涎まみれにして、いっぱいしごいちやつて♥」

「こんなの、我慢、出来ない……♥ 友梨佳先生のふたなりちんぽ、おしやぶりしたくてたまらない……♥」

撫子ちゃんはついに欲求を抑えきれなくなり、わたしのちんぽを両手で大事そうに支え、ぱくりと咥えた。

（あんつ♥ やつぱり十六歳のJK口まんこ最高つ♥ わたしのふたなりちんぽの味覚え込ませてあげたいつ♥）

温かいお口の中で、たつぶりと舐めまわしてもらうのはやつぱり最高に気持ちがよかつた。

撫子ちゃんは夢中になつてフェラを続けていた。亀頭を何度も舌でこすりあげて

その味を堪能したり、根元をしごいてふたなり精子がいっぱい出るよう促してくれる。

じゅるじゅるる♥ と吸引まで始めながら、撫子ちゃんは観念して言った。

「おいひいつ♥ なんでえつ？ なんれこんなにおいひいのお……♥」

「撫子ちゃんはちんぽを舐めて喜ぶ淫乱ちゃんのね♥ おとなしいお嬢様だと思つていたのに、そんなはしたない子だつたなんて♥」

「ちがうう、ちがうのにい♥ んじゅるるう♥ だつて、友梨佳先生のおちんぽ、舐めるのやめられないんですう♥」

撫子ちゃんは口をすぼめて顔を上下に動かして、ふたなりちんぽをイかせて精液を搾り取るためにいやらしい刺激を与えてくれている。

そして、わたしは撫子ちゃんのさらなる痴態に気がついた。

フェラを続けながら、撫子ちゃんの片方の手がそろり、そろりとスカートの下の自らの股間に伸び、アソコをいじり始めたのだ。

ヌレヌレになつておまんこを慰めたくて仕方なくなつてしまつたのだろう。情けなくもいやらしい手つきでおまんこをクニクニと撫でまわし、喘ぎ声をあげてしまつてゐる。

「あれあれ？ 撫子ちゃん、そつちの手でどこをいじつてるのかしら♥」

「バレちゃつたあ♥ 友梨佳先生にわたくしのエッチなところバレちゃつたよお♥ ふたなりちんぽ舐めながらおまんこ触つて気持ちよくなつてのお♥ あ～つ♥」

撫子ちゃんは完全に発情したメスとなつて、わたしの目を憚らずに、くちゅくちゅと音を立ててオナニーを始めてしまつた。

きつと普段から一人でエッチな妄想をしながらオナニーしているのだろう。その手つきは慣れたもので、どんどん卑猥に、どんどん激しくなつていく。

ちんぽをしゃぶる激しさも増していく、わたしもふたなり射精の我慢が出来なくなつてしまいそうだつた。

(気持ちいい～♥ オナニーしちゃうくらい興奮してる撫子ちゃんのフェラ、ねちっこくてたまらない♥)

撫子ちゃんは快楽を求めてもう見境がつかなくなつてゐるみたいだつた。丁度いい頃合いかもしけない。わたしはそろそろ、本番をしてあげようと思つて、こう声をかけた。

「撫子ちゃん、そんなにおまんこがうずうずするなら、このふたなりちんぽで犯してあげてもいいわよ♥」

「そ、そんなあ、ダメですう♥ 変態ふたりの友梨佳先生にわたくしの処女あげちやうなんて、ダメなのにい……ああつ♥ したい、エッチしたいよお♥」

「身体は正直ね♥ エッチしたいなら、その机に横になつて、おちんぽ挿入を懇願しなさい♥」

「いやですう♥ そんなはしたないことしたら、恥ずかしくて死んじやいますう♥ でもエッチしたい、したすぎておかしくなるう……♥」

「自分の欲求に素直になりなさい♥ 撫子ちゃんは本当は大人しいお嬢様なんかじやなく

て、ふたなりちんぽに発情しちやう、どうしようもないメス犬なんだって自覚するのよ♥

「どうしようもない、メス犬……♥ わたくし、そんなにだらしない子なんですか……♥」

「そうよ♥ だからはやくおまんこを見せて、わたしのことを誘惑しなさい♥」

「ああっ♥ もうダメえ♥ 我慢できないつ♥ わたくし、ダメな子になつちやいますう♥」

友梨佳先生にふたなりちんぽ挿入してもらいたくて、たまらない……♥」

撫子ちゃんは、わたしの命令に従つて、机の上に横になった。

そして、制服の前のボタンをはずして、ブラジャーをずらした。バスト94センチの巨乳がたゆん、とおいしそうに揺れてますますわたしを興奮させる。アンダーカップとの差を考えるときつとGカップ近くある。

「友梨佳先生、わたくし、はしたない子になつちやいましたあ♥ おまんこうずうずして頭おかしくなりそつ♥ ほら、こんなになつてるんですう、見てください♥」

撫子ちゃんはスカートをたくしあげ、ビショビショに濡れた下着を見せつけた。

さらに、下着をするすると脱いで、お股を大きく開いて、撫子ちゃんのナマおまんこを見せてくれた。

愛液で濡れて、ホカホカと蒸氣が立つていて。若々しいメスの発情の匂いが漂つてきて、ふたりちんぽは暴発寸前だ。

割れ目を指でくぱあ♥ と広げて、撫子ちゃんはいやらしい笑みを浮かべて懇願した。

「友梨佳先生のおちんぽ欲しくてたまらないですう♥ そのバキバキ勃起ふたなりちんぽ、お嬢様なのに淫乱な撫子の発情トロトロおまんこにください♥」

「撫子ちゃん、最高ね♥ よくできました♥ ご褒美にいっぱい、おまんこぱんぱん♥ つて突いてあげる♥」

わたしは待ちに待つた至福の時を味わうこととした。

撫子ちゃんが限界までぱっくりと開いたおまんこに、太いふたなりちんぽを突き込んでいく。

(んつ♥ これこれえつ……♥)

入口に亀頭がちゅぽん♥ と飲み込まれたかと思うと、むにゅむにゅ♥ とおいしそうにおまんこが吸い付いてくる。

そのまま奥まで挿入してしまふと、ふたなりちんぽ全体がヒダヒダにしごかれて、天にも昇るような快楽に全身を貫かれた。

(やば……♥ 久しぶりの女子高生おまんこ、たまらない♥ ホカホカでヌルヌルで、最高♥)

思わず射精してしまいそうになるのをなんとか堪えていると、撫子ちゃんもだらしない淫語で快感を伝えてくる。

「ああ～♥ 友梨佳先生のでつかいちんぽ、入つてくるう♥ ダメえ、処女まんこすぐ負けちゃうう♥ きゅうきゅう締め付けてもぶつといちんぽが強引に掻き分けてくるう♥」「わたしのふたなりおちんぽ、気持ちいいのね♥ ふふつ♥」

「もうこんな気持ちいいの知っちゃつたら、やめられなくなる♥ ふたなりおちんぽなし
じや生きていけない♥」

「もつともっと気持ちよくしてあげるわ♥」

わたしは腰をじゅぶじゅぶ♥ と動かして、撫子ちゃんのナ力を搔き回す。

突き込むときは優しく受け入れてくれて、引き抜くときはきゅうきゅうと締め付けてくる欲望まみれのおまんこが気持ちよすぎた。ちんぽを逃がすまいとそうしているのが、バレだ。

さらにさらけ出された巨乳おっぱいをわしづかみにして、モミモミ♥ と揉みしだくと、撫子ちゃんは可愛すぎる嬌声をあげてくれた。

「いやあつ♥ おっぱい、触らないでえ♥ ビリビリ感じちゃって、おまんこもおっぱいも気持ちよすぎて、バカになつちやう♥ ああんつ♥」

「もう快感狂いの淫乱ちゃんになつちやつたわね♥ そのままどんどん堕ちていつちやいなさい♥」

「もういやあ♥ 感じたくないい♥ これ以上感じたらダメになるのに気持ちいいいっ♥ 友梨佳先生のガチガチちんぽに犯されてイつちやう♥ イクイクイクうつ♥」

「わたしも精液すぐそこまで来てるう♥ いっぱいナカ出ししてあげるからふたなり種付けセックスでイキ狂つちやいなさい♥」

「友梨佳先生い♥ 精子出しまくつちやつてください♥ わたくしのおまんこ便器に出してえ♥」

「ああつ♥ びゅるびゅるしちやう♥ 撫子ちゃんの淫乱おまんこに搾り取られて本気の射精しちやうう♥」

「じゅふじゅふじゅふ♥ と腰振りの最後のスパートをかけて、わたしは絶頂した。どびゅるるるるう♥ びゅくうつ♥ ぴゅつぴゅつ♥」

大量の精液が撫子ちゃんの子宮に向かつて発射される。ふたなりちんぽの脈動は止まらず、一向に射精が終わる気配はない。

新鮮な精子たちが今ごろ撫子ちゃんの卵子にたつぱりと食いついているに違いない。

それでも安心していい。わたしたちふたなりちんぽから出る精子たちに子作り機能はなかつた。女の子たちにどれだけナカ出ししようと、赤ちゃんは出来ないのだ。

その代わり、ふたなり精子は女の子たちの身体に吸収されて、女の子たちをますますエッチにしていってしまう。

わたしが射精している間、一緒にがくがく震えていた撫子ちゃんは、一生懸命ふたなりちんぽを締め付けて精液を一通り搾り切ると、やらしい笑顔を浮かべて言つた。

「気持ちよかつたあ♥ 友梨佳先生、明日もふたなりセックスのご指導、よろしくお願ひしますう♥ 友梨佳先生が性欲溜まってぴゅつぴゅしたくなつた時は、いつでも呼んでください♥ 待つてます♥」

「わかったわ♥ 撫子ちゃんのことはこれから徹底的に指導してあげる♥ 覚悟しておきな

さい♥」

そう言うと、撫子ちゃんは嬉しそうに頬をユルユルに緩ませた。

たっぷり楽しませてもらつたけれど、わたしはこんなに淫乱な本性を隠し持つていた撫子ちゃんならもつとこの学園で活躍できると思つていた。

わたしだけで撫子ちゃんを楽しむのはもつたいたい。

このクラスのふたり肉便器に、撫子ちゃんを育て上げたい。

わたしはそんな計画を考え始めていた。

美姫 一章

わたしはあれ以来ずっと、股間に生えてきた謎の突起に悩まされていた。

入学初日から何日か経過しても、その突起は消えることなく、むしろ少しづつ大きくなっていた。今では五センチほどの大きさになっていて、無視するにも限界が来ていた。

触つてみると、なんだか変な感覚があつて、わたしは出来るだけその突起に触れないようになっていた。

(どうしよう……これ、まるで男の子のおちんちんみたい……こんなのが誰にも相談できないよ)

幼馴染で親友であるはずの愛衣や撫子にも、恥ずかしくて言えなかつた。だって、こんなものが生えている女の子なんて気持ち悪い、というのは自分が一番わかつていた。

わたしは共同浴場に行くことも出来ず、毎日部屋に備え付けのシャワーを浴び、その度に鏡に映る股間に生えたおちんちんのようなものを見てため息をついていた。

日に日に大きくなっているのが分かるのだ。

このままのペースで行けば、取り返しのつかないことになる。わたしはようやく、保健室で診てもらつたほうがいいのかも知れないと真剣に考え始めた。

わたしは中学生のころ水泳部で部活を頑張つていた。水中を泳いでいく感覚が好きで、いつまでも泳いでいられた。他の人と比べてもタイムは短いし、この白百合女学園でも水泳部に所属しようと思っていた。

今はなんとかスカートの前がもつこりせずに済んでいるけれど、もしこの股間の突起が小さくならなかつたら、みんなの前で水着を着ることが出来なくなつてしまふ。それだけは避けたかった。

まだ体験入部期間は始まつていなかつて、今のうちに何とかしなければならないよし、保健室で診てもらうしかない。嫌々ながらそう決めた。

その日、保健室に向かう途中も、恥ずかしさで何度も躊躇した。

こんなものが生えてしまつたところを、保健室の先生だとは言え見られてしまふだなんて、顔から火が出そだつた。

勇気を出して保健室の扉を開けると、すでに先客が待つっていた。

「あれ？ 美姫……？」 ちょ、ちょっと見るなあつ」

そこには保健室の先生の前でスカートを脱いでぱんつも今まさに脱げようとしている愛衣がいた。

どうして、先生の前でそんな姿に……その答えはすぐに閃いた。

もしかして、愛衣も同じ症状なのだろうか？ わたしと同じように、アソコにおちんちん

みたいなものが生えてきてしまったのかな？

「愛衣ちゃん、隠さなくていいのよ◆ 恥ずかしいモノじゃないんだから◆」

「で、でも凛先生、こんなの……変だし……」

「大丈夫◆ もしかしてだけど……あなたも、お股のところに、デキモノが出来ちやつたらからここに来たんじやない？」

「どうしてそれを？」

わたしは衝撃を受けた。どうして、この女の先生はそのことを知っているんだろう？
やつぱり、愛衣にも同じことが？ というか、お股におちんちんみたいなものが生えてきちゃうことって、よくあることなんだろうか？

困惑していると、その白衣を着た保健室の先生はもう一つ椅子を持つてきて、愛衣が座っている隣に置いてくれた。そして、そこに腰を下ろすよう手で示した。

「わたしのことは凛先生って呼んでね◆ よろしくね◆」

その先生はなんだか大人の女性の色氣を醸し出していた。身体を動かすたび、羽織つている白衣の下に着ているブラウスの中で、とっても大きな胸がブルブルと揺れているのがわかつた。

ものすごくセクシーな先生だなと思つていると、にこりと笑顔でこう言われた。

「お名前は？」

「美姫です」

「あら、同じクラスなのね◆ しかも一人とも友梨佳ちゃんのお気に入り◆ あらあら◆」

「え？ 今、なんて……？」

「なんでもないわ◆ さてさて二人とも、とりあえず見せてもらえないと何もわからないわ。スカートと下着を脱いで、お股をわたしに見せて『らんなさい◆』

「は、はい……」「わかりました……」

わたしたちは顔を見合させた後、揃つて、凛先生の前で下半身を裸にさせられた。親友同志で一緒にお風呂も入ったことのある間柄だったから、恥じらいつつもスカートも下着も脱いでしまったのだ。

診療目的だとは言え、他人に自分の股間を見られるのは恥ずかしくてもじもじしてしまつた。

ちらつと愛衣の股間を見ると、そこにはわたしのより二倍くらい大きな腫れ物が出来ていた。
いや、それはもはや完全に男の子のおちんちんと言つてよかつた。先っぽが太くなつていて皮が剥けている。さらに、わたしのおちんちんと違つて、なぜかカチカチに固くなつていた。

「うわ、美姫にもこれ、生えてきちゃつたんだ……仲間がいてよかつたあ」

「そうだね。でも……愛衣ちゃんの、おつきくなつてない？ さつきからピクピクしてるし」

「うん、なんかおかしくて……朝からずっとこういう風に石みみたいに固くなつちやつて、し

かもムズムズするんだよね」

愛衣ちゃんは不思議そうにそれを指でつんつんと触っている。

その様子を見て、凛先生はなぜか嬉しそうに笑顔を浮かべた。そしてわたしたちの全身を品定めするような目つきで見て、舌なめずりをしている。なんだか様子がおかしかった。

そして、凛先生はわけのわからないことを言つた。

「おめでとう、二人とも。愛衣ちゃんと美姫ちゃんは、今日から晴れてふたりよ♥」

「ふたり?」「なんだそれ?」

「おちんぽが生えてきちゃった女の子のことよ♥ これは正真正銘のおちんちん、男の子に生えているのと基本的には同じものよ」

「え……?」「うそ、それって……?」

「これから二人は、メスちんぽ性欲に悩まされることになるわ♥ 女の子のことが可愛くてしようがなくなつて、そのおちんぽを触らせたり、舐めさせたり、しまいにはおまんこに入れたくなつちやうのよ♥」

「は?」「い、意味わかんない……」

「もう、普通の女の子としての生活は出来ないと思いなさい♥」

「ちよ、ちよつと待つてよ……そんなの、おかしいでしょ! ありえないって……んんつ♥」

反論していた愛衣ちゃんが、突然妙な声を上げる。

見ると、凛先生におちんちんを手のひらで握られていた。根元のところを優しく手のひらで包まれ、ゆっくりと上下に動かし始めている。

わたしはようやく頭が働き始めた。あれは、男の子がよくするらしいオナニーと同じ動きだ。

男の子とおちんちんが生えてきたということは、そのおちんちんをああいう風にじigaかれたら、愛衣ちゃんはもしかして、気持ちよくなつてしまふ……?』

「な、なにこれ……♥ り、凛先生、やめてつ♥ それつ、なんか変な感じつ♥」

「最初は慣れなくとも、徐々に気持ちよさがわかつてくるわ♥ ほらほら、凛先生のおてでで初めての射精しちゃいましょうね♥」

「しゃ、射精……! ? んああつ♥ や、やばつ♥ ちょっと、本当にやめてつてば……んおおつ♥」

わたしはしごれたように動けなくなつてしまいながら、目を見開いて、愛衣ちゃんがおかしくなつていくのを見つめていた。

しごいてもらっているおちんちんがどんどん赤く大きくなつて、ぱんぱんに膨れ上がりしていく。

愛衣ちゃんは段々と目元がとろんとなつてきてしまつて、なぜかぴーんと足を伸ばして、悶えていた。

「これ、なに……んおおつ♥ なんか、ゾクゾクする……♥」

「いっぱい気持ちよくなつちやいなさい♥ その感覚は、快感よ♥ たっぷり味わつて♥」

「だ……ダメだこれ、き、気持ちいい♥ 凜先生、そうやつてシコシコすると、気持ちいいよおつ♥ んおほおつ♥」

おほお♥ とありえないくらいだらしない声で喘ぐ愛衣ちゃん。

ただただわけがわからないまま、気持ちよさそうな愛衣ちゃんを見ていると、突然体をびくっと震わせて背中を波打たせた。

「あつ、なんか出るう♥ ちんぽから熱いの出ちやいそう♥ 止めらんない♥ んおおおおおつ♥ おおおおおお♥ んぐう♥」

びゅるつ♥ びゅるるるつ♥

愛衣ちゃんはいきなり、おちんちんから白い液体を飛ばした。それは勢いよく凛先生のストッキングにかかり、べつとりとこびりついた。

ぴくぴくと震えて、下品な声でうわ言のように呟いている。

「おおお♥ んおおお……♥ 射精、しちやつた……♥ ふたなりちんぽで精液出しちやつた……♥ おおお♥」

「どう? 射精するの、頭おかしくなるくらい気持ちよかつたでしよう? これがふたなりの特権、超強烈な快感よ♥ 一度味わうと、普通の子は毎日射精しないと気が済まなくなつちやうわ♥」

「やば……♥ 」んなの知つたら、ダメになつちやうじyan……♥ めちやくちや気持ちよかつたよお……♥」

いまだにゾクゾク♥ と体を震わせている愛衣ちゃん。その姿はあまりにもだらしなくて、わたしは正直ドン引きしてしまった。

だから、凛先生がこう言つてきた時、わたしは首を縦に振らなかつた。
「さて、次は美姫ちゃんの番♥ おちんぽじごいて、たっぷり射精しましょうね♥」

「や、やめてくださいっ」

凛先生がわたしのおちんちんに手を伸ばしてきたのを、すつと避けて、自分のスカートとぱんつを慌てて拾つた。そして大急ぎで身に着けながらじりじりと後ずさりした。

「こんなの、おかしいに決まってる!」

「失礼しますっ!」

わたしは保健室を出て一目散に自分の寮部屋へと向かつて駆けだした。

愛衣があんな風になつてしまつたのがショックだった。精液を出してだらしない笑みを浮かべる愛衣の姿が脳裏にこびりついて離れない。

絶対に、あんな風になりたくない。わたしは絶対に射精なんてしてたまるものかと決心した。

女教師友梨佳 四章

わたしはその日、職員室で凜先生に手招きされた。

凜先生は、あれから五年経ったのにも関わらず、全くその美貌は衰えていなかつた。

先生自身の研究でわかつたらしいのだけれど、実はふたなり精液を飲み続けると、年を取つても老けるスピードがありえないほど遅くなるらしかつた。

ますます肌はぴちぴちになつてゐるし、胸も以前より大きくなつてゐる気がする。どんどん魅力的になつていく凜先生も、もちろんわたしの尊敬する先輩教師の一人だつた。

「どうしたんですか、凜先生♥」

「こっちにきて♥」

意味深な笑みを浮かべてゐるから、期待して身を寄せると、こつそり教えてくれた。

「これが最新のふたなり女生徒のリストよ。新入生の欄を見て♥ 一年B組の、友梨佳ちゃんが気に入つてた二人に、おちんぽが生えてきたわ♥」

「本当に……？ 美姫ちゃんに、愛衣ちゃんまで……。これからわたしが犯してあげようと思つてたのに。ちよつとがつかりです」

「あら、喜んでくれると思ったのに。だつてふたなり教え子と一緒に、同じ女の子を輪姦してあげられるのに♥」

「誰がふたなりになるかはランダムだから仕方ないですけどね……あれ、凜先生、今、なんて言いましたか？」

「同じ女の子を輪姦してあげられるのに、つて言つたのよ♥」

わたしはその言葉から閃いていた。

この子たちと一緒に撫子ちゃんを犯すことで、ふたなり精液便器として一歩ずつ調教していくのはどうだろう？

これまで観察した限りだと、三人は偶然にも同じ中学出身の幼馴染らしかつた。いつも仲良く一緒にいて、楽しそうにじやれあつてゐる。

撫子ちゃんがわたしの淫乱メス犬に成り下がつてゐるのを知らずに。
愛衣ちゃんと美姫ちゃんの二人にオスちんぽが生えてきてふたなり化してしまつたのなら、好都合だ。

きっとまだ二人はふたなり性欲に覺醒していないに違ひない。だから、撫子ちゃんを襲わないのだ。

わたしが二人を導いて、何年間も仲良くしてきた幼馴染を犯す、とびきりの快感を教え込んでやればいい。

三人を撫子ちゃんのおまんこでつながつた、穴兄弟ならぬ、ふたなり穴姉妹にしてしまうのだ。

「凛先生、わたし、いいこと思いついたんです！」

「どういうことかしら？」

「愛衣ちゃんも美姫ちゃんも、撫子ちゃんに夢中にさせちやいましょう♥」

わたしは一通り計画を話した。撫子ちゃんを自分のメス奴隸にしたこと、これからクラスのふたり精液便器にしたいこと、そのための第一歩としてふたり愛衣ちゃんに撫子ちゃんのおまんこの虜になつて欲しいこと。

凛先生はにこりといやらしい笑みを浮かべて、わたしの案に協力してくれた。

「素敵なアイデアね♥もちろん手を貸すわ♥さっそく今日の放課後、実行しましよう♥」

わたしの撫子ちゃん精液便器計画は、着々と順調に進行していくのだつた。

放課後、わたしはいつも通り一年B組に撫子ちゃんを呼び出した。

「友梨佳先生♥ 今日もいっぱい気持ちいいことしましよう♥」

これまで毎日おまんこにナカ出し射精して、入念にふたり精液を沁み込ませた撫子ちゃんは、すっかり淫乱ドスケベ娘になつてしまつていた。

わたしの顔を見るたび発情し、頬を染め、媚びるような目でわたしを見つめてくる。

普段は清楚でおとなしいお嬢様なのは変わらないのに、わたしと目が合つた時だけ色気溢れる表情を見せる撫子ちゃん。すっかりふたりちんぽ狂いと化していた。

「今日は、特別なお客さんを呼んでるつて話したでしよう？ もうすぐ到着するから、たつぱり歓迎してあげるのよ♥」

「はあい、友梨佳先生つ♥」

従順にわたしに従う様子は、完全に隸属したメス奴隸だった。

少し待つと、予定通り、凛先生が愛衣ちゃんを連れてきた。

愛衣ちゃんは最近、毎日保健室に通い詰めて、凛先生に抜いてもらつて快楽欲求を満たしているらしかつた。今日も抜いてもらえるはずなのに、自分の教室に連れ戻されてちよつと困惑しているのが読み取れた。

すでにちんぽ快樂を待ちわびて、スカートを押し上げてふたりちんぽがガチガチに勃起しているのが丸見えだ。

わたしと撫子ちゃんが並んで机に腰かけているのを見て驚いた顔をした。

「撫子……？ どうして……？」

「愛衣ちゃん♥ 友梨佳先生から聞いたよ♥ ふたりおちんぽが生えてきちゃつたんですね♥」

「なつ！ そ、それは……どうして、そんなこと撫子に言つたんですか、友梨佳先生！？ つていうか、どういうつもりなんですかつ！？」

「それは撫子ちゃんの口から聞きなさい♥」

わたしが顎をしゃくつて指図すると、撫子ちゃんはふらふら♥ と愛衣ちゃんに近づいて、

ドスケベないやらしい笑みを浮かべる。

「それは、わたくしが愛衣ちゃんのおちんぽをヌキヌキしてあげるためです♥」

「な、撫子……！？ んおおつ♥」

撫子ちゃんがスカートの上からナデナデ♥ としてあげただけで、愛衣ちゃんのちんぽはビクビク動いて、感じまくっているのが分かる。

スカートを捲り上げ、下着から飛び出した血管の浮き出たバキバキ勃起ちんぽをしごいてあげると、愛衣ちゃんは至福とばかりの表情を浮かべ、うわ言のように言つた。

「こんなに、いやらしい手つき……撫子、どうしちやつたの？ んほおつ♥」

随分とだらしない喘ぎ声をあげるなあ、とわたしはかつてのふたなりクラスメート、紗耶香を頭の片隅で思い出しながら、例の計画を離した。

「撫子ちゃんには、このクラスのふたなりの精液便器になつてもらおうと思つてゐるの♥ いずれふたなりっ娘が増えてきた時に、ちゃんと処理してあげられる女の子が必要だと思つて♥」

「そうなんです♥ わたしはみんなの性欲処理がかりになるんですよ♥ 愛衣ちゃんのふたなりちんぽが勃起して苦しそうなときは、わたしがいつでもコキコキ♥ してあげます♥」「そ、そんな……撫子は、それでいいの？ んひいつ♥ そこしげいたらやばいいつ♥」「んふふ♥ 気持ちいいんですね♥ わたしは愛衣ちゃんのそんな顔が見れて嬉しいです♥ これからも色んなふたなり女の子たちの快樂に溺れた顔が見れると思うと、ゾクゾクしちゃいます♥」

「撫子……？ そ、それダメえつ♥ 本当に興奮しちやうからあつ♥」

愛衣ちゃんは撫子が制服の前を開けて、ブラジャーのホックを外し出すと、焦った声をあげた。

同じふたなりとして、必死に射精をこらえているのがわかる。どうやら自分が射精するだらしない姿を見せたくないと思つてはいるらしかった。

ブラを外すと、例のボリュームたっぷりの巨乳が姿を現す。愛衣ちゃんの目はそれに釘付けになつて、すっかり息を荒げてしまつてはいる。むしやぶりつきたくてたまらなそうだ。

「な、撫子の胸、すぐお……♥」

「愛衣ちゃんに気持ちよく射精してもらうために、おっぱい奉仕してあげます♥」

そのたゆんだゆんのおっぱいで、ふたなりちんぽをぴつたりと挟んでしまつた。むにゅうう♥ と圧迫され、愛衣ちゃんは恍惚としながらも辛うじて理性が残つてはいるようだつた。

「ダメだよ、撫子……こんなこと、やめよう？ ……んおおつ♥ おおおつ♥」

「そんな真面目な」と言いながら、すごい声出ちやつてますよ、愛衣ちゃん♥」

「おほおつ♥ だつて、おっぱいで挟むなんて卑怯だよお♥」

撫子ちゃんは弾力たつぷりの巨乳を、両手で左右から挟んで、愛衣ちゃんのちんぽにムニユムニユ♥ と押し付けてはいる。

愛衣ちゃんは耐えられないとばかりに。ボニー・テールの髪を振り乱してよがつた。

「おっぱいすつごい柔らかい♥ このままじゃわたしたち友達じゃられなくなっちゃう♥ 撫子のこと、性欲の捌け口にしか考えられなくなっちゃう♥ おおおお♥ これダメ、気持ちいいい♥」

「わたしのこと、メス奴隸にしちゃっていいんですよお♥ わたしのおっぱいにふたなり精液ぶちまけてください♥」

「おおおおおお♥ イクイクつ♥ 撫子ちゃんにぱいざりされてイクう♥ 射精するといろ見られる恥ずかしいよお♥ で、出るう〜〜♥ おぐうつ♥ おおおおお♥」

びゅるるつ♥ びゅーつ♥

愛衣ちゃんはびくんつ♥ と背筋を伸ばして精液を放った。撫子ちゃんのおっぱいで受け止めきれずに、ぱたぱたと白濁液が教室の床へと垂れる。

よほど気持ちが良かつたようで、愛衣ちゃんはしばらく射精が止まらず、全身に力を入れたままおおおお♥ おおおお♥ と変な喘ぎ声をあげながら震えていた。

撫子ちゃんは射精が終わるまでおっぱいをムニュムニュ♥ と動かし続け、ねばねばの精液まみれになってしまった。首筋や顔にまで、ドロドロの精子がこびりついている。

わたしはその様子を見ても満足していなかつた。

まだまだ愛衣ちゃんなら射精できると思った。撫子ちゃんにもつともつと搾り取らせて、もう本当に撫子ちゃんに奉仕してもらわなければ満足できない体にしてしまうのだ。

「撫子ちゃん、まだまだ続けて♥ 愛衣ちゃんが精液出し尽くしてカラカラになつちやうまでエッチなことやめちやダメよ♥」

「わかりました、友梨佳先生♥ 愛衣ちゃん、ごめんね♥ イつたばかりなのに気持ちよくしちゃうね♥」

「えつ……撫子？ ちょ、ちょっと待つて、もう少し休ませて……♥」

「ダメです♥ 次はわたしの淫乱おまんこが、愛衣ちゃんのふたなりちんぽを待ちわびて、ビショビショになつてるんですから♥」

撫子ちゃんは、スカートの下から下着だけを脱ぎ、ヌレヌレのおまんこを見せつけた。

愛衣ちゃんの手を取つて、その指をそこに触れさせ、くちゅくちゅ♥ と愛撫させる。割れ目をいじられる快感に撫子ちゃんはあんつ♥ と可愛い声を上げた。

「こ、これが……撫子のおまんこ……♥」

愛衣ちゃんはその感触にまた興奮が加速してしまつたようで、射精したばかりのふたなりちんぽがビクビク震えてしまつてゐる。

(おまんこにふたりちんぽ、いれてみたいんだよね♥ すぐわかるわ♥)

可愛い♥ と思いながら眺めていると、撫子ちゃんはそつと囁いた。

「触るだけで満足なんて、してないですね♥」

そして、椅子に座つた愛衣ちゃんのふとももの上に跨つた。一人は向かい合つたまま距離を詰めて、おまんことふたりちんぽが触れ合うほどぴつたりとくつついた。

「な、撫子の身体の体温、感じる……♥ どうしよう、わたし、撫子とセックスしたくなつ

てきちゃつたあ……♥

「それでいいんだよ、愛衣ちゃん♥ わたくしのいやらしい体でもつともつと興奮していくだ
さい♥」

撫子ちゃんがふたなりをダメにする、優しい囁きで誘惑した。愛衣ちゃんはすっかり脳み
そをトロけさせられて、おまんこのナカで精液を出しまくることを妄想せずにいられない
はずだ。

「それでは、 irechaya imasu ne♥」

「ま、待つて……撫子、それは、やつぱりだめっ」「

「どうしてですか？」

「セックスしたら、戻れなくなるう……♥ 撫子のこと、エッチな肉便器としか考えられない
くなつちやう♥」

「そうしていいんです♥ わたくしはこのクラスの肉便器になるんです♥ ほら、このおま
んこのナカで、びゅーびゅー♥ つて、したくないんですかあ？」

「そ、それは……」

「愛液まみれでネチヨネチヨになつたふたなりちんぽを、おまんこのヒダヒダでくちゅく
ちゅ♥ つてしまいてあげます♥ 想像してみてください、愛衣ちゃんのちんぽが、わたく
しの一一番エッチなところにはいるところを……♥」

「そ、そんなの、気持ちいいに決まってる！ 想像したらダメなのに、想像しちゃつたあ
入れたくて仕方なくなつてきちゃつたあ♥ 撫子とセックスしたいつ、おちんぽ突っ込んで
気持ちよくなりたい……♥」

「正直でいいですね♥ すぐにびゅつ♥ つて精液出ちゃわないようにしてくださいね♥」

撫子ちゃんは、愛衣ちゃんのバキバキ勃起ちんぽの上に腰を下ろしていく。
トロけた割れ目の入口が亀頭に触れて、ちゅぽん♥ と肉棒を飲み込んだ。そのままぐじ
ゅぐじゅと奥深くまで、迎え入れていく。

「おほおつ♥ おおおおおつ♥ 撫子のまんこおつ、気持ちいいつ……♥ 絡みついてくるうつ
♥」

撫子ちゃんのお尻がぺたんと愛衣ちゃんの太ももに落ちて、二人は深く深く結合した。き
つとおまんこのナカで、亀頭が子宮口にぴったりとくつついてキスをしているに違いない。
愛衣ちゃんは亀頭が入つただけで、唇の端から涎を垂らし始め、一番奥まで挿入した今も、
たまらない快感で体をヒクヒクと震わせている。

「わ、わたし、ふたなり童貞、卒業しちゃつたあ……♥ 撫子のおまんこで、卒業しちゃ
つたよお……♥」

「あんつ……♥ 愛衣ちゃんのおちんぽ、カチカチになつて喜んでるのが伝わってきます……

…♥ 初めてのおまんこの入れ心地はどうですか♥」

「こんなの、一回味わつたらやめられなくなつちやうう……♥ 女の子とセックスしないと
生きていけないとになつちやうつてえ……♥」

「エツチしたくなつたら、わたくしに言つてください♥ いつでもわたしが、愛衣ちゃんのおちんぽをおまんこで優しく受け止めてあげます♥」

そして撫子は、愛衣ちゃんの上で腰をグラインドさせ始めた。

ぬちゅぬちゅ♥ と音を立てて、こすりつけるように腰をゆらゆらと動かす撫子。愛衣ちゃんはポニーテールを振り乱してよがっていた。

「あつ、ああつ♥ ダメ、それダメえつ♥ おほおおおつ♥」

「さつき出したから、まだ我慢できるはずです♥ いっぱい精液溜めて、気持ちよくぴゅつぴゅつ♥ つてしましょうね♥」

撫子ちゃんは容赦なく、わたしが教え込んだいやらしい腰使いで、愛衣ちゃんを責め立てていく。

ふたなりちんぽにたっぷり愛液をまぶして、柔らかいヒダヒダでしごきあげ、最高の快楽を与えてあげているのだ。

(愛衣ちゃん、あんなにだらしない顔になっちゃって、すうごく気持ちよさそう♥ これはもう、撫子ちゃんなしでは生活できなくなつちやうわね♥)

わたしはまた一人、女生徒が快樂の沼に引きずり込こまれていくのを見て、にやりと笑みを浮かべてしまった。

「な、撫子お♥ ふたなりちんぽ、溶けちやいそう♥ もっと撫子と、エツチなことしたい

♥」

「いいですよ♥ 心ゆくまでわたくしの身体で気持ちよくなつてください♥」

「おおお♥ おおおお……♥ おっぱい……♥ 撫子のおっぱい、触らせて♥」

「愛衣ちゃんの精液まみれになっちゃつてますけど、それでよかつたら♥」

撫子がにこりと笑みを浮かべると、撫子は我慢できないとばかりに激しくそのもちもちおっぱいを驚掴みにして揉みしだいた。

「柔らかいっ……♥ 撫子の身体、気持ちよくて、あつたかくて、ふにふにでえ……♥」

「うふふ♥ 愛衣ちゃん、わたくしも、愛衣ちゃんとキスしたくなつてきちゃいました♥ ちゅーつ♥ つてしていいですか?」

「こんな気持ちいいのに、キスなんて、そんなことしたら……♥ すぐにイッちやうつて…

…んちゅ♥ あむう♥ ちゅうう♥」

愛衣ちゃんにぴたりと唇を重ねられ、愛衣ちゃんはそれを美味しそうに味わっていた。くちゅくちゅ♥ と舌を絡め合わせ、唇をお互いにはむはむと甘噛みしあつて、食りあう

ようなキスをしている。

可愛い女生徒同士が、こんなにいやらしいことをしている姿は、なんともいえない耽美的な光景だった。彼女たちがついこの間までただの幼馴染で、ちんぽさえ生えてこなければこんなことにはならなかつたのだと思うと、ますます興奮してしまう。

ふたなりちんぽをおまんこで咥えこまれ、両手でおっぱいを揉みしだき、唇まで甘い涎まみれにされて、愛衣ちゃんは限界を迎えた。

「撫子ちゃん……あむう♥ んんう……♥」

「ちゅつ♥ ちゅつ……れろお♥」

「んんんんん♥ んはあつ、撫子つ……んちゅ♥ んむう……んんう！」

びゅるるるつ♥ ぴゅつぴゅつ♥ びゅくうつ♥

イクと叫ぶことすらできず、ガクガクと腰を震わせながら、ふたなりちんぽから精液を噴き出す愛衣ちゃん。ピンと足を伸ばしたまま、白目を剥きそうになっている。

最後まで腰をグラインドされながら精液を搾り取られ続け、唇を吸われ続けていた。

撫子がキスをやめると、愛衣ちゃんはぐつたりと背もたれにもたれかかり、まだ弱弱しく痙攣していた。

「れろれろお♥ んちゅ……んはあ♥ 愛衣ちゃん、すゞぐ気持ちよさそうにイキましたね♥ 大丈夫ですかあ♥」

「もう、ダメえ……♥ 撫子、気持ちよすぎ♥ 毎日撫子とセックスするう……♥」

「そうしましょうね♥ いつでも愛衣ちゃんの便器になつてあげますよ♥ それより、まだ、ふたなりちんぽに精液、残つてないですか？ 最後までしーしー♥ つてお漏らししてくださいさい♥」

「おおおつ♥ 撫子のおまんこ、ぎゅうつて締まつてるう♥ 射精止まんないつ♥ おおおおおお……♥」

ぴゅくぴゅく……♥ と愛衣ちゃんが再び射精した。最後の一滴まで撫子ちゃんは逃さないのだった。

くちゅり♥ と音を立ててふたなりちんぽを引き抜き、立ち上がった撫子ちゃんを、わたしはねぎらつてあげた。

「よくできたわね、撫子ちゃん。なかなかの淫乱つぶりだつたわ♥」

「ありがとうございます、友梨佳先生♥ ここまでこれたのも、友梨佳先生の指導のおかげです♥」

「この調子で、これからも頑張つてちようだい♥ 次の標的は、美姫ちゃんよ」

「美姫ちゃんのふたなりちんぽを、わたくしに虜になるまで搾つて搾つて搾りまくればいいんですね♥ わかりました♥」

撫子ちゃんはすっかり精液便器にふさわしくなつてしまつた、いやらしい笑みを浮かべるのだった。

わたしは最後に、射精したときのまま椅子に座り続け、ぼんやりと余韻に浸つている愛衣ちゃんに話しかける。

「愛衣ちゃん、明日からも撫子ちゃんのナカで射精したい？」

「したいですっ、させてもらえるなら、何回だつてつ」

「それなら、わたしの言うことを聞いてくれるかしら？ ふふ♥ 簡単なことよ。美姫ちゃんを、明日の放課後、保健室に連れてきなさい♥ もちろん何をするかは秘密にして、なんとしてでも捕まえてくるのよ」

「美姫を……？ でも、美姫はふたなり射精、したくないって……絶対、他の人にはちんぽを触らせたくないって……」

「撫子ちゃんとセックスし放題よ？ それなのに、美姫ちゃんととの友情を優先するのかしら」

「わたし……撫子とセックスしたいです♥ わかりました、美姫のこと、連れてきます♥ きっと美姫だって、射精の気持ちよさを知れば、わかってくれるはず……」

愛衣ちゃんは情けないことに、自分のふたなりちんぽ快楽のために、友達をわたしに売り渡してしまうのだつた。

美姫 一章

わたしはあれ以来、ひたすら、ふたりちんぽが疼くのを我慢し続けていた。
愛衣ちゃんが目の前で射精したあの日から、ちんぽが固くなつて、うずうずして仕方なくなつてしまふのだ。

(ダメ……絶対射精しないって、決めたんだからっ)

わたしは絶対に射精しないと決めていた。

しかし、ふたりちんぽはいつの間にか愛衣ちゃんと同じくらいの大きさまで成長し、わたしの意思に反してカチカチに勃起してしまふようになつていた。

ヒクヒクと震えて、苦しそうに、はちきれんばかりになつてしまふのだ。
次第にちんぽは元気を増していき、朝起きたときも、授業中も、放課後も、ずっと勃起し続けるようになつた。

ちよつとだけしごけば、すぐにでも射精して気持ちよくなれるのかもしれない。
わたしはまだ、ふたりになつてから一度も射精していない。あれだけ気持ちよさそうにしていたから、よほどイイんだろうと何度も想像した。

ちんぽが我慢汁を漏らして刺激を求めてきて、悪魔の囁きが耳に聞こえるようになり始めていた。

ふたり射精は、どれくらい気持ちいいんだろう？

一回くらい射精しても、ハマつてしまふことはないんじゃないかな？

他の人が見ていないところで、一回くらいオナニーしてしまえばいいんじゃないかな？
好奇心と誘惑に負け、ついつい勃起したふたりちんぽを触つてみたことは何度もあつた。一瞬でなんともいえない甘い感覚が走り抜けて、わたしは決まってそこで我に返ることを繰り返していた。

「触つちやダメっ」

一度でも射精したら、やめられなくなつちやうに決まつてる。毎日オナニーばっかりするようになつちやう。わたしは誘惑に打ち勝つて見せるんじやなかつたの？そう思いつつも、愛衣のだらしない姿を思い出すと、意地でもオナニーしないことを貫き通せた。

(絶対にあんな風になりたくないっ)

おおおおつ♥ とだらしない声をあげ、ちんぽの先から白くてドロドロの汁を漏らす愛衣の姿。

でも、愛衣ちゃんが勝手に勃起して、射精したい、射精したいって言つてる気がするの」

「ちんぽが勝手に勃起して、射精したい、射精したいって言つてる気がするの」

愛衣ちゃんは保健室で初めて射精した次の日、そう言つた。

あれ以来、毎日射精しないと気が済まなくなってしまったらしく、すっかりふたり快楽にハマってしまっていた。

ちんぽをしごいてもらって、精液を出させてもらうのを、「抜く」というらしいけど、愛衣ちゃんは凛先生にそれから何度も抜いてもらつていてるらしく、それをしてもらえない時はトイレで一人寂しくちんぽをコキコキして、便器に精液を出していると恥ずかしそうに教えてくれた。

本当は射精なんて気持ちの悪いことはしたくないのに、勝手にふたりちんぽが勃起して、しごかずにはいられなくなつてしまふと言つたのだ。

「もうヤだよ……ちんぽなんて要らないよお……」

愛衣ちゃんもわたしと同じように、ふたりちんぽに迷惑をかけられているのだった。

そこで、わたしたちは二人で一緒に考へるようになつた。

あれから愛衣ちゃんとわたしは、どうにかしてふたりちんぽを消すことが出来ないか、方法を探し始めたのだ。

そしてある日、ついに愛衣ちゃんから、救いの手が差し伸べられた。

「ねえ美姫、聞いて聞いて！ わたし、すつごいい話聞いてきたの！」

「なになに？」

「凛先生がふたりちんぽを消す方法を見つけてくれたら嬉しいの！」

わたしの中で喜びが駆け抜けた。

これで、わたしはふたりちんぽ射精の誘惑から逃れることが出来る。

我慢し続けた甲斐があった、と思う一方で、ちょっともつたいないような気がするのも事実だった。一度も射精の味を知らずに、ちんぽを消してしまふのは、なんだか損じやないかなと思つてしまつたのだ。

そんなだらしない自分を押し殺して、わたしは愛衣に話の続きを聞いた。

「それで、どうすればふたりちんぽを消すことが出来るの？」

「えっと、それは……凛先生の口から、直接聞いて」

「え？ なんで？」

「い、いいじやん、わたし説明するの下手だから……とりあえず、保健室一緒に行こうつ」

わたしはなんとなく違和感を感じて首を傾げた。

愛衣はそんな風に自ら卑下するような子じゃなかつたはずだ。何か、嘘をつかれているような気がしてならなかつた。

（もしかして、ドッキリとか？）

色々考えようとしていると、愛衣に背中を押されて、ぐいぐいと保健室へと連れていかれてしまつた。

とにかく、ふたなりちゃんぽが消えるという朗報で舞い上がってしまっていて、嫌な記憶が残っている保健室にも、素直に入ってしまった。

「あら、いらっしゃい♥ 「一人とも♥」

凛先生が出迎えてくれて——そして、隣にもう一人女の先生がいた。
美優先生。ホールで行われた始業式で、みんなの前で話していた美人の先生だ。胸やお尻が大きくて、すごく美人だったから覚えていた。

どうして美優先生がこんなところに。そう思つていると、愛衣が妙なことを言つた。

「ごめんっ、美姫……わたし、美姫のこと騙したっ」

「え……？」

呆気に取られているうちに、わたしは愛衣に両腕を掴まれて、がしやりと何かを嵌められた。カチヤカチャと鳴る金属製の何か。振り返つてそれを見て愕然とした。

手錠。後ろ手に嵌められ、振りほどこうとしても無駄だった。

救いを求めて美優先生や凛先生を見ても、二人ともいやらしい笑みを浮かべるだけで、助けようともしてくれない。

後ろで、愛衣が懺悔するかのように呟き続けていた。

「美姫、ごめん……わたし、美姫を売った……ごめん……」

「ちょっと待つて、愛衣、なにこれ……」

「わたしたちが、愛衣ちゃんにそういうお願いしたのよ」

言つたのは美優先生だった。

理解が及ぶのに時間がかかった。美優先生の指示で、愛衣はわたしを保健室に連れてきて、手錠をかけた……そういうことなら、わたしは、これから何をされてしまうんだろう？

答えは簡単だった。

わたしのふたなりちゃんぽを、射精させてしまおうとしているのだ。

「や、やめてっ！ 愛衣、離してよっ」

「ごめんね……」

愛衣は繰り返し謝りながら、わたしを椅子に座らせ、動けなくなるよう椅子に素早く括り付けた。そのまま縄でわたしの腕や足を、椅子に縛り付けてしまう。

抵抗しようとしても、愛衣は何かにとり憑かれたようにためらいなく縄をわたしに巻く手を止めることはなかった。

身動きが取れなくなつたわたしの前で、愛衣は凛先生のところに駆け寄つた。

「凛先生、わたし、ちゃんと言われたとおりにやりました♥ 約束通り、気持ちいいコト、してくれますよね……？」

「もちろんよ♥ あとでたっぷり一人で楽しみましょね♥」

「は、はい♥ あ、ありがとうございます♥」

愛衣の股間では、ふたなりちゃんぽが勃起して反り返り、スカートを押し上げていた。

悲しくて仕方なかつた。愛衣はメスちゃんぽ欲求に負けて、わたしを生贊に差し出したのだ。

心の底から信用していた愛衣がわたしを裏切った。そのことがショックだった。

そして恐ろしかった。ふたりちんぽの射精欲求は、こんなにも簡単に友情を壊してしまった

うということが。

「つていうことは、ふたりちんぽを消す方法が見つかって言うのも……」

「全部、嘘なの……ごめんね、美姫。ふたりちんぽは、一度生えたら絶対に消える」となんていって、凜先生が言つてた。だから、ちんぽを受け入れて、ふたりとして楽しく生活するしかないんだって」

「やだ……やだやだやだっ！ わたしは、普通の女の子に戻りたいのっ！」

「美姫も、きっと一度射精したらわかるよ……あんなに気持ちいいことが出来るんだったら、ふたりになるのも悪くないって、考え直してくれるよ」

「絶対イヤっ！ やめてっ、この縄をほどいてよっ！」

わたしの悲痛な叫び声に応じてくれる人は、この保健室にはいなかつた。

代わりに、美優先生がくすぐすと笑つて近づいてくる。

「落ち着いて、美姫ちゃん。これからいっぱい気持ちよくしてあげるから、大人しくしてね♥」

「え！？ 気持ちよくって……やめてっ」

このままでは、美優先生に搾り取られてしまう。

大人の雰囲気漂う、この綺麗な先生にちんぽを触られたりしたら、すぐにでも射精してしまいそうな気がした。椅子に縛り付けられているわたしは逃げることなんて出来ず、足元で美優先生が上品に膝をそろえて屈むのを見ているしかなかつた。

「まずは、美姫ちゃんのおちんぽを見せてちようだい♥」

「いやっ！ スカート、めくらないでっ！ ぱんつ脱がせないでっ！」

美優先生の手が、そろりとスカートをめくりあげ、ぱんつをするするとわたしの足から引き抜いていくのを、抵抗できずに見守るしかなかつた。

わたしは下半身を丸裸にされ、半勃ちになつたふたりちんぽをさらけ出されてしまった。

こんなにも恥ずかしいところを見られているのに、なぜかどこかで興奮していて、ちんぽがムクムクと大きくなり始めているのが悔しくて仕方なかつた。
(どうして……勃起なんてしたくないのにっ)

美優先生はそれを見て、嬉しそうにこりと笑つた。

「美姫ちゃんの童貞ちんぽ、可愛いわね♥ わたしに脱がされて興奮しちゃつたのかしら？ ちよつとずつ大きくなつてきてるわよ♥」

「違うんですっ！ これは、勝手に……っ」

「もっと興奮すれば、もっと大きくなるかしら♥ わたしのおっぱい見せてあげてもいいわよ♥ ふふ♥」

シャツのボタンに指をかけて、外していく美優先生。

紫色のいやらしいブラジャーを下にずらすと、びっくりするくらいたわわで大きなおっぱいが姿を現した。

(すごい……柔らかそう……)

ついついわたしはそれに見惚れてしまった。昔はおっぱいなんて見ても見惚れなかつたのに、どうにかしてしまつて。視線をその巨乳から外そうとしても、どうしてもじろじろと見つめるのをやめられなかつた。

股間で、ふたなりちんぽがますます大きくなつて、ガチガチに固く勃起してしまつた。ヒクヒクと震えだし、まるで刺激を待ちわびてゐるようだつた。

(こんなはずじゃないのに……◆ ああ……◆ ちんぽ、触つて欲しい……◆)

ちんぽの先から、我慢汁がトロトロと溢れ出し、どうしようもなく欲望が体を駆け巡つた。「あらあら、随分スケベな顔になつちゃつてるわよ、美姫ちゃん♥」

「イヤ……っ！ なんで、なんでわたし、先生のおっぱいで興奮してるの……◆ こんなはずじやないのにい……」

「ふたなりのメスちんぽ欲求を認めなさい？ 一度生えてきてしまつたからには、女の子にしごいてもらつて、射精したいって思うのは仕方ないことなのよ♥」

「そんなわけっ！ わたしは我慢して見せるつ！ 絶対、射精なんてしない……！」

「どこまで我慢できるかしらね♥ ふふ♥」

そして、美優先生は、細くて綺麗な指で、わたしの醜悪なフル勃起ちんぽを握つた。血管が浮き出て、パンパンに膨れ上がつたオナ禁ちんぽを、優しくさすられた。

「ひいいいいい♥」

勝手に背筋がぴんと伸びて、ぐつと奥歯を噛んで叫んでしまつた。

温かい手のひらでカリ首のところを包皮の上から握られ、上下に動かされるのが、たまらない。

凄まじい心地よさが、腰から背中へとゾクゾク◆ と駆け上つてきたのだ。

(な、なにこれえ……♥)

初めて女人にちんぽをシコられて、わたしは未知の感覚に襲われていた。

素直に気持ちが良かつた。このまま触られたら、頭がどうにかなつてしまふと思つた。それほど怒涛の快楽だつた。

「すごい声出てるわよ、美姫ちゃん♥ これまでオナニーもしたことないつて、愛衣ちゃんに聞いたわよ？ それだったら、こうなつちやうのも仕方ないわね♥」

「だ、ダメえつ……◆ それダメですう……◆ シコシコしないでえ……◆」

「ゆつくりしぐいてあげるから、たっぷり堪能しなさい♥ ほら、シコシコ、シコシコ……」

「いひいつ♥ そ、そんなとこ、こすられたあ……◆ ダメ、絶対射精なんてしないつ！

しないんだからあつ！」

わたしは必死になつて、その身震いするほどの快感をシャツアウトしようとした。

別のことで頭をいっぱいにしようとした。

中学時代に頑張っていた水泳部。このままちんぽが生えたままだつたら、水着を着ることが出来なくなる。夢だつた大会出場も出来なくなるし、恥ずかしくてプールにも入れない。どうしてもそれだけは避けたかった。わたしはこのふたなりちんぽをどうにかして消すのだ。

一度射精したら、後戻りが出来なくなるとわかつていた。

愛衣が凛先生にちんぽをしごかれて、どぴゅどぴゅ射精する姿を思い出す。涎が垂れそうなほどだらしなく口を開けたまま、夢見心地という表情で、変な声を出してイつてしまふ愛衣。

あんな風には絶対になりたくないのだ。わたしは声に出して叫んでいた。

「愛衣ちゃんみたいになりたくない♥ ああつ♥ ふたなりちんぽから精液出すことしか考えられない女の子になりたくないよお～♥」

「我慢しても無駄よ♥ 手コキ快感に溺れて、ぴゅつぴゅつてお漏らししちゃいなさい♥ 誘惑に負けて、ぴゅつぴゅつ♥ つてしたら、すっごく気持ちいいわよ～？」

「やだやだやだ、絶対ヤダつ♥ ひいつ♥ 射精したくない、したくない、したくないよお～♥」

「射精するのは悪いことじゃないのよ？ 一回射精しちゃえば、美姫ちゃんもその良さがきっとわかるわ♥ ヒクヒクしてちんぽから、白くてドロドロの精液、出しちゃいなさいコキを披露して見せた。

（それもいいつ♥ 快感漬けでダメになっちゃう♥）

動かす度にくちゅくちゅくちゅ♥ と卑猥な音が立つてしまうほど、ちんぽは喜びのうれし涙を溢れ出させている。

腰が浮き上がりつてしまふほど、快感まみれになつたちんぽが爆発しそうになつた時―― 美優先生はいきなりじごくのをやめて、透明なカウパーまみれの手のひらを、ねちよりと離した。

ぴくぴく、とちんぽはいきり立つたまま震え続け、ダラダラと我慢汁を垂れ流しにしている。

「え……つ？」

「あら、続けて欲しいの？ 射精したくないんじやなかつたのかしら」

「そ、そうですつ、わたしは射精、なんか……絶対、しない……」

さつきまで叩き込まれていた快感がなくなつて、わたしは少し寂しさを感じていた。

手コキ快楽が恋しくなつてしまつていた。

(わたし、なんてだらしないの……◆ 折角射精を我慢するチャンスなのに、コキコキして欲しくなつちやつてるよお……♥)

「本当にいいのかしら？ もうすぐ射精できそうだつたのにね♥」

「ううう……♥ もう十分です、から……もう、わたしのちんぽ、触らないで……♥」

わたしはやらしく股を開いて、さつきみたいに亀頭からカリ首を手のひらで包んでシコシコして欲しいと懇願したい気持ちを抑えてそう言つた。

気力を振り絞つてそう言つたのに、美優先生は気持ちいいコトをやめてくれなかつた。「そんな悲しそうな顔で言われてもね？ 表情が、手コキを続けて欲しいつて、言つてるわよ♥」

そして、わたしのちんぽに、さつきとは違う刺激を咥え始めた。

根元のところを掴んで、ちんぽの皮を、ぐりぐりと剥き始めたのだ。

「あひいっ♥ やめてつ♥ 皮、それ以上剥かないでつ♥ ズル剥けになつちやうよお……♥」

「ちやんと皮はムキムキしないと、不潔なのよ？ ちよつと包茎氣味だから、今日は亀頭を丸ごと全部、剥いちゃいましょうね♥」

「だめ、ダメダメダメっ！ そんなに強引に剥いたら、皮が元に戻らなくなつちやううふたなりちんぽの先っぽ、無防備にさらけ出しちやうう……あつ♥」

にゅるん♥ と包皮が全て剥けて、真っ赤になつた亀頭が丸出しになつた。

初めて外の世界と触れたその部分は、美優先生にふー、ふー♥ と息を吹きかけられるだけを感じてしまうほど敏感だつた。

一切触られていないのに、今にも射精しそうになつてしまつて、必死になつて堪えた。つつ、つと丸出しの亀頭を指で触れるか触れないかの優しさで撫でられるだけで、ちんぽはヒクヒク震えて喜んでしまう。

そして、わたしのちんぽはお手入れ不足で、とある状態に陥つていた。

美優先生は、わたしのちんぽのカリ首周りを見て、笑いながら目を細めた。

「なにこれ、チンカスだらけじやない♥ いくらオナニーしないからつて、お手入れをサボつちやだめよ？ チンカス掃除はふたなりの嗜みなんだから♥」

確かに、わたしのカリ首は黄色っぽいカスが大量にこびりついていた。これまで一度も剥いたことがなかつたんだから、仕方ない。

美優先生は舌なめずりをして、わたしにいやらしい笑みを浮かべた。

「こんなに汚いと、お掃除してあげないといけないわね♥ 今日は特別に、わたしがお口でチンカスを全部こそげとつてあげる♥」

「や、やめてえええつ！ そんなことしたら、絶対射精しちやうつ♥ フエラなんてわたしの童貞ちんぽが、我慢できるわけない♥」

「さつそく、お掃除始めるわね♥ あーむつ♥」

ぱくりと、美優先生のエツチなお口が、わたしのチンカスだらけのちんぽを咥えこんだ。

厚ほつたい唇が、ひつたりと吸い付いている。

温かい美優先生のお口のナカに包まれた
涎かしゃはい溜までた

ちんはの相元から先まで染みれたるよしだ。猛烈な快感が来たぢよへとても気を抜いたら精液が漏れちやいそうで、わたしは汗をダラダラかきながらなんとか堪え続ける。

じゅると吸われたら、すぐにでも射精してしまう自信があった。

液びゆるびゆる出す、変態ふたなりつ娘になつちやうんだ……(心)

ぼに張り付くほど の 吸引。

そして、同時に分厚い舌がカリ首の周りにこびりついたチンカスをこそげとるように、ぐるりと一周するようになつとりと絡みついてきた。

ていた。

びゅ～～♪ ♪ びゅくり、びゅくり ♪ ぴゅるぴゅるる～……♪

わたしはこれまで感じたことのない、ありえないほどの気持ちよさで全身を震わせながら

射精は何度も続き、その間美優先生はわたしのチンカスを念入りに舐めとり続け、鈴口か

ら溢れる精液を吸い取り続けてくれていた。
その刺激でまた気持ちよくなってしまい、なかなかちんぽの脈動は終わらなかつた。

何をかも搾り取られたような達成感と共に、わたしは射精を終え、全身を包む気怠ぎと幸せたっぷりの余韻に身を預けてしまっていた。

きっと今頃、あの時の愛衣と同じようならしないアヘ顔で、涎を垂らしているんだろう。

(き、き、気持ちいい……、これ、ハマるに決まってる……、毎日射精しないと、正気

なんとか正気に戻つたころには、美優先生は、口の中にたつぶりと精液とチンカスを溜めこみ、つっこむ見せつけていた。

「美姫ちゃんのザーメンとチンカス、濃厚ですごく臭かつたわ♥ ずっとオナ禁してたせいかしらね♥」

そして、ゴクリ、とそれらを全部飲み込んでしまった。
おいしそうににっこりと笑って、美優先生は口元の残りの精液を舐めとつた後、ハンカチ

で拭つた。

そして、凛先生に目配せをして、何やら意味深なことを言つた。

「最近ね、ふたりの女の子に意地悪するのが、マイブームなの♥」

意地悪する……？ 今、十分に意地悪されたような気がしたけど、もうとひどいことをしようと言つたのだろうか？

凛先生は、何やら見たことのない器具を美優先生に手渡した。

「そんなものをつけたら、ちょっと可哀想じやないかしら？」

「いいのよ♥ わたしたちにここまで手をかけさせた罰なんだから」

その器具は金属製で、何か棒を収納できそうな形状をしていた。そこにゴムのバンドがついていて、どこかに取り付けられるようになつてゐる。

（何のケースだろう……？）

それを手に持つて美優先生はニコリと笑つた。

「美姫ちゃん、やつと味わえた射精はどうだつた？」

「気持ちよくて死んじやいそうでした……♥」

「あら、そうなの。でも、今日から美姫ちゃんは射精禁止ね」

「え？」

わたしが呆気に取られてゐる間に、美優先生はわたしの腰にバンドを取りつけ、金属製の棒状のケースに、萎えかけているわたしのふたりちんぽを、収納した。

そして、がつちりと固定した後、小さなカギを取り出し、カチャヤリ、と音を立てて施錠した。

（うそ……もしかして…）

わたしは絶望感に包まれながら美優先生に視線を戻すと、にやりとしながら言われた。

「最初、絶対射精なんてしないって言つてたじやない。そんなに射精したくないなら、この貞操帯をつけてあげる」

「そ、そんなっ！ 貞操帯だなんて… 折角、ふたりちんぽ射精の気持ちよさ、教えてもらつたのにいつ」

「隠れてオナニーしようとしても無駄よ♥ 金属ケースの上から触ろうとしても無理だから♥ わたしが許可しない限り、射精するのは禁止♥ うふつ、頑張つてね♥」

「ひどいですっ！ わ、わたしもつと射精したいよおつ！ 勃起しても射精できないなんて、地獄ですよおつ」

「一週間後に、わたしのところにいらっしゃい♥ ふたりちんぽから溜まりに溜まつた大量の精液をひり出す極上の快楽を、もう一度味わわせてあげる♥」

「い、一週間……！？ そ、そんなに我慢できるわけないっ！ 精子出せなくて頭おかしくなるうつ」

「これから毎日、美姫ちゃんのちんぽの中で、新鮮なぴちぴち精子が外に出たいっ、ドクドク射精して欲しいっ、て跳ね回るわよ♥ 正気のまま、我慢できるかしら♥ じやあね

」

美優先生は、その言葉を最後に、保健室を出て言った。

美姫 二章

貞操帯をつけられてからのわたしの日々は、地獄そのものだった。

あれだけ射精するのを嫌がっていたはずなのに、今度は射精したくてたまらなかつた。自分でふたりちんぽをコキコキしごいて、びゅるびゅる白くてドロドロの精液をたっぷり出したくて仕方なかつた。

美優先生に抜いてもらった次の日には、射精欲求はもう限界に達していた。

「出したい出したいっ、精液出したいっ♥」

貞操帯の中でギンギンにちんぽを勃起させたまま、一回もしげーことが出来ず、ただただ発情ちんぽをもてあますしかなかつた。

朝起きても、授業中も、放課後も、ひたすらちんぽのことを考え続けた。

泣きそうになりながら貞操帯の上から虚しく引っ搔き回しても、一切ちんぽに刺激は届かなかつた。

ムラムラが体中に溜まつて、常に体が火照っていた。ぐつたりと机に頭を乗せてぼんやりしていると、愛衣が話しかけてきた。

「美姫……大丈夫？」

「射精したいよおっ！ 愛衣、助けてよお……頭おかしくなっちゃうよお……」

「ごめんね、わたしにはどうすることも出来ないよ……」

そして、愛衣はどうしようもないことに、わたしがちんぽ快樂を我慢し続いているのを知りつつも、保健室に通い続け、凜先生に手コキしてもらつていた。

わたしは、愛衣と一緒に凜先生のところに行き、貞操帯を外してもらえるよう懇願しに行つた。

しかし、それは無駄足だつた。

「貞操帯の力ギは、美優先生しか持つていなゐわ。力になれなくてごめんね」

「そなんあ……こんなの、死ぬう……♥ 射精できなくて死ぬう……♥」

そして、わたしが悶えている目の前で、愛衣は凜先生に手コキしてもらつていた。

くちゅくちゅくちゅ、とちんぽをしごかれて、だらしないアヘ顔を浮かべて感じる愛衣が羨ましかつた。

「ごめんね、わたしだけ射精しちゃうね……凜先生にしごかれて……きもちよくなつちやうね♥」

「羨ましい羨ましい羨ましいっ！ わたしも精液出したいっ！ オナニーでもいいから、なんでもいいから精液出したいよお……♥」

「おおく、おほおお……♥ イクイクつ、美姫の目の前で射精するうつ♥ んぐううつ♥ びゅつ♥ びゅるびゅるい♥」

愛衣が気持ちよさそうに、ねばねばの精液を吐き出すのを見て、発狂しそうになつた。

わたしもなんとかして射精しようと、ぴょんぴょん跳ねて、貞操帯の中で、貞操帯とちんぽを擦り合わせて気持ちよくならうとしたけど、無駄だつた。なにより、そんなバカみたいなことをしようとしている自分に嫌気がさしてやめてしまつた。

何度も美優先生のところに、貞操帯を外してもらえるよう懇願しに行つた。

しかしいつも答えはノーで、その場に這いつくばつてお願いしても、カギを外してもらえることはなかつた。

そして、わたしはほんと氣が狂いそうになりながら、なんとか一週間をやり過ごしてい
た。

我慢汁をダラダラに垂らしたふたなりちんぽは、ひたすら勃起し続け、一週間一度も、萎
えることはなかつた。

三日目からは夜も眠れず、女子寮を徘徊して可愛い女の子を見つけるたび、襲い掛かりそ
うになつた。すんでのところで堪えて、オナニーしようとして、貞操帯の上から虚しくちん
ぽをしごこうとすることを繰り返した。

目の下にうつすらと隈が出来てしまい、撫子にも心配された。

「大丈夫ですか……？」最近、美姫ちゃんの様子がおかしいって、クラスで噂になつてます
よ？」

「気が狂うう……誰か、助けてえ……♥」

「わたしでよければ、いくらでも力になりますよ♥」

最近、わたしの目には撫子がひどく魅力的に見えてたまらなかつた。この可愛い親友のお
嬢様に、精液をぶっかけて犯しまくつてやりたいと思うようになつてしまつっていた。

わたしが射精を我慢しているせいもあると思うけど、なんとなく、撫子が色っぽくなつて
いる氣がするのは気のせいだろうか。

ほんの少し、撫子の髪から精液臭い餓えた匂いが漂ってきたような気がしたけど、きっと
氣のせいだろう。

この大人しい撫子が、ふたりの子とセックスなんとしてるわけがない。

「撫子には、どうしようもないよ……折角力になるつて言つてくれたのにごめんね」

わたしは、撫子にふたりちんぽが生えてきたことを伝えていなかつた。

お嬢様の撫子には、あまりにもショックキングだろうと思つたのだ。たとえ親友だとしても、
もしかしたらちんぽが生えてるなんて気持ち悪いと思われて、仲に亀裂が入つてしまつかも
しれなかつた。

大事な友達だからこそ、秘密にしてしまつたのだ。

結局、一週間たつたその日の放課後、わたしは我慢することに疲れ果て、美優先生のいる
職員室へ向かつた。

「あら、美姫ちゃん♥ 一週間のオナ禁、おつかれさま♥」

「はやく貞操帯、外してくださいっ！ もうおかしくなりそうなんですうつ！」

「しようがないわねえ……その前に、来て欲しいところがあるの。ね、友梨佳先生？」

いつの間にか隣に来ていた担任の友梨佳先生が、感心した顔をしていた。

「すつごい辛そうな顔♥ 一週間我慢なんて、わたしには考えられない♥ 毎日射精しなくても、ふたなりって生きてられるのね♥」

「友梨佳先生……美優先生と、仲間だつたんですか……？ わたしがふたなりで、貞操帯つけられてるの、知つてたんですか……？」

「そうよ♥ わたしもね、美姫ちゃんと同じふたなりなの♥ 実は、美姫ちゃんに貞操帯をつけるアイデアを最初に思いついたのはわたし♥ 今日の特別な集まりで、極上の快楽を感じてもらうための計画だったの。許して♥」

美優先生は、友梨佳先生の計画に従つて動いていた……？

それなら、全ての黒幕はこの友梨佳先生ということだらうか？

「せ、先生……っ！ わたし、友梨佳先生のこと、許せませんっ……！」

「ごめんね♥ でも、美姫ちゃんはちょっと強情で、射精欲求に素直になれない子だつて聞いてたから、貞操帯っていうひどい道具を使うしかなかつたの♥」

「つ……！ 許さないっ！」

「あらあら、そんな風な態度でいると、貞操帯をつけてもらう期間を、もう一週間延ばそつかしら？」

「み、美優先生っ！ それだけはっ！ それだけはやめてください……お願ひしますう……精液出さないと、ほんとに死んじやうんですけど♥ 夜も興奮しちやつて、最近一睡もできてないんですっ」

わたしが泣きそうになりながら頬み込むと、友梨佳先生と美優先生はふふ♥ と笑つてわたしを職員室から連れ出した。

階段を上つて連れていかれたのは、まさかのわたしのクラス、1—Bだつた。教室の扉を開くと、驚嘆すべきものをわたしは見てしまった。

あんぐりと口を開けて目を離せないでいる、美優先生が耳元で囁いてくる。

「ほら、ご覧なさい♥ そこに可愛いエッチな女の子がいるわよ？ 犯したくなつてこない？」

もう片方の耳に、友梨佳先生も囁いてきた。

「もっとよく見て♥ そこで、たくさんの女の子たちに犯されてる、撫子ちゃんの姿を♥」

それは、倒錯的な光景だつた。

夕暮れに照らされた、放課後の教室。そこで、あまりにも甘美で堕落した饗宴が開かれていた。

制服を着た二人の女の子たちに群がられて、口にもおまんこにもふたなりちゃんぽをぶちこまれた撫子がそこにいた。

「あむつ♥ んぐううう……♥ じゅるる、じゅるるるるる……♥」

撫子は、口に突っ込まれたちんぽに吸い付いて、いやらしい笑みを浮かべていた。

「んじゅるう♥ んはあつ♥ もつとたくさん、おいしいちんぽ、しゃぶらせてくださいつ
♥ じゅるる♥」

あの、大人しいお嬢様だった撫子が、どうしてこんなことを……。

きっと、誰かが撫子を堕落させてしまったのだ。きっと、友梨佳先生あたりが、ふたりり
ちんぽに犯される快感を教え込んだのだろう。

撫子にちんぽを突っ込んでいる女の子は、どうやら一年生ではなく、二年生の先輩のよう
だった。

腰まで伸びるほど長いつやつやのストレートの黒髪を、風に揺らす綺麗な人だ。

ちんぽを吸われて快感で顔を歪めながら、気持ちが良さそうに腰を揺すっている。

撫子は引き抜かれようとするちんぽに吸い付いて、タコのように口のところが伸びてし
まっている。亀頭のところには一際強く吸い付いて、最後まで精液の残滓を吸い取つてから、
ちゅぱん♥ とやらしい音を立ててようやくちんぽが外に出た。

つるつるに磨き上げられた先輩の亀頭からは、だらしないことに舐めとられるたび、新し
いカウパーが溢れてしまつている。

「撫子ちゃん、わたし、イキそう……♥ 先輩なのに、早漏でごめんね……♥」

「いつてください、奈々先輩♥ わたくしのお口でたっぷり感じて……じゅるるるるう♥」

「イクイクつ♥ ああ～つ♥」

びゅるびゅるつ♥ びゅつ♥

撫子の顔に、奈々と呼ばれた先輩が大量の精液をぶっかけていく。白濁液まみれにされて

も、撫子はにへら、といやらしい笑みを浮かべたままだつた。

「奈々先輩の精液、すつごいくつさいです……♥ もつとぶっかけてくださいつ♥ 精液便
器として、撫子をもつと使つてください……♥」

あまりにも卑猥な言葉を使う撫子に呆然とした。

そして隣で、わたしの知つている人物が撫子のおまんこにちんぽを挿入して、腰を振りま
くつているのを見てさらに愕然とした。

それは愛衣だった。ポニーテールをぶんぶん揺らしながら、撫子のおまんこセックスで氣
持ちよさそうにしている。

「おおお♥ 撫子のおまんこ、最高つ♥ ごめんね、撫子、わたし、腰振るの我慢できない
よおつ♥」

「いいんですよ♥ ぐちゅぐちゅに濡れたおまんこに、たっぷり射精して気持ちよくなつて
ください♥」

「ああ～もうダメつ♥ わたしも早漏でごめんつ、撫子、イクイクイクううつ♥ あぐうつ

びゅくくつ♥ びゅつびゅつ♥」

愛衣が撫子のおまんこに挿入したまま、たっぷりと精液を注ぎ込んで、白目を剥くほど感じまくっている姿は、相変わらずだらしがなくて仕方なかつた。

口から出した舌の先から涎を垂らしながら、愛衣は射精を終え、ちゅぽん♥ とちんぽを引き抜いた。

「相変わらず、奈々ちゃんも愛衣ちゃんも、気持ちよさそうね♥」

わたしは隣で、そう言う美優先生が貞操帯のカギをポケットから取り出し、手に持つているのを見つけた。

「はやく、貞操帯外してくださいっ」

「焦らないの♦ 撫子ちゃんは逃げないわよ♦ わたしたちと一緒に撫子ちゃんのところに行きましょう？」

「そ、そんな……わたし、撫子とセックスしたくないっ、撫子は親友だからあつ」

「愛衣ちゃんも最初はそんなこと言つてたわね♦ 貞操帯を外してもらいたかつたら友梨佳先生の言うこと聞きなさい♥」

美優先生と友梨佳先生は、わたしたちを教室の中へ連れ込んだ。

わたしは、やつと貞操帯を外してもらえるという欲求に支配されて、撫子の目の前まで連れていかれてしまった。

自分の中で、これまで考えられなかつたような欲望がムクムクと膨らむのを感じていた。撫子を犯したい。愛衣や奈々先輩がしているように、わたしもあの中に入つて精液を出しまくるのだ。

(ダメダメ……そんなこと考えちゃダメだよおつ)

でも、貞操帯の中でちんぽはガチガチにありえないほど勃起し、射精を待ちわびていた。目を合わせると、撫子は、わたしを見てにつこりといつも通りの笑みを浮かべた。

「あら、美姫ちゃん……♦ わたくし、こんないやらしい姿になつてしまつたの……♦ 友

梨佳先生にやらしいことを教えられて、気がついたら、ふたなりの女の子たちの精液便器になつちやつた♥」

制服をはだけ、たゆんだゆんの巨乳をさらけだし、スカートをめくりあげられ、下着を脱がされていた。

あまりにもひどい痴態。顔にドロドロの精液をかけられ、おまんこも白濁液まみれだ。ふいに、カチャリ、と音がした。美優先生が、ついに貞操帯を外してくれたのだ。

貞操帯の中でむわっと蒸れて、ガチガチに固くなつたちんぽと、久しぶりに対面した。(わたしのちんぽっ……♦ 久しぶりのちんぽ……♥)

「さあ、一週間ぶりのちんぽ快樂、楽しみなさい♥」と美優先生。

「撫子ちゃん、美姫ちゃんを気持ちよくしてあげて♦」と友梨佳先生。

友梨佳先生の言う通りに、撫子はわたしの童貞ちんぽにためらいなく、指を触れた。片手で根元から先っぽまで、滑らかな指の動きで、コキコキとしごかれた。

一週間ぶりのセンズリ快樂に襲われ、ちんぽが一気に甘い痺れに満ちて、ドクドクと精液

が込み上げてくるのを感じた。

自分で中で、何か大事なものが壊れて、快樂に従順な体になつてしまふのが分かつた。
(気持ちいいいしゅんぽ触られるのつて、やつぱり最高♥)

「あ、ありつ、ありああつ……♥ ちょっと触られただけのにイクう♥ イクイクうつ♥
びゅつ♥ びゅつ♥ びゅくつ♥

あまりにも呆気なく精液が逆り、すごい距離を飛んで、撫子のおっぱいにべつたりとかか
つていった。

巨乳を白濁液まみれにされながら、撫子はにつこりと笑顔を浮かべ、わたしの射精を喜ん
でくれた。

「いっぱい出ましたね♥ 久しぶりの射精、気持ちよかつたですか？」

「めちゃくちやよかつたあ♥ 頭の中ぐちやぐちやに搔き回されるくらい気持ちよかつた
あ♥」

「美姫ちゃんはしつかり者だと思つてたのに、やっぱりちんぽ快樂には抗えないんですね♥
もつと気持ちよくなつていいですよ♥ 美姫ちゃんはまだ、童貞ふたなりさんですよね？」

「童貞卒業したいつ♥ 撫子のおまんこで卒業したいつ♥」

「もちろんいいですよ♥ 愛衣ちゃんの精液まみれのおまんこ、もつとドロドロにしてくべ
さい♥」

撫子は、股を大きく開いて、指で割れ目をぱっくりと開いた。

ところ、と愛衣が出した精液が奥から溢れ出しているが、そんなことは気にならなかつた。
親友とセックஸしようとしていることなんて、もうどうでもよくなつていた。

わたしは精液を出してもバキバキ勃起したままのちんぽを、撫子のおまんこにひとりと
ちんぽをくつつけた。ぬるぬる♥ と滑るその卑猥な穴の入口に、ちんぽを擦りつけるだけ
で興奮してイキそ�だつた。

「入れていい？ 撫子、いれるよ♥」

「どうぞ♥ 撫子のドスケベおまんこ味わつてください♥」

初めてのおまんこに、わたしはぬるぬるとふたなりちんぽを突き込んだ。

むにゅり♥ と柔らかいヒダヒダが絡みついてきたまらなかつた。ちんぽ全体が甘い快
感に浸され、全身を痺れるような心地よさが駆け巡る。

気がついたら、ぐちゅぐちゅといやらしい音をたてながら、腰を振つていた。

「あああつ♥ おまんこいいつ♥ すつごい気持ちいいつ♥」

「んつ♥ 美姫ちゃんのおちんぽ、大きいですね♥ 撫子のおまんこ広がつて、だらしない
ガバガバまんこになつちやいます♥」

「これハマるうつ♥ 撫子の身体で気持ちよくなるのやめられなくなるうつ♥」

ちんぽのカリ首にヒダヒダがひつかかり、にちゅにちゅ♥ とじごきあげられるのが想像
を絶する気持ちよさだつた。

我慢しようにもできなくて、あつという間に射精していた。

「あリつ♥ 出る出る♥ 白いちんぽ汁でるうつ♥
びゆくつ♥ ぶびゅるるつ♥」

射精しながら、腰を振り続ける。わたしのふたなりちんぽ汁を撫子にすりこんでいく。一週間分我慢した精液は、まだまだ出し切れていた。もっと出しまくって、撫子を精液まみれにしてしまったかった。

快感で震えながら、撫子のおっぱいに手のひらを触れた。

もつちりと吸い付いてくるような肌。精液にまみれてぐちやぐちやになつていても、柔らかさは変わらない。

夢中になつて揉みしだくと、ますます興奮してちんぽが撫子のナカで一回り大きくなつた。

「ああつ♥ 気持ちよすぎつ♥ んん……ぐうつ♥ おリおつ♥」

「撫子はみんなの精液便器ですから♥ いい気持ちになつてもらつて、たっぷり精液をもらうのが役目です♥」

すっかり精液臭くなつてしまつた撫子が、そんな言葉を吐くのはたまらない淫乱さを醸し出していた。

そして、わたしはなかなか気づかなかつた。

撫子とのセックスにのめり込んでいて、隣で愛衣や奈々先輩が撫子にちんぽをすりつけていることに。

愛衣も奈々先輩も、わたしと撫子のセックスを見ていてたまらなくなつたようで、各々欲求を抑えきれなくなつてしまつたようだ。

「おおつ♥ たまんないつ、お掃除フェラつ♥」

愛衣は撫子に、さつきまでおまんこに突っ込んでいたちんぽを咥えさせ、舐めさせていた。じゅるるる……♥ と音を立てて、ちんぽを頬張る撫子は嬉しそうだった。犯されるのが自分の役割だと、心の底から納得している顔だった。

「撫子、もっと強く握つてつ♥ いやらしい手コキ、お願いつ♥」

その横で、奈々先輩は撫子に自分のふたなりちんぽを握らせ、しゅこしゅこ♥ とちんぽをしごかせていた。撫子は慣れた手つきで、高速手コキ奉仕をしてあげていて、奈々先輩は気持ちが良さそうに、頬を緩めている。

三人のふたりを相手にして、全員を発情させ絶頂まで導こうとする撫子は、まさに彼女の望む精液便器となっていた。

愛衣が突然撫子の顔を両手で固定し、腰を振るイラマチオを始めながら叫んだ。

「ああつ……撫子、イクイクつ♥ また射精するつ♥ 何回でも、撫子になら精液出しちゃうよおつ♥ あぐつ♥」

「ぶぴゅつ♥ びゅぶぶつ♥」

粘っこい精液が撫子の喉に発射されていくのが見えるような気がした。

そして奈々先輩も、手コキ快楽では飽き足らず、撫子のふにふにおっぱいにちんぽを押し

付けながら、メス絶頂を迎えた。

「んんんっ◆ 撫子ちゃんのおっぱい柔らかくて我慢できないっ◆ イクうつ◆」

ぴゅるるるるっ◆ ぶびゅりゅるっ◆

おっぱいにわたしの出した精液の上に、その精液が上乗せされ、目も当てられないドロドロの惨状になっていく。肌に精液がすりこまれ、甘い体臭に精液のえた匂いが混ざつていく。

わたしもおまんこを味わい尽くして限界を迎えるとしていた。

何度も精液が出され、愛液とそれらが一体になったドロドロの中で、ぐちやぐちやとちんぽを搔き回し、撫子のおまんこにきゅううつ◆ と締め付けられながら、溜め込んでいた分の最後の精液を、ぶちまたた。

「わたしもイクうつ…………◆ 撫子、撫子撫子撫子おつ◆」

「撫子もイキそうですっ◆ みんなでわたくしのことを犯して、精液まみれにする変態セックスで、イッちゃいますう…………◆」

ぴゅるるるるっ◆ びりゅつ◆ どぴゅつ◆

最高の快感が駆け抜けて、精液を思う存分ひり出していく。

ちんぽをおまんこから引き抜いた時には、割れ目からどろり◆ と大量の精液が溢れ出してしまっていた。
(もう、わたしたち、後戻りできない…………)のままこの学園で、卒業する日まで撫子を犯しまくるんだ……◆

最初は射精すら拒んでいたのに、今では親友の撫子を、親友の愛衣と一緒に犯している。すっかり薄汚れてしまつた自分を意識しながらも、後悔はなかつた。

女教師友梨佳 五章

わたしのお気に入りの三人を全員堕とすことに、成功した。

美姫——十六歳。B86W53H82。黒髪ロングのクールな女の子。今日からは撫子の
おまんこに毎日射精するのにご執心になること間違いないし。

撫子——十六歳。B94W47H92。栗色の髪を縦ロールにしたおとなしい引っ込み思
案なお嬢様。ふたなり精液を浴びせられることに快感を覚えて、みんなの精液便器に。

愛衣——十六歳。B81W52H83。ポニーテールの活発な体育系女子。朝から晩まで
ふたなりちんぽを気持ちよくしてもらう」とばかり考えるドスケベ系女子に変貌。

彼女たちは今、入学当初の見る影もないほどに、淫乱ドスケベJKと化していた。

わたしと美優先生の目の前、放課後の教室のど真ん中で、お互いに求めあい、性欲のまま
に犯しあっている。

「あらあら♪ こうやつて、みんなこの女学園に染まっていくのね♪」

「すごくいい乱れっぷりですね、美優先生♪ 苦労して快樂の沼に引きずり込んだ甲斐があ
りました♥」

この計画はこれでひとまず終わりを迎える。

長い時間と手間暇がかかった計画だった。一部始終を思い出すと、よく頑張ったねと自分
を褒めたくなる。

まずは撫子にふたなり精液を沁み込ませ、淫乱ビッチにした。

その次に比較的だらしない愛衣を引きずり込み、美姫を引きずり込むダシにした。

最後に、連れてきてもらった美姫にふたなり射精を経験させ、貞操帯を使ってメスちんぽ
欲求を最大限まで高めてもらい、乱交パーティに誘い込んだ。

これで、精液便器と自称する撫子ちゃんを中心としたふたなりハーレムの完成だ。

二年生の奈々ちゃんは、そのドスケベっぷりに感心したわたしがスカウトしてきた女の
子だ。普段は同級生だけでなく三年生の先輩とふたなりエッチをして毎日を過ごしている
という。

二年生や三年生には、一年生では及びのつかないような、いやらしい女の子たちがたくさん
いるらしく、わたしはその子たちに会うことを秘かに楽しみにしているのだった。

次のわたしの目標としては、二年生や二年生の痴態も見ておきたかった。美優先生に協力
してもらって、女子高生たちの性の乱れっぷりを確かめたくて仕方なくなっている。

そして、わたしがどの部活の顧問になるかも、決まっていない。これから色々な部活を見

に行つて、それぞれでどれほど淫らなふたなりセックスが行われているのか、見極めに行くつもりだ。

どんないやらしいJKたちとふたなりエッチが出来るのか、今から楽しみでならない。

ひとまず、今は計画の成功を祝つて、快樂を味わうことにしようと思った。四人の女生徒たちが犯しあう姿に興奮して、わたしもふたなりちゃんぽが勃起してしまっているのだ。
愛衣ちゃん、美姫ちゃん、奈々ちゃんたちが囲う撫子ちゃんに精液をぶちまけるべく、わたしはその輪の中に入つていったのだった。

ふたなりお嬢様 紗耶香編

大学生の紗耶香の朝は、エッチなご奉仕が始まる。

お嬢様である彼女には、何人ものメイドさんが仕えていた。紗耶香はそのメイドたちに命令し、身の回りのお世話や、ちょっとした面倒ごとをさせていた。

もともと紗耶香はメイドたちに慕われていた。金髪碧眼の、まるで西洋人形のような美しい姿はメイドたちの憧れの的だったのだ。

だが、女学園から戻ってきた紗耶香には、大きな変化が起っていた。身体的にも、精神的にも。

親密とは違う特別な感情をメイドたちに抱くようになつてしまつていた。

——「欲情」という感情を。

その欲情は主に紗耶香と同い年のメイド、明日花^{あすか}に向けられていた。

今、紗耶香の寝室で淫らな饗宴が行われていた。

可愛らしいネグリジェに身を包んだ紗耶香、メイド服がよく似合う明日香。

二人が絡み合う姿は一見可憐で美しい光景に見えるが、実際にやつていることは淫乱そのものだ。

「そう、そこですわっ……んっ、ああ……◆」

紗耶香は、朝勃ちしたふたなりちんぽを、メイドの明日花にしゃぶらせていた。

天蓋つきベッドに寝転び、滑らかな肌触りのネグリジェをはだけ、上質な布地の下着から醜い肉棒を飛び出させていた。

凶暴に勃起し、ぱんぱんに膨れあがった紗耶香の肉棒を見た女の子は、最初こそ驚くが、何度もしやぶらされるうちに、自分から口に咥えたくなってしまう。

「ご主人様、気持ちいいですか……？ れろおつ、もつと舐めて差し上げます……◆」

メイドの明日花もそんな女の子の一人だった。

彼女はメイドたちのうちでも、特に可愛らしい子だった。

どんなときでもニコニコと笑顔を絶やさず、献身的に主人たる紗耶香に奉仕する。その見本のようないい姿は、他のメイドたちにも好評だった。

最初にフェラをするよう、紗耶香に迫られたときは、どう言葉を返せば良いかわからなかつた。

――ゞ)主人様はこんな方ではなかつた。

白百合女学園に入学する前、紗耶香は普通の女の子だつた。たとえ豪華な調度品に囲まれ、恵まれた生活を送つていたとしても、中身はただの可愛い女の子だつた。

――なのに、いつの間にか変わり果ててしまつた。

そういう悲嘆に似た感情が彼女の内で何度も響き渡つたが、無理矢理肉棒をしゃぶらざるうち、彼女の気持ちは変わつていつた。

我慢汁を舐めとつていくうちに、その媚薬に似た効用で、彼女自身も発情し始めてしまつたのだ。

――お、おいしい……◆ゞ)主人様のおちんぽ、素敵……◆

あつという間に明日花は紗耶香の肉棒に魅了され、自分から進んでフェラチオをおこなつていつたのだった。

「今日も明日花の朝のご奉仕、最高ですわ……どうにかなつてしまいそう♥ はあんつ♥」「いえ♥ もつと我慢して、我慢汁をいっぱい味わわせてください、ゞ)主人様……ちゅるつ♥」

今日も、主人である紗耶香に對して、欲望のままにちんぽをおねだりしてしまつた。今にもふたなり精液が漏れそうになつていてる紗耶香。

唾液にまみれた舌をねつとりと這わせ、発情顔でときおり表情を窺つてくる明日花の淫らさに、もう射精まで一刻の猶予を許さない状態になつていた。

「明日花、そんなこと出来ませんわ……◆ ふうつ♥ そんなことを言われても、おちんぽは言うことを聞いてくれませんのよ?」

「こんなことを言つては、失礼に当たるのかもしれません……ふえろつ◆ゞ)主人様は、少し早漏気味ではないですか?」

「そんなことありませんわつ! わたくしは、白百合女学園でたくさんのお嬢たちと、こういうことをしていたのですわよつ……ひいいつ◆先っぽ、そんなに舐められたらあつ◆いひいつ◆」

にわかに明日花のおしゃぶりが激しくなり、紗耶香はまともに反論できなくなつてしまう。

柔らかい唇で根元を甘噛みし、口内で舌を絡みつける。何度も繰り返した紗耶香との淫らな営みのおかげで、明日花のフェラはまるで娼婦のように上達していく。

あつという間に我慢が出来なくなり、紗耶香は腰を突き出しながら、甲高い嬌声をあげた。「ああつ♥ もうダメですわあつ♥ イク、イクイクイクうくつ♥」

すっかり仲の良い二人の間柄では、そんな下品な声を張り上げることもためらう必要は

ない。

びゅつ、びゅるるるっ！

紗耶香の肉棒から、白濁液が噴き出し、明日花の口の中を汚していく。

「んぐ、んぐう……おいしゅうございましたあ…………♥」

「ふう……♥ 今日もお上手でしたわ、明日花」

「滅相もございません、そのようなお褒めの言葉……わたしはただ、ご主人様のものをお舐めしたかっただけです」

「あら……もう、明日花つたら♥」

紗耶香が股間を下着の中にしまい、熱狂の余韻から醒めてきた頃だった。コンコン、と部屋の扉がノックされる。

「紗耶香様、失礼します」

「どうぞ」

美しいメイドが一人、入ってきた。

長い間、紗耶香の家に仕えている真宵さん。^{まよい}メイドたちの中では最年長の二十五歳、みんなの見本となる立派なメイドさんだ。

豊満な胸がメイド服を押し上げており、大人の女性の魅力をむんむんと漂わせている。黒髪は一つにまとめ、背中に流しており、まさに大和撫子の風情があった。

「紗耶香様、そろそろ朝ご飯の時間です」

ひんやりとした口調で淡々と伝える姿は、私情を交えないクールさがあつた。

表情が硬くめったに笑うことはないが、それが一層、彫像のような美しさを深めるのだった。

「明日花、何をしているのです。紗耶香様を起こしてきなさいと言つたのに」

「すみません、真宵さん」

「ご主人様も、お寝坊が過ぎますよ。ご自分で起きれるようにならないと」

「わかっていますわ。全く、真宵は融通が利かないのね」

「これは失礼いたしました。わたくしも出来るだけこういった注意はしたくないので。これもご主人様のためなのですよ」

真宵は、静かに頭を下げ、部屋から出て行く。

その姿を見て、紗耶香は下半身が熱くなるのを感じた。

——あの真宵さんを自分のものにしたい……。

女学園から帰つて以来ずっと感じていた欲望が、ムラムラと湧き上がり抑えられなくなつた。

幼い頃から一緒にいた真宵を犯すというのは、とつもなく甘美な罪のように思えるのだ。

「今晚、例の計画を実行しましよう、明日花」

そう伝えると、明日花はぱっと笑顔になつた。

「はいっ……真宵さんにもご主人様のおちんぽの素晴らしさを知つてもらいましょう！」
すつかり紗耶香の虜となつた明日花には、この淫らな関係性に堕ちることは幸せそのものだと思えていた。

その幸せな輪に、真宵さんも取り込めるなんて。

二人はだらしない笑みを浮かべながら、妄想して早くも登場してしまつたのだつた。

……

真宵は、紗耶香が大切な存在だからこそ、安易に親しくなつてはいけないと思つていた。
高校生の頃からこの家に七年間も仕え続けてきた。
仕え始めた当初は、中学生になつたばかりの幼い紗耶香の可愛らしさに心を打たれたものだ。

おつちよこちよいで、しょっちゅう転んだり、物を壊してしまつ姿は微笑ましいものだつた。

外見も、金髪碧眼のハーフと言つても、ここまで美貌の持ち主はなかなかいまい。これからどれだけ美しく育つんだろうと思うと楽しみだつた。

期待通り、女学園を卒業し家に戻つた紗耶香は、美しく花盛りを迎えていた。
しやんと背筋を伸ばし、立派なお嬢様となつた姿はとても立派だつた。

真宵はその姿を見たとき、嬉しくて胸が温かくなつたが、それを隠していつも通り無表情を貫いた。

わたしは遠くから見守るだけだ。そう自ら定めていた。自分などが、親しくなりたいという欲望に負けて関わりすぎては、迷惑になる。そう考えていた。

ただ、紗耶香の様子がどこかおかしくなつてしまつていていたのは、残念というわけではないが、ただただ真宵の理解できないところだつた。

紗耶香は、なぜか、真宵のことを見て拳銃不審になつたり、緊張した素振りを見せるのだ。
こんな例えを使って良いのか分からぬが、中学生の男子が女性に興奮して、いてもたつてもいられなくなるような感じによく似ていた。そうとしか言えないほど、妙にちらちらと真宵のことを見て頬を染めたりしてくるのだ。

しかし、きっと何か理由があるのだろうと、真宵は戸惑いを押し隠した。

そう、わたしは紗耶香がどう変わろうとも、身を尽くしてお仕えすることに変わりない。
わたしは私情を交えてはいけない。紗耶香様に喜んでいただけるよう尽力するだけだと心に決めていた。

人の間には、ちようどいい距離感というものがある。メイドの分際で変に仲良くなつては、

逆に気を遣わせてしまうだろう。

大事なご主人様だからこそ、遠くから見守るに留め、自分の役割をまつとうする。それが紗耶香の幸せにつながるだろう。

それが紗耶香のことを一番に考える真宵のやり方だった。

……

「お帰りなさいませ、ご主人様」

真宵はその日も、家に帰る紗耶香を淡淡と迎えた。

しかし異変が起きた。お屋敷に入った途端、メイドたちが真宵の周りを取り巻いて動かなくなつたのだ。

しかも、そのうちの一人、明日花は手に縄を握っていた。

紗耶香がだしぬけに言つた。

「真宵を縛りなさい、明日花」

「えっ？ な、何を言うのです、ご主人様……」

真宵はわけがわからず、その場で固まつてしまつたが、紗耶香が下した命令に目の前が真つ暗になつた。

「真宵も、おとなしくするのですよ。わたくしに恥をかかせないようにしてほしいですわ」「失礼します、真宵さん」

静かに明日花に手に縄をかけられ、奥の部屋へと連れて行かれた。

カーテンは全て閉じられ、暗い室内は、天井のシャンデリアが弱く照らし出すのみだ。そのまま椅子に縛られ、身動きがとれなくなつてしまふ。

自分が何か、悪いことをしてしまつたに違いない。大きな過失をしてかしたに違いない。

真宵はただただ、これから下されるだろう処罰を恐れて震えた。

しかし、主人たる紗耶香は妙なことをし始めた。

「真宵……わたくし、わたくし我慢できませんの……」

履いていたスカートをするすると捲り上げ、下着を露出したのだ。なんてはしたない格好だろう。

そして真宵は目を剥いた。その股間に、本来あり得ない異変が起きていることに。まるで男の逸物が生えているかのように、下着がこんもりと盛り上がつている。

紗耶香は頬を上気させ、言い訳するように言つた。

「このおちんぽがいけないんですね……こんなに熱く疼いて……真宵を犯したくてたまらなくさせるのですもの……」

「今、お、おちんぽ……とおっしゃったのですか？」

「はい、そうですわ。わたくしは、もう普通の女の子ではないのです。ふたりになつてしま

まつたわたくしを、真宵に……認めて欲しいのです♥

そう言つて、紗耶香は下着をゆっくりと下ろした。

ぶるん、としなりながら姿を現す男性器。女を求めて猛り狂い、鋼鉄の「」とく固くなっているのが見て取れた。

ひくひくと震え、刺激を待ちわびてどうしようもなくなつていて。

そんなことが……真宵はただただ愕然となつた。

今起きていることが信じられない。きっと紗耶香様は自分を犯そうとしているのだと、頭ではわかつてもその現実を受け入れられなかつた。

「明日香、真宵の胸をはだけなさい」

「かしこまりました、ご主人様……」

「ご主人様……？　い、いやです、恥ずかしい」

真宵はつい感情的に叫んでしまう。普段とは全く違う反応を見て、紗耶香がますます興奮しているのが真宵にはわかつてしまつた。

ああ……そんなやらしい目で、わたしを見ないでください……。

抵抗しても無駄だと察しつつも、もがかずにいられなかつた。

こんな形で、紗耶香に好意を向けられることになるだなんて。

以前から紗耶香を娘のように、家族のように可愛がつていた真宵にとって、その好意はあつてはいけないものだつた。

ずっと大事に、ちょうど良い距離感を保つてきた。そうやつて積み重ねてきたものが、何もかもが台無しになつてしまふ気がした。

そんな思いは届かず、明日花の手で豊満な胸をさらけ出されてしまう。紗耶香の視線がじいっと注がれる。視線が触れてくるような感じがして、じんじんと乳首がくすぐつたくて身悶えた。

「大きいお乳……桃色の小さい乳首が可愛らしいですわ♥」

「ご主人様、おやめになつて……」

あんなに小さくて可愛かった紗耶香。美しい女性に育つたかと思つたのに、こんな淫らな行為を好むようになつてしまふだなんて。

どうしてそんなおぞましいものを股間に生やしてしまつたのだろう……きっとあれが生えてきてしまつたせいで、紗耶香様は変わつてしまつたのだ。

「そんなに大きくして……はしたないです、ご主人様……」

「こ、これは仕方ないのですわ。本当は早くおちんぽをしごきたくてウズウズしていて……」

「ああ、紗耶……あなたのお乳で擦らせてちょうどいい」

「ダメです、ご主人様……そんな……」

真宵はもがいても縄はびくともしない。静かに、諦めが体に染みこんできた。

虚ろな目で動かなくなつた真宵の胸に、紗耶香がはあ、はあと息を荒げながら肉棒を近づける。

先走り汁をだらだらと垂らし、いやらしい匂いを振りまくそれを、真宵の胸に押し当てる。

片手で膨らみを揉み、滑らかな手つきで愛撫されると、ぴりぴりとかすかな電流が肌を走る。

その心地良い感覚は段々と肌に染みこんてきて、真宵の中で温かい何かがとろとろと溢れ出した。

真宵は不思議と、全てが壊れゆくのを感じながらも、それに身を任せてしまっていた。

紗耶香にならば、こういったことをされてもまんざらでもない……真宵は自らの主人に愛情とも、欲情とも言えない、不思議な温かい気持ちを感じていた。

紗耶香は夢中になつて胸を揉みしだき、欲望まみれの肉棒を押しつける。

「なんて柔らかいのお……◆ 真宵のおっぱい、いいですわあ」

「ご主人様、みつともない……そんなお下品なお顔をしないでください……」

「げ、下品だなんて、失礼ですか、真宵」

「これは失言でした、ご主人様……ああ、なんて固くて、熱い……」

押しつけられるいやらしい怒張は、ますます大きく太くなつて、はちきれんばかりだ。

これは紗耶香のわたしに対する感情の表れなのだろうか。それならば、こんなにも大きく膨れあがつてしまつて、それだけわたしのことを思つてくれているということだろうか。

まとまらない思考は、漠然とした幸福感を真宵にもたらす。

「いやがらないのですわね、真宵……他のメイドたちは、最初は激しく暴れましたのに」「紗耶香がそう言うのを聞いて、真宵は自然と言葉がこぼれた。

いつもの引き締まつた表情ではいられず、わずかに火照つてゆるんだ表情になつてしまつていることに、自分でも気付いていた。

どんな形であろうと、紗耶香と親しい関係になりたい……そう願つていたことを思い知らされた。

「ご主人様がこういった関係を望むのならば……わたしは、この身を委ねます……」

「真宵……あなたは、なんて素晴らしいメイドなのかしら……◆ もう、おっぱいに擦りつけているだけなのに、熱いものが込み上げてきますわ……◆」

紗耶香が真宵の双乳を手のひらで掬い上げ、その谷間に肉棒を挟むと、その熱さがますます体の芯に近いところで感じられた。

ぴちりと肉棒をお乳に押し当て、くちゅくちゅと肉棒を出し入れし、唇の端から涎を零しながら喜ぶ紗耶香は、滑稽なほど幸せそうだった。

「おほお……♥ やつぱり。パイズりは最高ですわね……おお、おおお……♥」
「こへことみつともなく腰を振り、欲望のままに快楽を味わう紗耶香の姿は、きつちりと
お嬢様を演じる紗耶香からかけ離れていた。

幼い頃の紗耶香を思い返させるような、可愛らしさがあつた。

真宵は思わず、笑みがこぼれてしまう。

「ご主人様は、子供の頃から何も変わっていないのですね……うふ」

それは真宵が初めて紗耶香の前で見せた笑顔だった。

それを見た紗耶香は一気に射精感が高まり、一気に精子を迸らせてしまう。

「ま、真宵っ……そんな表情、は、反則ですわっ……んつ、くうくうつ！」

びゅるるるる！ びゅくっ！ どぴゅどぴゅっ！

その白濁液を胸に浴びて、真宵はぽんやりと色っぽい笑みを艶然と浮かべていた。

「全く、こんなに汚して……ご主人様はとんだお転婆娘ですね。でも、そんなに心地よさそうにされたら、嬉しくなってしまうでしょう？」

……

紗耶香は射精の余韻に浸る余裕もなく、再び肉棒がいきり立つのを感じた。

真宵が自分を優しく受け止めてくれる喜びでいっぱいになり、もつともつと、思うがままに精を放ちたいという欲求でたまらなくなっていた。

幼い頃からずつと、一切文句を言わず献身的に使えてくれていた真宵。

彼女は紗耶香にとって、二人目の母親のような側面があった。今も、母親のように自分のわがままを許し、包み込んでもらっている。

最初こそ、どうしてここまで、わたしに身を捧げてくれるのだろう、という疑問があつたが、真宵ならここまでしてくれてもおかしくないという確信が湧いてきていた。
それならば、この自分勝手な肉棒が満足するまで相手になつてもらうまでだ。

下着を脱がせ、股を開かせ、だらしなくも秘所をさらけだしたポーズを取らせても、もう真宵は一切抵抗しなかった。

ところ、と女陰は湿り気を帯びており、雌の発情の匂いを紗耶香の鼻に届けた。

「ご主人様、そんなに見つめられたら、困ってしまいます……」

真宵が恥じらう姿を見て、一気に頭がかあつと熱くなる。ふつり、と理性を失い紗耶香は勝手にびくびく震える怒張をあてがつた。

「ま、真宵……いきますわよ……う、ううっ」

突き込んでいくと、温かくぬめぬめと包み込んでくる膣にうつとりとしてしまう。あまりにも甘美な快楽が流れ込み、ぶるぶると身震いしてしまった。

「ん、んん……お好きなように動かしてくださいませ……」

「いつも厳しいあなたがそんなにわたくしを甘やかすだなんて……するいですわよおつ」「本当はずつとこうして、優しくしてあげたかったのですよ。ご主人様が立派なお嬢様になるまでは、わたしがそういう役目を引き受けなければと思つていたのです」

「真宵……あなたはなんて……おほおつ♥」

紗耶香は言葉が続かないほどの快楽に見舞われ、かくかくと腰を動かすのを止められない。

じゅぶじゅぶ、と卑猥な音を立てておまんこを抉つてしまふ。目の前でチカチカと火花が散るようで、夢中になつて女体を貪つてしまふ。

「あ、んあ、……ああ」

控えめに喘ぎ声をあげる真宵も、実際のところひどく感じているようだつた。表情はとろんと蕩け、至福の時に浸つてしまつていてのがよくわかる。

紗耶香は全身を駆け巡る激しい電流で我を忘れて、快楽の沼に溺れていつてしまふ。「真宵、真宵……最後まで甘えさせてもらいますわあつ……んちゅう」

真宵の乳首に吸い付き、母乳をねだる赤子のようにその身にもたれかかつた。

「あらあら、ご主人様つたら……」

頭を大切なものを扱うように撫でてもらいながら、ヒダヒダで肉棒を擦り上げるのは、天国にいるかのようだつた。

紗耶香はあつという間に上り詰め、相変わらずだらしない声をあげ、だらしない表情で果てた。

「おお……気持ちいい、真宵のナカ気持ちよすぎですわあ……うんんっ！」

頭の中で何かが弾けるような感覚と共に、ふたりちんぽの中を精液が勢いよく流れ出していった。

びゅくっ！ びゅくびゅくっ！ びゅくっ！

「ああ、ご主人様……すごく熱い……♥」

真宵は心地よさそうに肉棒の脈動を感じつつ、優しく紗耶香を諫めた。

「そんなに出してはいけません……ああ……でも、まだ出てる……仕方ないですね、全くもう……」

そういう言葉をかけられては、ますます射精が止まらなくなつてしまふ紗耶香だつた。

快樂の虜となつた真宵は、他のメイドたちと同様、紗耶香の欲望のはけ口となつた。

だが、誰も文句を言う者はおらず、それどころか紗耶香のちんぽが欲しくてたまらない者が続出した。

幸せな堕落が、紗耶香の家にはびこつていつたのだつた。

そして、真宵は紗耶香の一番のお気に入りの相手となり、毎晩のようにその精液を受け止めることになるのだつた。

そのことを真宵は何も後悔していない。本当はずつと紗耶香と親密になりたかつたのだ。むしろ、最初からこうなることを求めていたのではないかと思うようになつてしまつた

の
だ
つ
た
。

(終)